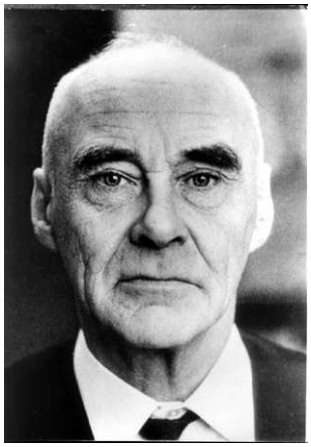
第 1 章：

N.A.コズイレフ(N.A KOZYREV)博士の展開

全ての物理的物質が、見えない、意識的エネルギーとしての“aether”によってつくられるという劇的な科学的な証拠が、少なくとも 1950 年代から存在していた。



有名なロシアの天体物理学者ニコライ A.コズイレフ博士（1908-1983（Ko-zir-ev と発音される）がそのようなエネルギー源が存在しなければならないことを疑問の余地無く、証明し、その結果彼は、ロシアの科学的なコミュニティの歴史の中で最も論争の的となる人物の 1 人になった。
彼の仕事との関連は、畏敬の念を起こさせるが、全ての、彼の後を追った人々は、旧ソビエト連邦によってほとんど完全に隠された、
鉄のカーテンがおろされていたとしても、我々は、インターネットの出現で最終的に「ロシアの最も守られた秘密に接近している。」
コズイレフの種調査結果から 2 世代のすばらしい研究が何千もの博士レベルのスペシャリストによって生れた、それは完全に、我々の宇宙の理解を変える。
この本で彼への我々の突出した言及で、我々の同僚と読者に永久に彼の歴史的重要性と影響を確立することを望む。
図 1.1？
ニコライ A.コズイレフ博士

1.1 エーテル

ギリシア語で「輝き」”を意味する言葉“aether”は秘密の神秘学の世界に長く隠してきた基本的に不可視の現実の、宇宙的な流動状エネルギーの源でした。
古代インドのベーダ聖典が「prana」とか「Akasha.」の名前で言及したものを、ギリシアの哲学者ピタゴラスとプラトンの作品は、長く議論している。
しばしば東洋では、それは「chi」、あるいは、「気」として、知られている

そして、例えば鍼の科学の中で人体と相互作用することが特に強調されている。
秘密の伝統を受け継いだ師とアデプトは、奇跡的な結果、例えば空中浮揚、念力移動、物体発現 manifestation、即座の治癒、テレパシーなどをするほどにこのエネルギーを操ることを学ぶことができた。
そのような結果は、20 世紀に繰り返して文書化され、「収束 III」に書いたように、研究所で追求された。
エーテルの存在は、疑い無く科学的なサークルで初期の 20 世紀まで広く受け入れられていたが、
1887 年のマイケルソン - モーレー実験の結果、そのような隠されたエネルギー源が、存在しないことが「判明した」。
しかし、少し例を挙げれば ―「暗黒物質（暗いエネルギー）」（「仮想粒子」）を含む「vaccum 真空流動」と「ゼロ点エネルギー」の最近の進展は宇宙中至る所に目に見えないエネルギー媒体が本当になければならないということを西側の科学者に認める気にさせた。
あなたが、禁じられた『エーテルでなく、「量子媒体」のような穏やかな言葉を使用する限り、『主流プレスで嘲笑の恐れなしでそれについて多くのことを語ることができる’。
主流科学的なエスタブリッシュは、「知られている」『エーテル』理論にあまりに近づくと非常に過敏になり、そのような理論は、間違っていなければならず、したがって、活発にそれに敵対する。
しかし、そのような抑制は、他の多くの者にパズルを解こうとする欲求と関与を増やすだけである。
エーテル存在の証明の早期の例は、ハル・パソフ博士（ケンブリッジ大学で尊敬された科学者）から来た。
パソフはしばしば量子力学理論が成立する前に、 “真空”にエネルギーがあるかどうか見るよう設計された 20 世紀初期の実験に、言及する。
研究所でこの考えをテストするのに完全に空気のない（真空）領域をつくらなければならないので、ファラデー箱として知られているようなものを用いて全ての既知の電磁放射の場からシールドすることが、必要でした。
この空気のない真空スペースは、絶対零度またはマイナス 273° C まで冷やされ、あるいは、-全ての物質の熱を起こすような振動を止めなければない。
これらの実験は、真空中にはエネルギーが無いのではなく、相当量の非電磁源があることを完全に証明した！
パソフ Puthoff 博士は、しばしばこれを非常に高く大きいエネルギーの「激しい揺濫と沸騰」と呼んだ。
このエネルギーが絶対零度でも見つかることができたので、この力は「零点エネルギー」または ZPE と呼ばれ、ロシアの科学者は通常それを“physical vacuum”または PV と呼ぶ。

最近、正統的なエスタブリッシュメント物理学者ジョン・ホイーラーとリチャード・ファインマンは、それを計算した：
一つの電球ぐらいの空間量の零点エネルギーの量は、全世界の海を沸点にあげるぐらい強力である！

我々は明らかに、少量の目に見えない弱い力だが、極端に壮大な力の源を扱っている。それは物理的物質の全存在を支えるのに十二分の力を持つ。
科学の新しい見方では基本的フォース・フィールドのうちの 4 つ重力、電磁気、弱い核力または強い核力の、全ては、エーテル理論から現れ、全てエーテル/ZPE.の単に異なる種類の表れである。
M.T. ダニエルズ教授によれば周囲にどれくらい“free”エネルギーが本当に存在するかというと、地球の表面の近くの重力エネルギー密度 5.74x 10^10（t/m^3）に等しいとした。
[我々は新理論では重力が単にエーテルの別の形であるのを忘れない。]
ダニエルズ教授の発見は、
重力場落下から「フリーエネルギー」としてかなり大きな 100 キロワットを引き出すことはその地域で生じている自然エネルギーの 0.001%というとても小さなものであることを意味する。
（新エネルギー・ニュース、1994 年 6 月、p.4）
1891 年に発表されたN・テスラの研究は、“表面の高電圧と振動数によって固体の、エーテル流体の“動きと固体の光と熱にアクセス可能になるとした？。そしてこれは彼にフリーエネルギーと反重力技術が可能だというヒントを与えた。
これが直接 N.A. コズイレフ博士の仕事と結びつくので、再び、固い物体の、エーテルは fluidlike 流体効果を持つというテスラの発言に特別な注意を払おう、

1.2 KOZYREV の発見を理解するためのアナロジー

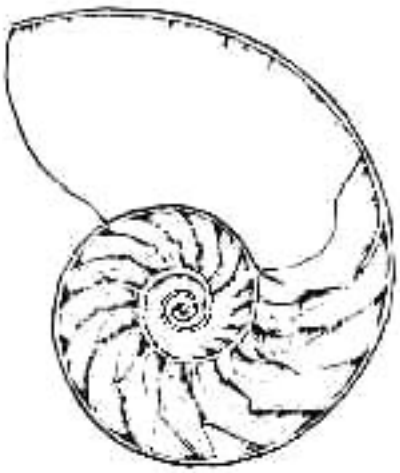
我々は 3 章と 4 章で、量子物理学の神話をくつがえし、度々引用される原子の “particle 粒子”モデルにひどく亀裂が入ることを示す。
Einstein’s の相対性理論が示すように、物理的物質の全ては最終的に純粋なエネルギーになり、量子領域に、 “hard particles 固体粒子”は見つからない。
原子と分子は、ロウソクの炎と同じで、これらが放出する、例えば炎の熱と光のエネルギーは、これらが、吸収したエネルギー（ロウソクの蝋と空気中の酸素のようなエネルギー）と釣り合っていなければならないことは科学的なコミュニティは、受け入れなければならない。
この「ロウソクのアナロジー」は、ハル・パソフ博士のモデルの特質を表しています、
このモデルは仮想的電子が、フリーに分離したときエネルギーの全てを放射せず、核にも

衝突しない理由を説明する。
オーソドックスな見解では「量子力学の魔法」としていわれて来た、原子の内部の表面上の「永久運動」は単純に説明される。
本当に Kozyrev’s の仕事に関連する発見を理解するには、物理的物質の特別な新しいアナロジーが、必要である。
Kozyrev’s の厳密な仕事は、宇宙の全ての客観的物質が、まるで水に沈められたスポンジのように、思うことを強制する。
このアナロジーでいえば、スポンジは完全に飽和するため十分長い時間、水中になければならない。
これを留意すると、この水中のスポンジに、2 つのことができる：
非常に単純な機械的手順で、これらが含む水量を減少させることも、増加させることもできる。
減少：
水中の、飽和したスポンジをしぼるか、冷やすか、回転するならば、中の水は環境に出る。
そして、質量を減少させる。
一旦スポンジが妨害されないならば、多数の小さい気孔への圧力が、軽減され、それが原因で 再び水を吸収し、静止した通常の質量がふえる。
増加：
また、例えば熱と、振動で気孔の一部が拡大することでその静止状態で保持できるより多くの水がスポンジに注ぎ込まれることが可能となる。
この場合、一旦付加された圧力を軽減するなら、スポンジは自然にその過剰な水を吐き出し、通常の静止している質量になる。
大部分の人々には不可能に思うが、振るか、回わすか、熱くするか、冷やすか、振動するか、物を物理的に変えることで、微妙ではあってもこれらの体重が増加または、減少したことを、確かな総計でコズイレフは示した。
これは彼の驚くべき仕事のわずかな 1 面である。

1.3 N.A.KOZYREV コズイレフ博士の背景

西洋の世界が主にコズイレフについて知らないので、若干の伝記および研究情報は必要であろう。
これで、彼が 「変人」または「変わり者」の科学者ではないことを確証し、むしろ実際ロシアの 20 世紀最高の思想家の 1 人と認識されよう。
Kozyrev’s 最初の科学的論文は１７才で書かれ、他の科学者は彼の論理の深さと明快さに驚いた。
彼の主な仕事は天体物理学の中にあり、そこで、彼は太陽と他の星の空気、日食の現象と放射バランスを研究した。

20 才までに、彼は物理学と数学の学位を得て、すでにレニングラード大学を卒業し、28 歳までに、コズイレフ博士は広くいくつかの大学で教える優秀な天文学者として知られていた。
コズイレフの豊かな人生は、1936 年にヨセフ・スターリンの抑圧的法律によって逮捕されたとき無残な展開になった、そして、1937 年に、良く知られた強制収容所の恐怖に耐えるひどく苦しい 11 年が始まった。
彼はこの間科学的な器材にはアクセス出来なかったが、隠された知識へ最も残忍なイニシェイションの経験を与えられた。
進歩した心にとって、このような耳障りで骨にこたえる困難は、物的世界の現世的満足に対する全ての欲求を焼き払う機会となり、高い意識への抵抗を取り除き
宇宙的な真実が直に認識でき、同化できる所で、イルミネイトされた状態が生じた。
この状態で、彼は、宇宙のミステリーについて深く考え、多くの異なる有機体が非対称の徴候、/、あるいは、螺旋を描いて成長するといった、生命の中に存在する全パターンに注意を払った。
彼は 1800 年代の真中、L・パスツールが“protoplasm”として知られる生命の基礎単位が本質的に対称形でないことを発見したことを知っていた、そして、微生物の群体は螺旋構造をつくって成長する。
また、植物、昆虫、動物と人々の構造の基礎をなすこれらの比例的拡大は、
多くの Atlantean ミステリーの古代の伝統の継承者が「神聖幾何学」を議論するなかで黄金比、/、あるいは、「ファイ phi」螺旋、フィボナッチ螺旋として知られる形を書いた。



Nautilus pompilus.

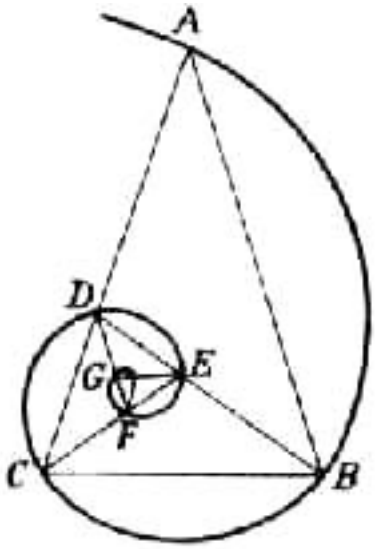
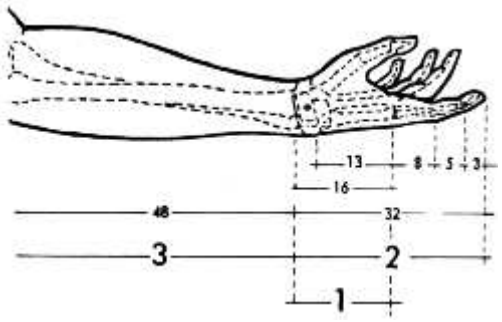


図 1.2？
オウムガイ・シェル（L）のなかの“Phi” 螺旋、そして、幾何学的に三角形(R)が書ける。
捕虜収容所での彼のイルミネイトされた観察から、コズイレフは、食べること、飲酒、呼吸と光合成を通してエネルギーがつくられるという通常の特性に加えて、全ての生命の形が目に見えない、螺旋を描くエネルギー源を吸収していることからくるかもしれないと考えた。
この本の後半で、我々はこの観点のデータがどれくらい包括的かわかる。
コズイレフは貝の螺旋を描く成長方向を理論化した、そして、この流れの方向で人間の体のどちら側に心臓があるかが決定される。
どこか他の地域にエネルギー流が反対方向に螺旋を描く時空がなければならず、そこでは、貝殻が反対方向に成長し、心臓が体腔の反対側にあると想像する。
この生物学の中の螺旋を描くエネルギーの概念は非現実的に見えるかもしれないが、それは神秘学の学校では昔から知られていた。
次のイメージは人間の腕の構造で“phi”の比率が、全てに自然に出てくるのを見せてくれる、これは他の全ての植物、動物と昆虫と同様に人間の体の全てに、繰り返されるプロセスのわずかな 1 例である。
成長の大部分は効率的パターンをとることで、生まれ「ファイ」はその性質上簡単に出てくるという関係を知る人はほとんどない。
コズイレフは、生命はそれ自体を支えるこの螺旋を描くエネルギーを、活発に取り込み、したがって、そのプロポーションが各段階でなければならず、他にどの方法もとれないといった。
この意味では､骨格システムをこのエネルギーのための“antenna”とみなすことができる。
図 1.3？
人間の腕の中の“Phi”の比例。



1948 年コズイレフが捕虜収容所から最終的に復帰し、専門分野に戻ることができたとき、月、金星、火星について多くの事前の予測をした。それは 10 年後ソビエト宇宙探査機で確認された。
それによって彼はソビエト宇宙開発競争の主要なパイオニアであると認められた。
それから、コズイレフ博士は、1958 年に、月の Alphonsus クレーターに火山活動があると宣言することで再び世界的な論争を引き起こした。
大部分の天文学者と科学者は信じることを拒否したが、この概念は真実でなければならなかった、そしてそれは、月は、巨大な天然資源と力の源を所有し星に人類を推進する優れた途中地点であることを意味した。
アメリカのノーベル賞受賞者ハロルド・ユーリー博士は Kozyrev’s 博士の月面上の火山活動の理論が正しいと思った少数グループの一人だった、そして、彼はＮＡＳＡに調査を実施するよう主張した。
直接的な結果として、ＮＡＳＡは莫大な“月のまばたき Moon Blink”計画に着手した。そして､後でそれは月で重要なガス排出を発見することで Kozyrev’s 博士の断定を確かめた。
しかし、すぐに Kozyrev’s 仕事の全てが、ＮＡＳＡの主流に完全に受け入れられたわけではなかった。

捕虜収容所の残忍なイニィシエイョンションを逃れてちょうど 3 年後の 1951-1952 年の冬に、コズイレフ博士は、非常に興味をそそる論争の的となる 33 年かかることになった一連の徹底的な実験の最初のものを行うことで、異端的な物理学世界へ進出を始めた。

彼の研究の明らかな欲求は、すでに最も極端な状況下の挑戦で徹底的に体験した、イルミネーションとイニシェーションの神秘的プロセスの、スピリッチャルな真実を確認することだった。(それはルドルフ Steiner’s の古典知識の中で、高度な世界の達成について言及したように)
彼がこれらの画期的な研究の結果を発表し始めたとき、
ロシアの多くの科学者と、非常に少ない西側の科学者は彼の過去の成功に基づいて聞く準備ができていた。
我々が言ったように、強制収容所でのコズイレフ博士の目に自然の中の螺旋を描くエネルギー・パターンは、はじめて自身を見せた。

彼の“direct knowledge 直接知”はこの螺旋を描くエネルギーが真実の自然であり“時間”の現れであることを知らせた。そして、我々が現在、それが単純な時間を測定のための機能以上のものであることを知るように、彼にはそれが“時間”であると感じられた。
コズイレフは、我々に時間の原因について考えるよう訴え、現実の宇宙で定義可能なものは、すべて時間に関係する。
しばらくこれを考えた後、我々は最終的に時間が純粋な螺旋を描く動きそのものであることを知る。
我々は、地球と太陽系の軌道パターンのおかげで、空間を通る複雑な螺旋を描くパターンを知る。
ところで、“temporology（時間の”科学）の研究は仕事を創始した Kozyrev’s 博士の影響を受けて、モスクワ州立大学とロシア人道財団で継続的な、活発な研究が行われている。
Moscow State University and the Russian Humanitarian Foundation,
彼らのウェブサイトは、それを述べる：
我々が時間の「性質」のメカニズムを理解すると、[それが、もたらす] もので世界中に新しい変化があらわれ起こる。
時間の「性質」を示す、物的世界の中の現象プロセスの、「キャリヤー」の特性は、時間のそれと一致することが確認された。

庭に落ちた木が「時間の流れ」によるのではなく強風で落とされた時、これは、一見奇妙にみえるかもしれない、
しかし、あなたは、風が吹く原因は何か、自身に尋ねなければならない？
最終的に、その地球の軸上の運動が、最も関係する。
それゆえに、全ての変化は何らかの動きに起因する、そして、動きなしでは、時間もありえない。
ロシアの Temporology 研究所を通して論文が発行された学者の何人かは、コズイレフが彼の用語“time 時間”でなく、より普通の科学用語（例えば“物理的真空 vacuum”または“エーテル）といった、”言葉を使用するならば、引き続く数年のうちに多くの人々がすぐに彼の仕事を理解したことに同意する。
読者が時間の顕れとして完全に螺旋を描くエネルギーの原理を理解することはこの時点では必要ではない、これからの進行で、明かになる。
コズイレフの概念に関して西のメディアに紹介した極めて少ない 1 つは 1970 年のシーラ・オストランダーとリン Schroeder’s の草分け的な本「鉄のカーテンの背後の神霊的発見」中の 1 章であった。そして、それは世界的な称賛を獲得し、「心霊的的発見 Psychic Discoveries」という短いタイトルで.、今日でも再版されている。
上記の Kozyrev’s の前半の背景と職業経歴に関する大部分の伝記的情報は、この源から来た。

“Time と題された第１３章で、
６０年代のニュー・フロンティア政策、の心で著者は説明する”

コズイレフは日に焼け、強健で、あたりを睥睨し、ほとんどスピリッチャルな質の、偉大な落ちついた印象を与えたと彼らは述べる：
評判と、成し遂げた仕事において、彼は我々が会った最も重要な科学者である。
彼は、新しい世界観（新しい宇宙発生論）を説明しようとしている。
Kozyrev’s 新しい概念の下で、サイキックな出来事は、ぴったり収まる。
これらは現在の科学の見方の中にあるもので、これらはシステム外の何かであったり、システムの保護を否定しなければならないもの、ではもはやない。
物理学と心霊現象の関係は有名で、現在ますます閲覧できるようになったロシアの論文で、しばしば議論されている、そして、Kozyrev’s 作業は疑う余地なくそれへの道を開いた。
Kozyrev’s 作業博士に言及する少ない西側の研究者のうちの 1 人は、カリフォルニアのダグラス調査研究所のアルバート・ウィルソン博士であったが、彼は言った。
私は、コズイレフが仮定したような何かが次の 10 年または 20 年の範囲内で物理的理論で確立されるのを強く感じる。
その関連は、革命的である。
彼が必要としたジャンプが科学的な知識として取り込まれることができ、その仕事は生成することができた。
現在 21 世紀の夜明けで我々は最終的に全ての部分をまとめることができ、Wilson’ s 博士の予測はおよそ十年ほど短かいものであった。
我々の用語を統一しておかなければならない、
我々はそのコズイレフの発見した「時間エネルギー “time energy”」の螺旋を描く流れを記述するのに、一般的科学用語「torsion ねじれフィールド」/、あるいは、「ねじれ波 “torsion waves”」を使う。“torsion” という[言葉は、本質的に “spinning” または “twisting.” を意味する]
多くの西側の科学者、特にトム・ビアーデン中佐はこれらの話題を探検し、これらを “scalar waves” と呼ぶ、しかし、我々はそれが絶えず螺旋を描く性質を思い出させるので、“torsion waves” が最終的に使用するのに簡単な言葉であると考えた。
読者は、全てのケースで、扱っているものがエーテル/ZPE/物理的真空の媒介で動く、電磁性質を備えていない単にインパルスの運動であることを知っていなければならない。
コズイレフがこれまでに彼の実験を行い始める前に、良い、堅固な理論上の基礎は彼の結果を説明するのにすでに適切だった。
我々は事前に Einstein’s の相対性理論の議論から始める。そして、ねじれフィールドの存在を理論的に最初に確立した、エリ Cartan’s 博士のモデルを追加することが続く。

1.4 EINSTEIN の重力の幾何学的モデル

アルバート・アインシュタインは 1919 年 5 月 29 日に、おそらく「…我々は曲がった 4 次元時空に生きていることを証明した」
空間と時間は、ともに「構造として溶けあっている。」
彼は、空間を移動している地球」は空間と時間を引きずっており、この時空構造は、惑星のまわりで湾曲していると考えた。
このように、彼は言った、
もはや重力は距離のなかで作用する不思議な力ではない、空間の中を直線で移動したとしても、物の存在の影響でカーブする。
空間はカーブしている？
“空間は真空ではないのか？とあなたは尋ねるだろう”。
真空の何がどのように、カーブさせることができるのか？
我々が見ることができるように、
アインシュタインの重力モデルを理解する上で重要な問題は「カーブ」という言葉にある、
これは、幾分フラットな、弾性のあるシートで現される。
本当に、惑星のアインシュタイン効果を視覚化する大部分の試みは、これらの重さが想像上の平らなゴムシートをまるでへこませるように描く
それは、空間における時空の「構造」として伸ばされる。

彗星または小惑星のような物体は、単に幾何学的シートにしたがって地球の方へ進行する。

このモデルに関する問題は、平面でない時空の湾曲の動きが球状の物体の全ての方向に必要であることだ。
さらに、ゴム・シートを平面にしようとして重力は重さでひっぱる。
重量のない空間では、ボールとシートは、単に一緒に平らに広がる。
実際は、「流れる」という言葉は、「湾曲」よりはるかに正確である、
収束 III で我々がそれを示したが、
重力は、実際 aetheric なエネルギーの形で、絶えず物体に注がれている。
重力の方程式は、流れなければならない方向を、明記しない
それは単に地球の表面から離れて飛びださない物に関係する力として存在する。
このエーテルの流れのような考えは、ジョン・キーリー、ウォルター・ラッセル博士までさかのぼることが出来、もっと最近ではウォルター・ライトのより安定した“Push Gravity”理論がある。
一旦我々が重力と電磁気のような全てのフォース・フィールドが動くエーテル/ZPE の単に異なる種類であると確証するならば、重力との活発な関係が存在する理由をストレイトに理解する。
我々は、惑星の全ての物体の中のあらゆる分子が aetheric なエネルギーの進行中の流入に

よって支えられなければならないことを知っている。
地球をつくる同じエネルギーは、また、我々をつくり、注いでいる。
我々は、巨大なエネルギーの川の流れにひっかかっている存在だ
地球への、その空気の流れがスクリーンに正に吹きつけるとき、多くの蚊が、窓のスクリーンにぶつかる。
我々の体は固体中を移動することができない、しかし、aetheric なエネルギーの流れは確実にそれができる？これは、キーリー、テスラ、コズイレフその他多くの人が示したものである。
星または惑星は適切に絶えずその環境からエネルギーを得なければならない。そして、「生きている。」
1950 年代にコズイレフは、我々の太陽について非常に類似した結論をだした、
その結論は星が時間の流れを熱と光に変える機械「のような働きをしているというものだ。
ほとんどすべての西側の科学者は Einstein’s と特殊相対性理論理論がエーテルの必要性を排除したと思っているのだろうか？そして、本当に、アインシュタインは 1910 年にエーテルの否定を支持した。そして、それは主流科学が、この考えが終わったと思う理由である。
しかし、実際はアインシュタインは 1920 年に、エーテルの存在の“仮説が、特朱相対性理論と矛盾しないと述べた。そして彼は 1924 年に書いた、
「理論物理学の上で、我々はエーテルなしではやっていけない」
参考
直接的な長期的動きを除いて、一般相対性的理論では連続体に、物理的特性を割り当てる。従って、この短期的動きの、各々の理論で、連続的フィールドの存在を仮定し、 したがって‘ether.の存在を仮定する、’[強調を加えた]
1.5 TORSION PHYSICS

1.5 ねじれ物理学

1913 年に、エリ・カルタン博士は、
アインシュタインの一般相対性理論の中の空間と時間の「構造」（流れ）が「カーブするだけではなく」、それ自体の中で「ねじれ」といわれる回転するか螺旋を描く動きがあることを、最初に明確に証明した。
物理学のこの領域は、概してアインシュタイン-カルタン理論または ECT と呼ばれる。
基本「粒子」例えば電子は核の軌道に乗って回り、循環するか「回る“spin”」と量子物理学では考えるが、カルタンの理論はそれ以前に出たので、その時代はあまりまじめにとられなかった。
大部分の人々は現在通常、地球とおそらく全ての銀河を囲むスペースに“右手向きの回転があることが確認されたことを知らない。そして、物理的真空中をそれが移動し、” 時計回りにエネルギーが回転するように影響されることを意味する。

1996 年にロシアのアキーモフとシポーフ博士は、現在まで、ねじれフィールドの定期刊行物におよそ 100 人の著者による 10,000 の記事があると書いた：
参照それらの理論家は、半分以上、ロシアだけで働いている。
1996 年現在主に Kozyrev’ s 博士の仕事に影響されてこのテーマに関して 5,000 以上のロシアの論文があるのが簡単にみることが出来る。
古典的物理学モデルでは、これらねじれフィールドは、主に理論的に存在するだけだったので、重力または電磁エネルギーに共通な力とは公平には考えられなかった。
本来の Cartan’s の 1913 年の理論はねじれフィールドが引力より約 30 桁弱いと推測した、そして、すでに電磁エネルギーより重力は 40 桁弱いことが知られている！
そのような小数点レベルでの影響は、“torsion fields” のスピンする性質は、理論は宇宙で観察する現象へいかなる目立った影響もない基本的に無関係な瑣末事項であるとした。
Trautman、Kopczyynski、F.、ヘール、T.ギブル、D.シアマなど、その他の、早期の仕事は、1970 年初期の’s、開いた心を持った科学者に、「ねじれフィールド」に対する関心の波を誘発した。
60 年前の Cartan’s 理論に基づくフィールドは弱く、小さく、空間の中を動くことができないという神話を、厳密な科学的な事実は、くつがえした。
アインシュタイン-カルタン理論の神話は、螺旋を描くねじれフィールドが動くことができないというものであった、（すなわち、これらは動かないままである）、そして、原子よりもはるかに小さいスペースの中にのみ存在できるだけだった。
ECT が予想したこれらの基本的ねじれフィールドの存在は、“静的ねじれ fields.” と呼ばれることをシアマほかは証明した。そして、アインシュタインとカルタンが仮定したものとはるかに違う、著しい特性をもつ、“dynamic 動的なねじれ fields” が同様に示された。
シアマほかによれば、静的ねじれフィールドは、エネルギーを少しも放射しない源を回すことでつくられる。
しかし、一旦あなたが回転源をもつならば、どんな形態であってもエネルギーを放出する、（例えば太陽または銀河の中心のように/、あるいは例えばその軸を中心に回転しつつ、同時に、太陽を中心に回っている惑星のように、同時に、複数の種類の動きの回転源で起きるところに、ダイナミックなねじれ波は、自動的に生じる。
この現象は、単に一つの「静的」点にとどまる代わりにねじれ波をスペースを通って広がらせる。
このように、ねじれフィールドは重力または電磁気の様に、宇宙の中の 1 つの場所から他の場所まで移動可能である。
我々は後の章でコズイレフが 10 年前、これらのフィールドが、“superluminal” 速度で伝わる、つまりこれらが光速をはるかに上回ることを意味することを証明したことを発見する。

「時空の構造」の中を重力または電磁気と別の超光速に見える速さで直接移動するインパルスが確定できるなら、物理学の中の重要な突破口を開く？それは「物理的真空」、「零点エネルギー」または「エーテル」が本当に存在しなければならないことを迫る。

1.6 MASTER LIST OF PHENOMENA THAT CREATE KOZYREV’S EFFECTS

1.6 コズレイエフ効果現象のリスト

Kozyrev’s 実験は、1950 年代に始まって、1970 年代から V.V Nasonov 博士の結果の検査方法と統計分析の標準化の手助けの援助のもとで進行した。

これらの実験は最も厳しい状況の下で行われ、何百または多くの場合何千もの判定を繰り返し、広範囲な数学的な詳細において書かれたのを思い出すことは、重要である。

これらは厳しく綿密にチェックされた、そして、Lavrentyev その他は独立して結果を繰り返した。(この本では、読みやすくするために Kozyrev’s 効果の数学的な/分析を省略した。)

コズイレフが“time.flow”と呼んだ「ねじれフィールド」の面に反応する回転と振動を使って特別に作られた探知器が、設計された

我々が以前のアナロジーに戻るならば、物質は水の中でスポンジのようにふるまうと言った。

例えばそれをしぼり、それを回したり、振動させ、スポンジの構造を変化させるならば、周囲の環境に水の一部を放出する。

研究所で長年観察された、次の物質の攪乱現象の全ては、ねじれ波の“time flow”によると理解される：

- 物理的物体を変形させる
-ジェット噴出気への影響と坊害
- 砂時計の漏刻への影響
- 光の吸収
- 摩擦
- 燃焼
- the actions of an observer, such as a movement of the head
-例えば頭の動きのような観察者の動作
-物体の 熱の上昇、または冷却
- 物質の相転移（氷の液体化、液体が蒸気へ、その他）
- 物質を溶かし、混ぜること
- 植物が弱体化し枯死
- 天体間の物体からの光ではない放射物
- 人間意識の中の急転

意識に関連する面倒な最終的な装置でなくとも、各過程がどのような方法で物質を撹乱す

るかすぐに理解することができる、それは aetheric な「水」の分量を吸収するか放出する原因になり、それは、我々のスポンジのアナロジーで完全にまに合う。
またさらに重要なことは、強い感情的なエネルギーは、距離が離れたところで、測定可能な反応を引き起こすことができ、事実、コズイレフ博士以外のかなり多くの他の人々によって、この反応は繰り返し報告された、そして、これからサイキック現象と意識の概念がうまれる。
この概念は 2001 年 9 月 11 日のアメリカ合衆国へのテロリスト攻撃の後、大きいニュースにさえなった。そのとき、ノエテックサイエンス研究所のディーン・ラディンと彼のチームは攻撃の前後の時間に、コンピュータ化された乱数発生器の動きに相当な変化を見ることができた：
図 1.4？
ラディン/INS のデータは 2001 年 9 月 11 日の、大衆の意識変化を測定している
人類の大衆の意識変化が、世界中のコンピュータ回路、特に北アメリカに最も近いコンピュータの電磁エネルギーの動きに影響を及ぼしたことをグラフは、示している。
我々は後で、これが、全く新しい意識の科学“consciousness science.”の世界の始まりであることを知る。
ねじれ波と意識は知的エネルギーと本質的に同一の顕れであることを示唆する
物理的物質の領域に戻ると、Kozyrev’s の仕事は、ねじれフィールドは吸収でき、シールドすることができ、時々反射できることを示した。
たとえば、砂糖は吸収することができ、ポリエチレンフィルムとアルミニウムはシールドすることができ、そして、アルミニウムまたは鏡の他の形は反射することができる。
コズイレフは、このエネルギー流の面前でそれを見つけた
、堅くて非弾力的な物は、重さに変化を示す、、曲がりやすく、弾力性がある物は、弾力/または、粘性の変化を示す
またコズイレフは、振動、熱、冷却、あるいは、電流がそれを通り抜けると、回転するトップの重さが変化することを示した。
我々が見るように、物質の上記の挙動の全ては、少量のエネルギーを意味する“水”を吸収し、放出する “スポンジ”のアナロジーと全くよく一致した。
1.7 BUILDING A MECHANICAL DETECTOR FOR THE “TIME FLOW”

1.7 “TIME FLOW”のために機械式探知器を造ること

明らかに、この点で答のない最大の挑戦はそのようなエネルギーを機械的に見つけることを可能にする方法である。
1 世紀以上の間、結局、主流の科学者は完全にそれを避けてきた。
ここで、ねじれ波の物質への力は比較的小さいが、安定した圧力を出していることを思い出すことは、重要である。

シポーフの研究、Terletskiy と他のロシアの理論家は重力のエネルギーとねじれフィールドのエネルギーを直接関係させ、このように、“gravispin energy”学説と、“gravispinorics.”の科学へと統合した。
この新しい理論では、重力とスピンは静電気学と磁気が電磁波に結合するのと同じ基本的方法で結合する。
ねじれ波はどんな方向でも動くことができるが、概してこれらは重力場の下への流れに最も吸収される。
ねじれ波の圧力の最も強い効果は、わずかな重力に関係する螺旋を描く動きである。
それがあまり微妙な圧力であるので、落下物にいかなるそのような動きも概して気がつかない。
多くのコズレイエフのねじれ波の機械式探知器は、循環するジャイロスコープまたは非対称に揺れる振り子のような、動いている物を含む。
動いているそのような物がどのようにこの穏やかな圧力を捕らえることができるか単純なアナロジーが、理解を助けてくれる。
海上の船は、帆を風の流れの方向に、合わせなければ船は動かない。
帆は風の方向に向けなければならない、そして、風の流が変わるならば、また、新しい方向を捕らえるために帆を動かさなければならない。
ねじれ波を見つけることは、ねじれ波が三次元の螺旋の形で絶えず方向が変わるので、風をとらえて出航するより難しい。
それは三次元の螺旋で絶えず動くエネルギー力を利用して測定する物で、測定の際、振動を起こさなければならない。
コズイレフは、振動と動きの 2 つの異なる形を一度に結合することでねじれ波の微妙な圧力を捕らえることができた。
我々は以下のパラグラフに書かれた正確な方法を議論する。
これらの特別な研究所の状況下の、ジャイロスコープまたは振り子は、コズイレフがそれを“time flow”エネルギー呼んだものに相互に作用するのに用いた。
このケースで、探知器は、エネルギーに応じて重さの変化、または突然の角度をもった動きを示す。
コズイレフが使った“time flow”エネルギーの最も基本的な探知器の 1 台は“torsion バランスであった。それは糸でつるされているように、”自由に回転できる、バランスビームだった。
1971 年のコズレイエフの最初の論文に書いたように、光線の端は重さ 10 グラムで、反対側は 1 グラムだけで、トリソンバランスの両側とも重さが等しく分布されていなかった。
コズイレフは、直径 30 マイクロメートルで 5 から 10 センチメートルの長さの capron（フィラメント）で、このビームをつるした。
明るい端よりもビームの最も先端にひもが付けられ、ビームは完璧な水平位置におかれ重

力の影響を受けた。
この位置は光線の中に大きなストレスをうみ、それを非常に簡単に動かした。
ビームの明るい端にポインターを作った、それによってコズイレフは、いつでも、分度器の上で光線が動いた度数を測定することができた。
空気によって影響されることを避けるために、中の空気の全てを外へだし真空にできるように、全システムはガラスのキャップの下に固定された。
さらに、全ての既知の電磁的影響がシールドされるように、コズイレフはファラデー箱に似た金属ネットで、キャップを囲んだ。
最も重要なことは、フィラメントの一番上にはビームバランスがぶらさがっていて、電磁装置で機械的に振動していた。
ビームは、ひもの最上部で特別な振動として完全にまだ残るので実験は、有効であると思われなかった
しかし、ひもの上部を揺するこれらの余分の振動は、外部の振動に対してより大きな感度をつくり出し、それは、物体全てを通して反響する。
不均等な重さのセットが水平に、細い紐で慎重に止められ
それは、多くのストレス下にあって、最もわずかなタッチで非常に簡単に動くシステムを与える。
これは、単純にいえば全車両を持ち上げるためのジャッキのクランクを回すレバーへの力に似ている。
それから、上下にひもを動かす振動と、バランスへのストレスを加えるとき、ねじれ波のwhisper-soft-柔らかいささやきともいえる圧力の影響を示すほど、探知器は、極めて敏感な全ての必要条件を持つ。
これは、この力を捕らえ、見つける賢い方法のうちの１つである。
（別の例では、ジャイロスコープが動くように、振動するストリングにぶらさげた。）
この意味で、この非常な感度は、矩形の平らな表面に一直線に、上向きに空気を噴射する小さい多くの穴を持つエアホッケー・テーブルと同様に働く。
前後の２人のプレーヤーは軽い、平らな円盤を打つことで、ゲームはする。
この場合上方への力で、テーブルの上の空気が動くならば、パックの重力は打ち消されて二つの間に繊細な釣合いをつくる。(Kozyrev’s 実験のフィラメントの余分の振動に似た非対称なバランスに似ている)
放っておかれるなら、パックは完全に止まっているかもしれないが、空気が噴出しているとき、パックを打って新しいエネルギーをシステムにもたらすならば、ごくわずかな努力で、極端に速く動く。
噴出空気がないとき、パックはもっとゆっくり動き、それを動かすには大きな力が要求される。
同じことは、コズレイエフの探知器でも真実である。

通常ねじれ波の“圧力”が静止した物を動かすのには十分強くないので、余分の振動のエネルギーを含まず、あなたが反応を見たのなら運がよかった。
余分な振動が重要であることがわからないので、コズレイエフの実験を追試しようとした多くの科学者は成功しなかった。
当然、それが非対称でない、あるいは、ひもの最上部に振動を導入しないならあなたは振り子でねじれ波を見つけない
この影響を視覚化するもう一つの方法は我々の最初のアナロジーである。1 滴の熱いフライパンに置かれたものに対して、冷えた金属の上に置かれた水との違いを注意する。
フライパンの中の金属の振動は水がフライパンのまわりをビュッと進む原因になる。そして、どんな方向からの圧力でも最もわずかな変化に非常に敏感になる。
我々のスピリッチャルな傾向の読者には、数千年間イニシェイションの教えは宇宙の目に見えないエネルギーを認めることができるために、あなたの vibrations をあげる必要性に言及してきたことに注目するのは面白い。
我々のワークショップで判明したように、時間の比較的短い間に、人間は触感に人間の“オーラ aura”のねじれ波の穏やかな圧力に応答するために訓練することができる。
ドルフ・シュタイナーまたはカルロスカ、スタネーダの作品に書かれたような長いトレーニングで、人間のエネルギー・フィールドは、結局現状のままで視覚的に見ることができる。
パート 2 において、我々の物理的体の構成要素としてのねじれ-波、人間のエネルギー・フィールドが本当に存在することを証明する多量の証拠を議論する。

1.8 SIMPLE MOVEMENT CREATES TORSION WAVES

1.8 単純な動きは、ねじれ波をうむ

コズレイエフの実験の一部は見かけと違って単純だったが、彼が達成した効果を考えてみる。
たとえば、10kg の重さの単純な上げ下げは振り子への 2-3 メーター離れたところからの壁を通して移動する影響するねじれ波の圧力によるものであった。
探知器として使われた振り子はガラスにシールドされ真空のなかに置かれたので、この影響は空気に起因することはありえなかった。
再び、実験の重要な構成要素はひもの上部から特別のテンションと動きをひき出すために振動させておく必要があることで、そして、ねじれ波の圧力は振り子から得られる。
これは完全に 10 キログラムの重さの質量が水の中のスポンジのようにふるまうことを示すもう一つの実験である。そして、それが“上下に動くとき、周囲の水”に“波紋”をつくる。
これは再び見る、物質の基本特性である。

1.9 WEIGHT INCREASE AND DECREASE CAUSED BY SIMPLE MOVEMENT

1.9 単純な動きに起因する重さ増加と減少

類似したもう一つの実験では、コズイレフは重さ測定のために使われる典型的なビームバランスを使った、右側に一定の重さのものがあり、左側にいろいろな物を止めるためのフックがあった。
この場合コズイレフは、左側に単純な重さの物つるし、ゴム片の上に載せて簡単にバランスさせた。
通常重さはどちら側でも安定した位置におり、ビームは、特定の重さでバランンスしており、スケールで測ることができた。
コズイレフは、それからビームバランスのアームを安定させ彼の手または留め金のどちらかでそれが動かないようにし、左の上のフックから、物を取りはずす。
それから、彼はおよそ 1 分間ゴムの部分の上で物体を上下してゆする。
それがすべてである！
こうした後、完全に静かに物体をバランスアームに戻して、再びその体重を計ると、それはわずかに前より高くなる。
スケールで物の重さが徐々に、減少することは、取り入れた余分のエネルギーを放出したことを明らかに示している。
彼がバーをもつとき概して金属クランプを使うようにして、彼の手がバランスアームを熱しないように注意したことは重要でした、
面白いことに、特定の日には、このテストは全く簡単に効くのに、他の日には、それは大変な困難を伴なうか、または全っくできない。
同じことは、10kg の重さを繰り返し上下させた上記の実験でも真実である。
これは、“時間変数”現象として知られていて、下で議論される。

1.10 KOZYREV’S 結果は決して反論がないよう、繰り返された

多くの読者は、Kozyrev’s 効果が単に彼の記録のエラーだと予想する。
ここで、N.A Nasonov’s 実験結果への具体的な反証がないことを覚えておくことは、重要である。(Levich（1996)）
それに加えて、独立したグループの研究者は、今は再度、Kozyrev’s 実験の一部を確かめた。
これらは、1960 年代-1980 年の A.I Veinik、、1990 年の Lavrentyev Yeganova 他、1990 年の Lavrentyev、グーセフ他
1991 と 1992 年の Lavrentyev 他.を含む。

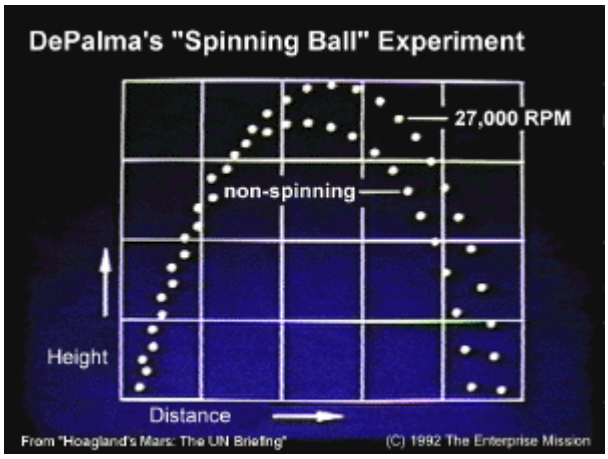
アメリカの研究者ドンサベージ Don Savage も、Kozyrev’s の仕事の多くを繰り返し、「科

学と技術の考察 Speculations in Science and Tech」でそれを発表した。
さらに、1989 年にコズレイエフの仕事の知識なしに、早坂と S. Tekeyuchi は、150 グラムのジャイロスコープを回転させ、2 台の精密なレーザー光線探知器の間にジャイロスコープを落とすことで、類似した体重の減少効果を発見することに最近成功した。
（ジャイロスコープを思い出せば、すなわち回転状態と非回転状態で、振動とか動き--この場合は、落ちるだが----、熱伝導または電流移動のような付加的プロセスが導入されない限り、重さは変化しない。
早坂ほかの研究結果、（実際は三菱会社に代わって実行された）を考察すると主流メディアで驚くほど報道した。
さらに、結果の原因をねじれフィールドの効果にあると彼らは考えた。
S.M. ポリャコフ博士、ブルース・デパルマ博士、サンディ・キッドのような他の多くの研究者は独立してジャイロスコープでの重力変化を発見した、しかし、彼らのほとんどが完全にはエーテルの流体の性質を理解しなかったように見える。それはねじれ波の螺旋を描く動きで、常に移動する。
1.11 ANTI-GRAVITY EFFECTS CAUSED BY THE DIRECTION OF ROTATION

1.11 回転方向に起因する反重力効果

コズイレフの多くの実験は、重さの変化が引き起こされる際、探知機への運動方向が非常に重要なことを示した。
彼は反時計回りの運動で回転したとき、振動しているか、熱くなっているか、電気を伝導させたジャイロスコープがかなり体重を減少させるのを確かめたが、それが時計回りの運動で回転するならば、それは不変のままだった。
コズイレフはこれが“Coriolis 効果に起因すると結論した。そして、物が地球の表面の方へ落ちる回転の動きをそのままを示す。
最終的に、この微妙な螺旋を描くねじれた圧力は地球に流れ込むエーテルの流れ（重力）になる。そして、全ての原子と分子の存在を支える。
1680 年に、ニュートンとフックはコリオリ効果が長い鉱山の穴に物を落とすことによって本当にあることを確認した、そして、実験はその後何回も繰り返された。
コリオリ効果は、北半球では反時計回りの動き、南半球では時計回りの動きを引き起こし、気象システムの背後にある動きの主な力と考えられる。
コリオリ効果の力が発見される前、大砲を長距離にある目標に発砲するときのそのファクターは、非常に混乱させられる軍の大問題であった。
それは大部分の人々が知らない、ほとんど知られていないもう一つの科学的事実である。
我々は、コズイレフが変則的な効果を見るために最初ジャイロスコープを振動させるか、熱くさせるか帯電させたのを思い出す。
これらの状況下で、彼はジャイロスコープを時計回りか反時計回りの運動で動かした。

振動するジャイロスコープを北半球での反時計回りの方向に動かすならば、それはコリオリ効果の反時計回りの流れに、同調して動いている。
これは通常物を押し下げるエネルギーの一部を吸収する原因になる、そして、その重さに小さいが、確かな減少が測定される。
独立して G.早坂と S. Tekeyuchi の仕事は、我々が上で言及した同じ変則的な結果を確かめた。
彼らのジャイロスコープが反時計回りに回転したとき、それは予想されるより、ゆっくり落ちるが、それが時計回りに回転しているならば、変化は見られない。このように、Kozyrev's 研究結果を確かめた。
当然、日本は、北半球にある。
コズイレフも、これらの実験で更にねじれ波に導くことを見つけ、彼のジャイロスコープが 100%水平に保たれずにあるなら、（まっすぐ下に動く）重力は、ねじれ波とどうも合致すると、示唆し、その後の理論家によって確かめられる。
エーテルの存在とダイナミックなねじれ波の現象なしでは、これらの結果のどれもが、単独では可能ではない。
1.12DEPALMA’S デパルマのボールの回転実験
図 1.5？



1992 年のホーグランドの国連のブリーフリングからの
ブルース・デパルマ博士の回転するボールの実験データは国連の R.C Hoagland’s.エンタープライズのウェブサイト上でホーグランドほか、によって要約され引用され、回転によるねじれ波を利用する完全な例で、ブルース・デパルマ博士によって完全に独立して発見された。

完全な真空の内側で、デパルマは 2 つの鋼のボールをとり、等しい力の量と、等しい角度でこれらを空中に投げ込んだ。
唯一の違いは、1 つのボールが毎分 27,000 回転させ、そして、他は回転させなかったことであった。
回転しているボールは空気へ高くあがり、対応するボールより速くおちた。そして、それは物理学の全ての既知の法則を犯した。
この影響の唯一の説明は、
両方のボールは、目に見えない関係からエネルギー自身に引き入れているというものである、そして、回転しているボールはその対応する物よりこのエネルギーをより多く「吸収する」ことにある？
エネルギーは地球に通常落ちてゆく、重力として存在する。
ねじれ波の-フィールドの調査を追加することで、我々は回転しているボールがその環境において自然に螺旋を描くねじれ波を利用できたことを知ることができる。それはそれにエネルギーの付加的な供給を与えた。

1.13 TIME-VARIABLE EFFECTS

1.13 時間-変数影響

コズイレフは、時間-変数の影響が彼の実験の範囲に生じるのがわかった。
彼は、これらの実験が晩秋と冬の前半に最も成効するということを発見するが、夏に実行するのは不可能だった。
コズイレフは、夏の空気の暖さがねじれ波の流れを中断させ妨害すると思った。
余分の熱は空気分子がより活発に揺れる原因になる、そして、このターンがねじれ-波が移動する際の微妙な螺旋を描く圧力を分裂させる。
彼が彼自身それを説明したように、
「太陽の光線による暖房は、[実験的な]効果を妨げる。」大気の層を作成する、
彼の職歴の初期に、彼はこの時間-変数効果が暖かい月に植物の自然の力で起こる成長に起因すると思った、
成長する植物の単純な存在が彼ら自身にエネルギーを引っ張って、それは通常探知器へと流れ彼の実験結果を妨害するとすでに気がついた。
明らかに、夏彼らの成長のためのエネルギーを吸収する植物と暖かい大気の中の振動の増加した混沌の組合せは、両方とも暖かい季節の間にそのような測定をする困難に関係することがありえた。

この季節実験の効果は、また、これまでに彼の結果を繰り返すことができる晩秋でも冬の状況を決して経験せず、実験をするのに最も好都合だった南カリフォルニアなどの地域に住んでいるアメリカの科学者を邪魔することができた。

1.14 場所、場所、場所

他のコズレイエフの仕事で全体にわたるものへの関連をいうと、実験する地理的場所でも重要な違いが生まれるということである。
彼の最高の結果は北極の近く最大の緯度 84° 15’（北極は 90° .である）で大量の氷が押し流されていく上で冒険的に測定を実行したときに、最も多くのことが得られた。
ねじれ-波エネルギーの最も大きい量が極地の地域で地球内に流入していることは我々が示したように、これは非常に重要な点である。そして、赤道の方へ進むと、弱くなる。
確かに、大部分の読者は、地球の極地に関連するこうした効果の説明がないのを不思議に思う。
答えは、磁気の研究で見つけられる。
1991-92 年の（A.I.）
ベェイクは、典型的“permanent”鉄フェライトの永久磁石には総体的な磁場があるだけではなく、N 極の右利きの回転と S 極の左利きのスピンによる総体的なねじれフィールドがある、とした。
G. I シポーフ博士は、全ての電磁界がねじれ波を起こすことを証明した。
みんなが地球の磁場が極地に最も集結することを知る時、同様にねじれ-波の最も大きな強さが極地地域にあることを知ることができる。
リチャード Pasichnyk の本とウェブサイトで、地震インパルスが東から西へむかうより、北から南の方が速く移動することを証明した
このように、極地地域の中へ流入し放出するねじれ波の付加された圧力は、コンパスで測ることが可能な典型的な南北極性の磁場よりはるかにに多くの影響を及ぼす。
コズイレフもねじれ波のエネルギーが地球の南半球では北と違って流れるとした、これは再びコリオリ効果による。
彼は、重力加速の速度が微妙な 3.10^-5 のファクターで、南北の半球間でわずかに変化することを発見した。
これは、地球の球面のカーブの形が南部に対して北半球では実際より平らだというあまり知られていない事実によるように見える！
これは、また、他の惑星（例えば木星と土星）でも観察され測定された。
コズイレフは、南半球の表面がわずかに北半球より地球の重心から遠く離れていることが、重力加速度の微妙な変化に関係すると思った。

1.15 LATENT FORCES EXISTING AFTER ENERGY STOPS BEING GENERATED

1.15 エネルギー発生が中止した後も、潜在的な力は存在している

「潜在的」という言葉は「表面に残されている」ことを意味し、コズイレフはねじれ波を起こすのをやめたあとも特定の影響、または、物の測定の妨害はしばらく続くのを観察した。
我々は、コズイレフは、ゴム片の重さを単純に振ることはどのようにその体重が増加する原因になるか示したのを覚えている
一旦その後でバランスビームに置かれるならば、通常の静止質量までゆっくりもどる。
物がその通常の重さへ復帰する時間が、“latent force 潜在的力”を測る方法である。我々はそれを測定できる
他の特定の物質は、Kozyrev’s コズレイエフの実験より速く重さが増加し、減少する。
コズイレフは、その物の重さの増加と、減少率は実際に全体的な体重だけでなく、その密度または厚みに基づくと結論した。
彼は材料の密度が濃いと、残りの力は速く消え、ねずみ算式の増加率で重さの損失が起きることを示した。
若干の例が、ここにある：
- 11 の密度の鉛は、14 秒でその潜在的な力を失う、
- 2.7 の密度の、アルミニウムは 28 秒で、その潜在的な力を中で失う、そして、
- 0.5 の密度の木は、70 秒でその潜在的な力を失う。

これを理解するのが難しいならば、マットレスまたは椅子のクッションに使う泡のような高密度の、厚いスポンジは、古く使い古された台所のスポンジのような軽く細いものより一層“spring”効果がある事実を考えることができる。

材料が持つ“spring”はより多く、速くエネルギーを吸収でき、放出することができる。(Nasonov 1985a, p.15).
コズイレフも、銅、ブラス、クォーツ、ガラス、空気、水、石炭、黒鉛、食卓塩その他に対する効果をテストし、最大の維持時間と、“最大の影響がレンガまたは火山 tuff”のような多孔性材料の上に観察されることを示した。(Nasonov 1985a（p.15)）
スポンジに似た、多孔性材料がある時、これに我々は興味を起こさなければならない。それ自体が多くの孔または穴で満ちていることを意味する。
1.15.1 THE ASPDEN EFFECT

1.15.1 アスプデン効果

システムの中に存在している潜在的な力のもう一つの例はアスプデン効果に見つかる。それはケンブリッジ大学のハロルド・アスプデン博士によって発見された。
この実験は、中心車輪に強力な磁石から作られたジャイロスコープをつかう。
ジャイロスコープを特定の最大速度に回転させるのに要求される通常のエネルギー量は、

1000 ジュールであった。
1 杯のスプーンでかき混ぜられる水の様に、ジャイロスコープの回転はその中心車輪の中に aetheric なエネルギーが螺旋を描き始める原因になる、そして、一旦アスプデン博士がジャイロスコープを中止させると、この泡立つ動きは物にとどまる。
驚くべきことに、Aspden’s ジャイロスコープが最高 60 秒間回転を止めたあと、それを初めに達した、同じ速さにもどすにはわずか 100 ジュールの 1/10 の少量のエネルギーが必要なだけである？。
これは、単にアカデミズムによって無視された「物理学の法則を犯す」再生可能な他の効果である、
しかし、これはコズイレフの仕事の、背景であり、
我々は、西側で一般的この効果を認めさせるためのアスプデン博士の苦労を読んだロシアの科学者の含み笑いを聞くことができる。
現在、あなたは、コズイレフがリード（Pb）とアルミニウムが 14 から 28 秒その潜在的な力を維持することを示したことに注目したかもしれない、それなのに、Aspden’s 博士のジャイロスコープはまる 60 秒間これらの力を保持する。
これはジャイロスコープの中心におかれた強力な永久磁石で余分の aetheric な/ねじれのエネルギーが利用されるという事実による？そして、収束 III で、我々は磁石を回転させせるこの基本特性がどのように多くの異なる“free energy”装置をつくるのに用いられたか示した。

1.16 MASTER LIST OF NON-MECHANICAL DETECTORS

1.16 非機械式探知器のマスター・リスト

我々はこれまでジャイロスコープ、振り子と、ねじれ波ビームバランスを議論したが、コズイレフはまた、「時間流」エネルギーを拾うことができる非機械式探知器を発見した。
それは我々が、「非機械的である」ということを意味するもので
通常必要な動く部品なしでねじれ波が、見つけられることができた、
それは例えばジャイロスコープの中の、ねじれ波バランスと振り子のように 2 つの異なる形式の機械の振動または運動を含む。
これらの非機械式探知器の一部はねじれフィールドに面して完全に相当な変化を示す、そして、タングステンとクォーツ quartz の場合、材料のねじれフィールドの影響を不可逆性にすることが出来る。
以下の全ては、ねじれ-波エネルギーの面前で変化を示す：
-特にタングステン金属で作られた電子抵抗器の伝導
- 温度計の中の水銀濃度
- 水晶発振器の振動数
- 熱電対の電位差

- 水の粘性
- 光電セルで行われる電子の仕事量
- 化学合成物の反応率（例えば Belousov-Zhabotinsky 効果）
- バクテリアと植物の成長因子

N.A Kozyrev’s の上記の探知器の記述を含む正確なグラフ、詳細な統計、分析と全ての仕事の、非常に詳細な概要は、（A.P. Levich による”）「Kozyrev’s の時間概念の“解釈の要点」に見つかる。（1996 年）。

1.17 CHERNETSKY’S REPLICATION

1.17 CHERNETSKY の複製

これらの非機械式ねじれ-波探知器の一部は、A.V. Chernetsky, Y.A.のチームによって複製された。
また、ガルキンと S.N. Kolokoltzev は非常にコンデンサ電荷を保存する電子構成要素である aetheric なエネルギーを生成し、保存する装置をつくった。
彼らは“自己生成し放出する装置” の発明に言及した。
コズイレフ、Chernetsky ほかは運転中、その部分が装置の 2 枚のコンデンサ・プレートの間に置かれるならば電子回路の中の抵抗レベルが変化するとわかった。
また、それがプレートの間に置かれる前より、クォーツ発振器の振動の振動数は、1000 回以上、速くなることができた。
、これらを電気が通り抜ける間安定した脈動するリズムを維持するので、水晶結晶板の信頼性が、大多数のデジタル腕時計と時計の正確な時間が保持されるのに用いられてきたがこれは驚くべきことだ。
1.18 LATENT FORCES IN THE VACUUM AND IN MATTER

1.18 真空の中、そして、物質の中の潜在的な力

Chernetsky ほかは、彼らの“自己生成する放出装置”がまさしく時空構造の中に、“静的”または動きのないねじれフィールドをつくることができることを発見した。
たとえ物質が領域の中に存在しなかったとしても、“流れ current”は fluidlike 流体のエーテルをつくることができる。
機械がオフにされ、その領域から取り去られたあと、機械の 2 枚のプレートの間にあった領域で、Chernetsky ほかは同じようにねじれ-フィールド効果を測定することができた！
潜在的な効果は、タングステン金属またはクォーツ発振器にもある。
類似したもう一つの効果がドナルド・ロスによって発見され、彼はそれを“Magnetic メモ

リーと呼び”、新エネルギーのための学会に論文化した。
ロスは、それ自体をビームバランスに引きつけるために、ビームバランスにとても近くに磁石を持ってきた
そして、およそ 5 日後、
磁石はビームバランスから非常に遠く離れるよう動き、同じように引きつけることを発見した。
ロシア人は、 「“真空の構造化」としてこの概念に言及する、”、おそらくそれは我々に再び真空のスペースの中に Atlantean ミステリーの継承者が“エーテル.”として知っていた“何か”があることを明らかにする？
コズイレフも、物理的物質が同様に“構造化されることができることを発見した。
彼は 1977 年の論文の 217 ページに書いた、
特定時間、物体を[ねじれ波を起こす]プロセスの近くに置く…
それ自身をねじれバランスの上に持ってくると、[最初のねじれ波を生成する]プロセスと同じ効果が生じる、。
[記憶]処理の働きは、アルミニウムを除いて、異なる[全ての]物質の特徴である。
Dankachov は 1984 年に、 “記憶”または“structuring”効果が水で同様に起こることを示した、こうして時々西洋の代替科学的な考えに自分の道を見つけた。
水の記憶”の実験は、粘性または水の厚み測定値の減少原因となる基本的ねじれ-波の 1 つのプロセスを作成し利用することから始める。
それから、扱った水は別のコンテナの水に移す、すると、新しい水の粘性は最初に扱った水のように減少する。
ジャック Beneviste のような、他の実験はこの水の記憶” の効果が化学効果まで存続することを示す、つまり、ねじれ-波発生機は特定の化学合成物で水を興奮させるのに用いられる。
その化学合成物はエネルギー的に純粋な水の密封容器へ移すことができる、そして、密封された水はオリジナルと同じ化学特徴をもつ。

1.19 日食のエネルギーは影響をシールドする

プロローグですでに明らかに示唆したが、太陽系の 99.86%の総物質と、我々の太陽圏のねじれ波の源は、太陽が主である。
1970 年に、Saxel とアレンは日食の間、月の存在が太陽の輝くねじれフィールドをシールドすることを示した、そして、これはねじれバランスに振動段階の増加を引き起こす。
気象学者 v.s.Kazachok, O.V. Khavroshkin と V.V. Tsyplakov は 1976 年の日食の間のこの実験を繰り返し、同じ効果を生じることができた、1977 年に彼らはそれを公表した。
他の者は、同じ結果を日食の時点で単純な振り子の逸脱を観察することで得た。

1.20 分子配置によるねじれ効果のシールドまたは増幅

1913 年のアインシュタイン-カルタン理論が、最初の、ねじれフィールド理論の存在の基礎を確証したと我々は、すでに、言った。
理論は、意志も場所によって右利きか左利きである空間の中のねじれ波であることを予測する。
量子物理学の中の「スピン」の概念に関連した以降の発見は確かめられ
「電子」が、「右利き」か「左利き」のスピンを持ち、
意志の動きにも時計回りまたは反時計回りが見つけられることを意味する。
全ての原子と分子は、右と左のスピンの運動の間の釣合いの度合いの変化を維持する。
コズイレフは砂糖のような強い右利きの分子はねじれ効果をシールドできるとし、テレピンのような強い左利きの分子はねじれ効果を強化する。
ロシアの以降の調査も、ねじれ波のための優れたシールドが、一般のポリエチレンフィルムにあるとし、アレキサンダー・フローロフ博士によって議論されたように異なる多くの実験で使われた。
1.21 “QUANTIZED” CHANGES IN WEIGHT

1.21 重さの“量子化された”変化

我々は、コズイレフの実験を議論した
物体は、いろいろな方法で攪乱される、そして、変化した重さは、時間とともにゆっくりバランス状態に戻る。
1 つの重要な要因が、ある
我々の簡単な水の中のスポンジの便利なたとえとは、一致しない実験で、それは出てきて、それは「量子化効果」を生じることが知られている
（何がそれを引き起こすか後で我々は、説明する。）
何かが量子化されるとき、それは段階を追って特定の間隔をあけてであるだけで、動かないか、滑らかに数えられないことを意味する。
単に置かれても、物の重さは増加しないし、“latent force 潜在的な力”の実験でも着実に減少しない、しかし、中で、突然の出来事が爆発している。
これは、確かに物質が持つ非常に変則的な特性である。
コズイレフが言うように、
平衡の振動実験では、重さの減少は特定の振動状態から始めて段階を追って起こる。
振動周波数がさらに増加すると、重さが減少する
最初のものから段階を追って同じ数値で成長する
また一面、それほどこのかけ離れた現象の現

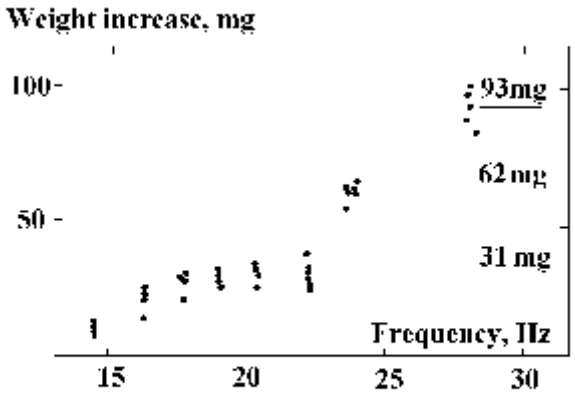


Fig.18. Stepwise weight increase with growing vibration frequency at a beam balance (Kozyrev 1977).

実的な説明は、発見されなかった
その後、効果の量子化がほとんどすべての実験で起こることがわかった。
（Kozyrev 1971, p. 126）
（コズイレフ 1971（126 ページ））
コズイレフはそれを振動に関係させ、この点で毎秒のサイクル数あるいは 1 ヘルツで測定し 620-グラムの重さに対するこれらの効果を研究した。
我々は、
物を冷やすことは、収縮させ、物を熱することは、膨張させることを覚えている。

熱と冷やすことは両方振動機能であるので、物を振動させる方法に従って、その体重を増加させるか減少することができる。
この実験では、620 グラム重さの物質は、それを高速振動に従属させることでわずかに増加する。
コズイレフと Nasonov は、より明確な数値が出てくる実験を行う目的で、
620 グラムの重さからより高く単純な 1 キログラムの数値までの結果から、後で直接数学的に「renormalize 再標準化する」ようにした。
次のパラグラフで与えられた数は、1 キログラムのレベルまで再標準化 renormalized される。
図 1.6？
増大する振動数とビームバランスによって測定された量子化された重量の増加。
我々がこれから見ることができるように、チャートが物の振動として 16-23 の閾値地域まで上がると安定的に 31 ミリグラムの重量の増加を物体は示す。（ヘルツ、または毎秒のサイクル数）
コズイレフは、毎秒 16 と 23 サイクルの間に振動を増やしても、このレベルで更なる重量の増加を見つけることができなかった。
彼がそれから、その重さで 24 ヘルツまで振動を増やすと、突然全体的な重さは増加し自発的に 62 ミリグラムと二倍になる。
振動を 24 から 27 ヘルツまで増やしたが、重さの変化は記録されなかった。
また、振動を 28 ヘルツから 31 ヘルツまで増加したとき、正味の重量の増加は 93 ミリグラムまで再び突然、跳び上がる。
新しい閾値に達するおのおの時に、最初と同じ 31 ミリグラムが得られ、全体的な量に加えられる。
コズイレフの発見として、
我々は、五から 10 倍の効果さえ得ることに成功した。
物の全体的な重さが増加したか減少したかに関係なく、この“effect quantization 量子力学的効果”がコズレイエフの実験のほぼ全てで起きたことを忘れられない。

このような何かが起こっているために、1 キログラムの物で測られた基本的 31 ミリグラムの間隔は、与えられたサイズの形と密度のベルをたたくときに、あなたが聞く、トーンに似て、そのボリューム、密度、重さとトポロジー（形）の結合された、機能によるものでなければならない。
コズイレフが物の振動数を上げると、新しい間隔で重さの増加が、生じた、
しかし、常に単位は 31 ミリグラムだった。
この“effect quantization 量子力学的効果”は実際に物質の多次元的性質を理解するための非常に重要な鍵である、原子と分子を図示するとき入れ子にされた球状波のタマネギみたいな構造がうまれる。
次章の議論で我々は、この実験の前後関係とそれが量子物理学の新しい発見に関連する方法を示し始める。

1.22 コズレイエフの意見を主流科学と結合することの困難

彼が測定した大きな効果はまだ少ないので、Kozyrev の意見は特に西側の、主流の科学的コミュニティで簡単には認めらていない。
たとえば、ジャイロスコープが回転し、振動する時 100 ミリグラムだけ軽くなるように、彼のメカニカルな実験で更なる力は研究され、10^-5 への 10^-4 の単なる要因によって、物の重さが変わると紹介された。
認めるべき法則としてこれはなんて小さい変化か
それは、ビタミン錠剤にラベル上では 100 ミリグラムの重さを持つかもしれない特定の活性成分を加えるのを思い出す。
コズイレフが書くには、
「これらの普通の破壊的なコースの発展と比較して時間の組織化していく特性は、星のような物質のシステムに対して非常に小さい影響を発揮することを実験結果は示している。
したがって、我々の科学的な知識システムにおいてこの実在が見逃がされたことは、驚くべきではない。
しかし、それは小量だが、事実上至る所に流れている、そして、それが保存される可能性だけが必要なだけである。コズイレフ 1982（p.71）)

REFERENCES:

リファレンス：

1. アキーモフ、A.E.とシポーフ（G.I.）Akimov, A.E. and Shipov, G.I.
ねじれフィールドの実験的な発現。Torsion Fields and their Experimental Manifestations.

国際会議の訴訟：Proceedings of International Conference:
自然科学（1996）の中の新しい考え。New Ideas in Natural Science, 1996.
URL：http://www.eskimo.com/~billb/freenrg/tors/tors.html
2. アノニマス。Anonymous.
(Amount of vaccuum space in light bulb) {Link no longer in operation 6/02}:
（電球の中の真空の量）{6/02 でもはやリンクしない}：
http://www.newphys.se/elektromagnum/physics/KeelyNet/energy/zpe7.asc
3. Fox, Hal.
現在のねじれフィールド。Now Come Torsion Fields.
NEN, Vol. 5, No. 11, Mar. 1998, p.1.
URL: http://www.padrak.com/ine/NEN_5_11_2.html
4. Gamow, George.
Gravity. 重力。
Anchor Books, NY, 1962;
p. 138.Keely, John.
同情的な振動物理学。Sympathetic Vibratory Physics.
URL: http://www.keelynet.com/
5. Kozyrev, N.A.
実験的研究のための時間の特性のポテンシャル。
On the Potential for Experimental Investigation of the Properties of Time.
1971.
6. Levich（A.P.）
N.A.Kozyrev’s の時間概念の主な解釈。A Substantial Interpretation of N.A. .Kozyrev’s
Singapore, New Jersey, London, Hong Kong:
World Scientific, 1996, p. 1-42.
URL: http://www.chronos.msu.ru/SEMINAR/ereports.htm
7. リンヌ（ウィリアム）。Lyne, William.
オカルトエーテル物理学。Occult Ether Physics.
Creatopia Productions, NM, 1997.
ISBN: 0-9637467-2-3
8. Nachalov（Yu.V.）
実験的現象の理論上の基礎。Theoretical Basics of Experimental Phenomena.
URL: http://www.amasci.com/freenrg/tors/tors3.html
9 Nachalov. Yu.V.と Parkhomov, E.A.
ねじれフィールドの実験的な探知。Experimental Detection of the Torsion Field.

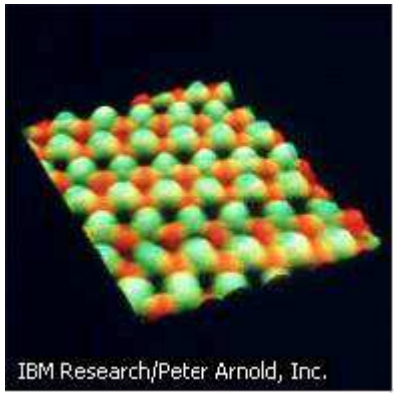
URL:　http://www.amasci.com/freenrg/tors/doc15.html
10. Nachalov、Yu.V.とソコーロフ（A.N.）Sokolov, A.N.
新しい長期行動の実験的観察。Experimental Investigation of New Long-Range Actions.
1993 年.
URL：http://www.amasci.com/freenrg/tors/doc17.html
11. オストランダー、S (. Ostrander, S.)とシュローダーL. (Schroeder, L).著
鉄のカーテンの背後のサイキックな発見（Psychic Discoveries Behind the Iron Curtain.）。
Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N.J., 1970.
URL:　http://www.psychicdiscoveries.com/
12. Pasichnyk（リチャード）Pasichnyk, Richard.。
不可欠な広大さ：The Vital Vastness:
第 1 巻。
書き手のショーケース（2002）Writer’s Showcase, 2002.
URL:　http://www.livingcosmos.com/
13. ラッセル（ウォルター）Russell, Walter.。
神のイリアッド。The Divine Iliad.
科学と哲学の大学; University of Science and Philosophy;
URL:　　http://www.philosophy.org/
14. トーブス（ゲイリー）Taubes, Gary.。
相対論の軌道。Relativists in Orbit.
デスカバーマガジン 1997 年 3 月号。Discover Magazine, March 1997.
15. テスラ（ニコラ）。
Lecture Before the Institute of Immigrant Welfare.
移民福祉学会の前での講義。1938 年 5 月 12 日。
16. ウィルコック（デイビッド）Wilcock, David.。
収束 III Convergence III.
2001 年 4 月。
URL:　http://ascension2000.com/　　ConvergenceIII
17. ライト（ウォルター）Wright, Walter.。
Push Gravity.　重力の圧力。
URL:　　http://www.keelynet.com/

第 2 章

LIGHT ON QUANTUM PHYSICS
量子物理学の光

2.1 エーテル的量子力学の基本

Kozyrev’s 博士の実験は、科学的主流の教えるものとは異なる、物質と周囲の環境との相互作用の関係の急進的な見方である。



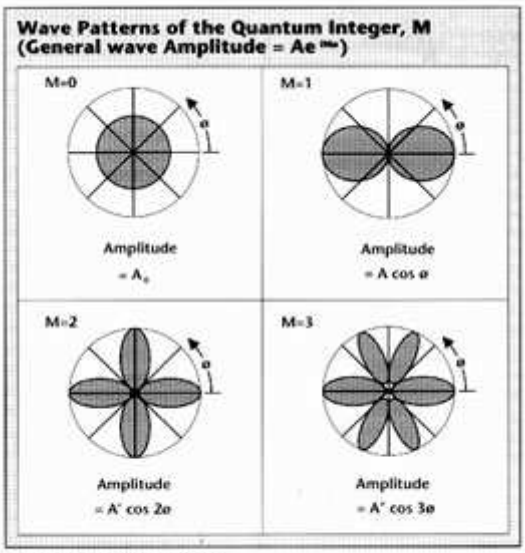


Figure 9-1C. Equatorial waves.
These figures look down upon a pole of the sphere and show amplitudes of the standing waves rotating around the center of the equator which depend on the longitudinal angle ø. Each added integer adds another pair of standing wave lobes.

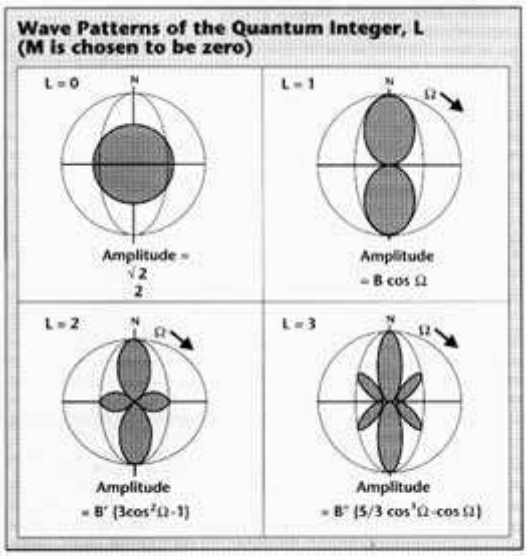


Figure 9-1D. Polar standing waves.
These figures look towards the equator of the sphere and show waves traveling between the poles. The amplitude equations are shown as Associated Lengendre Functions which depend on the latitude cosΩ, and the quantum integers L and M. Each added integer of L adds another pair of standing wave lobes.

したがって、量子力学の新理論は、非電磁気的な流状エネルギー源との相互作用に基づいてその物質の体重が、かすかに増加し、減少することを説明することが要求される。
ねじれフィールドが意識と連結する方法に関連する秘教的な問題と、スピリッチャリティは後の章に任せられる;

この点で、我々の主な懸念は、物質を正確に説明する物理学的機能システムを確立することである。
Kozyrev’の研究結果の他に何もないならば、我々にはその疑問に答えるための十分なモデルがまだないことは明らかだった。

感謝すべきことに、多くの熟達した思想家は量子物理学に関する問題に取り組み、これらの口やかましい質問に答えるエーテルに基づくモデルに追いついた。そして、それは西洋の主流科学的なコミュニティで、ほとんど完全に無視された。
これらのパイオニアには、ミロ・ウルフ博士 Dr. Milo Wolff,、ウラジミール・ギンスブルグ博士 Dr. Vladimir Ginzburg,、ウォロジミール Krasnoholovets 博士 Dr. Volodymyr Krasnoholovets、チャールズ・ケーグル Charles Cagle,、“Smart 1234、”
ドクター・ジョン・ノールベルグ Dr. John Nordberg,、トム・ビアーデン中佐 Lt. Col. Tom Bearden、ヘンリー・マイヤーズ博士 Dr. Henry Myers,、ハロルド・アスプデン博士 Dr. Harold Aspden,、R.B ダンカン博士 Dr. R.B.Duncan、Buckminster フラーBuckminster Fuller,、オリバー・クレーン博士 Dr. Oliver Crane といった多く者が含められる。

これら各々の情報源には“puzzle”の異なる部分の答えがあるが、我々はロッド・ジョンソンの仕事が全ての残りのパラドックスを完全に説明するのに必要だと感じている？それを第 4 章で導入する。
著者が将来完全な、統一されたモデルを紹介することは確かに可能であるが、我々はそのようなモデルが存在すること本当にが可能で、存在することを示すのに十分な面白いエッセンスをここで発表する。

2.2 GINZBURG’S の相対性の新しい見方

我々の研究する最初の重要な概念は、ウラジミール・ギンスブルグ博士のもので（この人はモスクワで生まれた）ソ連から 1974 年に彼の家族をつれてアメリカに移住した。
彼は 1968 年に科学技術的博士号を授与されたが、確かに彼はコズイレフ（Russia’s ロシアのトップ天体物理学者のうちの 1 人）の研究結果を聞くにはこれまでよい位置であった。
しかし、我々が言ったように、ソビエト体制の中にはこれらの問題を秘密にしておきたい強い欲求があった、そして、ギンスブルグは彼の仕事で Kozyrev’s の名前には決して言及しない。
それでも、ギンスブルグはいかなる既知の観察とも一致し、さらに、コズイレフが注意した物質の重さ-変化の変則を完全に説明するために、相対性理論の一般方程式に、単純な 2、3 の変更が可能なことを発見した。
相対性理論は速度が速まるに従い、物の質量は次第に増加すると述べる。
従来の科学的な考えの中ではこの光の速度に近づくと、方程式の状態では物が無限に大きくなるので光速を上回る物質はない。
非常に漫然とした言葉での表現になるが、ギンスブルグはどんな既知の科学的な観察を否定することなく、完全にこれらの方程式を反対にすることができると理解した。（逆にする）

これは実際には、物が動いて、大きくなる代わりに、エネルギーをエーテルへと放棄していくことを意味する。そして、光速に近づくと、徐々に重力質量と、不活発な質量と電荷の中心的な特徴の全てを失う原因になる。
ギンスブルグは、次の引用の中にこの新しい概念を持ち出す：

読みやすくするために強調を加え、 “velocity 速度”のような学説用語を削除した：
これらの新しい方程式の主な 2 つの特徴は、以下の通りである
速さ[速度]が増加し、重力質量と不活発な分子の質量の両方が減少する。
その速度が増加し、粒子の電荷は減少する。
ここで見るように、物体の全体的な質量（重さ）は慣性質量と重力の両方として理解される。それは単に物体に重力と慣性がふるまう方法の測定である。
興味深いことに、重力と慣性は物質に本質的に同一の効果を及ぼす。そして、それは Einstein の“等価原理”として知られている。
この原則は重力と慣性が等しい同じ強さのエネルギーの 2 つの形の現れであることを明らかにする？下へ動くときの（重力）と、空間の中を動くときの抵抗（慣性）を提供する、

これは両方の力の後にある“エーテル”または“物理的真空”が本当になければならないと考えることが 1 つの最も簡単な方法である、そしてコズイレフも彼自身の研究でこの関係に注目していたことを知る。
一旦物がスピードを速め始めるならば、(この新しい考え方は水に沈められたスポンジのようだと言った)、付加された圧力で、そのエーテルは放出され、そのためにますます物と原子と分子は圧縮される。
ギンスブルグは、続ける：
すぐに前世紀の相対論的な方程式を捨てる準備をしなくてはならないことはない。
しかし、一旦あなたがそうできるならば、多くの驚くべきことを発見する：
-粒子が休止している時だけが“純粋”な物質と思われる。
粒子が動き始めるとすぐに、その重力質量と電気チャージは新しい相対論的な方程式に従って減少し始め、同時にその物質の一部はフィールドに変化する。
粒子の速さが極限の螺旋フィールドの“C”の速さと等しくなるとき、その重力質量と電荷はゼロと等しくなる。
この 1 点で、物質は完全に純粋の”フィールドに変えられる。
あとに全てのエネルギーが続かなければならないと思われる螺旋を描く経路の「C」の「極限の螺旋フィールドの速さ」は、 通常の光速よりわずかに高いとギンスブルグは言う。
我々の既知の物理的現実から物が完全に消えることができる概念による、基本的相対性方程式のこの単純な変更は、新しい量子物理学へと変更させる。
これは、重要な疑問を生み出す：

どこで“消失、するのか？”

2.3 MISHIN AND ASPDEN BOTH FIND DIFFERENT LEVELS OF AETHER DENSITY

2.3 ミーシンとアスプデンは、両方ともエーテル密度の異なるレベルを見つける

ギンスブルグは、物が光速度まで増加すると、 “純粋な場そのもの”になると主張する。
しかし、エーテルには異なる振動レベルがあるという、明確な証拠が、ある、
したがって、線形運動、内部の振動または関連したエネルギー的な動きのどれかで、
物が光速の方へ速められ、エネルギーと質量が消えるのは、単に高いエーテルの振動レベルに位置がずれたからだと結論する。
この本では、このレベルを密度として言及する。
1 例としてビーチボールを水にゆっくり押し込むことで圧力をかけるならば、空気で囲まれたとこから徐々に密度の濃い水に囲まれたところに移動することができる。
ビーチボールにかけた圧力を離すとき、高密度の水の圧力はポンと鳴って低い密度の空気に再び戻る原因となる。
ビーチボールの基本的形態は何も変化しなかったことを知っている。
これは粗雑なアナロジーであるが、この本を通して議論する多くの変則を説明するには最高に都合が良い。
A.M.ミーシン.博士
ハロルド・アスプデン博士、N・テスラ博士とジョン・キーリーのような特定の科学者は、エーテルが密度の異なるレベルに再分割されることを独立して発見した。
これらの研究結果から、我々は物質とエネルギーの質が各々の密度で異なることを知っている。そして、各々のレベルの中で物理学の基本的な“法則”の変化がおこってくる。
我々の議論の適当な文脈で、断片的に彼らの発見に触れてゆこう。

全てロシアの聖ペテルスペルグの（ A.M. Mishin ミーシン博士）が彼の研究所の中での長期間にわたる広範囲な測定で異なる状態で存在する、エーテルを示したのが最初であるがその測定状態は観測者自身がつくる混乱させる妨害のタイプと関係していることも明らかにした。
これらの研究結果は、コズイレフのデザインの一部に類似した公開されない「付加された構成要素」をもつ自動振動する電気機械システムによる測定を通して確立された、それは、非有機的なシステムに比べて、生物システムからねじれ波を見つけることに適していた

これらの測定値装置と技術で、ミーシンは研究することができた：

- エーテルの“温度”はその中で振動する妨害の量と同類である

-そして、エーテルの分極化と、方向、または、- エーテルの流れ、または流れの動き
ミーシンはエーテルの異なる密度を測定し、次のような特徴を発見した：

- エーテル-1 は、固体物理体のようにふるまった;
- エーテル-2 は、濃い超流動液体のようにふるまった;
- エーテル-3 は気体のようにふるまった。そして、分子の運動に関係する
-エーテル-4 の状態は、星のプラスマ・エネルギーとして観察される;
- エーテル-5 は、銀河のプロセスと一致する。

我々が見ることができるように、ミーシンが発見したエーテルの各々のレベルが異なる密度レベルを備えているように見え、密度を減少させる際の順序で言うと、特に最初の三つに明らかに見える。
ミーシン博士がエーテルに異なる密度レベルが存在することを発見したただ一人の科学者でないことを思い出さなければならない。
1950 年代から、ハロルド・アスプデン博士は類似した発見を論文化し、彼の場合は、これを広範囲な方程式によってバックアップした。
さらに、Aspden の仕事の全ての主要な基礎はレビュー・プロセスでうまく仲間に回覧されて、結局高名な科学的なジャーナルに発表された、そして、この情報は後の章に掲載する。
また、19 世紀物理学者ジョン・キーリーは、おそらくきわめて Mishin 博士に似た発見プロセでスエーテルの 7 つの異なる密度を分類した。
この研究の全てで、我々にエーテル的なエネルギー密度の異なるレベルが、実際の異なる“次元”と一致する概念であること、または存在の異なる側面であるとして、認識することが認められる。
多くの古代の神秘主義的-教えは色に一致する 1 オクターブ、主に 7 つの密度が、全音階的な音階の中に、虹または調性の中にあることに同意する、そして、これは前章で詳しくかいておいた。
奇抜な高次元”の数学的な問題の素晴らしい、エレガントな解決は、我々が神の宇宙を正確に理解することを期待させる。
最も純粋な、可視光と聞き取れる音の大部分のハーモニックな振動は、両方とも便利にオクターブ・フレームワークに組織される、
そして、エーテルの振動と少しも違わないように見える。
この本で情報を示し続けるが、ミーシンと Aspden の多層エーテルレベルモデルの結合され

た効果は我々の議論にとって非常に重要である。
ミーシンは我々にそのようなレベルが存在するという直接的な観測の証拠を与える、そして、アスプデンは完全な数学的な基礎からその存在理由を説明する。
決して表にでない、量子物理学の理論が、あった
それは存在している物が、消失し、/、あるいは周囲に再出現することに関連した不思議な効果を、論文化して説明することを可能にした。

これらの効果は、この本の後半で議論される中国から現在現れている中国のスーパー霊媒のポール・ドンの本の中のような科学的に文書化された多数の驚くべき念動の報告と同様にバミューダトライアングルの異常とその他のボルテックスの渦を含む。
この本の情報は、これらの必要条件を満たす理論を述べる。
さらに重要なことは、これらの異なる aetheric な密度がまた、知性と意識の異なるレベルに一致しなければならないと確証する。
そして、今のところ、我々は基本に焦点をあて続けなければならない。
2.4 GINZBURG AND THE “DYNOSPHERE”

2.4 ギンスブルグと“DYNOSPHERE”

ギンスブルグ博士も、彼の新しい相対性方程式が球を基礎として移動する spiral field スパイラルフィールド”の螺旋を描くエネルギーの流体エーテルの波の存在を明らかにし、それを“dynosphere“と呼ぶことを提案する-
”[The] dynosphere は、宇宙の全ての空間を満たしているフィールドバブルの部品である。
明らかに、Ginzburg’の理論は、コズイロフの研究結果と正確に一致する。
最終的に、“aether”は全宇宙至る所に存在する aetheric なエネルギーの最小レベルの球状の泡から成りたつと、視覚化されなければならない。
ねじれ波は、隣接した“field bubbles”が互いにぶつかることを原因にしてこのエーテルの中を動く。
波が水の中にうねる時、一組の浮いている物が、本質的に同じ場所のままにいることができるように、1 つの泡は、実際その位置からあまり遠くに動かない。
インパルスの勢いがフィールド泡を打つたびに、泡はその隣に衝突する。そして、勢いを転移させてゆく。

たとえ全ての泡が出発したのと相対的に同じ位置にいたとしても、インパルスは移り続ける。
Ginzburg の新理論は原子と分子が単に渦構造（煙の輪または渦巻きと同類の）であるという考えに至る。そして、彼が dynosphere と呼ぶ流体エーテルの内部に、それはできる。

彼と他の多くの思想家がこの主張をバックアップする大量の証拠を提供したが、大部分の主流科学者はこれらの概念を遠ざけ続ける。
彼らは、原子が粒子でできていると主張する使い古された思考の建造物の上に立っている。
しかし、我々は現在、粒子モデルが仮定の連続で確立された信念以外の何物でもないことを証明する。

2.5 ASSUMPTIONS OF QUANTUM PHYSICS

2.5 量子物理学の仮定

ニールス・ボーアは原子の“magnetron”モデルを展開した最初の人であった。そして、それは小さい太陽系のような互いを軌道に乗って回る粒子を含む。
多くの実験がまるでいわゆる“粒子”が波のように、ふるまうことを確認しており、このモデルが真実であるはずがはなく、実際にまぎらわしいことをまだ多くの人々は、知らない。
これはシュレジンガーの猫パラドックスとハイゼンベルグの不確定性原理のように問題を混乱させる。そして、その両方はその原子が実際に“確定”でなく、量子レベルで“不確定”であると話す。
問題の基礎がまだ不合理で、何かがあって、それは“真実”でない。
ここで、我々は量子領域での大多数の結論が仮定なのを思い出さねばならない。それは 2 つの間接的な関係だけで確立される：

スペクトル分析
軌跡の分析
最初の表で見ると、想像したものより、スペクトル分析は、単純である。
特定の元素（原子の集まり）が小さな、透明な容器に格納されて、エネルギーが変化するとき、それは光（光子）を放出する原因になる。

それから、元素ごとで特別な種類の光が、輝き、放出された光子を押し出し、
これがプリズム（レンズ）または回析格子（スロット）を通り抜けると虹色のスペクトルに分解する。

元素によって変化して輝く、光の放射のユニークな性質のスペクトルは、フィルムで記録され、分析される、すなわちフィルムが、小さな色のついた垂直線の連続として捕らえる。
（それは、「黒体」放射として適切に名をつけられる）
これらの線は特定の正確な色の周波数の、数えきれない数の光子でつくられる。そして、元素はそれを放出している。
我々が確実に知っている全ては、原子は特定のカラー周波数の光（光子）を放出している

ことで、それによって分析されていることだけだ？
他のことは、情報に基づく仮定である。
量子力学的な測定の第二のカテゴリーは、“vapor-trail 泡の軌跡” または “bubble chamber 泡箱” 暗箱の泡分析である。
“粒子” を見つけるのに用いられる媒体は、概して非常に高圧ガスで満たされたガラスの容器である。（例えば水蒸気）
更に分子を中に入れることができないほど、圧力を高くし、チャージされた “粒子” が媒体中を移動するとき、目に見える痕跡ができる。
ミロ Wolff 博士の説明は、ここにある：
測定の二番目の手段は、一つのチャージされた粒子を媒体に入力することで
媒体に目で確認できる反応を起こしたエネルギー部分を抽出することで粒子経路を記録する。
写真フィルム、そして、蒸気で飽和した空気、あるいは、液体は一般的な媒体物である。
2 番目の、［媒体を］粒子が通過すると、小さな霧粒子または泡を引き起こす状態が、現れる;ので、この方法は霧箱または泡箱と呼ばれている。
磁場が存在すると、粒子の経路は[螺旋に]カーブする、そして、経路の痕跡の測定で、質量、勢い、エネルギーの計算を可能にする。
ウルフ博士が指示するように、大多数の我々の “粒子” の信念はこれら 2 つの測定値の形とこれによって推論された仮定から生まれる。
更なる “証拠” の 1 つは、原子が粒子の核を持つという考えに関系する。
非常に薄い金箔を高エネルギーの陽子で攻撃し、多くの陽子のホイルの通り抜け方を測定したラザフォードの実験が、これである。
少量であっても、かなりの数の陽子が、ホイルを通り抜けなかった。
陽子の全てが通過するわけではなかったので、ラザフォードはこれらの陽子が原子の中央の小さな “nucleus 核” に跳ね返った、そして、残りの領域は主に “empty space 真空.” だったと結論した
量子物理学の大多数の仮定の基礎に、ラザーフォードの実験と、分光学と泡箱分析がある。
1985 年まで原子は視覚的には “見られ” なかったが、IBM 研究所アルマデン研究室は電子トンネリング顕微鏡を使って実際にインクのしみのゲルマニウムの分子の組織の写真を撮ったのが最初だった。
この図 2.1 の、実験でわかるものは不明瞭な、ファジーな球状物で、ちょっと球状でない幾何学的性質も持つように見えるが、とても幾何学的なパターンの組織である、
それは、確かに従来の科学にとっての驚きであった。
写真では、目で確認できるよう人工的にオレンジと緑で色をつけて、2 つのタイプの原子を区別した。：
図 2.1？

インクのしみのゲルマニウム原子の実際の写真。
さらに、量子物理学者が原子の「電子」を研究したとき、これらは、実際は「点」ではないと述べ、むしろ涙形の「雲」がスムースにでき、その「ドロップ」の終わりの最も狭くなった非常に小さい中心点に集まっている。(図 2.2)、

ここで、我々はこの点を、明白にするためにミロ Wolff 博士の本からの抜粋を強調を加えて、再版する：

122 ページ？
電子軌道は、ない！
惑星のように核のまわりを運動する電子という概念をもつ人は誰もが、ひどい間違いをしていた！
あなたがそのような考えを学んだとするならば、すぐにそれを捨てなさい。
全ての計算と全ての実験は、衛星のような軌道運動が通常の原子の中に存在しないことを示している。
その代わりに、定常波 standing wave のパターンが、ある。
たとえば、定常波パターンが完全に球状である図 9-1 の N=1 の場合を見てほしい。[またはこの図うち、M=0 と L=0]、
電子のパターンの中心は、また、陽子のパターンの中心である。
これは、宇宙の中の水素原子の通常の状態である;
これらは、軌道でなく左右対称の球面になっている。
図 2.2？
電子雲の上から見たところ（L)、そして、側面図(R)。
[ウルフに感謝申し上げる（1990）] 133 ページ？
1) 電子の中央構造物を徹底的に調査した全ての実験は、否定的なものだった。
2) 電子のサイズも、質量もチャージさえも予測する QM(量子力学)理論は、存在しない。
さらに、粒子の量を定める有意な計算理論が、ない。
これは、全ての計算が同じなので、あなたが粒子を信じるにせよ、QM(量子力学)には実際に粒子概念の必要がないことを意味する。
3) 常に電磁エネルギーに変換できるので、“mass 質量” の実在性は疑わしい。それには粒子の特性がない。
観察された涙形の電子雲は、ウルフ博士が提案する振動の“standing wave”を理解するとき、正確に我々が予想したものである。
我々は、水素原子の電子雲が球体の形を持つのを見たのを思い出す。
これは、全ての他の元素の「建築用ブロック」と水素原子を考えた時、
核の中の 1 つの仮定的「陽子」と 1 つの仮定的「電子」は球状の雲として実際確認され、

また、原子が渦構造をうむという直接の確認である。

2.6 NEGATIVE AND POSITIVE:

2.6 負と正：

SIMPLE DIFFERENCES IN PRESSURE

圧力の単純な違い

あらゆる科学者が知っているように、電子雲はマイナスにチャージされ、そして、非常に小さい核領域の中の“protons 陽子”はプラスにチャージされる。

これは“charge チャージ極性として知られており、2 つのチャージはそこで”分極化するか、対立している。

これが本当に意味することは長い間ミステリーであった、そして、その理由はチャージの“flow 流れ”にある。

この問題は多くの科学者の心をびっくり仰天させた、それをアスプデン博士は以下の引用文に書いた：

私は、まだチャージ極性の謎を解決することができないことを認める。

それは、未踏の地域として横たわっており、その領域への短い 2、3 の遠征は別として、私はそれを未知の土地とみなす…[それは、我々への挑戦であり、そして、おそらく物理学の最終的な征服地点の最前線である。

研究も正当化されず、テーマが物理学者によって言及されさえしないことは、私を驚かせる。

この我々の回りと、地球上で我々全ての内側で起こっていることをみるより、最初の瞬間に起こった‘Big Bang’のことを研究する方が簡単なようである。

[加えられる強調]

O. Crane’s 博士の新理論と他の理論では、これらの正と負に対立するチャージまたはチャージ極性は、実際にエーテル的な圧力の違い以外の何物でもない。

マイナスの電子雲は高い圧力を持ち、そして、プラスの核は低い圧力を持つ。

単純に、電子雲のマイナスのチャージは、原子の中心の明らかにチャージされた領域内に流入している。

球状フィールドまたは物体の中心の方へのエーテル的なエネルギーの圧力は、重力とチャージ極性を意味し、電磁気と重力の間の非常により簡単な統一が、可能な、ことを示唆する。

（秘教的な科学は再び、全ての物質の “1.なる根源的”エネルギーと言うかもしれない）

重力とチャージ極性の唯一の違いは、aetheric な圧力の測定された強さの違いと、球表面を圧迫する、エネルギー流による、シンメトリーの度合いの違いである。

なぜ、我々はシンメトリーが重要と言うか？

単に、重力の力は 1 つの場所から他の場所まで地球上ではどこでも非常に一定である

ところが原子の中には、電子雲の間で中心の方へのエネルギーの「流れ」が、ない領域がある。
理由をこの章の後半の特に割り当てたページで説明する。
現在、Crane の博士の“チャージのエーテル的圧力”概念で、チャージ極性のミステリーは、すっきりする。
この概念の否定できない事実の確証がビーフェルド(Biefield-)、ブラウン効果として知られたことで、与えられる。かつてスイスチューリッヒ・のアルバート・アインシュタインの学友であったポール Biefield 教授によって、最初に提案された。

Biefield はエーテルの流れとしてチャージされた“aetheri エーテル”概念を提案した、そこで、マイナスチャージは aetheric なエネルギーの海の中の高圧領域で、この圧力はこの同じ海の中のプラスチャージと呼ぶ低圧の領域内に流入する。
このモデルが本当に真実ならば、Biefield は、電磁強度の十分高いレベルで、反重力推進力の力をつくることが可能でなければならないと提案した。
うまく Biefield の理論上の効果をテストした最初の人は、1923 年のタウンゼンド T.ブラウン博士であった。
彼の実験は、単純にプラスの電気プレートである“plate コンデンサー（面白いことに、文字通り、ディスク形である）と”互いの上端を非伝導性または、誘電体の間にはさまれたマイナスのプレートで構成されている。
このプレート・コンデンサーには、高い量の電気がチャージされ、動こうとしたら水平に大きく円を描いて回転できるようしっかりと針金でつるされた。
この物が充電されるとき、それは、単独でコンデンサーのポジティブなプレートの方へ進む恒常的な押す力を維持し、ワイヤー/プレート・コンデンサーの全部の組み立てた物が中で単独で回転する原因になる。
クレーン博士は、続ける：
コンデンサーを光線の測定器に垂直に固定すると、
陽極ならば（低圧）になって重量の増加を示した。
陰極のとき（高圧）ぱ、対応して、重量の減少が起こるのを示した。
効果の強度は、極性をもつプレートの大きさ、電圧レベルと誘電体分極化能力によって決定された。
[加えられる強調]
“誘電体の分極化能力に関する最後の説明は、混乱させるかもしれない。
我々が言ったように、誘電体は不伝導性物質である。そして、この実験でそれは 2 枚の反対の位置にチャージされたプレートにはさまれる。
“分極化能力”は、誘電材料がどれくらい 2 枚のプレートの間のチャージを分離しておくことができるか、分極化させたかについて言っている。

我々がここで理解できることは、宇宙の機能と構造を理解するための非常に中心的で本質的な発見だということである。
負と正の極の間で流れが確立されるとき、エネルギーの川は周囲のエーテルにつくられる、そして、aetheric なエネルギーの川は力強くポジティブの方へ進む。
この効果は、本当に重力を打ち消す十分な強さがある。
評価された多くの情報源は、ブラウンが重力を破ることができ、それ自身で上空に上がることができる完全独立の装置をつくり、その後すぐに彼の仕事を極秘にしたと伝えた。
2001 年 5 月 10 日のディスクロージャープロジェクト相談役概要状況説明に、ウィルコックは、多くの会議の側近と他の招待客と一緒にそれに出席したが、その時、特定の証人は、様々な深い秘密プログラムが推進力のために本当にこのテクノロジーの活用法をマスターしたと証言した。
同心の磁気リングと回転している磁気ローラー（前章で議論されたジョン R. R.サール教授によって考案されたもの）のシステムは反重力を働かせるもう一つのシステムだが、うまく複製され、結果はその後、ロシアで Roschin とゴーディンによって公表された。
特定の“探求者”は、Biefield-ブラウン効果が推進力のために使われることができたことを人々に注意させ始めている。
ジェフ・キャメロンの次元変換技術は、彼の各々の角に付けられた細いワイヤー付きの三角形の金属的フレームの “T3”装置の 2 つのバージョンの活動を映像化した。
不伝導性円形の基底の表面に、一旦電流がオンにされるならば、三角形のフレームは浮揚し、空気中でわずかにぐらつくのが見られる。
大きくて十分な「パチン“SNAP”」という音が、聞こえる
流れが切断されると、装置は急に落下して、表面にもどる。
もっともなことだが、
2002 年 2 月現在から、ウェブサイトのタイトルページを除く全内容を漠然とした言葉で、「チェックし続けると「ありがたいことに、
2002 年 3 月に、ジム・ヴェントゥーラは、シャン＝ルイ Naudin の研究に基づき独立して正確な同じ実験を追試しており、一般大衆の表示のためにベル技術のウェブサイトに 3 本の映画が現在存在する。
最初の 2 本の映画の中で、面白いことに、物はそのワイヤーの上で絶えずぐるっと回転する。ねじれ波の螺旋を描く圧力を示している、仕事中の（重力-回転エネルギーである）。

原子の中で、高圧のマイナスの「源」がプラスの低圧の「シンクくぼみ」の方へ押し出される、これは核に中に流れる電子雲と関係がある。
これは、原子とこれらを囲むエーテルの“真空”が両方とも同じ流体的エネルギーの材質でできているという結論に導く；
原子との、唯一の違いはエーテルが低圧の中心の渦に渦巻き始めるということである。そ

して、電子雲の中を移動する。

うなずけることだが、ディスクロージャープロジェクトの１人の情報提供者は人工の ARV 航空機“flux-liners.”として（宇宙人の乗物の再生）がインサイダーに知られていることを明らかにした。そして、これは学説“airliner の明らかな応用である、”、そして、空気の代わりに乗物が aetheric なエネルギー流れまたは流れの上を走るという知識を示す。

2.7 SPHERICAL SYMMETRY AND A CENTRAL AXIS

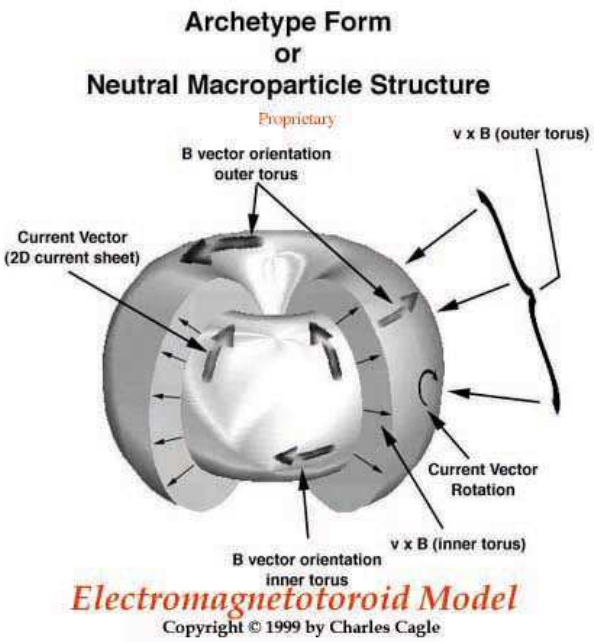
2.7 球面左右対称と中心軸

原子の性質に関する次のキーポイントとして、量子物理学の“粒子”の実験がこれらのエネルギー・フィールドが球面構造体になる傾向があることを示したのを知っている。
しかし、これらの球面構造に、回転が見られる。
例えば探知器と連続して異なる角度で衝突する前に、電極から解放された同一の「粒子」の性質を測るなどいろいろな技術が、この発見をするのに用いられた、
主流の量子力学の学界で“spin”の発見の正当性は、論争中ではない。
ウルフ博士が「粒子と電気と」と題された彼の本の第１０章で述べるように、

147 ページ？
次のように、回転の特徴に関してジレンマが存在する：
粒子は、チャージ、質量と動きに関して球状で対称形である。
それにもかかわらず、人間の視点からスピンの存在を見ると回転軸が要求され、それは、球面左右対称を破壊する！
これが、どのように存在するのか？
シンメトリーか、そうではないのか？
回転が相互作用の中に移されると、このジレンマから脱出するかもしれない（すなわち、スピンが測定されて）、常に粒子運動の線に沿って回転軸が存在すると理解される。
[加えられる強調]
このように、“粒子”がエーテルの中を動き、これらの回転の中心軸は彼らの運動方向に合致する。
これは、これらの動きに正確に煙の輪と同じような「渦」性質を与える？
この形は、流体媒体でのどんな直線運動にでも自動的につくられる。

我々の次の質問は、この球体の渦の正確な外観である。
中心のまわりを回転する一つの流れがあるとき、何が起きるか思い浮かべることから始めよう。

一旦流体が回転し始めるならば、それはその回転軸に沿って渦巻きを作る。
これは、手洗いシンクを水で満たし、手で水を大きく円にかき混ぜると非常に簡単に示すことができる。
円の中央では速い渦巻きが出来る。
現在、我々はその球体の中で（この場合は原子の外部だが)、同じ液体が回転しているのを想像する必要がある。
我々は発見するものが、何かというと球の南北極の間の回転軸に沿って渦巻きが、再度できるということである。
この渦巻きは、球の中心を通る完全な穴をつくる。
球の１つの極で水は中に流れ込もうとし中心に接近するほど次第に狭くなる渦をつくり
その水の、勢いの継続は対立している極に流れ出ようとして外の端に近づくと次第に広い渦になる。
水の一方向の流れは外へ流れ出なければならず、他のどこにも行けるわけもない。
これは、“torus トーラス”構造の基本特性であって、たとえば、煙の輪の中心へカールしている動きに見ることができる。
当然、図面は 1000 の言葉より価値がある、そして、チャールズ・ケーグルの図 5.3 は量子レベルで球面トーラス体の構造を示す。そして、彼はそれを“electromagnetotoroid”と呼ぶ：
図 2.3？
“Electromagnetotoroid（量子レベルの球状円環体構造を示す”)。
回転現象の研究を続けると、その他の人も同様に量子領域で球面円環体を採用したことがわかる。
ハロルド Aspden’s 博士理論は多くのなかでこの事について最も包括的な一つである、そして、よく数学的に実証し、そして、最もすばらしい物理学ジャーナルのいくつかに発表された。
アスプデン博士は原子の実際の球面円環体形態の概念を図示する一方で、“torus トーラス”という言葉は使わない：
私のこの主題の研究の先にエーテルの回転の勢いの証拠と角運動量を展示することができ、球が中心軸に質量と密度で回転でき、エーテルで包まれていることは否定できないと私は、ここでコメントを挿入する。
それは、我々がエーテルの信念と信仰を保って、アインシュタイン宣言で我々の気が奪われないならば、展望が開かれるはずだ。



[加えられる強調]

2.8 SPECIFIC ANOMALIES MUST BE SATISFIED

2.8 特別な変則が、なければならない

我々がしなければならない全てが球状原子の中心軸と流状エーテルの渦ができることを考えることだけならば、作業は比較的単純だろう。
しかし、このモデルを完全なものにするために満たさなければならない量子的な観察で、出てくる特別な幾何学的な変則が、ある。
正確なモデルを示すのに必要な 2 つの量子の基本的問題がある：
まず最初、我々は、単純な球が形成されることに対して、“電子の雲”がこの原子の真空の空間にできる理由を解説する必要がある。
第２に、これらの球状トーラス体のエネルギー構造が結晶構造をつくる方法と理由を理解する必要がある。（例えば塩化ナトリウムまたは塩）それは立方体をつくる。
そのような結晶の面白い特性の 1 つはそれが自然にそれ自体のミニチュア版に砕ける、そこでも、同じ角度関係が保存される。
前章で紹介したように、我々が古代の神聖科学の中で多くの重要性を持つ一組の異なる 5 つの幾何学的な形として知られているプラトン立体の重要性を理解したとき、両方の疑問が解かれるかもしれない。
要するに、“プラトン立体の”幾何学的な形は、自然に振動する（脈動する）流体の球体“vortex”に現れる。
次章において、我々は現代での古代のプラトンの立体の重要性を理解し、そのうえでこの理論は正しくなければならないことを証明する驚くべき予想外の物理的に重い証拠を見る。
第 4 章では、完全なロッド・ジョンソンの理論上データは、我々を量子領域の見方のラウンド外へつれていく。
ホーム | インデックス | 次

REFERENCES:
リファレンス：

1. アスプデン（ハロルド）Aspden, Harold.。
Energy Science Tutorial #5.
エネルギー科学チュートリアル#5.
1997.
URL :
http://www.energyscience.co.uk/tu/tu05.htm

2. ケーグル（チャールズ）Cagle, Charles.。

Electromagnetotoroid モデル。
1999.

URL :
http://www.singtech.com/

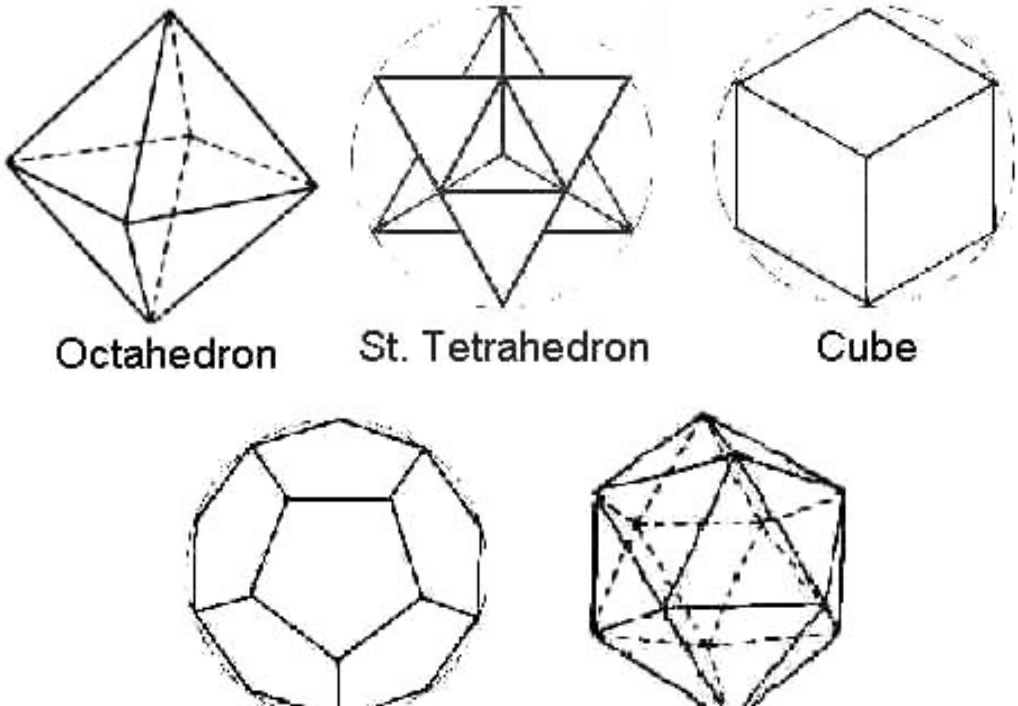
3. キャメロン（ジェフ）Cameron, Jeff.。
Transdimensional Technologies.
Transdimensional 技術。
2001.
URL :
http://www.tdimension.com/
4. Crane, Oliver et al. Central Oscillator and Space-Time Quanta Medium.
4. クレーン、オリバーほか本部発振器と時空量媒体。
Universal Expert Publishers, June 2000, English Edition.
万能の専門家の出版者、2000 年 6 月、英語の版。

ISBN 3-9521259-2-X
5. ミーシン（午前）Mishin, A.M.
(Levels of aetheric density) URL:
（aetheric な密度のレベル）URL :

http://alexfrolov.narod.ru/chernetsky.htm
6. Mishin, A.M.
6. ミーシン（午前）
The Ether Model as Result of the New Empirical Conception.
新しい経験的な概念の結果としてのエーテル・モデル。
International Academy of MegaSciences, St. Petersburg, Russia URL:
MegaSciences、セントピーターズバーグ、ロシア URL の国際的アカデミー：
http://alexfrolov.narod.ru/mi-paper.htm
7. ウルフ（ミロ）Wolff, Milo.。
Exploring the Physics of the Unknown Universe.
未知の宇宙の物理学を調査すること。
Technotran Press, Manhattan Beach, CA, 1990.
Technotran プレス、マンハッタン・ビーチ、CA、1990。
ISBN 0-9627787-0-2.
http://members.tripod.com/mwolff

第 3 章：

量子力学の領域の中の神聖幾何学

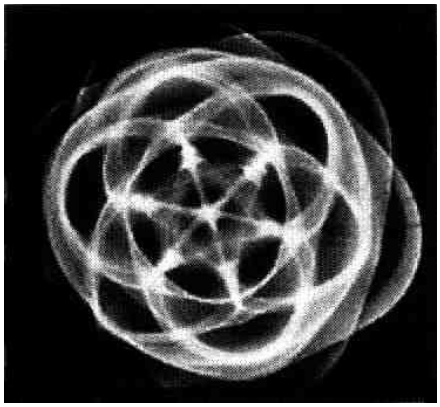


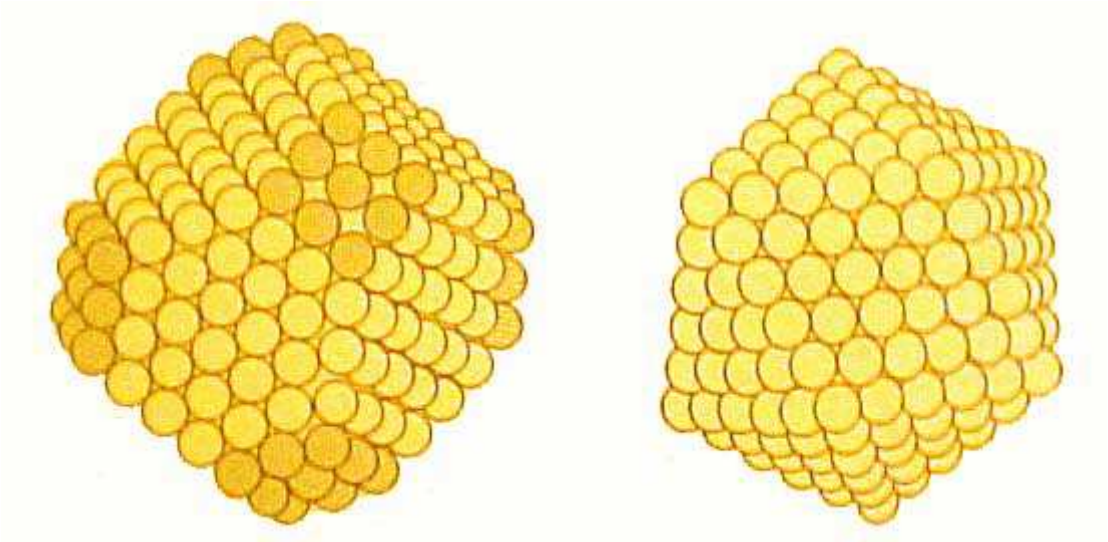
3.1 アトランティス文明の秘密再訪

前章に図示した、この本で記述した大多数の統一された宇宙論的図はこれら自身 18,000 年前の年代を示すベーダ聖典を通して詳細に洗練された状態で提供された。

我々が議論している全宇宙論が古代の間にAtlanteansアトランティスの人々とラーマヤーナの人々Ramans に有名だったことは、非常にありえる。

それから、およそ 12,000 年前、世界的な大洪水によって、両方の文明の破壊が起きた。





年月が過ぎたので、科学的な知識を受け継いだ人々でさえも“大きい構図 picture.”を理解するのはますます困難になった。
ベーダを含む、ほとんどすべての神聖な伝統は宇宙の全ての面を統一する隠された秩序があった、そして、この秩序の下にある幾何学的な形の十分な研究と視覚化で、新入者の心が宇宙との一致に関係することができると主張した。そして、意識と物質を超えた精神能力の大きい妙技を持つことを可能にした。
これらの視覚化の一部は、マンダラの研究の形になった。（例えばヤントラの形の様な）
他の人は、動きと音楽がこれらの幾何学的なパターンと調和したダンスに関係するのを好んだ。
他の者は静かにこれらの形を、コンパスと直定規で集めて、書き、 “神と”“幾何学”と宇宙の偉大な建設者を象徴する、文字“G”で、天と地をコンパスで囲み定規で示した、それゆえに、フリーメーソンの友愛の重要な主なシンボルとした。
テンプル騎士団のような前プレ-フリーメーソングループは、彼らの神聖な構造（例えば大聖堂の中のステンドグラス・ウインドウ）にこれらの幾何学的な関係を記号化することを選んだ。
3.2 SACRED GEOMETRY AND THE PLATONIC SOLIDS

3.2 神聖幾何学とプラトンの立体

それゆえ、宇宙のこの隠された秩序に関する秘密の神秘主義的学校の知識の基礎は、常に神聖幾何学であった。
前の 2 冊の本で広範囲にこの主題について書いた、読者はより大きく理解するためにこれらを読み返すことが奨励される。
要するに、神聖幾何学は振動の単にもう一つの種類である、あるいは、以下の例のように「音楽の結晶化“crystallized music.”」を考える：
最初に、我々はギターの弦を振動させる。
これは“縦波スタンディングウェイブを引き起こす、縦波は前後に弦が動かず、1 つの場所で安定したままの波動を意味する。
若干の領域に極端な上下の波の垂直の動きがある所が見られる。そして、他の領域には垂直の動きのない結節点として見られる所がある。
縦波の種類からつくられる結節点は常に互いの間に均一に間隔があき、振動速度が結節点の現れ方を決定する。
これは、振動が高く上がると、結節点がよくみえることを意味する。
我々は円形の平面の“Chladni plate”を振動させ 2 次元の、オシロスコープを使うとき、結合して、正方形、三角形と六角形のような一般的な幾何学的形をつくる結節点が発達するのを知る。
この仕事は、ハンス・ジェニー博士、ジェラルド・ホーキンズその他によって何度も繰り返された。
- 円に 3 つの等しい間隔で結節点ができると、　これらは三角形をつくる。
- 円が 4 つの等しく間隔をあけた結節点を持つならば、それは正方形をつくる。
- それが 5 つの結節点を持つならば、それは五角形をつくる。
- Six nodes form a hexagon, et cetera.
- 6 つの結節点は、六角形をつくる、といった具合だ。
これは波動力学に関する非常に単純な概念であるが、ジェラルド・ホーキンズは最初に円の中に刻まれるこの幾何学が本当に音楽的関係をもつと数学的に確証した。
我々は、彼が一晩で英国の田園地方の平野に現れた幾何学的ないろいろなミステリーサークルの構造を分析することでこの発見にいたったことを理解すると驚くかもしれない。
これは、我々の前の両方の章でかいた。
神聖幾何学で最も深く、最も尊ばれた形は、三次元の、プラトン立体として知られている。
5 つの形だけが全ての必要とされた規則に従う資格を与える存在である、これらは 8 面をもつの八面体、4 面をもつ四面体、6 面をもつ立方体、12 面をもつ 12 面体、20 面をもつ二十面体である。
ここで、四面体は“star tetrahedron” か完璧な左右対称で結合した 2 つの四面体を組み合わせたものを示す。:
図 3.1？

5 つの基本的なプラトン立体。

これらの幾何学的な固体の主な規則が、ここにある：
- 各々の形は、あらゆる側面が同じ形である。：
八面体、四面体と二十面体は正三角形の面をもつ、
、立方体の面は正方形で、あるいは、12 面体は五角形の面をもつ。
-各々の形の上のあらゆる線は、正確に同じ長さである。
- また、形のあらゆる各々の内角は、同じである。
そして、重要なことに、
- 各々の形は球の中に完全に合う。そして、全ての点が重複なしで球の端に触れる。
円の中に三角形、正方形、五角形と六角形を配置する二次元の場合に似て、プラトンの立体は単に、３次元の波の形の表現である。
この点は、強調の強さが足りないぐらいだ。
振動が結節点を作るので相殺された領域で、プラトンの立体の各々の先端または頂点が、球の表面に触れている。
このように、我々が見ているものは、振動と/波動の三次元の幾何学的なイメージである。

Buckminster フラーの学生と彼の弟子であるハンス・ジェニー博士の両方は
球の内側で振動し/脈動して、プラトンの立体がどのようにできるかを示す賢命な実験を考案した。
Fuller’s の学生によって行われた実験では、球面の気球は染料の中に浸され、、“Diatonic 全音階的な”の比率で鳴る“pure 純粋な”音の振動で脈動させた。
均一に隔てられた少数の結節点はこれらを互いに接続した細い線と同様に、球の表面にできる。
4 つの均一に間隔があいた結節点を持つならば、四面体を見る。
6 つの均一に間隔があいた結節点は、八面体をつくる。
8 つの均一に間隔があいた結節点は、立方体をつくる。
20 の均一間隔があいた結節点は 12 面体をつくる、そして、12 の均一に間隔をあいた結節点は二十面体をつくる。
これらの幾何学的な物体の上に見る直線は、単に球の表面の全ての、各々の“至近距離の結節点である 2 点間によってつくられ、自身が発生させるストレスを表す。
Figure 3.2 ?
図 3.2？
ハンス Jenny 博士の球状振動する液体の中のプラトン立体構造。

ハンス・ジェニー博士は、その点で
粒子部分について類似した実験を行ったが、ここ図 3.2 に、「コロイド懸濁として知られている明るい色の非常に微小な懸濁粒子を含む水の液滴が写しだされた。
粒子に充満した水のこの粗い球状液滴が、振動した時、いろいろな「全音階的な」音楽の振動で、楕円にカーブした線に囲まれてプラトン立体が中に現れる。
写真に見るように、それはこれらの結節点を一緒につなぐと、2 つの四面体が中心領域にあることは明らかである。

液滴が平面的に見える球の代わりに完璧な球ならば、形は明らかによく見える。

3.3 PLATONIC SOLIDS AND “SYMMETRY” IN PHYSICS

3.3 物理学の中のプラトンの立体と“シンメトリー”

物理学の違う多くの場面でプラトン立体の形は、“シンメトリーsymmetry”をつくるのに必要な全ての基準に適合するが、プラトン立体のミステリーとその重要性は現代科学では完全に失われた。
この理由から、多次元性を扱う理論で、プラトン立体をしばしば見る、そこでは、これらが多くの方向に回転でき、互いと比較し常に同じままであることが可能なように、多くの“面”がシンメトリーの方向で交差する必要がある。
これらの多次元理論は「グループ理論」（別名「ゲージ理論」）を含む。それは一貫して「包まれた超次元的空間のいろいろなプラトニックなモデルを特徴とする。
これらの同じ「モジュール式機能」は、「高次元の理解と、研究に使える最も先進の数学的なツールであると考えられる、そして、「超ストリング」理論は、これらから完全に離れたろで造られた。
要するに、プラトンの立体は “高次元” の世界の錠を開けるマスターキーとすでに我々は言っている。我々の前章で上記の点を端的に示したが、キーはシンメトリーである。
我々が、固体のシンメトリカルな質に注意をむける時、第５章のウルフ博士の言葉「重要な３次元の生命は、我々に良き感覚を与えなければならない」は光をあたえる。
図. 71？
あなたの探球のアドバイザーとして、私は話すことができる。「物理的問題においてシンメトリーの状況が理解されたときはいつでも、止まり、そして、考えるべきだ！
あなたはほとんど常にシンメトリーの特性を用いて問題を解決する簡単な方法を見つける。」
これは、シンメトリーに関して遊ぶ報酬の１つである。
考えは、整然としている

数学と幾何学においては、正確である必要が、ある;
そこで、シンメトリーが関数または幾何学的な数字として同じに、意味されるよう厳密に定義される。

1）座標の回転、
2）軸に沿っての動き
3）変数の相互交換。
我々の主な目的である自然科学においては、シンメトリーの存在は、（下記のことがあっても）自然法則が変化しないことを通常意味する：
1）空間の中の座標の回転、
2）空間を通して軸に沿った動き
3）未来を過去に変える、そのｔはｔ？に、なるような
4)、ｘをｙとｚとｚ交換するような２つの座標の交換？、その他、
5）与えられた変数が変化する。
[emphasis added]
[加えられる強調]
ここでウルフ博士はこれらの名前をあげないが、形づくられた存在としてはプラトンの立体は、最大の幾何学的なシンメトリーがある。
アスプデン博士の次の抜粋は、、エーテルの“fluid 流体結晶としてプラトンの立体に言及する”、そして、これらが fluidlike 流状の媒体の中に現れるとき、固体に似た効果さえだすことができると説明する：
それが固体で流体でもあるという特性を示すので、19 世紀の物理学者にはエーテルは謎となった。
『流体結晶』が時間の知覚に役立っていることは、ほとんど何も、知られていない。
多くのポケット計算機の中のディスプレイは、電気的信号を使い、電界不安の機能をもつエーテルの様な、液体状態と固体の状態特有の両方の特性を示す物質による。
[強調を加えた]
これは、テスラがエーテルを液体のような物質の動き、光と熱をうむ固体として「動き」を説明した理由である。
プラトンの立体が実際、まるでこれらがエーテルの中に秘められた構造上のフレイムワークであるように、動く。そして、エネルギー流を特定のパターンに組織する。
それゆえに、プラトン立体は、エーテルが脈動するとき自然にこれら自身が作りだす単純な幾何学的な“crystallized music 音楽の結晶化” である。
注目すべき重要なもう一つの点は互いのプラトンの立体の“成長”の階層として、動きが螺旋経路に沿って常に起こるということである。そして、主に古典的な“phi”比率に基づく。

正当に評価されない“pyramid power ピラミッドパワー”現象をより完全に議論するとき、研究してきたねじれ波が同様に“phi”パターンで続くのが見られた、そして、構造上の“cavity effect 洞窟効果”は第 7 章でビクターGrebennikov 博士によって切り開らかれた。

3.4 MICROCLUSTER PHYSICS

3.4 ミクロクラスター物理学

我々がこの本の前半を仕上げていたちょうどその時、
新しい同僚は、量子世界の我々の全見方を変える物質の全く新しい側面を紹介して、我々に「microcluster ミクロクラスター物理学」の伸展する新しい分野に注目させた、
それは、従来から認められた「法則には従わない。」
ミクロクラスターは、明確な直接の証拠を提示する小さな「粒子」です
原子は、エーテルの中の渦で、当然、これらの振動/パルゼーションによってプラトンの立体構造に集まる。
さらに、集まったエーテル的なエネルギーの縦波 standing-wave の電子雲の代わりに、まだ核の軌道に乗って回る一つの電子の幾何学的なパターンがなければならないと思う人々のために、これらの新しい発見は、なかなかの難問をひき起こす。
マイケル A.ダンカンとデニス H. Rouvray による話では、“microclusters ミクロクラスター”の物語は、1989 年サイエンティフィックアメリカンの 12 月号において最初に主流界に侵入してきた：
固体を分割し、再分割して、固さの特徴が、チェシュキャットの特徴のように、一つずつ消えて行き、液体またはガスの特性曲線ではないものものに取り替えられる。
これらは、その代わりに物質の新しい相ミクロクラスターに属している、
これらは、固体物理学と化学の中心と、材料科学の関連した分野に問題を提起する。
かってできた前の物質の特徴は失うのに粒子の集合がいかに小さくならなければないか？
これらを囲む物質の影響から解放されるならば、原子は、どれほどの力を変更するか？
伝導率の基礎をなす独特な自由電子の共有を避けるために、物質が金属の、原子のこの一群は、どれくらい小さくなければならないか ？
[加えられる強調]
主流に流れたこの物語の後、2 年もたたないうちに、microcluster ミクロクラスター物理学の科学は、サトル菅野とヒロヤス・コイズミによって自身の大学院教科書に書かれたものに実現された。
Microcluster 物理学は、尊敬すべき主流のシュプリンガー出版社の材料科学の分野の一連のテキストの中の 21 章に発表された。
我々が使うこのテキストの引用の全ては、1998 年に発表されたその修正された第二版による。
菅野とコイズミのテキストは、我々に言います

microclusters の新しい発見によると現在のサイズによって、各々異なる特性をもつ、4 つの基本的カテゴリーに原子をグループ化することができます：

分子：
1-10 原子。
ミクロクラスター：
10-1000 原子。
微小粒子：
1000-100,000 原子。
大量： Bulk:
-100,000+原子。

KNOWN ORMUS ELEMENTS	
Element	**Atomic Number**
Cobalt	27
Nickel	28
Copper	29
Ruthenium	44
Rhodium	45
Palladium	46
Silver	47
Osmium	76
Iridium	77
Platinum	78
Gold	79
Mercury	80

Table 3.1 – Known Metallic Microclusters or "Ormus" Elements in David Hudson's patent.

上記の表を研究するとき、最初からミクロクラスターは分子と微細粒子に共通の特徴を持つと予想するが、菅野ほかがここで説明するように、実際の特性は表示されたものではない。
10 から 10^3 の原子からなる Microcluste ミクロクラスターは、大きいものに対応する特性も少数の原子からなる分子に対応するものも示さない。
microclusters はマクロスコピックな固体とミクロスコピックな粒子（例えば原子と分子）

の間にある材料の新しい相をつくると考えられるかもしれない。マクロスコープとミクロスコープ両方の特徴を示す。
しかし、新しいこのような相の研究は、物質の量子論の発展によっても、近年まで触れられないままにされた。
[加えられる強調]
読み続けると、10-1000 原子の集まりのミクロクラスターでもランダムにならないことを知る;
特定の“マジックナンバーの”原子だけが、一緒に集まってミクロクラスターをつくる。
次の引用は最初にこれがどのように発見されたかを述べている、これを読むとき、言及された“mass spectrum”の分光器分析が書かれているのを思い出さなければならない、それについては、我々は最後の章に書いた。
“cluster beams”を議論するとき、これは原子（例えば Na またはナトリウム）が小さいノズルから吹き飛ばされ“beam”の形になることを意味すると分析される。
最も重要なことは、原子がノズルで鳴り響いて、これらは microclusters ミクロクラスターとして自発的に集まる。それは変則的特性を示す：
microclusters のミクロスコピックな特徴は、最初、マジックナンバーと呼ばれる特別なサイズの Na [ナトリウム]クラスタビームの質量スペクトルの変則を、観察することで現れる。
マジックナンバーは電子のシェル構造の原子価から来ることが実験的に確認された。
1991 年の本の初版以来メタルミクロクラスターの画期的な調査結果に刺激され、比較的濃度を高める、実験法の進歩に助けられて
いろいろなサイズのミクロクラスタービームの形の非相互に作用する microclusters の研究分野は、5 年から 7 年で急速に発展した。
この進歩は、また、コンピュータと計算技術の改良による。

microclusters ミクロクラスターの分野は、多くの物理学者の注意とその基本的な観点からの理解だけでなく電子機器、触媒作用、イオン工学、カーボン-化学工学、写真撮影その他の応用装置の視点から見ても面白く、純粋に応用研究で働く化学者を引きつけた。(そして、生物学者でさえ！)
この分野の展開の舞台を、紹介し、ミクロクラスターの研究に重要な基本的な物理的概念をはっきりさせる本が初心者のために必要なのが感じられる。
この本は、そのような必要条件を満たすようになっている。
それは、1987-1990 年の期間に東京大学、京都大学、東京都立大学、東京工業大学と九州大学の主に物理学の大学院生にした連続講義に基づく。
[加えられる強調]
次の引用は菅野と小泉の特定の本の最初の部分からで microclusters の非常に変則的な物理的特性に関して詳細に伝えている。

これらは微細粒子より原子数に関してわずかに小さいだけだが、ずっと安定している。
microclusters ミクロクラスターのこの大きな安定性は、同じ元素の分子または粒子より非常に高い温度で燃焼するという事実に関係する。
デイビッド・ハドソンによれば、ロシアの科学者は（後でその人を議論する）microclusters ミクロクラスターが分析される色スペクトルを現すために 200 秒以上の間、燃やされなければならないことを最初に発見したが、既知の分子の他の全ての合成物は、およそ最大 70 秒で、燃え上がる：
微細粒子を更に分割して半径が 10 オングストロームの単位の、ミクロクラスターと呼ばれる粒子に到るとき、微細粒子の物理学は今までとは異なることを知る。

理論上の仮定に由来するこれらの特性の、本質的な違いは、たとえ微細粒子での測定が不可能であったとしても原則として所定の形とサイズの部分的に抽出されたミクロクラスターの測定可能な実験で確かめられている。

この仮定は、与えられた典型的な形のクラスターが他の形（むしろ小数の）と比較して、非常に安定しているという事実を考えることで証明されるかもしれない。
この事実と対照的なのは、一定のサイズの異なる形の微細粒子はエネルギーがほとんど変質し、統計処理を許す大きな全体的効果をつくることだ。
これは、微細粒子の明確な形の抽出を不可能にする。
明確な証拠として、いわゆるマジック・ナンバーサイズのほとんど球面の形のクラスタービームの形のアルカリ[1.8]と不活性の金属成分[1.9]のミクロクラスターが得られた。

マジック・ナンバーは質量スペクトルでの多量の変則が見つかる特定のサイズ N を意味する。[すなわちクラスターの中の原子の数]
これはそのサイズの microclusters が近隣のサイズのものと比較して比較的安定していることを示す。[加えられる強調]
上に記述された“ほとんど球形の”形は、プラトン立体と関連する幾何学として後の引用でも見られる。
次の説明は多分大部分の読者のためにあまりに技術的なので、飛ばすことができる、しかし、それは“cluster beams”がどのように作られ、分析されたか、そして、原子の特定の“magic numbers”が出てきたかの明確な記述である。
さらに、つくられたクラスターが電気的に中立になる点に注意しなければならない。それはもう一つの予想外の変則的な結果である：
例えば、図 1.5 に Na クラスタービームの質量スペクトルを示す。
ビームは、熱い Na と Ar ガス混合のノズルからの断熱的な放散によって生じる。

ビームの中の Na クラスターは photoionized される。そして質量は、四重極質量アナライザーで分析され、最終的にイオン-発見システムで見つけられる。
実験の詳細な結果で、このように観察された質量スペクトルが、元々ジェット放散によって [電気的に]中立なクラスターが生産されていることを反映していることが確かめられた。

N の豊富な変則サイズ、8、20、40、58 と 93 は Na クラスターの中立のマジック・ナンバーと考えられる（図 1.5)。

[加えられる強調]
すぐに、その重要性を簡単に見逃がすので、次の文は非常に精密な注意を払うべきだ：
次に、これらのマジック・ナンバーが電子のシェル構造に関係して独立して動く原子価を示し、球状のシンメトリカルなポテンシャル効果をもつ… [加えられた強調]、
これが伝えることは、仮定的 “electrons” が microclusters で個々の原子にもはや束縛されず、全クラスターを通してむしろ独立した単一体として動くということである！

我々の新しい量子モデルには、電子はなく（Biefield-ブラウン効果を通して、核の方へ中に流れる aetheric なエネルギーの雲だけがある。
この場合 microcluster の動きは一つの原子のようで
クラスターの中心がポジティブにチャージされた原子核と同類になっていてそこにネガティブにチャージされたエネルギーが中に流れている。
面白いことに、次の文章は、エーテルの流体的動きである、ミクロクラスターの流体的特性が固体と同様であることを示唆している。

[シンメトリーな]、金属 microclusters の、原子と分子はミクロスコピックな世界に属しているのに対して、そこでの微細粒子はマクロスコピック世界に属すのを明らかにするようである。
これは、若干真実であるが、すべての面においてそうではない。
我々はこの章の中で、microclusters が有限の内部の温度で、マクロスコピックな世界で液体の相が明らかに確認されるかもしれないことを議論する...

[加えられる強調]
次の抜粋は Besley ほかの（鉄のクラスターの理論上の構造と安定性の研究と題した）完全に異なる研究からのものである。そして、この章の終わりにリファレンスをつける。
明らかに、菅野と Koizumi’s 教科書から直接離れてこれらの調査結果と効果は発見された。
そして ミクロクラスターが分子と凝縮された物質においては見られない変則的な電気と

磁気特性を示していることは Besley ほかの研究のキーである。:
また、小さいクラスターでも分子とか、物質の凝縮したものとは、全く異なる、微小サイズの電子か、磁気か、他の特性の効果のポテンシャルがあるので、クラスター自身の特性は重要である。
理論上の視点から、裸の金属クラスターのガス相の反応性質とそれに反する幾何学的、安定性を理解するのにかなりの研究努力をした。

[加えられる強調]
ところで、菅野ほかの s microcluster 物理学教科書の 11 ページ前に移り、「基本的多面体」と題したセクション 1.3.1 に来る。

これで、ミクロクラスターと Johnson’s 物理学の幾何学の間の関係はすぐに明瞭になる：

最近、ミクロクラスターの安定状態がプラトンの 5 つの多面体によって与えられることが、議論された[1.12];
四面体、立方体、八面体、五角 12 面体、二十面体[すなわちプラトンの立体];
そして菱形面の、Keplers の’2 つの多面体;
菱形 12 面体と菱形 triacontahedron…
四面体は、空間-充填材であるという点に注意することは非常に重要である、
そして、図 1.9 で示すように、二十面体、三角の十面体と 5 回、回転する左右対称の五角の 12 面体は非結晶質の構造である：
これらは、大量の周期的な構造を、つくらない。
多面体が非結晶構造であるならば、ミクロクラスターが結晶構造の大きさに成長する方法は、相転位を経なければならない。

[加えられる強調]

長年神聖幾何学を研究した人には、肉眼にとって非常に小さなレベルで、原子が完璧なプラトンの立体構造に集まると考えることは、素晴らしい。
また、これらの microclusters の一部も流体的性質を持ちそして、これらが 1 種類の幾何学的な構造から他の種類のものに流れることを許すことを考えることは面白い。
彼らのテキストにおいて、菅野とコイズミは、二十面体と 12 面体のような特別の非結晶質の多面体が大きな結晶物になる前にはむ、したがって、相の変化をへなければならないと仮定した。
しかし、この章の後半で、特定の状況下で、2 つ以上の原子の元素の集合体から、非常に

microclusters ミクロクラスターに類似した形態の大きいサイズのレベルのものがつくられるという、結晶学の全理論にひびが入るような反駁困難な証拠を提示する。
重要なことだが、菅野他がつくった教科書を読者がめくると原子の、残りのプラトンの立体に分類される多くの図が見られる。
我々は、あらゆるケースで、原子の“magic number”のグループが、上に言及された幾何学的な構造の 1 つをつくることを知る。
たとえば、特定の数の全てが等しい幅の大理石で、四面体を造るとき、与えられたサイズの四面体を造るのに正確な“magic”ナンバーの大理石を必要とするだろう。
Buckminster Fuller’s が“球の密着充填模型を作ったが、これは同じことである”、そして、その最も単純な形態は 3 個の三角形の大理石を結合し、中央の上に第 4 番目の大理石を置くならば、四面体の形を見ることである。
菅野ほかの Microcluster 物理学教科書 18 ページで、面白いことに、“約 460 の”原子（明らかに中に原子の球の密着充填構造を見ることができる）からなる金のクラスターの写真を持つ。そして、紛れもなく幾何学を形成している。
これらの画像は走査型電子顕微鏡で非常に高い拡大で撮られる、そして一連の異なる角度から、cuboctahedron 幾何学[図 3.3（L）]の構造が明らかに見える。
面白いことに、クラスターは cuboctahedron から他の形まで幾何学的なイメージから異なるイメージまでその構造物が変化するのが見られ、作動中のエーテルの流体的性質と目に見えない“stresses”を再び示している。.
図 3.3 は“マジックナンバー”459 個の球状原子が cuboctahedron 形のクラスターをつくるために充填する方法を技術的に-描写した図であり、561 個の原子は二十面体の形のクラスターになる。
図 3.3（459 個の原子の Cuboctahedral のクラスター（L）と 561 個の原子(R)の二十面体のクラスター(R)
次の引用は、Besley ほかの研究のセクション 3 からで“ジェリー状”モデルを議論し、microcluster の原子の個々の性質が集団行動によって失われることが非常に明白になる.。
再び、我々はこれらの親原子を通す動きの代わりに、全構造を通して動く電子とマジック・ナンバーを理解しようとする。
電子の“geometric shells”がミクロクスターでつくられるという仮説が理解される。
単純な金属（例えばアルカリ金属）の小さなクラスターの、質量の分光器での研究は、
特に激しいピークが “magic numbers” または nuclearities のような存在と一致していることを示した。
これらの実験が（球状）jellium ジェリーモデルの発展に導かれ、実際のクラスター幾何学は（すなわち核の構造は）まだ理解されていないが、おそらくクラスターが熱するか速く fluxional 流れるので重要ではない
その点でクラスターの原子価電子は、平均の中心ポテンシャルが球状に動くと仮定される。

Jellium ジェリー状モデルはしたがってクラスターの電子シェルを充填させる観点からクラスターのマジック・ナンバーを説明する。そして、それは原子の電子シェルに似ている。
いくぶん原子核より大きい（N ~ 100-1500 [クラスターの中の原子になる]）大量のスペクトルのピークの強度の周期的な振動は、電子シェルが supershells.に結合するからであると考えられた
非常に大きな金属クラスターの（最高 10^5 原子）質量スペクトルの高い強度での長期間の振動の観察は、そのようなクラスターが原子の三次元幾何学的なシェルの形成を通して成長するとされ、これらの原子核のためにクラスターの部分的安定性をうむ電子のシェルというよりはむしろ幾何学的な充填であるという結論になった。
確かに、電子の“supershells”についての考えは、量子領域で原子が結合した流状の混合を提案する。
再び、Besley ほかの次の文章は、、、電子の“粒子”が“geometric shells”に一杯になり“ジェリー状の”モデルが変移金属で知られているようには、機能しないと我々に話す時、電子についての全ての考えにひびが入るように見える。
この点で、個々の電子はありえないので、Besley ほかは明確に、多くの物体の力に依存する角度を仮定した。
「要するに、「流体結晶」のエーテル的な量のモデルは、本質的にミクロクラスターをつくる力 forces　を説明することが要求された：
変移金属のためのジェリー状モデルを示すはっきりした証拠が、原子核 nuclearities 領域にもない

我々は、クラスター構造の状態をよく優位に説明するモデルとして多くの物体の力による角度の明白なモデルの導入に期待する
（我々が採用した mM [ミユーレルモットラム Murrell-Mottram]のモデルの場合のように）
これらのクロクラスターの研究結果を考え抜くと、流体の球状領域の振動でプラトンの立体が簡単につくられることを忘れてはならない。
microcluster 研究者がこの関係に気がついたように見えないことは、全く驚くべきである。
量子力学の粒子現象としての見方が優勢なので、科学的な研究者の心には電子の“geometric shells”を含む精巧な説明が正しいと強く思われている。
究明されなければならない重要な問題はこの幾何学ができる方法と理由である？そして、振動する、fluidlike 流体状の量子媒体の考えは断然、最も単純な答えである。
microcluster は、完全な幾何学的な形の、単に大きい“aetheric atom”である。

3.5 デイビッド・ハドソンと“ORMUS 元素”

既知の ORMUS 元素

元素	原子番号	
コバルト	27	
ニッケル	28	
銅	29	
ルテニウム	44	
ロジウム	45	
パラジウム	46	
銀	47	
オスミウム	76	
—イリジウム	77	
プラチナ	78	
金	79	
水銀	80	

表 3.1？

デイビッド Hudson の特許の中の既知の金属的ミクロクラスターまたは“Ormus”元素。
次に、我々はデイビッド・ハドソンの仕事を見る。この人は 1970 年代後期に金の物質は特性上ミクロクラスターを含むことを理解した。
彼はこれらの不思議な材質を分析し、いろいろな方法でテストすることに数 100 万ドル費やした、そして、1989 年に彼は「軌道に再配置された単原子元素 Orbitally Rearranged Monatomic Elements」または「ORMEs.」という名前をつけることによってミクロクラスター発見の特許権を得た。
[オンラインで議論されるとき、Hudson’の著作権を侵害しないために名前は通常“Ormus”または“M-state”元素という名前に変えられた。]
ハドソンは、1990 年代初期からの彼の講義を本で発表してミクロクラスター物理学の博識を誇示したが、菅野ほかの.教科書または他の主流源だと理解するものが発表したものより、彼の研究結果は刺激的である。Hudson の特許は、彼が以下の貴金属要素に見つけたミクロクラスター構造に集中する。

（菅野とコイズミがミクロクラスターが非金属元素でも見つかったことを確認した点に注意しなければならない。）
ハドソンは、上記のミクロクラスター金属の全てがたくさん海水の中に存在することを理解した。
さらに驚くべきことに、ハドソンは地球上でこれらの元素が一般の金属的状態よりミクロクラスター状態で最高 10,000 倍、多量かもしれないことを発見した。

Hudson の研究は、この金属的な microclusters が多くの異なる植物を含む、多様な異なる生物学的システムに見つかり、そして、これらが子牛の脳の材質の重さ最高 5%を作ることを証明した。
さらに、これらは室温超伝導体の働きをし、超流動体の性質があり、磁気エネルギーがこれらの外のシェルを通してしみ出ることができない時、磁場を前にすると浮揚する。
これらの物理的性質は、中国、インド、ペルシャとヨーロッパから錬金術の伝統に書かれているいろいろな材質と一致する。
いろいろな人々が金のミクロクラスターまたは“金の単一原子 monatomic を摂取する志願兵となり”、古代インドのベーダ聖典に書き留められているのと、同じクンダリニーの変化と精神的影響を経験するのを報告した。
Hudson の特許を得たイリジウムミクロクラスターの加熱を取り巻く現象の発見は、もっと論争の的である。
材料が熱されると、その体重は 300 パーセント以上増加するのが見られる。
さらに驚くべきことに、microcluster イリジウムが摂氏の 850 度まで加熱され、材質は物理的視野から消えて、その重量の全てが失われる。
しかし、温度が再び減らされるとき、ミクロクラスターイリジウムは再び現れ、前の重量の大部分が回復する。
Hudson の特許で、thermo-gravimetric 比熱—重力的分析表を示し、この発生した活動中の効果を示した。
重さが増加し自発的に、重さが減少し、全ての物理的な視点から消え失せると、材質を考えることは、コズイレフの研究結果をギンスブルグの従来の相対性方程式を改め、ミーシンとアスプデンのエーテルの複数の密度の発見と組み合わせるとき、もはやありえないことではない。
最初の章に書いたように、コズイレフは微妙ではあるが物の熱と冷却が、その重さに測定可能な影響を及ぼすことができるかを明らかにした。
またこれらの重さがスムーズな、流れるやり方でなく、突然の“quantized 量子的”爆発で増加と減少が起こることを知っていた。
ウラジミール・ギンスブルグ博士は光速に近づくと、物体の質量が純粋なフィールドに変化すると考えた、そして、ミーシンと Aspden’s のデータは質量が実際に aetheric エーテル的なエネルギーの高い密度へ移動したことを示唆する。
このように、この章の最初の Hudson の特許を受けた、ミクロクラスターイリジウムに対する観察された効果は、物が aetheric なエネルギーの高い密度に、完全に位置が移動可能だという考えの、完全な証明を提供する。
イリジウムのミクロクラスターの場合、ミクロクラスターの幾何学的な構造が熱エネルギーをより能率的に利用するのを許すようである。

この振動を利用して相対的に下の温度で極端な反響を引き起こして、イリジウム内部の振動を光速以上に持ってくる。
（これらの内部の振動はそのような付加された反響が導入される前に、原子の,ネガティブな電子雲と陽原子核の「渦」を通してエーテルが流れる速度のためにすでに光速に比較的近いかもしれません。）
それから光速度の閾値点に最終的に達するとき、イリジウムの aetheric なエネルギーはより高い密度に位置がずれ、それが—測定可能な視野から消える原因になる。
温度が減少するとき、イリジウムは、再び下の我々自身の密度に、領域に置き換わり、今はより高い密度での圧力が除去されたと考えられた。

3.6 ANOMALIES OF CRYSTAL FORMATION

3.6 結晶構造の変則

ミクロクラスターの変則的な領域を明らかにした今、我々は従来から理解されている結晶形成の問題に取り組む準備ができた。
一般に使われている食卓塩は､2 つの異なる成分（ナトリウムと塩化物）が一緒に接合して、プラトン的立体幾何学（この場合立方体）を形成する仕方の完璧な例である。
2 つの水素原子と 1 つの酸素原子は、四面体の形で結合して水分子をつくる。
（それは、四面体分子を持つが、液体状態では結晶はない。）、そして、蛍石結晶は、八面体をつくる。
これらの特性を持つ結晶は、これら自身が同じ方向性を維持し、対称形になる。
より技術的な記述は結晶が微細なレベル”で秩序だって特徴ある角度で交差する、平らな表面（側面）を持つ“固形物であるということである。

ここで我々の重要な質問を覚えている“なぜ球状のエネルギーの渦が終わりにはこれらの特徴のある幾何学的な角度とパターンで結合するのか？これらの答えはもちろん、エーテルの“harmonic なエネルギー構造としてプラトン立体を理解するところにある。
Glusker と Trueblood の古典的な結晶形成の方法の定義は、原子配列が規則正しく繰り返されてこれらが産出されることである：
どんな結晶も、若干の基本構造のパターンの繰り返しで、三次元転換を続けることで確立されると理解される。

[加えられる強調]
「転換 translation」という用語は、我々が正確な度数によって特定の物を回転させること

を、意味する。
例えば 360 度の円の中で 180 度が、２回の転換するとき「二つ折られた」結晶ができる。
このように、「転移の繰り返し」は基本的構造の元素（原子または原子の群れである分子）が結晶を作ることを意味し、何度も回転することができ、再び同じ方法で、繰り返されたパターンをつくる。
このような原子の規則的な配列の専門用語は「定期性 periodicity」で、それは結晶が四方八方に無限に同じことを繰り返す“ある基本的構造の単位から成り立つことを意味し、それ自体の空間の中の”全てを満たす。
同じ構造（原子または原子の集まり）は、同じ、周期的な方法で、つまり専門的用語でいう「定期性」の性質で繰り返し続ける。
この古典的な“periodic”結晶構造の理論では、直接結合するものを除いて、各々の原子は、その本来のサイズを保持し、形づくり、他の原子にはどれにも影響を及ぼさない。
結晶学において定期性のモデルが非常によく働いていると理解することは、重要である。
どんな種類のものでも発見された結晶はこの方法で分析できた、そして、全ての側面の間の角度は単純な幾何学的な原則に基づいて予測できた。
1912 年に、マックス.フォン・ラウエはＸ線を使う方法で結晶の内部構造が照射できることがわかった。「回折図」として知られている図は、黒い背景の上に一つの光の点の配列として、現れる。
これはウィリアム H.とウィリアム L.ブラッグによって正式にＸ線結晶学という完全な科学になった、そこでは、実際の本当の結晶構造が何かを決定するために互いの光の点に関して幾何学的に分析される。
このテクノロジーが開発されたあと、70 年間、主流科学者によってこれまでに観察されたあらゆる回折図は完全に定期性モデルに合致した。そして、それは必然的に全ての結晶が構造上の単位は 1 組の原子配列であるという明らかに単純な結論に至った。
定期性モデルの最も直接的な数学的な規則の 1 つは結晶は、2、3、4 と 6 倍の回転を持つことができるだけである（転移。）
この理論から、単一原子または分子でできている反復する、周期的な構造物である結晶を見ると、五回の回転、または 6 よりどんな高い回転も結晶には、存在することができない。

原子は、個々の点のような自身の特性を保持することに「なっていて」、他の原子と溶け合った大きな単一の全体にはならない。

それにもかかわらず、純粋な幾何学的用語でいえば、12 面体は 5 倍の左右対称を持ち、二十面体は 5-と 10 倍の左右対称を持つ。
この章の最初にウルフ博士が概説したように、これらのプラトンの立体は全ての必要条件が左右対称に適合していても、単に単一原子を詰めて、結合させてもこれらの結晶になら

ない。
再び言うと、12 面体と二十面体は左右対称性を持つが、これらには結晶形成の際の、定期性がない。（反復して空間を隙間なく充填することができない）
したがって、それは、「不可能なので」科学の中にこれらの分子の、結晶構造の形がどちらも、現れるということを信じる準備が、ありませんでした？
または、そのように、彼らは考えていました…
さて、悪名高いロズウェル事故に入ろう。
グルームレイクの/エリア 51 の従業員エドガー・フーシェによれば、復元された装置には、従来の定期性の結晶モデルに合わない分子構造が見つかった。
これらは“quasi periodic crystals 準-周期的結晶.”の-省略形“quasi 準結晶として、知られている。
これらのユニークな合金には、二十面体と 12 面体の両方の性質がある。
サイズの大きさのレベルでミクロクラスターに似ているだけでなく、これらの準結晶は、多くの変な特性、例えば極端な強さ、極端な熱への抵抗を持つと理解され、これらの金属はたとえ通常の電気の伝導体であっても、非伝導体でもあった！

（我々が進歩すると、これは説明できる。）準結晶は、ミクロクラスターとは異なり、個々の“cluster beams”からだけでも作れるように思われ、一体化した使用可能な合金にすることができる。
フーシェは自らのウェブサイトで以下のように述べる：我々が強調したように
私は、USAF 内で特別秘密にアクセスが許可される部門である『Q』の、最高機密保持を要求される場所にいた。
[最高機密]の [グルーム湖施設]の食堂で私は、ローレンツ力やパルス爆発、
サイクロトロン放射、量子流、フィールド変換発生器、準結晶エネルギー・レンズ
そして、EPR 量子レシーバーといった言葉を聞いた。
私は、その準結晶が推進力と通信技術の全く新しいフィールドの鍵であると話された。
今日まで、準結晶の電気的、光学的にユニークな物理的特性と、なぜ多くの研究が、機密にされるかあなたに強く説明した。
14 年の準結晶研究は、奇妙な構造をもつ 5、8、10 と 12 倍の[例えば面白い特性をもつ 12 面体と二十面体のような]左右対称で豊かな安定した準安定準結晶の存在を確立した。
これらの並外れた材質の研究と記述のために新しい装置が開発されなければならなかった。
私は、秘密にされた研究は、準結晶は、高いエネルギー貯蔵材としての候補が約束されており、金属マトリックスの構成要素、熱障壁、特殊な塗料、赤外線センサー、強力なレーザと電磁気学への応用の可能性を示していることを発見した。
若干の高度に強い合金と外科的道具は、すでに市場に出ている。
[注：

1993 年に、ウィルコックは個人的にテフロンとケブラーKevlar の両方が逆行分析されたものだと話された。
私が一度ならず話された物語の 1 つは、ロズウェル事件の推進力に使われた結晶のペアの 1 つは水素の結晶体であったということであった。

水素結晶をつくることは我々の科学的能力では最近まで、手が届かなかった。
それが、今では変わった。
DOE の最高機密のブラックプログラムの 1 つによって、水素結晶を生産する方法は、発見され、製造は 1994 年に始まった。
水素準結晶のグリッドと、名づけることの出来ない別の材質は、ロズウェル航空機のプラズマ・シールド推進力の基礎で、それは、生化学的に設計された乗物の肝要な部分であった。

科学者とエンジニアによって、査定され、ロズウェル乗物で示されたテクノロジーとそれ以後墜落したあと 8 台の乗物を逆行分析することが試みられたあと、科学者にとって思いがけない無数の先進の結晶学は、発見された。
おそらくこれらのテクノロジーを再生した人々はロズウェル・ハードウェアを 35 年後、まで秘密に研究し、彼らの、見た何百もの金属のテクノロジーを再現するため、何千もの答のない疑問を抱えそして解き、科学的な世界に今まで出たことの無い「準結晶」を静かに「安全に」持ち出した。
ミクロクラスターとは完全に別に、準結晶の異なる何千もの参照が、文字通り現在インターネットにある。
同じ文書で microclusters と準結晶に言及しているたった一つの科学的研究もオンラインで見つけることができない。）政府契約の会社に、多くの準結晶の参考文献があり、これらが強力に広範囲にわたって研究しているのを見るのは非常に簡単である。
しかし、たとえこれらが量子物理学の優勢な理論にユニークなチャレンジを示すとしても、これらは一般的なメディアはほとんど言及しない。
研究は続いているが、それは非常に抑制された興奮である。
1982 年 4 月 8 日にダン Schechtman は、アルミニウム・マンガン合金（Al6Mn）の準結晶を「発見」（または再発見）した名誉を与えられた、
それは、融解した液体状態で開始し、非常に急速にさました。
Ｘ線回折図によって確認され、下の写真に似た二十面体の形をした結晶が、生産された。
Schechtman のデータは、1984 年 11 月まで発表さえされなかった！
図 3.4 の右の写真には、明らかに多くの五角形を見ることができる。そして、二十面体の五つのシンメトリーが示されている：
図 3.4？

二十面体（L）と準結晶形成(R)のＸ線回折図。
我々が言ったように、準結晶が出現すると、他の普通でない幾何学的な形と一緒に、12 面体と二十面体の両方が現れる。これによって分子領域でプラトン立体 5 つ全ての出現が完了する。
12 面体と二十面体は、両方とも五角形の構造の五つのシンメトリーの要素を備えている。
図 3.5 は、筑波（日本）の NRIM の Pang Tsai からの、12 面体の形をしたアルミニウム銅鉄の準結晶合金と、（10 面をもつ）十角形のプリズム形をしたアルミニウム・ニッケル-コバルト合金を示している：
図 3.5？
NRIM.の Pang Tsai によってつくられた準結晶の 12 面体（L）と十角形のプリズム(R)
問題はあなたが一つの原子を束ねたこうした結晶をつくってたしかめることができないことである、それでも、写真で見るように、これらは本物である。
科学者の重要な問題は、この結晶が生じるプロセスを説明し、定める方法である。
A.L.によると
マッカイの五つのシンメトリーを含む結晶学的定義の 1 つの方法は、原子価の“放棄である：
五つの折り目をもつフラクタル構造は、至る所で、有限サイズの原子を捨てなければならなくなる。
これは世界の結晶学者の合理的仮説にはならないが、数学者はそれを自由に探求している。

[加えられる強調]
これ は microclusters にととても類似していることを示唆し、準結晶がもう個々の原子を持たないようになり、むしろ、原子は全ての結晶を通して統一体になった。
これは結晶学者が、信じるのが不可能かもしれないが、単純な三次元幾何学を含む、我々のミクロクラスターの観察に相関して、実際にそれが A.L.マッカイの問題の 4 つのポテンシャル解で最もシンプルなものの一つです。
再びいうと、結晶は非常にリアルで、超えなければならない唯一の大きなハードルは原子が粒子でできているという固定化された信念である。
関連するもう一つの例は、ボーズ-アインシュタイン縮合物に見られ
最初は、アルバート・アインシュタインと Satyendranath ボーズによって 1925 年に理論立てられ、1995 年に最初にガスで示された。
要するに、ボーズ-アインシュタイン縮合物は原子の大きなグループのようでまるで一つの“粒子のように、ふるまう。そして、全ての空間と全ての時間、全構造を通して各々の構成原子”が同時に占めるように見える。
全ての原子は正確に同じ振動数で振動し、同じ速度で移動すると測定される、そして、全ては同じ空間領域にあるように見える。

厳密に、システムのいろいろな側面は全体として統一された働きをする。そして、個性の全ての兆候を失う。
それは、「超伝導体」のために非常に存在することが要求される特性である。
（超伝導体は、流れの損失なしに電気を伝導する物質である。）
一般的には、ボーズ-アインシュタイン縮合物は、とても低温で作られるだけである。
しかし、microclusters と準結晶に類似したプロセスが起きているのを観察する、そこでは、個々の原子のアイデンティティの感覚がもはやない。
面白いことに、さらにもう一つの類似したものは“コヒーレント”な光として、知られているレーザー光線の働きである。
レーザー光線の場合、それが空間と時間で全ての光線がまるで一つの“photon”であるようにふるまう？レーザー光線において個々の光子を差別化する方法が、ない。
レーザー、超伝導体と準結晶が 1940 年代から回復された ET 技術で見つかったことに、注目することは面白い。
これは、明らかに、議論のテーブルに全く新しい量子物理学の世界を導入する。
やがて、準結晶とボーズ-アインシュタイン縮合物はずっと広く使われるのが見えてきて、いかに“粒子”に基づく量子力学的思考が誤った状態か理解される。
さらに、生命システムがボーズ-アインシュタイン縮合物としてしばしばふるまうと、英国の物理学者ハーバート・フローリッヒは 1960 年遅くに提案した。そして、作動中の大規模な法則を提案した。
後のエーテル的な生物学を扱った章で、我々はこれを議論する。

図 3.6？
ダン　ウィンターが再版した、サーウィリアム　クルックスの「元素の幾何学的周期律表。
次の疑問は、原子に見られる“electron clouds 電子雲”に関係する。
ロッド・ジョンソンとダンウィンターは共に、原子の中の涙形の“electron clouds 電子雲”がプラトン立体の側面に完全に一致する点に注目した。
ウィンターは、電子雲を「ボルテックス円錐」として言及した、図 3.6 は元々、20 世紀初期から有名で非常に尊敬された科学者で後で、超心理学の分野への研究者になったW・クルックスによって考案された元素周期律表で、残念なことに読みにくいコピーである。
図の下部に、“vortex cones”がプラトン立体の各々の面に一致する仕方の図がある。
（図 3.5 のより読みやすいコピーが以前のウィンターの本の 1 冊に存在するかもしれない。
最大のサイズにしてイメージを見るとき、元素名の一部は理解することができる、そして、他は既知の元素の周期律表と比較して、位置を推論することができる。

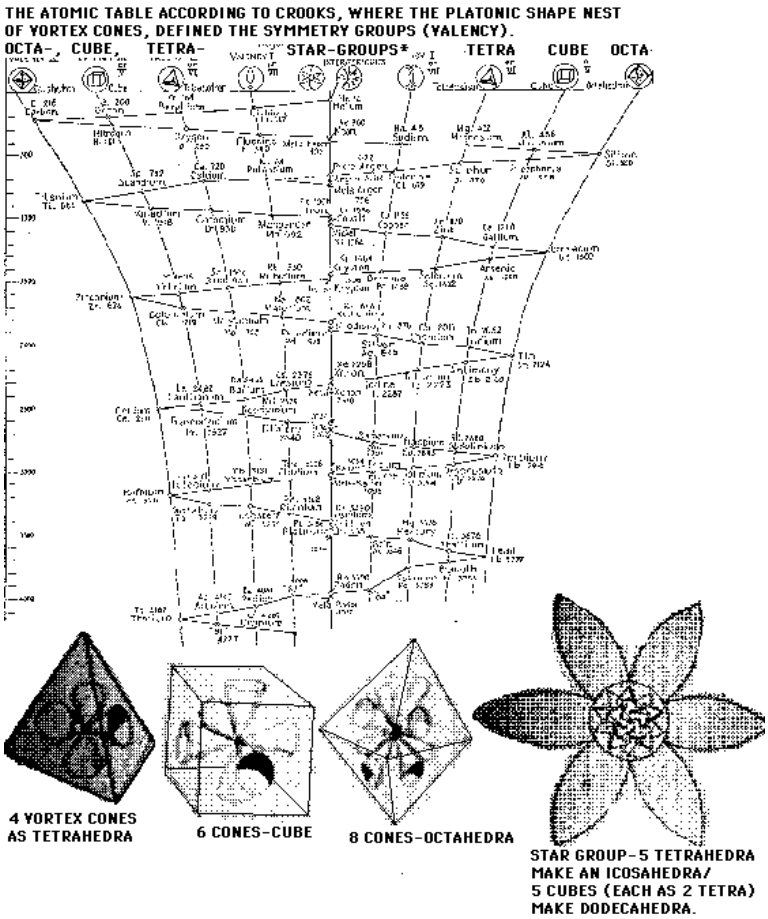
表は明らかに、上から下に読む、そして、中心から下に 2 つの円が書かれ、最初の成分はヘリウムである、そして、線は各々の連続した元素に引かれる。

左のスケールは一連の測定度数である。そして、大見出しの 0 から始めて、各々の線は 10° の単位を示している。

目盛りの上に書き込まれた度数の数値は、50、100、150、200、250、300、350 と 400 である。

サークルックスの理論は、1 つの元素から次に移る際、これらの元素の幾何学に関して回転角度または転換を含んで設定したことを示すように見える。

We can see that the wave is mostly straight, but at times there are “dips” in the line that appear to correspond to larger angular rotations that must be made.)



より大きな角度の回転と一致する線に「くぼみ」がある時以外は、波はほとんどまっすぐなことを理解する。)

エーテルの中でのプラトン立体についてアスプデン博士が書いたことに戻って考えるならば、これは“fluid 流体的結晶の動きをすると述べた。そして、これらは固体であると同時に、液体としてふるまうことが可能なことを意味した。

このように、一旦電子雲が不可視のプラトン立体によって配置されていると理解すると、どのように結晶が形成されるか、準結晶がどのように作ることが可能か理解することは非常に簡単になる。

プラトンの立体の「巣」が、原子の中にあり、

「巣」の中の各々の球に 1 つの固体があり、電子雲の「巣」が、原子価の異なるレベルで全く、共存している。

プラトンの立体はエネルギー的な構造とフレームワークを作る、そして、aetheric なエネルギーは、原子のポジティブな低圧の中心の方へ突進するように流れなければならない。

我々は固体の各々の面の流れるエネルギーが、通り抜けなければならないじょうごのような、ウィンターが「渦円錐」と呼んだものをつくる動きをこのように、理解する。
現在の我々にとって必要な文脈では、次章の Johnson の分子と原子の構造物の中のプラトン的なシンメトリーの概念を、多くの人々と同じように奇妙に、考えてはならない。
包括的な研究を続け、特に準結晶工学として、理解される、この情報は、人類の特定のサークルですでに使用中に見える。

REFERENCES:
リファレンス参考文献：
1. Aspden, Harold.
1. アスプデン（ハロルド)。
Energy Science Tutorial #5.
エネルギー科学チュートリアル#5.
1997.

URL:

http://www.energyscience.co.uk/tu/tu05.htm
2. Crane, Oliver et al. Central Oscillator and Space-Time Quanta Medium.
2. クレーン、オリバーほか本部発振器と時空量媒体。
Universal Expert Publishers, June 2000, English Edition.
万能の専門家の出版者、2000 年 6 月、英語の版。
ISBN 3-9521259-2-X

3. Duncan, Michael A. and Rouvray, Dennis H. Microclusters.
3. ダンカン、マイケル A.と Rouvray（デニス H. Microclusters.）
Scientific American Magazine, December 1989.
1989 年 12 月、サイエンティフィックアメリカン誌。
4. Fouche, Edgar.
4. フーシェ（エドガー)。
Secret Government Technology.

秘密の政府技術。
Fouche Media Associates, Copyright 1998/99.
フーシェ・メディアは、連合する、著作権 1998/99。
URL:

http://fouchemedia.com/arap/speech.htm
5. Hudson, David.
5. ハドソン（デイビッド）。
(ORMUS Elements) URL:
（ORMUS 要素）URL :

http://www.subtleenergies.com/
6. Kooiman, John.
6. コーイマン（ジョン）。
TR-3B Antigravity Physics Explained.
TR-3B 反重力物理学は、説明した。
2000.

URL : http://www.fouchemedia.com/Kooiman.htm
7. Mishin, A.M.
7. ミーシン（午前）
(Levels of aetheric density) URL:
（aetheric な密度のレベル）URL :

http://alexfrolov.narod.ru/chernetsky.htm
8. Winter, Dan.

Braiding DNA:
DNA を編むこと：
Is Emotion the Weaver?
感情は、織工であるか？
1999.

URL :

http://soulinvitation.com/braidingDNA/BraidingDNA.html

9. Wolff, Milo.
9. ウルフ（ミロ）。
Exploring the Physics of the Unknown Universe.
未知の宇宙の物理学を調査すること。
Technotran Press, Manhattan Beach, CA, 1990.
Technotran プレス、マンハッタン・ビーチ、CA、1990。
ISBN 0-9627787-0-2.

URL :
http://members.tripod.com/mwolff
http://members.tripod.com/mwolff

第 4 章：

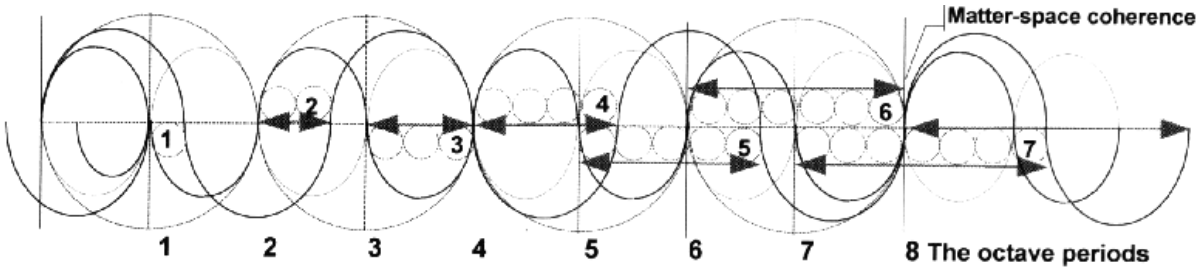
THE SEQUENTIAL PERSPECTIVE

連続的展望

原子が中心軸に対して球面左右対称のエーテルの-渦であることを示唆する証拠が本当に理解された。そして、これは球面円環体をつくった。
Biefield-ブラウン効果は、“charge polarity 極性への充電のミステリー(極性からの放電でなく))” がエーテル的エネルギーが電子雲の中を通って核に流れるという壮大な解答を証明する。

ギンスブルグ博士は相対性理論の方程式に許容できる単純な 2、3 の調整をして、エネルギーと質量を放棄すると流れが光速の方に高速化するとして、研究所でコズイレフによって観察された物質の挙動を完全に説明するモデルをつくった。
従来の四面体と、立方体と八面体の結晶の分子形成を通して、そして、特にミクロクラスターの導入で、二十面体と 12 面体の準結晶の、ボーズ-アインシュタイン縮合物の現象で、我々は、量子領域でのプラトン立体の重要性を見る。

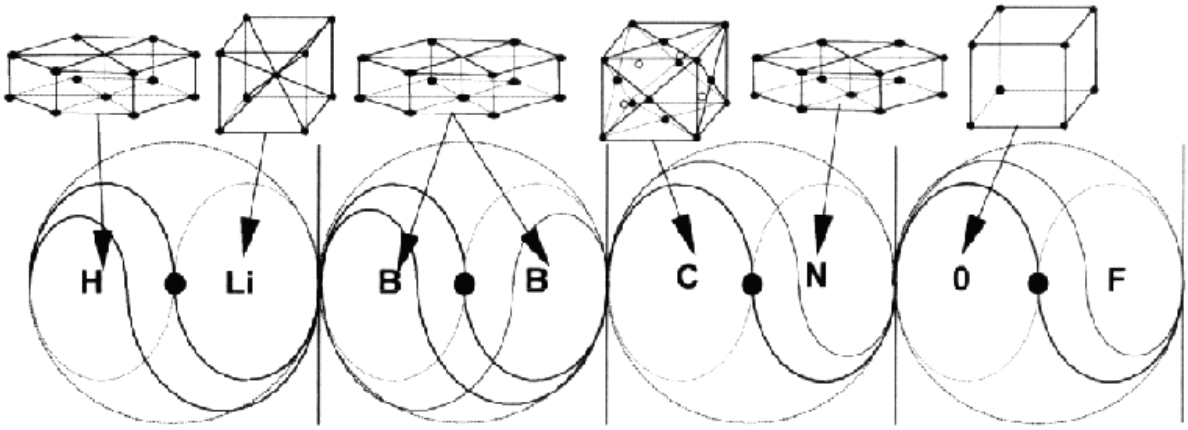
.



現在我々には反駁できない物的証拠があり、これらの力が存在することをもはや否定できない。
これらの新しい調査結果は、それを明らかにする。
もはや原子を個々のユニットとみなす必要はなく、むしろハーモニックなエーテルの渦として、大きいレベルで一緒に統合された例えば準結晶のような一貫性とすることができる。
そして、このデータに、ロッド・ジョンソンの仕事をあてはめることでパズルの全ての“loose ends 失われた鍵”の有効な解答を得る。
4.1 BASICS OF JOHNSON’S “SEQUENTIAL PHYISCS”

4.1 ジョンソンの “1 連の物理学 SEQUENTIAL PHYISCS”の基本

Johnson の最終的に見るモデルは、以下のようである：
- エネルギーのグループだけで“固形の”粒子が、ない。
あらゆる量子的な測定が、エネルギー・フィールドの交差している構造と形として幾何学的に説明することができる。



- 原子はプラトンの立体の形をした実際に相互逆回転するエネルギー形態である。そして、特に八面体と四面体の相互逆回転に根ざしている、各々の振動の/pulsational パルス的な形はエーテルの主な異なる密度と一致している。

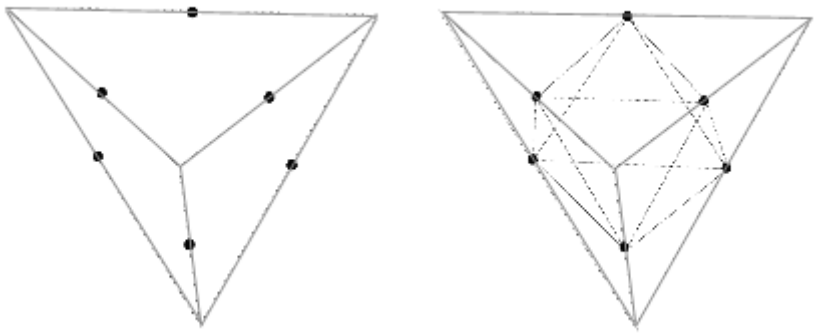
全宇宙の中の、全ての密度レベル、または次元は、これらのエーテルの 2 つの初源的なレベルで組み立てられる。そして、それは絶えず互いに相互作用している。

数多くの物理学の先進的理論家は、すでに超ひも理論に基づく「粒子の網目」モデルの方へ努力しており、宇宙における全ての物質は、幾何学的なマトリックスのエレメントとして相互に連結している。

プラトン立体が共通の軸を共有し、互いが入れ子になった巣のようになって縮小し、相互逆回転が可能なこと従来の科学者が思い浮かばかったので、量子領域の理解に失敗した。

再び、この章で、最初に Johnson の量子レベルの“モデルの概要を見ることで単純化し、後でそれを証明する科学的証拠を議論する。

相互貫通する四面体モデルの黒い鉛筆のイラストで、中心的原則のアウトラインを述べる。そして非常に明確に、三次元立体として、どのように見えるか示した。



中に八面体が出来ることを想像する前に、構造の視覚映像をよく見ることは、重要である。

画像の中に、先端が上を示すものと先端が下を示す四面体とが 2 つあることが明らかに見られる。
また、球の中に四面体が完全に一致するのが理解される。:
図 4.1？
相互貫通(インタレース)四面体。
心の中でこの構造を思い浮かべて、モデルで以下の点を考える：
量子レベルで四面体と八面体は球で互いに逆回転する。
- 両方とも、共有の中心のまわりで球面のシンメトリーになる。
宇宙の中に存在しなければならないエーテル密度の 2 つの初源的なレベルを四面体と八面体は表す。我々はそれを A1 と A2 と呼ぼう。
次図に見るように、八面体のフィールドは四面体のフィールドの中央と完全に合致し、したがって、直径より小さい：
図 4.2？
インタレース四面体（L）の内側と、その八面体(R)は合致する。
［ローラーLawlor,（1982）］
図 4.2 は相互貫通の四面体の中に八面体が見られる。そして順にその相互貫通 4 面体の外側に立方体が存在する。
相互貫通四面体の中で組み合わさった八面体がフリーな動きで相互逆回転できるのを想像することは、最初とまどう。
本当に、この、2 つの幾何学的形は、完全に釣り合い、統合されている。
しかし、Johnson’s 物理学の最も重要な部分は、八面体が四面体フィールドから分離して、相互反対方向に回転することを知ることである。
再び上記のハーモニーックな位置に着く前に二つの幾何学的形がフィットするのが可能な位置は、8 つの「相」だけが、ある
8 つの相の位置をとるために 2 つの幾何学的形態は互いに、線から線、または点から点の角度で、直接的に関係づけられなければならない。
これは、次の“phase 相”の図で視覚的に表される：
図 43
逆回転する八面体と四面体でつくられる 8 つの“相の位置 positions”。
我々がこの図に見るものは、2 つの基本的波動である：
小さい波動は、八面体の回転が象徴する、主な各々の 4 つの円に合致する、
その境界の外側にある大きい波動は、相互逆回転する四面体がつくりだす主となる円である。
この図は断然最も簡単な方法で四面体と八面体がつながる方法を示す、それはケネス・ウィルソンによって最初に「“phase 相の物理学」の科学に基づくラージスケールで波動の幾何学的関係を理解する手段として生み出された。

8 つの“相の位置”の各々は異なる元素を表す、そして、これは次の形で示される：
図 4.4？
8 つの相の位置“phase positions”は元素でつくられる基本的な結晶構造に関連する。
続けると：
四面体と八面体は両方とも高圧下にある？四面体はネガティブな電子雲として核の方へ多くの圧力をかけ八面体の方へ、押し入る。
固体上の結節点か線が、他の固体上の結節点または線と交差するときだけ、エネルギーのために出入口を開いてこの圧力が放出され流れる。
そのような“放出の”開始を視覚化する最も簡単な方法がある、それはボール紙の穴をさえぎり、ヘアドライヤーをオンにして、穴の方へ移動し、ノズル・面をボール紙に対して固定する。
ノズルが実際に穴に着くまで、空気は、どこにも抜けられない、そして、エンジンは速く激しく動いて、過熱する;
しかし、一旦ノズルが穴に着けば、どこかに空気がながれ、そして圧力は放散されエンジンはリラックスする。
Biefield-ブラウン効果を通して原子の中の電子雲の圧力は、常に核の方へ突進しようとする、そして、逆回転する幾何学的形とつながらない限り、その圧力は、ブロックされる。
これからみると、幾何学的な形の中の線と結節点は、入れ子になった球状フィールドの中に“飛び出た”“穴”とみなすことができる。それは流入圧が流れることを許す。
これは圧力”問題の解決である、しかし、我々はまた、四面体と八面体の逆回転する力によってつくられる圧力を覚えていなければならない。
（これらは、我々がそれぞれをエーテル 1（A1）とエーテル 2（A2）と呼ぶフィールドバブル field bubbles”でできる幾何学的形である。

古代の伝統は、しばしば A1 と A2 を“陰と陽の力.”と表した）
両方の幾何学的形の間の、幾何学的にバランスするオクターブポイントに、大量の「穴」が一列に並ぶが、外部からの圧力の全ては、中心へ流れることはできない。

「オクターブ」点でないところで、2 つの形が一緒に原子価を「ロックする」とき、
A1 と A2 の逆の回転は完全には釣り合わない。そして、圧力が追加されシンメトリーも壊れる。
これらが外部のエネルギーによって乱れないならば A1 と A2 はその均衡を失った位置で「動けない」ままです。
要素の D.メンデレーエフの周期表の大部分の要素は、このように、不安定な状態で「定着している」。
このケースで、自然の力で成立した、全て非放射性成分は表の左から右に、8 つのグループ

に組織される。
これらは、シンメトリーの欠如した不安定な位置から離れ、結晶化されたより大きいシンメトリックな幾何学的なバランスした位置に動く。
ジョンソンのモデルの中で、幾何学が再び完璧に回復し、釣り合うのは、オクターブ高音へ引っ越すときか第 8 番目の逆回転の相の位置のときだけである。
これは、狭いイスに座ることを思い出すと視覚化できる。
明らかに、最も快適な着席位置は、体が中央にある時である。
単に、始めはスツールに座るとして描くと、8 つの異なる位置で、あなたの 1 本の足の小さな一部だけで、いすに座っているかのようだ。
各々の位置はアンバランスで不快で、椅子に完全に集中し着席するまで、本当のバランス状態でない。
このように、原子と分子は「不安定な」、バランス状態でなく、平衡をつくるために簡単に他の行方不明のエネルギーを持つ不安定な原子と分子とくっつく。
4.2 ‘COVALENT’ BONDING

4.2 ‘共有結合’の接合

The first form of bonding that can occur is known as covalent bonding.
最初に成立可能な種類の結合は、共有結合として知られている。
この名称は、問題の原子間で電子雲が「共有される」ことから「原子価結合」から使われます。
それは、我々が言ったように、本当の「電子」では、なく、A1 と A2 の幾何学的なシンメトリーの完成で、入れ子にされた四面体と八面体の間を、結合させる。
全ての元素は A1 と A2、の単に異なる比例でのミックスである、そして、Johnson’s モデルにおいて、巣のように入れ子にされた四面体と八面体は互いに異なる位置に固定される。
この最も単純な例は、H2O として一つの酸素原子が水の分子または相互に融合するために自然に 2 つの水素原子を引きつけることである。

当然、水の分子は、四面体の形を形成する。
後の生物学の章で、このユニークな構造の結果から起こる興味深い可能性がわかる。

4.3 イオン結合’

化学の中で他の基本的結合は、「イオン結合として知られている。
「この場合、チャージされた極性の違いによって、マイナスがプラスを引きつけるところ

で結合はつくられる。
元素がバランスを失った状態にチャージされると、それはイオンとして知られている。それゆえに、イオン結合と言われている。

最も単純な例が塩化ナトリウムまたは塩である。そして、それは Na+Cl-として書くことができ、立方体か八面体をつくる。
正と負のイオンの圧力の違いが、この場合一緒にこれらを引きつける原因になる。
塩の分子の中の、塩素原子は、幅 1.81 オングストロームでナトリウム原子 0.97 オングストロームのほぼ二倍と同じくらい大きさである。
また、イオン結合は特定の元素の個々の原子は、互いに引きつけられ二つずつ一緒に結合しシンメトリーになることで、起こることができる。
この最も基本的な例は O2 として書かれる酸素ガスの分子である。
初期の錬金術師の唯一の方法は中心的元素を見つけることができた
例えば、単体の酸素原子のように酸と基材、その他と混ぜて、燃やしたり、凍らしたりする、プロセスによって、徹底的に基本的な化学物質を分裂させることで、処理した。

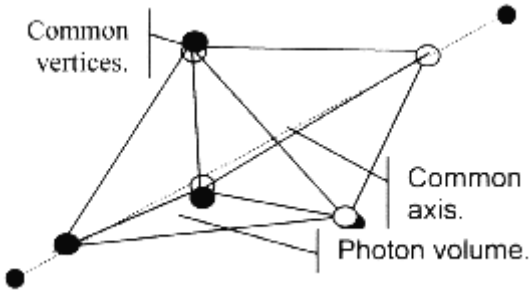
4.4 FREQUENCY EXPANSIONS AND CONTRACTIONS

4.4 振動数の拡大と収縮

要点に戻ると、四面体と八面体が位置することが可能な 8 つの基本的位置または相を持つ。
しかし、抜け目ない読者は、明らかに 8 つの基本的幾何学的な位置が全ての周期表をつくるのに十分でないことをすでに知っている;

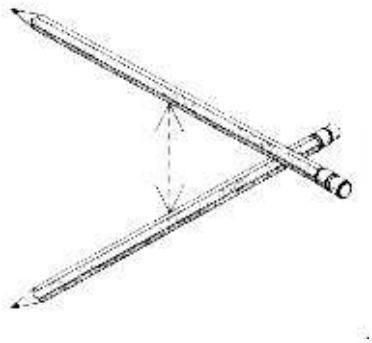
自然界の元素の全てを生み出すために更に若干の作動中の特性がなければならない。
図 4.5？

四面体（L）から八面体(R)への振動数の収縮。
Here is the key:



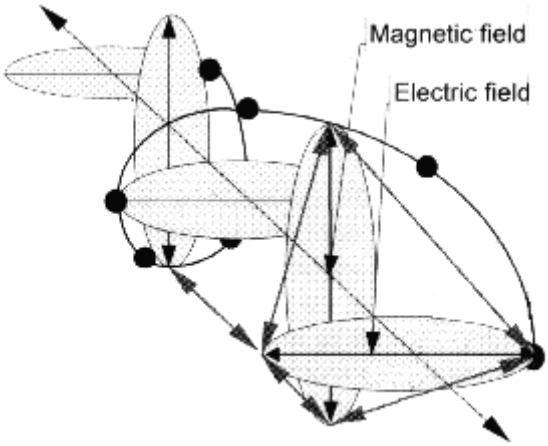
キーは、ここにある：
両方の幾何学的な形は、これらの中心から広がり、また、縮むことができる。
これは、振動数の変化と呼ばれる。
これらの振動数が変化するとき、異なる種類の幾何学的な固体を作る。
これらの固体はちょうどプラトン立体でなく、アルキメデスの固体のような他の形でありえる？そして、これら、全ては親としての四面体と八面体構造と相互関係している。
図 4.5 で見られるように､幾何学形状を縮小することはその線の各々を 2 つ以上の等しい大きさの長さに、二分するのと同じくらい単純である、
我々が各々の線を 2 つの部分に分割するとき、これは“second-frequency 振動数の 2 倍”分割と呼ばれ、各々の線を 3 つの部分に分割することは“third-frequency 振動数の 3 倍”と呼ばれている。
Buckminster バクミンスター.フラーは合計 10 の異なる振動数（幾何学的な形）が四面体から、振動数の拡大または収縮の過程でつくられることを証明した？そして、これは、Johnson’s の研究結果の中心である。

たとえば、原子核の“強い”力は、電子雲の“弱い”力より正確に 10 倍、強力なことが知られている！



この特異な現象のうなずけるいかなる説明も､他にこれまで聞かなかった。（これは 100 の平方根として通常書かれる。それは 10 である。）
ここで核は､最も高い振動数の収縮のレベルになって最も大きな幾何学的な「包みこむ」点を表す。

我々がする必要があることは膨張と収縮から現れることができるいろいろな振動数をもつ、相互逆回転する幾何学の 8 つの基本的な相を結合することです。
これを考慮することで、全ての周期表は提出することができる？そして、最終的に、元素が固体、液体またはガスかどうかに関係なく、予測できる、そして、その凍点、溶点およ



沸点でそうなる。

ジョンソンは、思想家ジェームズ・カーターの彼が「circlons.と呼ぶ螺旋を描く運動の図を通して全ての周期表を提出することができた仕事にダイレクトな興味を持った
「最も面白いことに、カーターの「circlons」は、球形トーラス構造です！

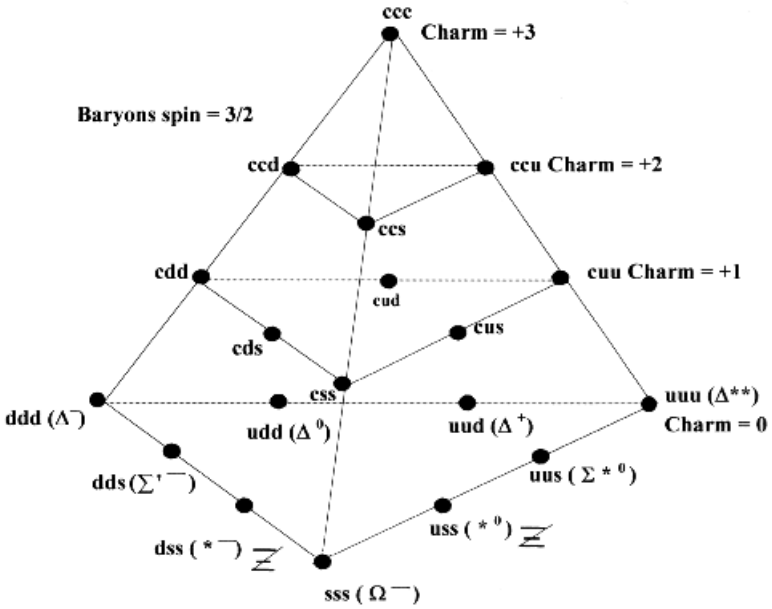
カーターは、circlons サイクロンの中でいろいろな元素を図解し、螺旋を描き、渦巻き状の、周期的な「回転の中に回転」が、あるのを示したが
彼は、単にそれらが、「絶対運動によって存在しなければならないことは知らなかった。」
より完全な記述を読みたい読者に詳細なインタビュー記事/、あるいは、彼のウェブサイトを案内しよう。
この本の目的と考えを単純にしておくために、我々は量子物理学でプラトン立体の幾何学が本当に作動中なことが最も明らかな兆候の一部を単に指摘する。

4.5 PLANCK’S CONSTANT AND THE ‘QUANTIZED’ NATURE OF LIGHT

4.5 プランク定数と光の量子的性質‘QUANTIZED’

我々のほとんどは放射熱と光が同じものに起因すると考えられていることをすでに知っている？電磁エネルギーの爆発の通過で点火する“photon”によることが知られている、
しかし 1900 年以前は、熱と光は中断せずにスムーズに流れる“photons.”を単位として動くとは考えられていなかった。
物理学者マックス・プランクは最初に光と熱が最小レベルのエネルギーの“pulses” または“packets”で動くことを発見した。そして、それは 10^-32 センチメートルであるのを計算した。

面白いことに、より速い振動ならば、より大きいパケットを得る、そして、より小さい振動を持つならば、より小さいパケットを得る。（原子核は、実際に比較すると惑星の大きさである！）

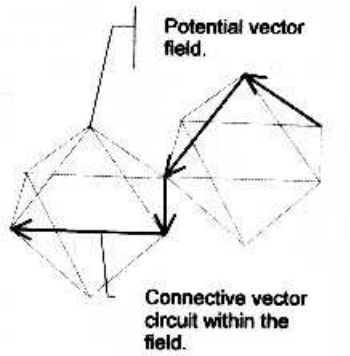


プランクは、振動の速度とパケットの寸法のこの関係が常に、それを測定方法に関係なく、一定のままであることを発見した。

振動速度とパケットサイズのこの恒常的な関係は、Wein’s 置換法則として知られている。
プランクは厳密に、現在“プランク定数”として知られている関係を表す一つの数を発見した
「21 世紀科学とテクノロジー」の 2001 年 12 月号の中の最近のキャロライン・ハートマンによる記事では、特に最大 Planck の研究結果を扱って、彼の発見によってつくられるパズルが未解決のままなことを明らかにした：
今日、我々は原子構造に対する深い洞察のためにキュリー、リーゼ・マイトナーとオットー・ハーンのような科学者の継続的研究に恩恵を受けている。
しかし、基本的な問題として：

電子の運動の原因は特定の幾何学的な法則 laws,によって説明される運動で、さらに特定の元素が他より安定している理由は、明白でなく、新しいパイオニア的な仮説と考えが待たれている。
[加えられる強調]
我々は、すでに Hartmann の質問に対する答えがこの本に出ているのを見ることができる。
我々が言ったように、Planck の発見は輻射熱の研究から起こった。
キャロライン Hartmann の紹介の記事のパラグラフは、彼が達成したものの完璧な記述である：
100 年前、1900 年 12 月 14 日に、物理学者マックス・プランク（1858-1947）はベルリンソサイティの皇帝ウィルヘルムの前でのスピーチで彼の輻射の新しい公式の発見を知らせた。そして、物質が熱して、熱を輻射し始めたときのいろいろな色の全ての規則性を記述

することができた。
しかし彼の新しい公式は、重要な仮定に基づいた：
この輻射エネルギーは連続的でなくて、特定サイズのパケッツだけで起こる。
難しさは、物理的にわかりやすいこの公式の背後にある仮定方法の中にあった。
それは、振動数に比例して“energy のパケッツが（一定でなく”)、異なることを意味した？（Wein’の置換法則）
ハートマンは、少し後まで続ける：
あなたが自然において明らかに解決できない問題にやって来るときはいつでも、より高い、より複雑な法則がその背後になければならないことを[Planck]は知っていた;
あるいは、言い換えると、”人は異なる“geometry universe 普遍的幾何学が、あると仮定しなければならない。
たとえば、プランクは物理学のいわゆる“物理”法則が普遍的に有効でない点が見えたので、Maxwell 方程式の正当性が再確立されなければならないと常に主張した。
[加えられる強調]
Planck の仕事の核心は一次方程式で定めることが可能だ。それは物質の放射は“packets パケット”でどのようにエネルギーがリリースするか爆発するかを、記述している。
方程式は E=hv であるが E はあなたが結局測定することになるエネルギーに等しく v はリリースされるエネルギー放射の振動数である、そして、h は“Planck’s 定数）として知られている。(v と E の間の“流れ”は一定になる”



Planck 定数は、6.626 の数値と発表されている。
それは大きさに関係ない定数である。それは単に 2 値の間の純粋な比率を表し、それ以外の特定の測定値が割り当てられる必要がないことを意味する。
プランクは、魔法のようにこの定数を発見したのではなく、多くの異なる類いの熱放射を研究することで苦心してそれを引き出した。
これは、ジョンソンが彼の研究で明確にした最初の大きな神秘である。
彼は、Planck 定数を測るために、デカルト座標システムが使われるのを我々に思い出させる。
このシステムはその創設者（ルネ・デカルト）の名をとって名づけられる、そして、それが意味する全ては立方体が三次元空間を測るのに用いられることである。
これは、大部分の科学者がそれを普通ではないとは思えないほど、一般的なものにされている？それは活動の長さ幅と高さである。
Planck の実験では、小さい立方体は、そのスペースの領域中を動くエネルギーを測定するのに用いられた。
単純さのために、この立方体は、Planck’s 測定システムにおいて“1 なる”量(1)は自然に

割り当てられた。
しかし、彼がプランク定数を書いたとき、彼はそれが十進数であることを望まなかった、それで、彼は立方体量を 10 移動させた。
これで定数は、0.6626 の代わりに 6.626 になった。
本当に重要なことは、最終的に立方体（10.）と立方体の中にあったもの（6.626）との関係の比率は同じままで、立方体に 1 か、10 か他の数値を割り当てたかどうかは、重要ではなかった。
我々が言ったように、プランクは長年にわたって厳密な実験を通してこの比率の恒常的な性質を識別しただけだった。
リリースされる箱の寸法に従い、異なる大きさの立方体でも、それを測定する必要がある。
つまり、立方体自身の量が 10 単位とすると、その内部にある立方体は、関係するサイズに関係なく常に 6.626 単位の比率を持つということだ。
すぐに、我々は何かに気がつかなければならない;

6.626 の数値は 6.666 に非常に近い。そして、その 6.666 は 10 の正確に 2/3 である。
我々は疑問に思うだろうが、
「何で、2/3 がそれほど重要なのか？」
図 4.6？
Planck’s 定数によって測られる“photon”をつくるために 2 つの四面体は共通面で接合している。
球の中に四面体が完全に合致したときの四面体の総質量は、フラーその他によって説明される単純な、測定可能な幾何学的原則に基づいて正確に球の 3 分の 1 になることを知っている。
光子は、形 4.6 に見るように実際に結合した 2 つの四面体から成り、これらは結合して立方体を通るがこれらのうちの 1 つだけを、測定するのに十分可能だ。
立方体中を動く質量（エネルギー）の総量は、プランクがナンバー10 を割り当てた立方体の総質量の 3 分の 2（6.666）である。
Buckminster フラーは最初に光子が本当にこのように 2 つの四面体を合わせたもので成っていることを発見した、そして、彼は 1969 年に彼の惑星のアドレスで世界に発表し、その時以降、明らかに、これは忘れられた。
Planck’定数 6.626 と“pure”6.666 または立方体 10 の 2/3 との違いは、わずかに 0.040 であるが、真空スペースの誘電率がエネルギーの一部を吸収する比率を含んでいる。

クーロンの方程式として知られているものによって、真空”の誘電率は、正確に計算でき

る。
これをより単純なことばで表現すると、“物理的真空”のエーテル的なエネルギーは、それを通り抜けるどんなエネルギーも少量吸収する。
これは、元々放出されたものより、それを通り抜けたためにわずかに少なくなったエネルギーだけが「許される」ことを意味する。
それで、一旦我々がクーロンの方程式を因数分解するならば、完全にその数値が出てくる。
さらに、立方体の座標の代わりに四面体の座標を使って空間を測定するなら、Planck の方程式 E=hv の必要性が、無くなるか？エネルギーが現在の方程式の両側と同じように測定されるから、E（エネルギー）は“定数”を必要としないで v（振動数）に等しくなる。
エネルギーの「パルス」は、「光子」としてプランク定数によって示されたことを量子物理学者に知られている。
我々は、通常「光子」について光のキャリヤーとして、考えるが、それはこれらの機能のうちの 1 つだけである。
より重要なことは、原子がエネルギーを吸収するか、リリースするとき、エネルギーは「光子」の形で伝導されるが、ミロ・ウルフ博士のような研究者の確かな学説で知られている唯一のことは「光子」をエーテル/零点エネルギー・フィールドを移動するインパルスであることを我々に思い出させる。
現在、我々はこの情報が幾何学的な構成要素を持つことを知ることができる。それは原子が同じ様にその幾何学を持たなければならないことを示唆する。
4.6 BELL’S THEOREM

4.6 BELL の定理

量子レベルに幾何学があることを明らかにした最近発見されたもう一つの特異現象は、Bell の不平等定理である。
この場合、2 つの光子は、反対方向に放出される。
興奮した別々の原子の状態から、各々の光子が、放散される。
両方の原子の状態は同一の原子から成る、そして、両方とも、同じ率で減衰する。
これは、同じエネルギーの質の 2 つの“ペアの”光子を正確に同じ時間で反対方向に放出する。
両方の光子は鏡のような分極化フィルタを通るならば、理論的にこれらの移動方向は変化しなければならない。
45 度で 1 つの鏡を持つならば、光子が 30 度の角度で鏡に反射したり異なる角度で回転することを当然予想しない。
しかし、実際にこの実験が行われると、鏡の角度の違いに関係なく、光子は正確に同じ角度で回転した！
ミロ Wolff’s 本博士のページ 142 と 143 からの次の引用が実例を示すように、この実験で`

出てきた精度は不安定だ：
完全に 1 つの探知器の局所作用のどんな可能性も除去したうえでのアスペクト Dalibard とロジャーによる音響オプティカルスイッチを使って 50MHz の周波数での最近の実験では、光子の移動の際、偏極化作用の基本設定が変動した。

ベルの定理と実験結果が意味するものは宇宙の部分は、親密な方法でつながっている（我々にとっては明らかでないが）これらの結合が、基本的にある。（量子理論は、基本となるが）
どのように、我々は　これらを理解することができるか？
解答はないが、問題は、次のものによって深く分析された（ホイーラーと Zurek 1983 年（d' Espagnat 1983）ハーバート 1985 年、スタップ 1982 年、ベームとハイリー1984 年、パージェル 1982 年、その他）。
これらの著者は、以下の非局所的な関係の記述について同意する傾向がある：
1. これら別々の場所の出来事が、既知のフィールドまたは物質なしで関係する。
2. これらは、距離で減少しない;
100 万マイルは、1 インチと同じである。
3. これらは、光より、早い速度で動くように見える。
明らかに、これは科学のフレームワークの範囲では、面倒な現象である。

ベルの定理が我々に見せてくれているものは、
エネルギー的に対になった「光子」は、一つの幾何学的な力、例えば四面体、によって実際に結び付けられ、光子は、離れてより大きいサイズに拡大し続ける。
これらの間で幾何学的形が広がっても光子は、互いと比較して同じ角度のフェーズ位置を維持し続ける。

4.7 THE ELECTROMAGNETIC WAVE

4.7 電磁波

アインシュタインが物質が電磁エネルギーから作られると決定した時から、我々の次の研究点は電磁波である。
我々のほとんどが、電磁波が静電的な波と、一緒に動く磁気の波の 2 つの構成要素を持っていることを理解している？。
面白いことに、2 つの波は、常に互いに対して垂直である。
ここで何がおきているか思い浮かべるために、ジョンソンは等しい長さの 2 本の鉛筆をとって、これらを互いに垂直に保持するよう頼む。そして、これらを分離させる距離として、

鉛筆の基本的長さを使う：
図 4.7？
互いに 90 度の 2 本の鉛筆は、均等に離れている。
我々は鉛筆の各々の下に、鉛筆の一番上の各々の先端をつなぐことができる。
こうすると、2 本の鉛筆の間の正三角形で出来た、4 面の物体ができる？我々は、四面体を持つ。
図 4.7 鉛筆の形で示された基本的長さとして静電的であるか磁気波（それは、両方とも同じ高さまたは振幅を持つ）の総の高さを持つことによって、我々は電磁波で同じプロセスを動かすことができる。
ここの図 4.8 では、一緒に、この同じプロセスを使用して線をつなぐ時、「隠された」（ポテンシャル）の四面体が含まれた、実際の電磁波自体がたどる方法を見ることができる。
図 4.8？
電磁波のなかに隠された四面体の関係。
再度科学に忘れられただけで、いろいろな思想家によってこのミステリーが絶えず発見されてきたことを、ここで記載することは重要である。
トム・ビアーデン中佐の仕事は J・マクスウェルが彼の複雑な“quaternion 4 元”方程式を書いたとき、それを知っていたことを厳密に示した、しかし、O・ヘビサイドは後で 4 つの単純な 4 元式にモデルをゆがめ、四面体の隠された“potential”を中で損ねた。
この隠された四面体は、ウォルター・ラッセルによって、そしてまた、後で Buckminster フラーによって発見された。
ジョンソンは最初に彼自身でそれを発見したとき、以前のこれらの進展を何も知らなかった。
4.7 GELL-MANN’S “EIGHTFOLD WAY”

4.7 ゲルマンの八道説”

クオークとして知られている原子を構成する“粒子”を研究するとき、次の謎に行き当たる。
原子構造が突然、粉砕されたとき、
暗箱の中の通常の螺旋を描く「粒子」経路から離れて飛ぶ短い軌跡が、出てくる、これらは「クオークという名前をつけられた。」
これらが最初に解放されたあとこれらの「クオーク」は非常に速く消える。
唯一雲の軌跡だけが本当に探知できるが、これらの動きの幾何学は、慎重に分析され、異なる幾何学的な形の動きが分析される。
誤解を招くような、“color、”“charm”と“strangeness.と呼ばれる
多くの異なる形の各々異なる幾何学的な特性をもつ「クオーク」が、発見された、
マリー・ゲル・マンは、最初に統一されたモデルを発見した

それはこの異なる幾何学的な特性が全てのどのように相互に関係づけられるか示した、それを「八道説と呼んだ。
「我々が見るときれいに、統一された幾何学的な構造は、四面体である：
図 4.9？
ゲル-マンの“quarks.” 組織の八道説” の中の四面体
我々はここで正確に何がわかっているか？
各々の点は、明らかに、異なる「クオークである。
「ジョンソンは原子の内側の四面体の aetheric なエネルギー流が突然、粉砕されるとき、「クオーク」は放出されると、我々に話す。

瞬間的な短い時間に、リリースされた粉砕されたエネルギーの断片はこれらが原子に束縛されたとき、そうだったのと、同じ回転する/幾何学的特性であふれ続ける、しかし、その後エーテルへと非常に急速に溶解する。

人は 1 つの原子を粉々にすることで異なる“quarks”の全ては必然的に見れないが、ちょうど原子が粉々にされる角度がその内部の幾何学的な統一体のどの部分がリリースされたか決定できる。
これは、クオークを特に苦心して研究されなければならなかった理由である。
面白いことに、
cuboctahedro 立方体八面体のような他の「包まれた」幾何学的な振動は、ゲルマンのモデルの中にも同様にある;
この四面体は、彼が発見した 3 つの異なる階層のうちの 1 つである。
再びいうが、主流科学的な世界はゲル-Mann’s 八道説を、使い勝手の便利な幾何学的な組織以外の何物でもないように、それより深い意味はないと、見ている。
この次の抜粋において、ミロ・ウルフ博士は、彼の本の 198 ページから、幾何学が、量子領域で“核の空間共鳴 nuclear space resonances”の構造を理解する鍵かもしれないという事実に言及している：
価値ある結果の判断に関して面白いもう一つの問題は、方法が核のスペース反響を核粒子動物園のグループ理論の説明にマッチするがどうか見ることである。
その理論の名前の 1 つは、1960 年にゲル-mann と Ne’eman によって発見された八道説である。
賢く、回転 spin,同等 parity,、同位元素番号とストレンジネスの番号といったこれらのパラメータを決定するために、いろいろな粒子の幾何学的なグループを使う：。
グループ理論は、空間の反響のような物理的構造をまだ明かにしなかった。
もし関係があるならば、Sr シュレジンガー波動方程式の解決が八道説にマッチする直交する特性を持つと予想することは論理的である。

それは、刺激的な見通しへの試みである。
面白いことに、我々が本のこの部分を終えたちょうどその時、R.B ダンカン博士から連絡がきた。
彼は全く詳細で非常に注意深い仕事をオンラインに発表し、ウルフが言及しているジオメトリーに基づくグループ理論で原子の構造を説明する。
ダンカンは、解決を発表する前に彼の人生の 30 年間この問題に取り組んだ！
4.8 THE ENIGMAS OF “SPIN” AND TORSION EXPLAINED

4.8 “SPIN”の謎とねじれ波の説明

図 4.10？
180 度は、八面体のエネルギー形式の上を進むインパルスに起因する“electrons”の回転角度である。
我々が考える必要がある次の証拠部分は、スピンである。
長年物理学者はエネルギー粒子の“spin”があり移動することを知っていた。
たとえば、「電子」は絶えず鋭く 180 度回転しているように見え、または「1/2 のスピン」が原子の中を動く。
“Quarks”はしばしば移動するとき“”1/3 回転と“2/3”回転するのが見られる。ゲルマンはこれらの動きを四面体と他の幾何学に組織することを許した。
主流の誰も本当にこれが起こる理由を十分に説明してない。
Johnson’s モデルは、上記の図 4.10 に見られるように、電子雲の 180 度“spin”が八面体の動きに起因していることを示す。
実際に 180 度の運動が各々の八面体の 2 回の 90 度変化から発生したと理解することは、重要である。
八面体は、「後方にすなわち 180 度、ひっくり返らなければなりません」
それをとり囲む幾何学のマトリックスは同じ位置のままです。
四面体は、同じ位置を保持するために 120-度（1/3 回転）か 240 度（2/3 回転）回転をしなければならない。
これは、この下の 4.9 のセクションで簡単に説明する。
（ウルフ、クレーン、ギンスブルグと Krasnoholovets のような他のエーテル理論家は、1/２スピン現象を自身のエーテル流体に基づいて説明する。）
またねじれ波の螺旋を描く動きの謎は、この同じ過程で説明される。
たとえどこにあなたが宇宙にいようとも、中に、“vacuum 真空のすき間をあき、エーテルがこれらの幾何学的な形で常に脈動し”マトリックスを作る。
したがって、そのエーテル中を移動するどんな瞬間的インパルスもこれらのエーテルの幾何学的な“fluid crystals 流動結晶体”の側面を横切る経路をたどらなければならない。
このように、ねじれ波が螺旋を描く動きは、それが移動し、通り抜けなければならない単

純な幾何学に起因する経路をたどる。

4.9 THE FINE-STRUCTURE CONSTANT

4.9 微細構造定数

このセクションを単純化するために我々は勤めて働いたが、微細構造定数は視覚化するのはとても難題だった。；

この部分を読むのが難しいなら、この本の本筋”をどれも失うことなく 4.10 セクションの概要にスキップできる。

“matrix”モデルがどれくらい遠くまで当てはまるか見るのを望む人々のために、この部分を含めた。

微細構造定数はほとんど主流の人々が決して耳にしなかった量子物理学の一面であるが、おそらく、粒子に基づくモデルにしがみつく科学的な主流にはそれが全く不可解でじゃまである。

電子雲を、柔軟なゴム・ボールのように、思い浮かべてください

そして、各瞬間エネルギーの（カップルとして知られる)、「光子」は吸収されるか、放出され、まるでそれがはねるように雲が伸びたり収縮する。

電子雲は、常に光子のサイズから、正確な一定の比例関係で跳ね上がる”。

これはより大きい光子を持つならば、電子雲の上での“跳ね上がり”がより大きくなることを意味する、そして、小さい光子は電子雲の上で小さく“跳ね上がる”。

この比例関係は、サイズに関係なく、一定のままである。

微細構造定数は Planck’s 定数のようなもう一つの“大きさに無関係な”数値である。それは測定方法に関係なく、同じ比例を得ることを意味する。

この定数は、分光器分析によって連続的に研究され、非常に尊敬された物理学者リチャード P.ファインマンは、彼の本「光と物質の奇妙な理論の中」で、ミステリーを説明した。

（我々は、言葉“coupling”が単に光子と電子の結合または分離を意味するのをここで再び思い出さなければならない：）

観察された結合定数 e に関係するとても深くて美しい質問が、ある？

現実に光子を発射するか、吸収する現実の電子の振幅 。

それは、実験的に、単純な数で、約 0.08542455 であると決定した。

物理学者はその二乗の逆数としてそれを覚えているのが好きなので、私の物理学者友人は、この数を認めない：

137.03597 の最後からおよそ 2 つの小数位は不確実である。

50 年以上前にそれが発見されて以来ずっと、それはミステリーであった、そして、全ての良い理論物理学者はこの数と心配を彼らの棚に上げたままだった。

すぐに、この数のカップリングが来るところを知りたいはずだ：
それは、π、または、おそらく自然対数の基礎に関連するのか？
それは物理学の最大の誰も知らないすごいミステリーの１つだ：
人は理解出きずに我々のマジック・ナンバーところへくる。

その数字は「神の手」が書いたと、あなたは言うかもしれない、そして、「我々は、どのように彼の鉛筆が動いたか。」知らない ―
実験的にどんな種類のダンスをすれば非常に正確にこの数字が測定できるか、我々が知ったとして、コンピュータでこの数を出させるためにはどんな種類のダンスをすべきか知らないといったようなわけか？ひそかにそれを入力する分けでもななく

[加えられる強調]
Johnson’s モデルにおいて、微細構造定数の問題は、非常に単純に、アカデミックに解決する。
我々が言ったように、光子は一緒に対になった 2 つの四面体として移動する、そして、原子の静電的な力は八面体によって維持される。

単に四面体とこれらが衝突する八面体の間のボリュームを比較することによって、微細構造定数を得る。

我々がする 全ては、球に囲まれている八面体のボリュームになる、球に（円周）囲まれた四面体のボリュームを分割することで、これらの違いとして我々は微細構造定数得る。

これがどのようになるか示すために、いくらかの付加的な説明が、必要である。
（4.3、そして、4.4 図。）我々がこの章の最初に見た「相-波の図 phase-wave diagrams」は八面体と四面体の角度の関係を示している。
物質なしの四面体は完全に三角形なので
三つの頂点が、傾き回転する方法として、
その面は、それぞれ 120 度の 3 つの等しい部分に、円を分割する。
したがって、それをとり囲むマトリックス幾何学とともに、それをバランスさせるためには四面体を 120 度回転させる必要があるが、最初と、同じ位置になる。
これは三角形の車輪の車を思い浮かべると、理解するのが簡単である、車輪が再び十分前と同じに見えるように前に進める。
三角形の車輪の各々は、こうするには 120 度を回転させなければならない。
現在、八面体、はそのバランスを回復するために常に “upside down 上下逆さまに” また

は 180 度回転しなければならない。
あなたが自動車のアナロジーでこれを見るならば、車輪はあなたがカードの床板に見る古典的な“diamond”の形である必要があるだろう。
出発した時と正確に同じダイヤモンドを見るために、180 度、上下逆さまにさかさまに動かさなければならない。
ジョンソンからの次の引用は、この情報に基づいて微細構造定数を説明する：
静的電界を八面体として、ダイナミックな磁場を四面体として見ると、これらの間の幾何学的関係は 180 から 120 度である。

ラジアン・ボリュームで定義された球としてこれらを理解するなら、単に互いを割ってみれば、微細構造定数が出てくる。
“radian volume”は単にその半径からその物の質量を計算することを意味する。それはその物体の幅の半分である。
（これら自身を数学的にテストすることを望む人々のために
単に 180 度のサインと、120 度のサインでそれを分割します、
そして、エネルギーのわずかな損失を説明するためにその数をクーロンの方程式にあてはめてみてください —波動がエーテル中を動くときそれは起こります —。）
2 つの「ラジアン・ボリューム」を互いに分割する、この単純な過程が実行されるとき —微細構造定数が、結果的に現れます。
面白いことに、ジョンソンがエネルギーが 1 から他に移るように、八面体と四面体の関係として微細構造定数を見ることができることを示すとき、ジェリーIuliano は我々が球を立方体へ崩壊させるか、立方体を球に発展させるときに、生じる“leftover 残された”エネルギーとそれがまた見ることが可能なことを発見した！
2 つの物の間のこれらの広がるか崩れる変化は、「タイル張りの計算“tiling,”」として知られおり、
「そして、Iuliano の計算は、実行するのがあまり難しくはありませんでした;

“tiling、”と Iuliano’s 計算が実行するのがあまり難しくなかったので、2 つの物の間のこれらの広がっているか崩れている変化は知られている;

それは、単に誰もそれをためそうとする考えがなかっただけであった。
Iuliano の計算において、2 つの物量は、変化しない;
立方体と球は、彼が設定したようにπの二乗の 8π が質量となる。
互いにこれらにタイルを張るとき、立方体と球の唯一の違いは表面域の量の中にある。
二つの間の表面域の違いは、正確に微細構造定数と等しい。

すぐに、 “どのようにしてそうすることができるのか読者は尋ねなければならない。そして、微細構造定数は八面体と四面体の関係で、そのうえ同時に、立方体と球の関係でもある？”、全てが完全にハーモニックな関係で互いの中で巣を作る時、異なる幾何学的な形が類似した特性を持つことができるということは、“symmetry”な魔法の別の面である。
ジョンソンと Iuliano’の理解で、原子で作動するエーテル的な幾何学的構造のエネルギーを扱っていることが明らかになる。

Iuliano の発見が我々に見せてくれるものは、「円の二乗という古典的な幾何学ということを考えることは重要です。」
これは、長く「神聖幾何学」の秘教的な伝統の中心要素でした、
物質界は、正方形または立方体として見られ、精神的な世界は円または球として見られ、それらの間の釣合いをそれが示すと思われてきました。
これが比喩で暗号化された“隠された知恵”のもう一つの例であることを知ることができる、そう理解すると必然的に、その後の我々の時代の人々は秘密の科学の本当の理解を回復する。
彼らは一旦我々が微細構造定数を発見しても、多分、何をみているか、たぶん理解しないことを知っていたので、この古代の知識は我々に鍵として残された。

4.10 A UNIFIED MODEL

4.10 統一されたモデル

現在、Johnson’s 物理学とその現実的なデータである、ミクロクラスターの科学、準結晶と、ボーズ-アインシュタイン縮合物によって、我々には本当に統一された量子モデルがうまれている。
我々に Johnson’s 物理学が出てきたことで、可能なかぎり単純化され、合理化されるようになったので、科学的にモデルを理解しようとする誰もが本当にその多くのニュアンスを得るためにはそれについてよく読むことが要求される。
それでも、オープンマインドを持つ人々には、我々がここで示したデータは、主張を証明するのに十分である。
キーは、神聖幾何学が常に量子領域の中に存在するということである;
それは、主流が時代遅れの“粒子”モデルに拘束され続けて、この時まで不可解なままだ

った量子物理学のいろいろな変則現象は認知されないままだった。
この新しい理論では、もはや特定のサイズに原子を止どめておく必要はない;
これらは、同じ特性を維持したまま広げることができる。
現在一旦我々が量子領域で何が続いているか完全に、理解するなら、これらが最も効果的に結束させる正確な幾何学的な配置を知る時、とても固くとても軽い材料を設計することができる。
我々はロズウェル事故の残骸の部分が信じられないくらい損傷がないと言われたのを思い出す、それも、これらが傷つけられず、燃やすことができず、どんな形の損害も受けないほど、強かった。
一旦我々が完全に新しい量子物理学を理解するならば、これは、造ることができるタイプの材料である。
我々は、準結晶は熱を保存することが非常に上手で、そのうえ、たとえ関係する金属が通常良いコンダクターであるとしても、しばしば電気を非伝導になるのを思い出す。
同じように、microclusters ミクロクラスターは磁場が一群の内部で自身を透過するのを許さない。
Johnson’s 物理学が言うにはは幾何学上完璧なその構造は完璧に徹底的に結束させ、熱と電磁エネルギーはそれを通り抜けることができない。

その幾何学には、とてもコンパクトで正確な内部があり、そこには分子の中を通る流れのための、文字通り「部屋」がない。

我々に量子物理学の比較的完全な aetheric なモデルがある今、そのような幾何学的な力が、サイズの大きいスケールでもグローバルグリッドとして知られる形態で前の影響を持ち続けるか、見せる準備ができた。

この情報の多くは前の章で検討したが、それにもかかわらずもう一度それを書くことは重要である。
量子の幾何学とマクロの幾何学の重要な関係を確立して、存在とこれらの新理論の重要性を事実上証明し、我々がこの時点まで議論した原則の全てに基づく宇宙の完全に新しいモデルを詳細に描写するために移ります。
第 6 章は主にこの新しい宇宙論的モデルを説明することに集中し、第 7 章は活動中のより特別の、観測できる情報を組み入れた新理論を示す。
ホーム | インデックス | 次

参考文献：

1. Besley, N.A., Johnston, R.L., Stace, A.J. and Uppenbrink, J. Theoretical Study of the Structures and Stabilities of Iron Clusters.
1. Besley、N.A.、ジョンストン、R.L.、Stace、A.J.と Uppenbrink（構造の J.理論上の研究と鉄一群の安定性）。
School of Chemistry and Molecular Sciences, University of Sussex, Falmer, Brighton, BN1 9QJ, United Kingdom.
化学と分子の科学学部、サセックス大学、Falmer、ブライトン、9QJ BN1、イギリス。

http://www.tc.bham.ac.uk/~roy/Papers/fecpap.ps
2. カーター（バリー）　Carter, Barry.
ORMUS and Consciousness.
ORMUS と意識。
YGGDRASIL:
イグドラシル：
The Journal of Paraphysics.
心霊物理学のジャーナル。
1999.

http://members.aol.com/yggdras/paraphysics/BCarter.htm
3. カーター（ジェームズ）　Carter, James.
Theory of Absolute Motion.
絶対運動の理論。

http://www.circlon.com/
4. Feynman, Richard P. The Strange Theory of Light and Matter.
4. ファインマン。リチャード P、光と問題の奇妙な理論。
5 フラー（Buckminster.）. Fuller, Buckminster.
惑星計画。Planet Planning.　1969 年
6. ゲルマン（マレイ）　Gell-Mann, Murray.
The Eight-fold Way. 1960.
八道説。1960 年。
7. ハートマン（キャロライン）　Hartmann, Caroline.

Max Planck’s Unanswered Challenge.
マックス、プラント　答のない挑戦。
21 世紀科学とテクノロジー誌、第 14 巻、No.2、夏 2001。

21st Century Science and Technology Magazine, Vol. 14, No. 2, Summer 2001.

http://www.21stcenturysciencetech.com/
8. ジョンソン、ロッドとウィルコック（デイビッド）。 Johnson, Rod and Wilcock, David.
Conversations on Sequential Physics.
連続した物理学の会話。
2001 年.

http://www.ascension2000.com/sequential1.htm
9. Mehrtens（マイケル.）Mehrtens, Michael.
Definition of Microclusters.
Microclusters.の定義

http://www.subtleenergies.com/ormus/research/research.htm
10. Sugano, Satoru and Koizumi, Hiroyasu.
10. 菅野、サトルとコイズミ（ヒロヤス）。

Microcluster 物理学：

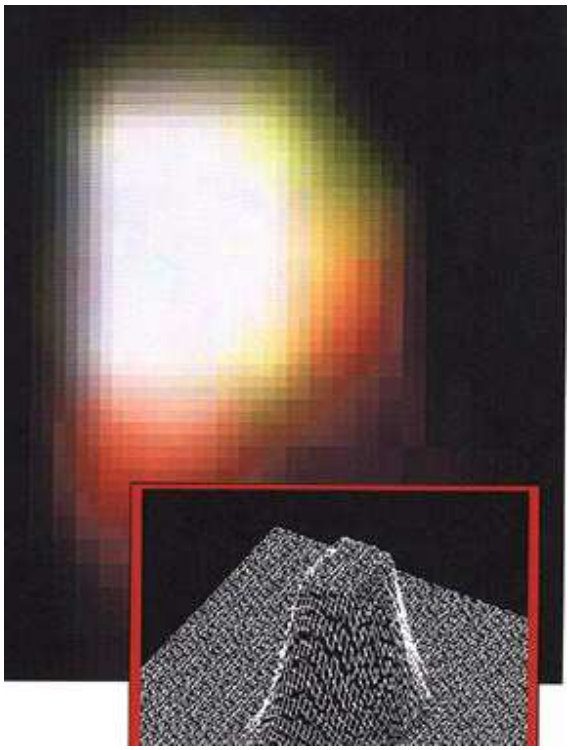
第二版。
Springer-Verlag, Berlin Heidelberg New York, 1998.
シュプリンガー出版、ベルリン・ハイデルベルク・ニューヨーク、1998。

ISBN 3-540-63974-8
11. ウルフ（ミロ）Wolff, Milo.
Exploring the Physics of the Unknown Universe.
未知の宇宙の物理学を調査すること。
Technotran Press, Manhattan Beach, CA, 1990.
Technotran プレス、マンハッタン・ビーチ、CA、1990 年。
ISBN 0-9627787-0-2。
http://members.tripod.com/mwolff

第 5 章：

LARGE-SCALE GEOMETRIC ENERGY FORMS

大規模な幾何学的なエネルギーの形



原子の集まりが結合し量子レベルで幾何学的な構造を生みだし、個々の特性がもはや見られない大きい全体になるのを許す、力の存在を見た。
ロッド・ジョンソンとその他の発見で、これらの力の存在を説明するための統一された量子モデルがある。そして、現在の量子論（例えば Planck’s 定数の意味）の中に存在すると知られている全ての未処理事項を関係づける。
我々のこの章の目的は、本当に統一された aetheric なモデルで、全てのサイズのレベルでこれらのエネルギー構造が同じ構造と動きを示し続けることである。
我々の議論を Hessdalen（ノルウェー）の Massimo Teodorani 博士と同僚による “熱性プラズマ thermal plasma” 構造の反復される現象の、研究を見ることから始める。
我々はそれからねじれ-波エネルギーが噴出する地球の幾何学的グリッドに関して、情報の再調査へ移動する。そして、そのほとんどは我々の前の 11 章においてカバーされた。

5.1 EARTH PLASMA FORMATIONS

5.1 地球プラスマ構造

2001 年 11 月 17 日、研究者でラジオ・パーソナリティのリンダ・ムールトン・ハウは、マッシモ Teodorani 博士の Hessdalen（ノルウェー）の谷で見られた変則的なプラスマ構造に関する調査についての独占的なレポートを発表した。
ハウは、最後の 10 年間を通して、多くの目撃者が観察し、報告したと書く：

…flickering 明滅と、脈動はその形の変化に点火する。
1990 年代に、ノルウェーのエンジニアは、二回光を調査した。
しかし、ノルウェーのエンジニアにイタリアの天体物理学者がレーダー、写真、ビデオテープと分光器で共同の研究室において加わったとき、この 2001 年 8 月の調査はより重大になった。
結果は、2 つのグループに分析することができる：
95%は熱性のプラスマである、そして、5%は未確認の固い物である。
プラズマは長波のラジオ周波数を発する、そして、不思議なことに、サイズまたは明るさの変化によってこれらの温度は変化しない。

ハウは、Teodorani ほかの.調査の概要から引合いに出して続ける：

1. 大部分の明るい現象は、熱性のプラスマである;
2. 光のボールは、一つの物でなく、共通の重心のまわりで振動している多くの光いの構成要素から成る;
3. 光のボールは、より小さい光のボールを放出することができる;
4. 常に;光のボールの形は変化する
5. 光のボールの光度増加は、 放射している領域の増加によるだけである。

放射が発される原因と物理的メカニズムは、現在知られていない。
我々が上記のリストに見られるように、microcluster と同じように特別の特徴を持つ形を持つ;
すなわち、球状エネルギー・フィールドに一連の「多くの小さな構成要素」を持つには、(例えば microcluster での原子のように)「共通の重心のまわりで振動することである
「Erling Strand 博士によると、これらのプラスマ構造は、最高 2 時間見えるままであることができた、これは明らかに球電の短命な現象とは異なる。

我々がそのデータを処理すると共通の重心のまわりで多くの小さな丸いい光が振動することを知る。

それは物体の中心を回っているボールあるいは、ミニ・ボールを放出する中心の何かの力である。
それは、全く複雑である。
次の引用は、ドミートリーブほかの自然な自己発光性の形成に関する研究では理解されない事実を確証する。つまりこれらのプラスマ構造が大きなサイズのレベルでもミクロクラスターと同じ基本的な幾何学的な原則に従って動くことが可能だという考えと正確に合致

する。

ここでは、リンダ・ムールトン・ハウは“LMH として、Teodorani 博士は“MT として略して引用する：
この抜粋の中の強調を加えた”：

MT：
そして、これらのプラスマがいくつかの形をとることができる変化の相の経過を、我々も確認した。
時々は、幾何学的な形にもなった。
LMH：
幾何学的な形もあったのですか？
MT：
はい。
時々は、幾何学的な形にもなりました。
その理由はわからない、しかし長方形のような何かを見た。
それは、突然、不定形のプラズマから長方形に変わる。
それは一時的に起きたのを、我々は確認した、それは私の論文（EMBLA 2001）の中にある：
光学の問題だ。
LMH：
あなたが何か丸いプラスマの球のようなものを、見ていたが、突然長方形に変わったのか？
MT：
確かにそうだ。
最初は、それはビデオ・カメラのような一種の器械の影響かと思った。
後で、もし同じ現象を撮ったビデオと、この同じ現象の写真とを比較していなければ、これらは、同じものだと理解しなかったろう？
すなわち、プラスマなのだろうか？
その幾何学的な形にもかかわらず我々が光の分布とスペクトルを見ることで特定の分析と研究ができる。
我々は、それがプラスマであることを理解する。
しかしそれは奇妙ではある？プラスマ現象は説明することができるが、何がそれを引き起こすか主な理由が、まだわからない。

LMH：
そして、今までにあなたを含めて他のどの天体物理学者も誰もこれまでにプラスマ相互作

用と変換のこの種類を論文化しなかったと言うことは、正しいか？
MT：
いや（我々ではないが)…私は、一部の天体物理学者が無定形の光のボールを光の現象として理解したことを知っているが、今年我々が見たのが最初である。
LMH：
そして、なぜこれらが熱性プラスマであると科学的なあなたの論文の中で結論するのか？
MT：
理由はもしも私がスペクトルを必要とするなら流体の波長のスペクトルを分析すると、そのスペクトルは、イオンと電子の混合を表す典型的マックスプランク・カーブに似ているそれは、非常にはっきりと言える。
そして、我々は、温度も測定し、このケースでは温度は太陽の温度より高い 6,500 のケルヴィン度あった。
この形の写真は Howe のオンライン作品で特集され、はっきりと幾何学的状態が見える;
それはビデオテープと同じに従来の写真でも両方とも捕らえられたのを思い出す。
このインタビューで Teodorani 博士はこれらのプラスマは測定温度の変化無しで、突然、サイズが変化することができたと話す。そして、それは確かに従来の物理学の見方では変則である。
我々の理論で、プラスマの寸法が減少して、行方不明のエネルギーが aetheric なエネルギーの高い密度に位置がずれることを知っている。
それは、プラスマの温度が変わらないという理由である;
プラスマの一部は、単に我々自身の物質の aetheric な密度の外に出て行った。
しかし、それはレーダーのような特定の器具と我々の感覚器官によってはまだ見つけられない。
さらに、アーリン Strand 教授の仲間の Teodorani は、可視性と不可視性の間を行き来するプラズマ現象のラジオ波の軌跡およそ 34 本を捕らえた。
レーダーはプラスマの位置と速度を示す、しかし、肉眼はその存在を見つけられなかった、そして、可視性と不可視性の間の転換はほとんど瞬間的であった。
可視性のこの急転は、見えなくなるとき、プラスマのエネルギーが aetheric なエネルギーの高密度に、置き換わったという証拠を追加しただけである。
二次的証拠はプラスマが消えると 100K 以下まで温度が、突然、落ちる。全て 2 分の 1 未満になることが可能なのだ。
[6]そのような急速な温度変化は明らかに、熱力学の従来の法則に従わってない？プラスマは 1 分で次の状態にうつる”
図 5.1（球から矩形のプラスマ構造に変わった後の拡大写真）
目標物のピークの強度と、ピクセル数の、明瞭な測定を同時にするため使われる。三次元点分布機能（PSF）として使われる

日付：2001 年 8 月 18 日。
M. Teodorani.による画像処理
Teodorani 博士とリンダ・ムールトン・ハウのインタビューで、彼女がイングランドで、赤外線の範囲を通して見えるだけのプラスマ構造に接した自身の経験を報告し、プラスマ球、不可視性と幾何学的な構造の間の関係に更なる支持を加える：
LMH：
そして、それはイングランドで少なくとも年間で 12 の私自身も含む目撃報告と、一致している。そして、私が見ることができる赤外線の範囲を通して、光の卵形のように見えたものが脈動した光の正方形に変わる。
私は他の人々と一緒にこれを見た、我々は赤外線スコープで見ることができるだけで目でそれを見ることができなかった。
[加えられる強調]
リチャード Pasichnyk の「生命の広大さ（第 1 巻）の第１１章に報告したように、そのようなプラスマ構造はたいてい何らかの強化された地球物理学的活動に関係する。
このタイプの最も変則的な一回の出来事のうちの 1 つは（日本の）丹後で 1930 年 11 月 30 日に報告された、我々は冒頭の文の後に注を加えた：
晴れた、雲のない朝空に変な虹が見えた。それは、注意をひいた。
[注：
この虹は、その地域で aetheric なエネルギー・フィールドのローカル歪曲に起因したように見える。このように、可視光がスペクトルに分解する原因になる。]
季節外れの、これまでに見たどれとも、違う、ユニークな、出来事は自分の多数の記憶にしっかりとうめこまれた。
次の朝、轟く音とともに、地面の揺れが来た。
閃光と、青っぽい炎とオーロラのような残照のきらめきの反射を見、畏敬の念にうたれた顔と目で、人は天を仰いだ。
地面が揺れたところに、あきれるほどの明るい光（火の玉）と漏斗形の光、輝く動く柱が、来た。
万福寺の方に、かなりの輝きをもって回転するまっすぐな列の丸い輝く物質が、見ることができた。
[加えられる強調]
このような出来事は、大部分の人々が信じるほど、珍しくない;
これらは、単に集約されておらず、従来の形の科学的なデータとして普通のプレゼンテーションで報告される。
Pasichnyk と Aleskey ドミートリーブ博士は、地球物理学的活動が増大した時に報告された「UFO の目撃数の確実な増加の兆候の研究を引用する。
Pasichnyk は、M.A.パーシンガーと G.F、Lafreneiere によって 1977 年に書かれた本のこ

とを指摘する、それは、地震と UFO レポートとの関係を米国の地図とグラフで示した
1820 年と 1971 年の間で、両方の現象は、同じ時間と同じ地域で「全く同時である」のが見られる。
[9]それゆえに、明確な証拠から(この場合は地震だが)、考えられることは、これらのエネルギー的なプラスマが地球の中心から直接放出されており、したがって、地球の芯が作られたのと同じ材質でこれが出来ている事を示している。
このように、我々は地球の中心が太陽に見るエネルギー的プラスマと同じ形から成るという Pasichnyk の主張と同じ見方といっていいか？そして、これは Teodorani ほかの測定がなぜプラスマが太陽表面と同じ温度を持つかを説明する。
以下の 2 つの章において、惑星が太陽から実際に放出された物質であって、したがって、太陽と同じ基本的物質から作られているという証拠を提示する。
本当に、統一されたエーテル的な宇宙論において、前章において議論したように、全ての物質は超伝導ボーズ-アインシュタイン縮合物プラスマの形の幾何学的な特性をもつものとして始まる。そして冷える前に、個々の原子と分子が分離し、結晶する。5.2 PROOF FOR EARTH’S LUMINOUS PLASMA CORE

5.2 地球の芯は輝くプラスマであることの証明

Earth’s プラスマ芯の大部分のケースは我々の前巻において提示した、しかし、我々はこの重要性のために再び重要な多くの事実をここで繰り返す。
大部分の教養のある人々は、地球の最も熱い領域が中心にあることを知っている、
そして、それは、徐々にクールダウンし段階的に連続した層を通って外層として知られている球の外部の上の最も冷えた領域に最終的に到着するがその前は、それは、硬質層または lithospheric 光の球の段階である。
それを覚えていることは、また、重要である
地球の外皮は、他の地球の質量と比較してそれほど薄い
もしも地球を、1 杯の水の大きさに例えると、
水の表面の表面張力で生まれる濃度と厚さを持つ、外皮が、地球にもあるだけである
これは、実際には“solid 固形”物質が地球上にほとんどないことを示している。
従来の地質学者は、地球の芯が鉄とニッケルから成ると思う。
優勢な“dynamo ダイナモ”理論では、この金属的核は、地球内で回転して、順番に地球の磁場をつくる。
おそらく、この理論が人気がある最も強い理由は、人が磁場の伝導を鉄のような金属に要求するのが適切だという信念である。
しかし Schappeller、サールと Roschin とゴーディンを含む非常に多くの研究者は、磁場が白熱する aetheric なプラスマ・エネルギーの縦波だけでつくられることが可能なことを研究所で、実演した。

本当に、地球のまん中の形態の全ての“証拠”は間接的で、地震の時、つくられる地震インパルスの研究から、主にもたらされている。
前章で説明したように、横から横に移動する波は（Ｓ波または横波として知られている)、地球の芯を通り抜けることができない、そして、これによって芯が固いと、人は予想する。
Pasichnyk は、圧縮したプラスマ・エネルギーでできていても、Ｓ波は地球の中心を移動できないと指摘する。
従来の科学は地球を不活発な質量とみなし、プラスマの芯であるという考えを即時に拒絶し、またエネルギー源が継続的なエネルギー入力を必要とするために、プラスマ・モデルは通常すぐに抹殺された。
しかし、物理的物質をたやすく通過できる引力とねじれ-波が、aetheric なエネルギーの形で絶えず地球に流入していることを一旦理解するならば、地球の中心のプラスマ源を補給するエネルギー源が保障される。

磁場と同調して、大多数のねじれ-波エネルギー的活動は、地球の極で起きている。
我々は第 1 章に書いたようにコズイレフが北極の近くで最大のねじれ-フィールド効果を見つけたのを思い出す、そして、Pasichnyk はまた、我々に他の形態の証明を提供した。
たとえば、
地震波は、地球内部の南北軸に沿って、西軸より速く移動する。
前の章において議論したように、他の観察でもエネルギー的な活動が極地域から地球の芯に向けて本当に加速する事実を示している：
1. 磁気と太陽の活動と関連するオーロラ的活動。
オーロラまたは“北極光、”は極地の上に通常見られる発光エネルギー体である。
Sun’s 活動が増加するとき、オーロラはより明るくなる、そして、オーロラも地球磁場と正比例して変化する。
このオーロラは、活動中の流入エネルギーを見せてくれる。
2. 極地のカーテン形のオーロラ。
オーロラの形を研究することから、超細長い、じょうごのような、電子と陽子の螺旋形のエネルギーの渦を知る、地球の極地の地域から、輝度の高いレベルで螺旋を描いて降りていくのが見られた。
3. 地球の芯は、金属的磁気としてはあまりに高温である。
金属は特定の重要な温度より上では磁場を維持できない。それは、キュリー点として知られている。
しかし、従来のモデルに反して、地球の内側の温度は、非常に速く上がるとわかった
そして、我々が掘って穴をあけるように、100 キロメートルまたは 62 マイルだけでもスムーズな増加を続けるのを、グラフの上で推論するが、地球の中の温度は、金属が磁場を生

むにはあまりに高い。
4.日食での磁気と重力の変則。
日食の間、地球磁場は弱められる、そして、この影響は移住する鳥を混乱させるのに十分である。
振り子のいろいろな研究からも、重力場はまた、日食の間、変化する。
これら両方の観察で、太陽のねじれ-フィールド放射と、エネルギー的『粒子』の流入によって地球が絶えず『供給されている』ことを示す。

5. 地球磁場の傾き。

地球の芯が回っている金属的発電機であるならば、その磁場が回転の軸に合わなければならないと予想する。
しかし、磁場が回転軸からおよそ 11 度外れているから、発電機モデルは十分でない。
6. 太陽の活動と 1 日の長さの変化。
地球上の 1 日（LOD）の長さは、地球がどれくらい速く回転しているかの、基準になる。
LOD と太陽の活動レベルの関係は、明確な相互関係が示され、確立された。
これは、発電機モデルでは説明できない、地球と太陽との間の直接的エネルギー相互作用を示している。
7. 太陽の活動に対する地球磁気の変化。
太陽の活動も、地球磁場の方向と強度を変化させることができる。
地球の内側の巨大な発電機がそのような外部の変化に影響を受けることは、とてもありえない。
8. 極地の反転、ゆらぎと移動。
地球の磁場に、発電機モデルにあわない一連の動きがある。
「チャンドラー揺動」として知られている円形のパターンを、極地で絶えず描く、
そして、磁場は極性の完全な反転と同様に突然の「ジャーク移動」を経験することができる。
（地球中央の流れるように動くエネルギー源は太陽の変化にとても敏感なので、地球の芯が多量の金属の固体であるという考えよりも簡単にこれらの変則を説明する。
9. 形成的な力としての重力の役割。
我々のモデルでは、重力は各瞬間地球へのエーテル的なエネルギーの動きでその内部の物質とエネルギーをつくっている。
一旦我々が 2,700 キロメートルまたは 1,678 マイルより深くなるならば、
重力の大きな度合が、中心から放出されるより中心の方向に向いている。

これは、Earth’s 地球の芯の形成での重力の役割を示す。（Biefield-ブラウン効果がマイナ

スの電子雲が明らかにチャージされた核の方へ突進することを示すのと似ている）

一旦流入エネルギーが地球の中央に収束するならば、その一部は逆に外へ流れ出る。そして、この重力変則をつくる。

10. 地球から出て来ているプラスマ風。

NASA’s 力学探検家宇宙探査機は、プラスマ風が極地への風の流動に加えて地球極地から発散しているとした。

これはこれらの地域はエネルギーの入口と出口の 2 つの性質をもち、両方が起きていることを示す。そして、それは引き続いて起こる章においてより深くカバーされる。

5.3 WILCOCK’S AETHERIC EARTHQUAKE MODEL

5.3 WILCOCK’のエーテル的地震モデル

上記の全ての証拠に基づいて、原子のエーテル的なモデルとしての球面円環(トーラス)体と大規模なプラスマ構造（例えば地球の核）は著しく似ていることが明らかに理解できる。

Pasichnyk と他の多数は、太陽活動の増加は地球の地震の総量の増加と強度に強く関係していることを実証した。

一旦これらの地震が起きると、同様にしばしば変則的なプラスマ構造が観察される。

この概念に対する更なる支持は地球の geophysically 地理学的に活発な領域の上で、レーダー・オペレータがしばしばまぎらわしい信号を受け取る“radar angels レーダーエンジェル”の現象に見られる。

現在の大部分のレーダーはこれらの外へ出てくる信号を映しだす能力がある、それは大部分は地震によって活発な地域の中の地球から、絶えず放出している見えないプラスマ球に起因する。

それでは、地震とは正確には何か？

我々はこの本を通して提示される証拠と情報に基づいて、仮定として以下を示す。:

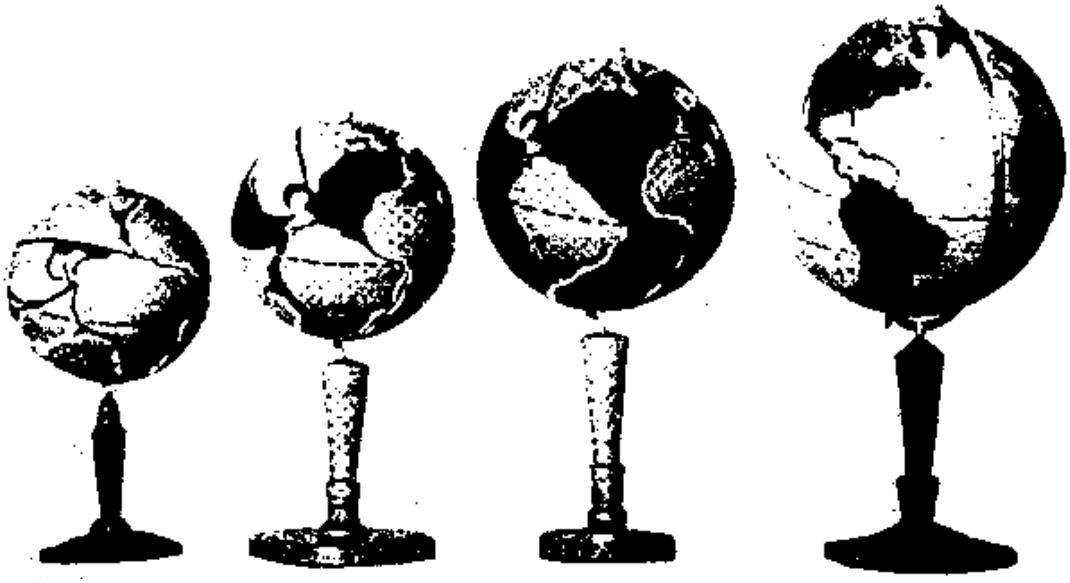
- 我々は後で議論するように太陽面暴発または他の源から、突然の出来事で、例えばエネルギー的な活動の波が起きたとする。
- この波は、地球の中心核に急にエネルギー量流動を増やす。
- それによって芯の中の発光プラスマの総量は、増加する。
- しかし、地球を囲む、プラスマを含む圧力は減少せず、特別の高い量のエネルギーの圧力下に圧縮されたものはどこにも行けない

-単純な aetheric な物理学に基くと、エネルギー波が十分に高いならば、この突然の圧力増加はより高密度の aetheric なエネルギーに、プラスマの一部を置換するよう圧迫する。

- 一旦プラスマがより高い密度に達すると、現在我々が測定する地球の形を作っている密度の物理的物質を簡単に通りぬけることができる
- この点で、プラスマは地球の中央の大きな圧縮力に、もはや含まれず、遠心力を通して地

球の中心から立ち去ることができる。
-水の表面で油の多くが沸騰するように このプラスマが、地球の表面でそれ以上の密度状態の方へ沸騰する。
圧力は常に高いところから低いところに流れるので、プラスマは自然に地球の表面近くのエーテル的エネルギー密度が最も低い領域の方へ進む。

-



- 真
空の空間は、固体に比べて密度はほとんどない、 したがって、aetheric なエネルギーの密度は非常に低い。
- したがって、地球の皮の比較的真空に密閉された隙間に、周囲の固体に比べてほとんど密度がない aetheric なエネルギーがある。
転移したプラスマは、そのような隙間に自然に引きつけられる。
- 一旦プラスマがこの空間に着くと、圧力は軽減され、地球の芯を支えているオリジナルのプラスマ状態に一部は戻って置き換わる。
- しかし現在の、温度が非常に低いと、プラスマの一部は突然、冷える。
- プラスマが突然、冷えると、それは新しい物理的物質に結晶する。
- この新しい物質が、割れ目の端に沿って全く突然に、できる。
- 水が氷に結晶するとき、大きさが膨張することを思い出す。
物理的物質にクールダウンし（相が転移)、するので、似たようにそのプラスマの量が増加する。
裂け目の領域にこの新しい物質がつくられ、周囲の大陸部分を押す時、大きな爆発的な力が放出される。
新しい物質の生まれた量が断層線に沿ってずれを引き起こすのに十分大きいならば、地震

が引き起こされる。
多くの場合、プラスマの一部は、高密度状態のまま、地球表面から続けて出て行く。
-このエネルギーが大気を通過するとき、可視的に十分低い密度を動くか、その低さでは動かないかである。

- プラスマが高密度ならば、見えない“radar angels レーダーエンジェル”がつくられる。
- プラスマがその最初の密度に移動するならば、“plasma formations プラズマの形”が観察されるかもしれない。
-ノルウェーの エールリングストランド教授が、観察し、撮影したように プラスマが反響し、2 つの隣接した aetheric な密度のレベルで動く、「揺れている」状態ならば、可視性と不可視性の間で出たり入ったりするだろう。
確かに、地震発生と表面運動の圧力の従来のモデルはこの要因の中でみなければならない;これは、突然の急転を発生させることができる要因である。
この新理論は、“kimberlite パイプの現象が理解可能にする、”とドミートリーブ博士と V.L Dyatlov.博士の両方が言った。
現代の地質学の大きなミステリーと考えられる、この現象が主にロシアと、アラスカで、観察された。
最初、地震学者は地球表面の近くで突然の爆発と熱波を観測した。
爆発が起こった地域が表面に十分に近いならば、穴をあけることができ、調査することができる。
[場合によっては有能だったエスキモーの人々は自己流に手掘でこの領域までいった。]
細長い中空のチューブが、爆発のサイト裂け目に発見された。
面白いことに、有益なことに、チューブの内部は、完全にダイヤモンドで覆われていた！
通常、このようなダイヤモンドと他の結晶がつくられるのに数千年の数えきれない年月が必要だと思われる、しかし、この場合は、瞬間的にできたように見える。
我々が Krasnoholovets 博士その他の仕事を研究するとき、我々の第１０章には多くの意味が出てくる。そして、博士はこれらがねじれフィールドにさらされたどんな物質も、自然に強い硬度で結晶化することがわかった。
ねじれ-波を生成する装置にさらされた金属はかなりの強度で固くなり、これら特有のフォームで結晶化した、そして、ねじれフィールドはまた、水と他の合成物において microcluster 構造をつくることができる。
それゆえに、プラスマ構造は、ねじれフィールドの瞬間的な照射で非常に高い強度をもつ幾何学的な結晶に圧縮することできる。
明敏な読者は、この地震モデルにもう一つの帰結があるのを理解するだろう。
この理論で、突然のエネルギー増加の波が地球にくるとき、プラスマは高い密度に押し込まれ、芯から逃げ出す。

この転換で、新しい物質がつくられ地震が引き起こされる。

しかし、また、芯でゆっくり、規則正しくエネルギー増加が起こるならば、高い密度に置き換わることなしに芯の全ての大きさが徐々に広がることがあり得る。
これは、地球の全体的な大きさを序徐に増やす。
我々は前章でミクロクラスター、準結晶とボーズ-アインシュタイン縮合物で知ったように原子が単一の特性を保持した大きな一群に集合可能な量子モデルを提案したが、これと地球規模の出来事も確かに一致する。
このキーは、十分なエネルギーがこれらの構造に加えられるとき、この大きさは広がり続けるということである。
Microclusters は、個々の原子として始まりそれから、結合して大きい、:結晶のような形に「溶ける」。
これらのユニークなホログラフィックに統一された原子が個々の特性を保持しない構造を維持するならば、他の結晶のように時間とともに準結晶は、発達を続けることができる。
、ボーズ-アインシュタイン縮合物（超伝導体）はまるでそれが一つの原子であるようにふるまい続け、また新しいエネルギーの追加によってサイズが膨張することができる。
我々の理論では、宇宙の全レベルのサイズでの、全ての基本的構造は、この同じエネルギー的な原則に従って機能し、より大きい量のエネルギー流の中に拡大することができる。
したがって、地球の芯は新しい aetheric なエネルギーによって絶えず補給され、有機体の成長で起こるように絶えず大きさが非常に成長する。
この予測は、“Global Tectonics 拡大テクトニクス.”の科学に現実化される

5.4 GLOBAL EXPANSION TECTONICS

5.4 地球拡大のテクトニックス

1933 年に、クリストファー・オットーHilgenberg は、地球をその現在のサイズの 55-60 パーセントまで、縮小するならば、図 5.2 で見られるように、全ての大陸がジグソーパズルのように一緒に結合されることを最初に示した。
彼は、これが地球の大きさが拡大していることに起因しているという大胆な提案をした;
過去の一時は、本当にそれは現在の地球のサイズの 55 から 60 パーセントであった。
我々がこのテーマで、見つけた最も精密な記事は先に引用したようにジェームズ Maxlow [7]である。
確かに今日の大学教科書の中にこの新理論はないが、長年にわたって静かにこの支持率は増えている。
地球拡大のシンポジウムは（1981 年に）オーストラリアのシドニーで開かれた、そして、スミソニアン協会は1989年に座談会を主催し全世界の地殻構造のモデルに関するこれらの

概念と他が議論された。

Maxlow が書いたように、
[スミソニアンの会合での]これらの議論はプレート地殻構造の理論は疑わしい何かがあることを示した（Kremp（1992））
そして、プレートテクトニクス/の現在の概念と、大陸移動説/極移動は再評価されるか、修正されるか、または否定される必要があることが示された（Smiley,スマイリー（1992）。）

図 5.2？
Hilgenberg の「拡大する地球」モデルである「小惑星 terrella」理論。
最小の地球は、現在の 60%の半径である。
（ヴォーゲル（1983 年）から）
プレートテクトニクスまたは、大陸移動説/ ”モデルは、主流科学者の間で主流である。
このモデルにおいて、地球はその全ての寿命を通して恒常的なサイズを維持し、
そして、すべての大陸は「パンゲア」と知られているのと同じくらい同じ巨大な質量として始まった。
結局、この大陸のいくつかの部分にひびが入り、その割れ目は火山活動の領域であった。
これらの火山のたくさんの峰に沿って新しい溶岩が放出され、その後海のそばで冷やされ、本来の大陸と異なる一画は、ゆっくり互いを押しのけて、現在の位置になった。
しかし、地球サイズが変わらないことが至上命令だとしてこの「漂流」が起こるならば「上昇には、降下がなければならない。」
多くの科学理論の中からみると、新しい層が絶えず形成される「上昇する造山運動」の地域が、あるとするなら、おおいに後退して、再び融解した状態に溶ける地球の外皮が沈む「除去される地帯」がまた、なければならない。
Maxlow が指摘するように、このモデルは重大な、重大な欠陥を抱えている：
“subduction zones「除去される地帯」”の決定的な証拠は、地球上でこれまでに発見されなかった。
さらに、
プレートテクトニクス・モデルの要求より、除去地帯の存在可能性は、はるかに少量である。
あるいは、もっと簡単にそれを置くべきなのか、
我々は、観察されたデータで簡単に地球の拡大を示すことができる、
しかし、我々には嫌疑のかかっている除去が同時に、起こっていることの証明手段がない。
データの不完全な集合に基づき、Maxlow は、 “plate tectonics”モデルの終結を言続ける：
たった今[2001 年に]、地質学的地球物理学的データベースは、挑戦され/、あるいは、放

棄されるべきどんな地球的な地殻構造上の仮説でも、自信をもって量を定めることができる段階に達しており、地球の拡大地質学は、地球規模でデーターを示すことで現実化されなければならない。

現在の手元の新しいデータで、“plate tectonics”モデルは、廃棄することができる。
しかし、Maxlow と他の情報源によれば、主流の科学的で地質学的コミュニティが地球拡大理論を受け入れない理由に 2 つの主な理由が、ある：
現在の量子物理学の理解では「想定できない」物質が、存在すること。
地球拡大プロセスを時間とともに正確に再現する数学的なモデルをつくるための必要な証拠は、存在するようには見えないこと。この 2 つである。
この本で議論した量子モデルで、最初の点は事実上除去され、そして、第二点のために必要な支えとなる証拠は Maxlow が提供した。
ますます、地球の地球物理学に関する情報が得られ、地球拡大理論はその信憑性においてさらに強化されるだけである。
新しい地図の
海底地域に見る広がる速度と方向のパターンにみるように地球は、「始生代期間]から現在へと指数的に拡大している
そして、Maxlow によって、この結論を支持する地図とイメージは、彼の論文に示されている。

Maxlow の数学的なモデルに基づくと、地球は毎年におよそ 21 ミリメートルの率で、サイズが広がっていなければならない。
そして、本当に、
1986 年、ケアリーは、衛星レーザーを使って地球半径がプラスマイナス 8 ミリメートル、変動し毎年 24 ミリメートル広がっていると思われる測定をした。
Robaudo とハリソンは、1993 年の VLBI と SLR 測地学の測定を使って地球が毎年 18 ミリメートル広がっていると結論した。
この観測された地球の拡大の従来の説明はちりと隕石の継続的な流入に起因するとしている、しかし、むしろ海と海底の拡大の直接のデータの集合に基づく Maxlow の計算と、完全に合致する。
ロシアの他の科学者は地球の地質の歴史において特定の時代にそのサイズが急増すると結論した、そして、これは Maxlow の毎年 18-millimeter の拡大の代わりに、Robaudo とハリソンが 21 ミリメートルの数値を計算する理由になった。
この理論がとり上げる明らかな問題は、次である：
全ての大陸が一度地球の外面の一部で一つならば、我々はどこに、海を置くのか？
Maxlow はこれらの初期の時代に、地球表面に全体に少量の水があったことを示唆する、そ

して、“shallow epi-浅い大陸と海”は現在大陸であるいろいろな領域を覆っていた。
地球の上の本来の外皮は、おそらく太陽から離れて融解し押し流された状態が減少し冷却した結果出来上がり、厚みが特定のレベルに達した、だがその時地球が広がり続けたので、新しくできた外皮は、非常に薄くなっていった、そして、このような高さに、下がった。
大陸が分離して壊れ始めて、これらの浅い epi-大陸海はすっかり空にされ、低い高度の割れ目に、初期の海が作られた。
これから、もう一つの疑問が出てくる：
「元々そこにすべてがないならば、海の中の全ての水はどこから来たのか？」
地球は、aetheric なエネルギーの継続的な増加によって、大きさが「発展する」
それは、太陽と他の源から受けている。

地球の大きさを増大させる同じエネルギー的なプロセスはまた、大気圏で連続的に新しい水素と酸素分子をつくっている。そして、密度を厚くしている。
それから水素と酸素は海に空から雨のように流れる大量の水を作るために一緒に結合する。そして、地球の外皮で塩と混ざる。

面白いことに、我々が前章において、ガス惑星が全く地球サイズの岩の芯を持つのが見られることを実証したので、地球が太陽から離れて遠くに漂って、結局また、ガス惑星になると考えられる。
第 8 章で、新しい変化が地球の空気と火星のような他の惑星においても発見され、新しい空気の作成が進行中の処理であることの Aleskey ドミートリーブ博士の証明の、証拠を我々は調査する。

5.5 RADIAL, GEOMETRIC EXPANSION OF THE CONTINENTS

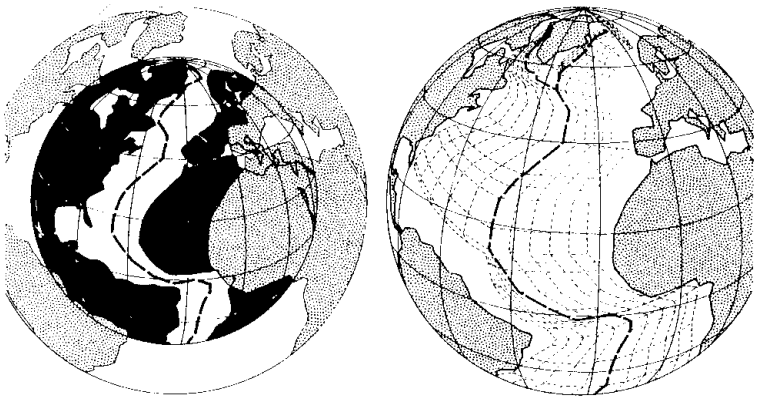
5.5 大陸の幾何学的な拡大と放射、

地球の活動が量子レベルでの活動を共通の結合では、共有するならば、我々が microcluster または準結晶の形成で見えるようにプラトン的な立体幾何学が拡大のプロセスの間、含まれるのを見るのを予想しなければならない、
。我々は、すでにノルウェーで、Teodorani 博士ほかが自然発生的な幾何学的な構成をとったプラスマ構造体の観察があることを知っていた、

そして、これはまた、地球の芯の中のプラスマが同じ特性を持たなければならないことを示唆する。
我々は自然発生的な幾何学的な構成を採用しているノルウェーで、すでにプラスマ構造の Teodorani 博士 et al’s 観察を見た、そして、これは Earth’s の芯の中のプラスマがまた、同じ特性を持たなければならないことを示唆する。
さらに、Pasichnyk’s 測定作業のおかげで、我々は W.R コルリスと A.M.、Dziewonski と J.H.ウッドハウスは、地球の芯が特定の角度から見るとき 6 つの側面を持つ三次元幾何学的な固体の形である「六角形のシンメトリー」を示すことを確認した。
グレッグ・ブラーデンの 1996 年のビデオテープに録画されたプレゼンテーションで、このシンメトリーデータからいって地球の芯は主な 5 つのプラトン立体の 1 つ 12 の五角形の面をもつ完璧な 12 面体として形づくられたことを示唆しているといった。
このように、幾何学の“microcluster”現象は、まさに量子領域より非常に大きいサイズのレベルでも有効に続く。
（二十面体も、非常に反復的な六角形のシンメトリーを持つ。）
我々の幾何学が fluidlike 流体の媒体の中の振動/波動の単純な副産物であるのを忘れないようにしよう。；
ハンス Jenny’s 博士の研究は、流体で振動/波動のレベルが増えると、流体の中に見る幾何学的な形がより複雑になることを明らかにした。
それで、地球の芯の脈動の中の振動/波動の率が絶えず増加するならば、我々は作業中に幾何学のますます複雑な形を見ることを予想しなければならない。
これを心に留めて 1993 年に、ヴォーゲルほかは、（彼らの地球表面の広範囲な理論化に基づいて）地球拡大仮説に関して、以下の結論を出した。

現在の地球半径のサイズを 55 から 60 パーセント下げるとするなら：
1. 大陸の輪郭は、共に割れ目が閉じた形に結合する;
2.異なる大陸の位置は各々に関して一般に一定の位置関係のまま、分離し“放射状に地球”拡大を引き起こした、そして;
3. 大陸の動きの原因は時間とともに、半径と海底の拡大速度の増加する原因と一致する。
これらの 3 つの現象の一致は地球拡大に終わる、地球内部から動くプロセスによるもので、偶然ではない。
我々がここで見る必要があるキーはヴォーゲル他が大陸の分離が“放射”または螺旋を描く動きで起こると述べた 2 点である。

この Perry のコンピュータ再構成に基づく地球の放射拡大のモデルは図 5.3 に見ることができる。



我々が、プラトンの立体の互
いの内部に「入れ子にされた」階層構造を研究するとき
螺旋を描く動きが常にあることを知っている、そして less-complex 複合されたものでない
形が 1 つのもっと大きい複合構造体に拡大する。
これは、前章でかなり書いた。

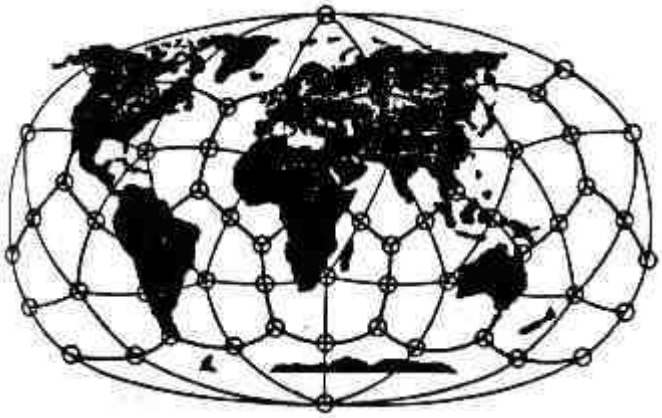
図 5.3？

Perry による地球の放射拡大のコンピュータ再構成。
(From Carey, 1986)

（ケアリー（1986）から）
国立大洋と大気協会またはNOAAのために働いている有名な科学者アセルスタン・スピルハウス博士は、我々に地球は、幾何学的なハーモニーのなかで本当に大きくより大きい形に拡大しているというその証明を提供した。

ベーテ Hagens 博士との我々のコミュニケーションによれば、この地域でのスピルハウス博士の調査結果は、1980年代にサイエンティフィックアメリカン誌に特集された、
そして、我々はそれから、出てくる残りのイメージのコピーを得ること望む。
Spilhaus のモデルでは、地球の大きさは広がっていない、しかし、彼のデータの全てが一貫した角度関係の直線に基づいており、彼が発見した根底の幾何学的な形は、依然として直接拡大する地球モデルに適用できる。

地球が、経験した次のような形の階層は広がるミクロクラスターによく似ている、



四面体：

パンゲア“大陸”が最初にバラバラになったとき、各々の主要な‘crack 割れ目’はほとんど正確に同じ長さであった、あるいは、他のすべてにも‘等距離’にひびが入った。
これらの本来の中心から大陸が離れ放出され、これらの等距離の線は概略で四面体をつくる。
我々が前章の2つで討議したように、この四面体の形は地球でエネルギー的な‘signature 徴’を出し続けている、そして、リチャード・ホーグランドとエンタープライズの仕事は他の惑星でも明らかに四面体のエネルギー構造を発見した。

立方体-八面体：

大陸が分離し続け、これらの幾何学は等距離の線の大きい構造体に拡大する。そして、立方体と八面体が結合された形をつくる。
我々が「時代の転換」で書いたように、ブルース・キャシーはこのグリッドがまた、地球で依然作動中なことを明らかに証明した。
これらの正確なグリッド測定から、“harmonic エーテル物理学”の新しい分野でキャシーは非常に有効な、多くの前進をした。そして、その幾つかは「時代の転換」で書いた。

20 面体-12 面体:

地球の大陸は、今は等距離の線の二十面体と 12 面体結合された形に拡大した。
再び、この段階への拡大のプロセスは、螺旋を描く放射経路に沿って起こる、。
図 5.4 に、
オリジナルの NOAA 新聞へ感謝する、
我々は、今日スピルハウス博士が現在もっている地球の幾何学的な膨張の最終段階の考えを見ることができる。
我々は、五角形形の面が主に 12 面体にあることを知っている、そして、三角形の面が、二十面体にある。
明らかに、点線は海底の峰や山脈を表す。
現在地球の芯が 12 面体の形をしているように見えることを考えれば、この形を見ることは、驚くべきでない：

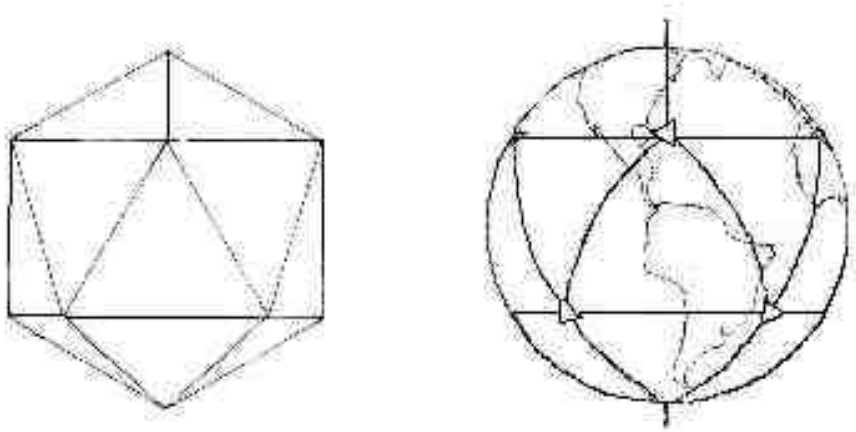


図 5.4？
Spilhaus’博士の最終的な結論としての幾何学的な地球大陸の拡大図。（彼の NOAA に感謝する）

Spilhaus のデータには全く満足だが、このような幾何学的な形が現在地球を取り囲むとい

う考えを支持する他に多くの付加的な情報がある。
ゴンチャローフ、モロゾフとマカロフのロシアのチームは、地球に 20 面体—12 面体のグリッド（大陸と海底火山の多い峰の位置に基づく[図 5.5]）の形があると独立して打ち出した。図に見るように、大西洋中央海嶺は大西洋の中にジグザグに進む垂直線と一緒に正確に走る。
12 面体の五角形と二十面体の三角形は、このイメージにも見ることができる：
図 5.5？
ゴンチャローフ、モロゾフと Makarov の 20 面体と 12 面体のグリッド。
面白いことに、ゴンチャローフほかは地球（例えば立石、ピラミッド、モノリス、メンヒル、オベリスク、寺院、塔、石の地下室、ストーンサークル、ジグラット、地球マウンドなど）で、4000 以上の異なる古代の神聖なサイトの場所を調査した、そして、例外なく、彼らが調査したすべての古代のサイトはこの 20 面体と 12 面体グリッドにだいたい位置している。
我々は、第 9 章において古代文明諸国がそのようなテクノロジーを使用した理由を学ぶ;
地球をバランスさせるために、ねじれ波を利用することは、ピラミッドのような形の能力と関連する。
我々は権威ある情報源に、ピラミッドが地震、厳しい天気と放射性放射物の厳しさを減少させることができると同時に、水、地下油田と鉱物の純度を増大させることを証明したロシア人と Ukranian の研究を見る。
ピラミッドがまた、ヒーリングのために使われることができる。そして、成長刺激と意識拡大と精神的成長に関連する。
物理的物質に関する上記の結果の全てはねじれ波の働きによってつくられる。そして、物質に対する穏やかな十分に集中する形式の圧力は重要な効果をつくることができる、その中でこれらの“grid lines”が主にねじれ-波の形であることを思い出すことは重要である。
ねじれ-フィールド探知器は、他の地域よりもこれらの線に沿ってねじれ放射の非常に強い量を拾う、そして、これらの線が交差した結節点は特に活発なところを示している。
このように、我々は文明が現在生じている損害をよく相殺するためにもう一度地球を横断するこのようなピラミッド・システムを立て直すことを非常に望むべきかもしれない。
アトランティスとラーマの失われた古代文明の崩壊の後、限定された核爆発の出来事、/、あるいは、環境破壊が進展で、そのようなプロジェクトはきわめて必要になる。5.6 COUNTER-ROTATING ENERGY FIELDS AND GRID DYNAMICS

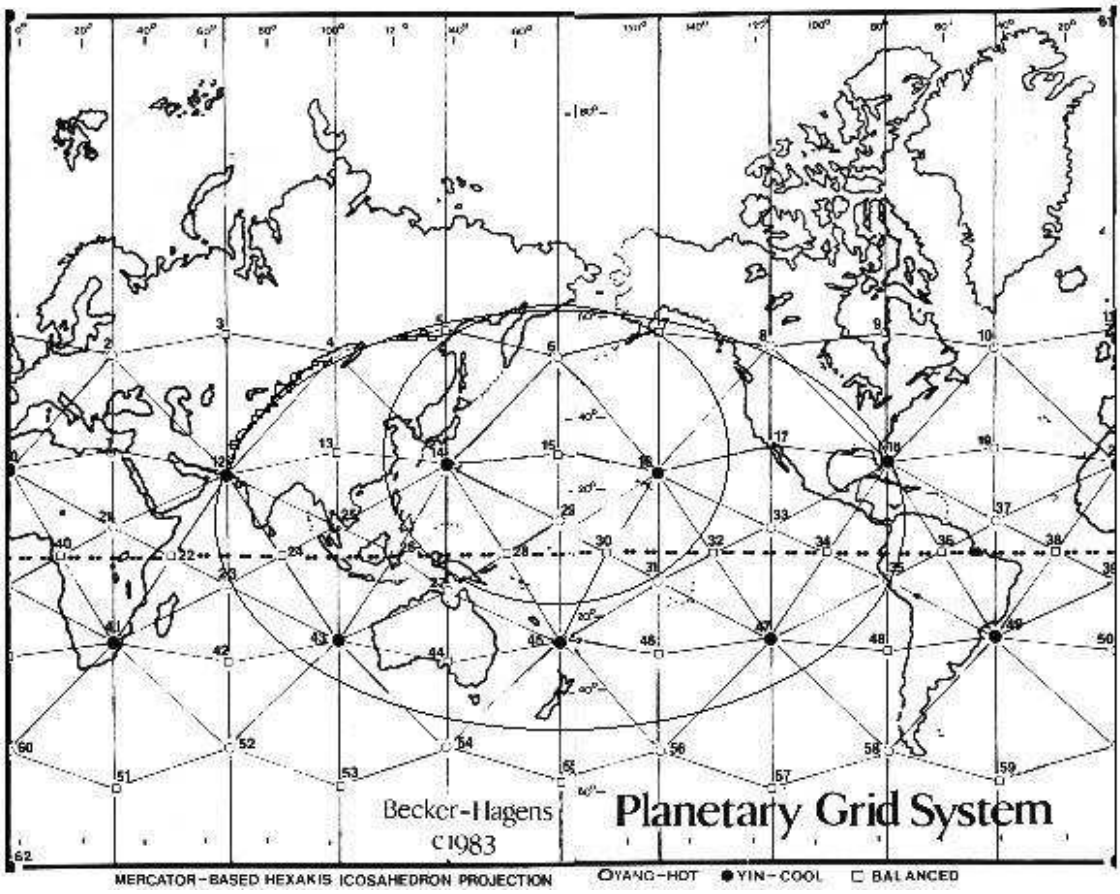
5.6 逆回転するエネルギー・フィールドとグリッド力学

我々は、Johnson の量子モデルで、原子が実際に逆回転するエネルギー・フィールドから成っているのを思い出す。
原子または分子が安定するためには、幾何学的にバランスのよい形に一緒に結合されなけ

ればならない。
同じように、我々は Spilhaus 博士の地球拡大モデルの最後の 2 段階で 2 つの幾何学が常にあることを知ることができる;
我々は、立方体と八面体の組合せと二十面体と 12 面体の組合せを持つ。
地球の膨張の最初の段階さえ、四面体は実際に八面体を取り入れるが以後同様に、最後の章で見たように八面体は、四面体の内部に直接包まれる。
ジョンソンのモデルに基づくと、グリッドに見られる二十面体と 12 面体は本当に対立したエネルギーフィールドのハーモニックな結合状態にあり、量子領域で分子の合成物がつくられるのと正確に同じやり方に、見える。
我々は、
これらの互いに逆回転するエネルギーの力は、地球の軸の上で互いに逆の時計回りの回転が真の原因でつくられたストレスにあると信じる。
この場合、
2 つの幾何学的形が一緒に結合されるとき、
反時計回りに回転している幾何学は、時計回りに回転する幾何学に比べてわずかに強い回転力を持つ、これは地球が反時計回りの方向に回転する原因になる。
利用できる証拠は地球に、地球的なエネルギーグリッドがあることは、本当にかなり理解され、古代文明によって利用されたことを、示唆する。
我々は、この部分でグリッド線と結節点に沿って起こる現象を含む重要な事実を探検する。この情報は一般にはよく知られていないが、にもかかわらず非常に真実で、前章と他の数人の関係者が広くこれについて書かれた。
初心者のために、リチャード Pasichnyk の仕事から現在、地球の表面に見られる二十面体の等距離の 12 の点（頂点）に集中する異常な特性を編集したリストを取り出そう。
前章で特集したが、これは再び、ここで繰り返すに値する。
Pasichnyk は“フィールド”としてこれらの 12 の地域に言及していることを思い出さなければならない：
1. 地球の電気的な螺旋、変な音と磁気および重力変則は、各々の地域に起こる。
2. 海底の最も深い点はこれらの点にある。]
3. [これらの点のまわりに流れる]海流パターン[。注] ：
イヴァン P.サンダーソンのデータは、この現在のパターンが相互逆回転の動きを示すことを明らかにする。]
4. 深い海底の[これらの点で見られる強い嵐。]
5. これらの海洋表面の点で塩分の最高の数値[が見られる。
6. これらの点は大気の充電と泡の爆発と、他の関係が最も豊富な場所と見られる。
7. この同じ地域は、天候の圧力の上下するシステムとなり台風の目になる。
8. 螺旋を描くガスの星雲は、各々のフィールドの空間の集中点に観測された。

9. 地球の表面だけの層（岩石圏）と、プレートテクトニクスの物理的側面は Fields の場所に関連する。（除去地帯、プレート境界、プレートの上昇、裂け目、ストレス・パターン、地震-波の異常、その他）
（更なる議論は 3.4 のセクションでする）

10. [これらの地域で光る現象と（イオン化された粒子） 暗い質量 (中性子)は 繰り返して観察された。
11.超高層大気、放射帯と磁気圏のパターンと、変化は、フィールドとの関係を見せてくれる。
12. ウナギ、鉄を凝結させるバクテリアと電気魚は、地理的にこれらの地域にある。
13. 地球上の全ての生命の 70 パーセント以上は、生命の電気エネルギーの発生に理想的なフィールドに関系している。（緯度 40 度の間）
本当に、Pasichnyk の三部作の本である「生命の広大さ」の大きな中心部分は、これらの地球と他の惑星にも起こっている「フィールド」の研究である。
前巻の１２章において、、これらのフィールドが太陽系中至る所の各々の惑星で働いていることを示している、大多数が納得のいく Pasichnyk からの情報をまとめた。
我々が理解できるように、ねじれフィールドが、現実の圧力をつくるが、上記の効果の全ては、物理的物質に関して出すことができる、強いねじれフィールドの力に起因することがありえる。
これが圧力をかけ海と大気圏で測定する流れを形成する役割を果たすように見えることが、ある
そして Pasichnyk の研究はそれが地球グリッドに完全に関係していることを見せる。
我々がすでに指示したように、高い強度のねじれ-フィールドの領域はまた、物質が高レベルの aetheric な密度に動くことが可能な領域である。
ここでのキーは、これら地球的なグリッドである 12 の結節点上の地域の中の高い度合いのねじれ放射で、物質とエネルギーがで高レベルの aetheric な密度に、位置がずれることが本当に可能だと理解することで、これはすでに文書化されて、その中でも、20 世紀にイヴァン P.サンダーソンの仕事を通して、観察された。
1972 年に、イヴァン・サンダーソンは、サガ誌の中に” “ 世界の 12 の悪魔の墓地’と題した記事を発表した。
これらの“悪魔の墓地”地点は Pasichnyk によって議論された“Fields フィールド”と同じもので、図 5.6 に見るように、これらは地球グリッド上の二十面体の点を表す。
再検討として、我々は二十面体の各々の面は、すべての内角が 60 度の完璧な正三角形であることを知っている。

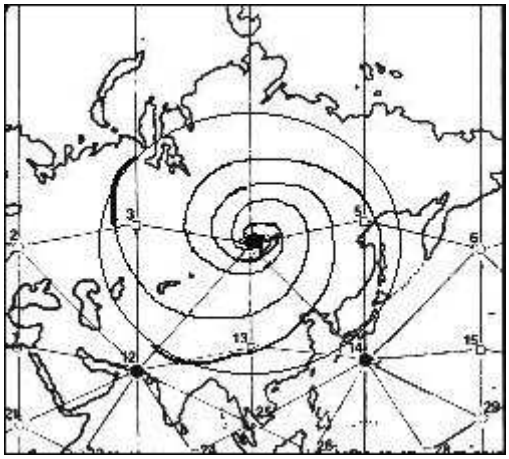


地球のような球の内部の、二十面体の点は、赤道の上下の緯度 30 と 40 度の間に位置する。
各々の点は極地の二つを除いて、近隣の点から 72 度間隔で間隔があけられ、これらの正確な幾何学的な中心は北緯か南緯 36 度にある。
北半球での、5 つの点と、南半球での 5 つの点と南と北の極地の 2 つの点が結合する。
図 5.6？
二十面体（L 左）と地球のグリッド(R 右)でのそれの位置決定。
（ニック・ネルソン Nick Nelson に感謝する）
サンダーソンは、航空機と帆船の喪失に関する全ての利用できる大量のデータを総合分析をすることでこれらの点を発見した。
彼はこのデータから、このような失踪が他のどの地域よりも、この 12 の地点ではるかに起きていることをつきとめた。
チャールズ Berlitz’は「バミューダトライアングル」の本で、これらの地域特性（地球物理的プロセスに関することと同様に、電磁気時間歪曲異常についての両方）について明確に書いた：
これらの地域は…結節点を表し表面の海流は、1 方向に回転し、表面下の流れは、逆方向に回転する。

[注：
再び、我々は逆回転するエネルギー力を見る。
わずかに触れる程度で１掃されてしまう表面下の大きい潮流は、異なる温度で、
磁気渦を用意し、ラジオ・コミュニケーション（磁気）に影響える？
おそらく重力も？
そして、結局、特別な状況が、時空の異なる点に出航するか、飛び去って水上の船と飛行機が消える原因になる？

これらの地域の不規則な動きについての面白い側面情報を
サンダーソンが慎重に計測された飛行での驚くべき「早めの到着」を
記述する際、明白に示す。
飛行機がそれほど遠くに予定より早く到着したその唯一可能な説明が、たとえばこれらの後から、毎時 500 マイルで海風を吹かせたためというものだ。

[注：
この種類の風速は、通常最悪のハリケーンに見られるだけであることを忘れなくないようにしよう。
もしこれらがバミューダトライアングルや他の渦域、の中で最もしばしば起こらなければ、このような事件は、単に記録されない風の結果かもしれない
もしよけて通るか、「空の穴」を通って安全に推進できなかったなら、これらが特別の次元の異常に遭遇して、多くの旅行者は彼らの命を費やした。
船または航空機が aetheric なエネルギーの高い密度に位置がずれて、帰らないとき、バミューダトライアングルのような地域または（我々は、前巻の第１０章においてそれを重く報告した）日本の悪魔のトライアングルの沖の中に崩壊が生じる。



再版された新しい総合版の本「反重力と世界グリッド」のウィリアム・ベッカーとベーテ

Hagens 博士による記事“惑星グリッドで時間に関連する異常の付加的な確証を与えた。
：
2 人は本稿で、ハワイの近くの結節点で起こっている時間に拠点を置く異常を報道した：
[地球上の二十面体のエネルギー点である]
ハワイ地帯の近くで飛行機の乗客とパイロットは突然、「デッドゾーン」に遭遇する
[彼の電磁使用]器具が停止し、コックピットから通信することができない。

[たぶん 1 時間以上がかかって]約 350 マイル飛んだ後に、
引き上げられた「現象」とパイロットが見つかった
管制塔当局は、彼の「デッドゾーン」経験の始めとその終わりの間で経過したかなりの時間見つけることができなかった。
[加えられる強調]

REFERENCES:
リファレンス：
1. Berlitz, Charles.
1. ベルリッツ（チャールズ）。
The Bermuda Triangle.
バミューダトライアングル。
(1974) Avon Books, New York, NY.
（1974 の）エイヴォン・ブックス、ニューヨーク、NY。

ISBN：
0-380-00465-8 [また、http://www.bermudatriangle.org/を見る]

2. Braden, Gregg.
2. ブラーデン（グレッグ）。
Awakening to Zero Point.
ゼロに気づくことは、示す。
[Videotape Presentation] 1996.
[ビデオテープ・プレゼンテーション] 1996。
URL：
http://www.greggbraden.com/
3. Corliss, W.R.
3. コルリス（W.R.）
(comp) (1982) Lightning, Auroras, Nocturnal Lights and Related Luminous Phenomena.
（償い）（1982 の）稲妻、オーロラ、夜の光と関連した明るい現象。
A cagalog of Geophysical Anomalies.
地球物理学的変則の cagalog。
[and] (1991) Inner Earth:
[そして]内部の（1991 の）地球：
A Search for Anomalies.
変則の検索。
Glen Arm, MD, Sourcebook Project.
グレン腕、MD、典拠プロジェクト。
4. Dmitriev, Aleskey.
4. ドミートリーブ（Aleskey.）
Planetophysical State of the Earth and Life.
地球と生命の Planetophysical な状態。
URL:
http://www.tmgnow.com/repository/global/planetophysical.html
5. Dziewonski, A.M., Woodhouse, J.H.
5. Dziewonski、午前、ウッドハウス、J.H.
(1987) Global Images of the Earth’s Interior.
Earth’s 内部の世界的な（1987 の）イメージ。
Science 236:37-48.
科学 236：37-48。
6. Howe, Linda M. Scientists Say Mysterious Lights in Hessdalen, Norway are Thermal Plasmas.
6. ハウ（リンダ M.科学者（まあ Hessdalen での不思議な光））、ノルウェーは熱のプラスマである。

(2001) November, 2001.
（2001 の）2001 年 11 月。
[Technical references in this article to Dr. Massimo Teodorani and Prof. Erling Strand’s research.] URL:
[マッシモ Teodorani 博士とアーリン Strand’s 調査教授への本稿の中の専門的な参考書。]
http://www.earthfiles.com/earth301.htm
7. Maxlow James.（ジェームズ）。
Expanding Earth Theory.
地球理論を広げること。
URL:
http://www.tmgnow.com/repository/global/expanding_earth.html

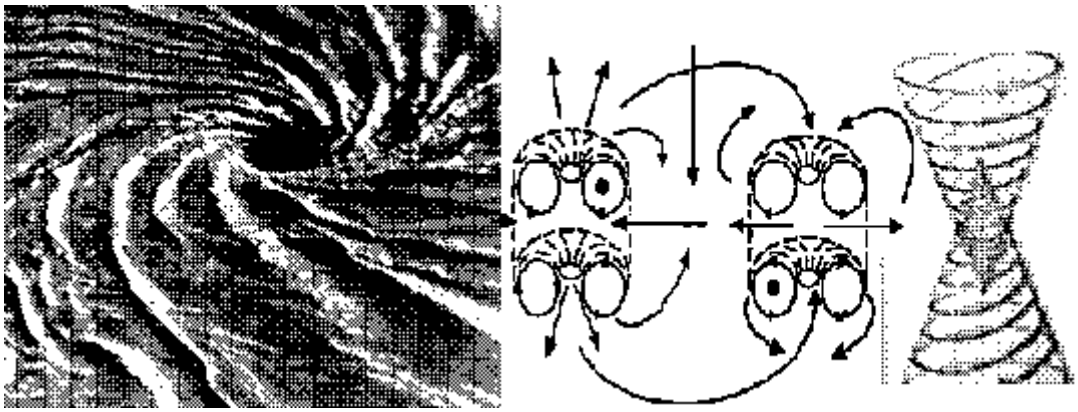
8. Pasichnyk Richard.（リチャード）。
The Vital Vastness ?
不可欠な広大さ？
Volume One:
第 1 巻：
Our Living Earth.
我々の生命地球。
Writer’s Showcase / Iuniverse.com, 2002.
Writer’s ショーケース/Iuniverse.com（2002）。
ISBN：
0-595-21078-3;
URL：
http://www.livingcosmos.com/
9. Persinger, M.A., Lafreniere, G.F.
9. パーシンガー、M.A.、Lafreniere、G.F.
(1977) Space-Time Transients and Unusual Events.
（1977 の）時空一時的現象と普通でないイベント。
Chicago, Nelson Hall.
シカゴ（ネルソン・ホール）。
10. ウィルコック（デイビッド）Wilcock, David.。
Convergence III ?
収束 III？
Extraterrestrial Physics.
地球外の物理学。

2001.
http://ascension2000.com/ConvergenceIII

CHAPTER SIX:

第 6 章：

THE UNIVERSAL HEARTBEAT



宇宙の鼓動

（プラズマ構造と惑星エネルギー力学の動きが、ハーモニックな拡大原則を示すのと同様に）物質とエネルギーが量子レベルで機能する基本的方法の実用模型を持つ今、神の宇宙の本当の統一モデルを提案する準備ができた。
このモデルは、非常に古い古代の聖典（秘教的科学の記念碑と神話の伝説）の中に隠され、現在まで時代と共に再発見されるのを待っていた。
この新しく再発見された情報は、宇宙の暗闇を麻痺させるゆっくりとした原子炉火災の孤独な、散らばる無の突然の爆発の代わりに、既知の宇宙の起源と創造を、意識的な最後の存在として我々が開いた花のように考えるのを許す。

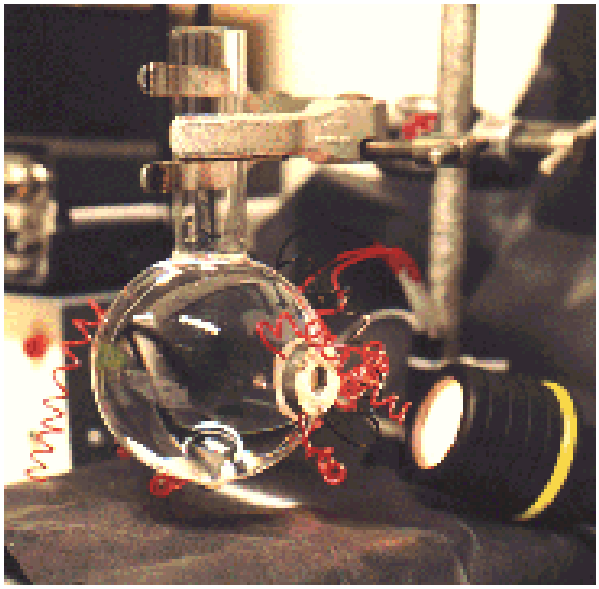
我々は 1993 年のオリバー・クレーン博士が、このモデルに関連した先例となる重要な概念の多くを作り出したことにお礼を言いたい。現在 1 ドルの寄付でオンラインから「中心発振器と時空媒体量」と題する論文をダウンロードする準備ができた。

[1]この章は、Crane’の中心仮説と古代のベーダ聖典と同様の Johnson’s 物理学からもたらしたものの混合で我々が観測できるデータに合った完全に統一されたモデルを与えたと思っている。

6.1 CLUES ABOUT THE UNIVERSE FROM ANCIENT MYSTERY SCHOOLS

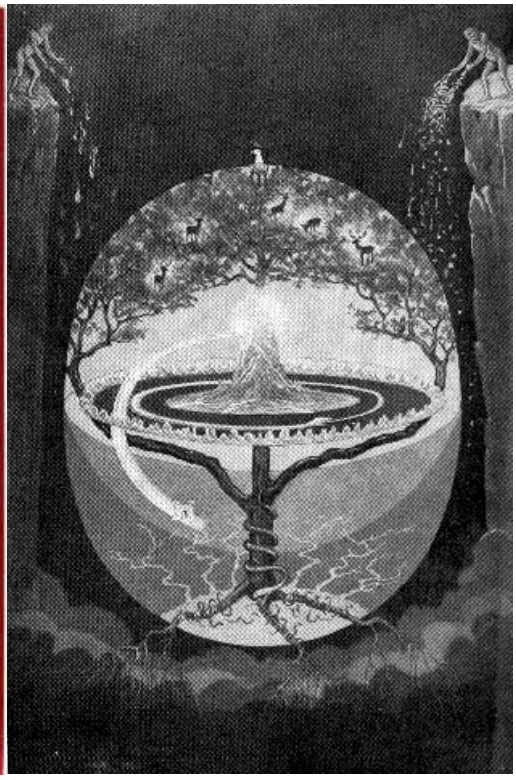
6.1 古代のミステリー学校からの宇宙についての手掛かり

ほとんどすべての秘教的なスピリッチャルな伝統において、宇宙は一なるものから始まる。そして、それはミステリーで覆われる。
それは球の形であるといわれており、我々は宇宙的な球としてこれに言及する。
あるいは、数学的な視点からは、この球は「時間」も「空間」もない純粋な点として考えることができる ―このようにあなたの内側からの展望によって、無限に大きいとも無限にちいさいともいえる？そして、この点に球的対称性もある。
我々はその内容について本当に考察することができないが、
その特性は、「絶対の物理的真空 Absolute Physical Vacuum」または APV として現代のロシアの物理学に現れる。
現在我々が、動きがなく、時がなく、変化がありえない、エネルギーがないと考えるように、それ自体の内部に動きがないことから Terletskiy は“useless”と全く誤って言った？
それから、一なるものそれ自体を分割することを選んだと伝統は我々に伝える。
この点で秘教的な科学は、“ 1 が 2 に分割されたと言う。すべては球の内側で起こり.その形を変えず、あるいは、細胞分裂に見るように、それ自体の複製を作る。



この球の中のエネルギーの単純な分割は 2 つのエーテル体をつくる、単純化の目的のために、我々はそれを、エーテル 1（A1）とエーテル 2（A2）と言う。
ロッド Johnson’s の量子物理学モデルに見るように Kozyrev の全ての効果と、全ての aetheric な密度、あるいは空間と時間の側面は、最終的に、物質生成で、これら 2 つの基本的な力のダイナミックな相互作用に起因するといっておこう。
物理学ニュースの次の抜粋は、主な 2 つの異なる密度のエーテル（すなわち“暗黒物質”）が銀河と超銀河団で作動中であることを示唆する。
読者がこのパラグラフの全て（単に強調された部分）を理解することは、必要ではない：
http://newton.ex.ac.uk/aip/physnews.259.html#2
DARK MATTER, LIKE LUMINOUS MATTER, IS HIERARCHICAL.
発光物質の様に、暗黒物質も階層的になっている。
すなわち、それは銀河のレベルで集まり
そして、星雲のレベルで、集まる。
この見解は軌道に乗って回る日本のＸ線望遠鏡 ASCA の最近の観察に基づく、それは、Fornax 銀河星雲の中からのガスのＸ線放出の記録による（1996 年 2 月 1 日「自然」、Y.イケベほか、）。
どんな場所においても暗黒物質の密度は熱いガス密度（最高 10**8K）から推論される。そして、多分それはその周辺の目に見えない暗黒物質の重力影響を受けることで、バランスがとられているだろう。
ASCA 科学者の測定を説明するのには 2 つの異なる種類の暗黒物質の存在が示唆される。
これは銀河レベルでの影響をもつ冷えた暗黒物質（例えば axions）と
星雲のレベルでの熱い暗黒物質（例えばニュートリノの集合体）の混合型宇宙論のモデル

を提案する。
（1996 年 2 月 10 日、科学ニュース。）[強調が加えられた]
上記は、宇宙で主に 2 つの“aether” の形（暗黒物質）が作動中であることを示唆する多くの現象のうちの 1 つである。
再び、重要な出発点は、それ自体の内側に A1 と A2 に分かれた宇宙的な球があることである。



これらのエーテルは、わずかに異なる振動速度を持つ、上記では“hot”と“cold.”として表されている。

6.2 A1 と A2 は互いの中で逆回転する

次に、最も重大なことは、宇宙的なエーテル体であるエーテル 1 と 2 が互いに多くの妨害を起こすことなく相互逆回転または反対方向の渦となることができるのを見なければなりません。
- A2 が反時計回りに渦巻く間、同時に、A1 は時計回りに渦巻く、そして、互いを通り抜ける動きを続け、これらは球になる。
- A1 は A2 よりわずかに速く振動するので、A1 は、A2 の球体よりわずかに速く循環する。これは、後で重要な点になる。

これらの、A1 と A2 の体は、周囲を流れる球体の“field bubbles”を持つ流状態である。
これはコズイレフ、ミーシンその他のエーテルの fluidlike 活動と“currents”を確認した仕事で確かめられた。
しかし、これらの「フィールド泡“field bubbles”」は、内部にプラトン立体幾何学を持つので、これらの隣りあうものと比較的安定したマトリックス構成物をつくって結合したままになる原因となる。
こうして A1 結合自体が 1 つの球面体として、A2 結合自体が別の球面体となる。
それゆえに、A1 と A2 の流動的な結晶幾何学的な性質によって、たちまち互いに（均質化し融合し、彼らの逆回転する勢いを失うことにならないようにする。
そして、これらは対抗して回転する。そして、たとえこれらが非常に高い圧縮状態にあっても、これらの“field bubbles”は超流動体のように互いを通り抜けてすべり込むことができる。
ある意味では、これは人々がにぎやかな都市通りで反対方向に歩くとき、互いを通り抜ける方法に似ている。

6.3 A1 AND A2 CONDUCT VIBRATIONS LIKE A SINGLE FLUID

6.3 A1 と A2 は、一体化した流体のように振動を伝える

再びいうと、A1 と A2 の流体-結晶マトリックス質は、自身の内部に精巧な逆回転するベーダのマンダラ・パターンのような幾何学的な秩序を保存する。
これは、内部の磁気的吸引力の形とみなすことができる。
しかし、実際に波紋（パルゼイション）をこの宇宙的な球に送り始めると、A1 と A2 のフィールドバブルは互いにぶつかる。そして、流体を単体に統一して、振動（パルゼイション）を伝える。
これらのパルゼイションは、実際、真実の鮮明なねじれ波である。
この統一された流体としての A1 と A2 の概念は、密度に関係なく、全てのエーテルのレベルが A1 と A2 から成ると説明するが、実際宇宙がどのように機能するか理解する際、これはとても重要である。
このように、A1 と A2 は、我々が議論したオクターブになるエーテル的なエネルギー密度の、先駆者とみなすことができる。
これは先で、より明白になる。

6.4 A1 AND A2 COLLIDE TO FORM ELECTROMAGNETIC ENERGY (MATTER)

6.4 A1 と A2 は、衝突することで電磁エネルギー（物質）を形成する

ほとんどいつも、A1 と A2 は互いのまわりをすべって通過する。

しかし、これらの幾何学がきちんと整列するならば、一緒に混ざることができる。
A1 と A2 のフィールドの泡が一緒に結合するとき、電磁エネルギーが作られる。
もちろん、我々はアインシュタインその他によれば、電磁エネルギーが、全ての物理的物質の基礎単位であることを知っている。
従来の“粒子”モデルでは結合は、明らかに、許されない。
それで、すぐにこの基礎概念を利用し、次の一連の流動的エネルギー概念モデルを操作して進めよう：
- “superfluid 超流動体の性質によって 2 つの fluidlike エーテルは流れて、球状スペースの中で本当に逆回転し、絶えず簡単に互いを通り抜け、これらの粒子が衝突しない限り、これらの動きに対して文字通り抵抗はゼロであることを意味する。
- 2 つの fluidlike 流動エーテルが互いを通り抜け、これらのフィールドの泡の一部は直接衝突する。
-これらの幾何学的な振動数がきちんと合うとき、A1 と A2 のエネルギーの 2 つの異なる形態は一緒に結合する。
一旦 A1 と A2 が一緒に結合するならば、至る所でこれらを囲む材質によって、これらはすぐに圧縮される。
-水の中に球状の空気の泡ができるのに似て、圧縮された A1 と A2 の合併されたエネルギーは、ミニチュアな球を作る。
- これは、宇宙的な球体の小さなレプリカをつくり、マクロコスモスに対して完璧なミクロコスモスとなる。
- この小さい球の内側に、宇宙的な球がするように、A1 と A2 の aetheric なエネルギーが互いに続けて逆回転して、渦巻く。
-第 2 章で説明したように Biefield-ブラウン効果とともに、これはそれ自体が A1 と A2 を引きつけ渦をつくることで、“gravity”となる。
- これらの小さい球が A1 と A2 からフィールドの泡をますます引きつけ続け、大きさは徐々に成長する。
これは、水の中の球状の泡に新しい泡を加えるときその大きさが広がるを見るのとそれほど違わない。
この過程でつくられた“単位”が物質を形成することを我々は現在 Johnson のモデルで考える。
A1 と A2 が一緒に混合されないで、観測できる物質は、ない。
これは今まで書いたこの宇宙の“エーテル”モデルの中で、最も重要な基本的特性である。
次のステップはこの宇宙的な球の中の構造を正確に理解することで、それは小さい球状の多くの数の“単位”が形成されることを意味する。
「液状の循環する球体になるとは、正確に何か？」
と尋ねるとき、答えの一部が見つかる、

そして、「「フィールドの泡」の間の、多くの数の衝突は、どこにあるか？」と尋ねるとき、残りの答えが、発見される。

6.5 VORTEXES COLLIDE IN THE CENTER, FORMING A SMALLER SPHERE

6.5 渦はセンターで衝突し小さい球を作る

前章においてすでに、球面円環トーラス体がどのように液体の中に回転の動きに起因する自然な渦巻き状の形を形成するか説明した。
流体が循環する球では、北と南の両方に渦巻きがみられる;
1 つの極の上で、渦巻きは螺旋を描いて中心の方に“入っていく”、そして、他の極の上で、それは中心から螺旋を描いて“出て行く”。
同じ球の中の A1 と A2 は、反対方向に逆回転しているのを思い出す。
これは、これらが同じ球で両方とも同じ軸を共有する球面円環トーラス体の形をつくることを意味する。
それで、現在、我々は以下を仮定する：
- 最初のエーテル（A1）は時計回りの動きで回る、これは渦巻きが球の北極から流れ入り、球の南極から外へ流れ出る原因になる。
- 二番目のエーテル（A2）は反時計回りの運動で回る、これは渦巻きが球の南極を通り球の北極を通って外へ流れ出る原因になる。
渦巻きに引っかかる船をイメージするなら、
それは回転して、大きな円の周辺を回るのを思い出す、
そして、動きはだんだん速くなっていき、渦の中心に近くなるとももっと速くなる
結局そこにつくられた信じられない圧力によって押しつぶされ、水に引き入れられる。
この渦巻きのアナロジーを、我々の球で使うとき、
これは、球の渦の中心-軸に、最も大きな動きの速度と最も大きな圧力があることを意味する。
A1 は北から中心の方へ押す、そして、A2 は南から中心の方へ押す。
これら両方は、最大の圧力と動きと、最大の速度で、宇宙的な球の正確な中心で衝突する。
A1 と A2 ができ、これらの相互逆回転の動きが始まったそのとき、この渦の中心で衝突が最初におこった時を主流科学者は“Big Bang.”と呼ぶ
A1 の南への移動圧力は、A2 の北への移動圧力と衝突する、
そして、A1 と A2 のフィールドの泡の多くがこの領域で他より多く一緒に結合し始める。
各方面からこれらの上に押し入ってくる圧力があるのでこれらは中心から球の形になる。
物理学の Johnson’s モデルによる可視光と物質を形成と同じように、電磁エネルギーはつくられる。

それがこの A1 と A2 の“particles 粒子”の、fluidlike 流状エネルギーの多くを吸収し、球のエネルギーのそれ自体が成長し始める。
我々は、また、この宇宙での出来事を星の最初の起源とみなすことができた。
発光プラスマは、2 つのエーテルが一緒に混ざって、生じる本来の、基本的形である。
次のイメージは、ダンウィンターの仕事から来る、
左に渦巻きがあり、中央で円環体構造が作られ相互に逆回転する
そして、あまりに正しいウォルター・ラッセル博士の図はこれらがどのように一緒に来て、球を形成するか示す。
（我々はこのイメージから、ダンウィンターがこれを思い浮かべた時、互いの上にある同類の 2 つのドーナツのような、2 つの円環体が両方とも同じ球体スペースに含まれ、互いの中で渦巻くことが可能なことを理解しなかった単純な間違いをしたことを知る。）

図 6.1？
ダンウィンターとウォルターRussell’の逆回転する渦構造のイメージ。

ウォルター・ラッセル博士は、宇宙が組み立てられ、機能する方法を神秘的な啓示 illumination として 39 日間かけて見るという経験をした。そして、新しい宇宙論のキーポイントの多くがこれから生まれた。

彼の図から、この中心球がどの方向からであっても、エネルギーの 2 つの交差した「渦巻き」によってつくられる方法が、正しく、正確に、よくできた視覚映像として得られる。

（ここには掲載していないが）ラッセルによる他の具体例は、
簡単に 2 本の渦巻線が球を示し、その間のダイヤモンド形の中心領域の中に、明らかに円を見る。
6.6 ESOTERIC UNDERSTANDING OF “GREAT CENTRAL SUN”

6.6 “偉大な中心太陽の秘教的理解

我々が本当にすなわち発光プラスマとして球を扱っているが、多くの同じ考え方を持つ秘教の教えは、「偉大な中心太陽 Great Central Sun」としてこの中心球に言及する。
さらに、これはまた、ナンバー3 の神秘的な重要性の基礎である。
A1 を「男」として A2 を「女性」として、見るならば、これらの「性的な」結合から、その「両親の両方の材料からこれらの小さな根源としての 1 なるもののイメージとしての子を作る。
すなわち我々は、三位一体の概念がベーダ信仰、エジプトの信仰、キリスト教の信仰を含む多くの精神的な伝統において出てくるのを見る、

有名な学者ジョーゼフ・キャンベルによって表されたように、中心的な原型は男で女である両性具有の息子を作る父と母である。
たとえば、これはエジプトの神話に父のオシリス、母のイシス、そして、中性的な息子のホルスとして見ることができる。
これは、物語で知恵の深さを隠しイニシェイションされていないものの間に、
象徴主義によって「秘教的」または非形而上学的な三位一体の秘教的科学的事実を共有可能にする、教義方法の 1 例である。

6.7 CENTRAL SPHERE BEGINS OSCILLATING (VIBRATING)

6.7 中心球は、共鳴し振動する

我々は今、大きい中心太陽の出生と成長を理解する。
次に、脈動しているリズムがこの中心球に確立されることを発見する：
- 一旦球の中心にできる発光プラスマが特定のサイズに達するならば、A1 と A2 の渦巻き運動の信じられない周囲の圧力は球それ自体の上に崩れて、内側に破裂する原因となる。
- この凝縮内破は、超高密になってプラスマを発光させる。
- しかしプラスマは、密度が特定の最大レベルを越えて圧縮されることに抵抗する。
- それで、弾力性のあるボールが圧縮されたときのように、全てのプラスマ球は圧力で取り囲まれたことに対して外側に爆発し、集団でオリジナルの大きさに立ち直る。
- プラスマ球がその本来のサイズに達するとすぐに、巨大な周囲の圧力はもう一度内側に破裂する原因となる。
安定した-流入するエネルギー量の増加によって、わずかに絶えず球は大きくなるが、球はそんなにきつく圧縮されることができないので再び爆発する、というサイクルが練続する。
- この球は、現在クレーン博士が“central oscillator 中心振動.”と呼ぶものである
この宇宙的な球のモデルの A1 と A2 のエネルギー・フィールドは、ほぼ恒常的な、安定した速度を維持するが、互いと比較して A1 は A2 よりわずかに回転は速い。
この、中心球の内破と爆発のサイクルは、安定した、変わらないリズムの息を中に吸い込んで外へ出す脈動である。
この理由のために、秘教的伝統は、それを「神の息」”または“宇宙的鼓動”とする

6.8 OSCILLATIONS OF CENTRAL SPHERE HARMONIZE WITH THE “SECOND”

6.8 中心球の振動は、“秒と一致する

大きい中心太陽の主要なパルスの各々が我々が秒と呼ぶ時の単位と完璧に一致する事実を明確な証拠が示している。
これは多分最初は不合理に見えるだろうが、それがデータによって導かれた正確なものであることを次章で知る;
すでに我々の読者は前章で知っているようにその背景を過去の古代のシュメールとマヤ文明の両方までたどる。
我々が音楽の弦を引く時、その響きは多くの異なる倍音を持つように、振動を扱う際、多くの異なる波長が一緒に動き、時間間隔においても秒が唯一ではないのを、見る必要があるのを覚えていよう。
O.クレーン博士は、脈動する別々の振動数を産出する、異なる「入れ子にされた」球の中心に、発振器があると信じている。
そして、彼はどんな星もこのように、タマネギのような多層構造を持つのを理解する。
この仮説によれば、一旦外の球が 1 秒につき 1 回パルスするなら、次の内部の球が 1 秒につき 2 回、次の内側の球が 1 秒につき 3 回、次の球が 5 回、次の球が 8 回そして“phi”比率が　続く。
“e”とパイと同様に 2、3 と 5 の平方根のような、他の比率も、ファクターとしてありそうだ。
再び、この主張に基づいて、波動のいろいろなハーモニーを見ると
秒より非常に大きいのと小さいのと多くがあるが、これらは常に正確な間隔で関連しあっている。

6.9 SONOLUMINESCENCE:

6.9 音ルミネセンス：

PROOF OF CENTRAL OSCILLATOR THEORY

中心発振器理論の証明

我々が収束 III で示したように、この“central oscillator 中心発振器”現象のほとんど正確な再現が 1934 年 H.フレンゼルと H.シュルテスによってほとんど理解されていない音響ルミネサンス現象として最初に観察され、研究所で示され、その後”1988 年 D.F.ガイタンと 1995 年.S. Putterman ほかの現代の目で検証されたことをここで指摘することは面白い。
この実験の全体的な性質は、むしろ密接に発光プラスマの中心発振器からつくられる宇宙的な球の条件を模倣する。

この実験では、球状ガラスのフラスコは、水で満たされ、球の中心に向けられた高い強列な音波で、どちらの側も振動した。
それから、一つの小さい気泡を、細いガラスのストローで中心領域に導入する。
泡は音波の衝突する圧力によって、ジャーの正確な中心に浮遊するが、それ自体面白い和声学の事実である。
それから、泡が崩れ、放出する均一なリズムが始まる。
各泡が崩れるそれぞれの時に、発光プラスマを形成し、それは可視光を放つ、そして、光が一定に見えるほど、パルスは急速である。
驚くべきことに、Putterman ほかは内部の泡が各時その本来のサイズの 1/100,000th に圧縮され、極端な規則性をもって 1 秒の 100 の 100 万番目ごとに振動するとした。そして、小さい泡のどんな一つの原子でも音波から得られたものより、1 兆倍多くのエネルギーを放った。
Dr. W.A.スティア博士は、後でフラスコの中にある本当の球から 1 ミリ逸れただけで劇的に効果は弱まるとした。
図 6.2 は、音ルミネセンス実験のための基本的な実験装置である。
これは、この時点ではオンラインでもはや利用できない W.A. Steer’s 博士ウェブ・ページから取り出した。

図 6.2？
W.A.Steer 博士の音ルミネセンスのための基本的実験装置。
音ルミネセンスは、主流科学には依然として不可解なミステリーである。

まず最初に、泡のパルスは正確に 1 秒の 100 万分×100 の 1 の間隔であることに気がつかなければならない。そして、時間単位である秒に正確にハーモニックな関係を見せる。
２番目に、誰も気泡の単純な圧縮がなぜそのような高エネルギーの強度の可視光をつくるか理解できなかった？我々が現在知っている少しの融合過程の間も起こるのに十分なエネルギーが近くのどこにもない。
我々の新しい理論では、気泡の内側の A1 と A2 の強制的組合せの泡が各時崩れて、見られる可視光を生じると言う。
このように、ミニチュアの“matter generator 物質発生器”は、宇宙の形成で存在したのと、同じ状況を複製することでつくられる。
もっと面白いことに、最近の調査は、研究所で振動している球の中心に複数の波動率が生じることが可能なことを示した：
http://newton.ex.ac.uk/aip/physnews.168.html#3

SONOLUMINESCENCE CAN BE CHAOTIC.

音ルミネセンスは、混沌状態でありえる。

Previously, researchers have observed sonoluminescence to be remarkably stable:

以前、研究者は著しく安定している音ルミネセンスを観察した：

音波を液体に適用し、泡が崩れることで小さいフラッシュをつくるとき、連続したフラッシュの間の時間は一定であることを測定した。

しかし、JPL（818-393-6946）の R.グリン・ホールトによって、新しい実験が、実行され発表された

実験的なパラメータの（例えば音波振動数と強度）わずかな調整で

こうした安定した状況から連続したフラッシュ間の時間を変化させることができる。

結果として、フラッシュの連続的変化は、カオス、または他の非周期的な特徴を示す。

たとえば、実験者はフラッシュの間のタイミングが準周期的な動きであるのを観察し、2 つの周波数として分析されることができた。

（R.グリン・ホールトほか、物理学リブレット、1994 年 2 月 28 日。）[強調を加えた]

慎ましい音ルミネセンス実験で、作成した発光プラスマの中心発振器を持つ。それは光を放って、2 つの異なる振動数で脈動させることができる。

その単純なパルスは、質量の球状流動状領域の中央に電磁プラスマ・エネルギーができる原因となることがありえるという概念により科学的な支持を与える。

この話題の上で、「パルサー」として知られている速く脈動する非常に高エネルギーの明るい物体が宇宙にあるのを指摘することは面白い、

これらの観察された動きの多くは、まだ主流科学に対して神秘的なままである、

しかし、そのような物は、この新しいモデルで完全に説明される。

6.10 PULSATIONS OF “GREAT CENTRAL SUN” REVERED IN ANCIENT TRADITIONS

6.10 古代の伝統において尊ばれる“中心の偉大な太陽の波動

我々が以前述べたように、次章において秒は偉大な中心の太陽の波動のハーモニックな時間のキーであることを確証する。

古代の先進文明からこの知識を受け継いだアメリカインディアンは、変わらない安定した、リズムでドラム打つことで、この宇宙的な鼓動を象徴する。

脈は、概して、最初のものに対して各々4 ビートの圧力で、毎秒 4 拍子に非常に近い。

これは全ての人間が深いところで、秒は重要だという内部認識を持っていることを再度示唆している。

ドラマーは大多数のポップスが毎分 120 拍であることを知っている。それは大きな中心の

太陽と完全に一致する鼓動のように、毎秒 2 拍になる。
ゆっくりした歌はリラックスした効果を持つ、そして、速い歌は刺激的な効果を持つ。
人間の心臓は、平均毎分 60 拍のパルスを持つことが知られている。
我々はまた大きい中心太陽のこれらのリズミカルな波動が、呼吸に例えられることを忘れない。
ベーダ聖典で、 “呼吸の科学”が全ての秘教的な伝統で最も深い秘密の一つである。瞑想はこのエネルギー過程を模倣する手段として使われていると言える。
瞑想で宇宙の鼓動のような、あなた自身の体のリズミカルな遅い呼吸の動きを想像することで、あるいは歩く時に、逆回転する腕と足の動きをイメージすることで、あなたは、意識のより高い状態を経験することができる、
究極の存在とあなた自身を合併した感覚を持つ。
ヒンズーの伝統も新入者に彼らの心拍数と彼らの息を特定数のビートに合わせることを教える。そして、このように心臓と隔膜と肺の間の 2 つの安定したリズミカルな振動数の動きをつくる。

6.11 CENTRAL OSCILLATOR CREATES NESTED SPHERES OF ENERGY DENSITY

6.11 中心発振器は、エネルギー密度の入れ子にされた球をつくる

次の点は我々が提示する必要がある、中心発振器が脈動して、中にエーテルの波を基礎とした構造が作成されることである。
再び、A1 と A2 は、互いを通して絶えず渦巻いている逆回転の動きの流体としてふるまうそして、統一された 1 つの流体として、振動のパルスが彼らを通り抜けるとき、動くことができる。

したがって、中心発振器の継続的な波動は球状波-パルスを起こす、あるいは A1 と A2 によってできた、エーテルの結集した体を波紋（ねじれ波）が出て行く。
 これらのねじれ-波のパルスは、それから宇宙的な球の外側の境界の先端に着く。
一旦パルスがこの境界線に着くならば、これらはそれを離れてはねかえる。
- これらは、宇宙的な球の正確な中心へ、直接バックして反射する。
次の点は、我々が見る必要がある：
- 大きい中心太陽は、明らかに、球状パルスが宇宙的な球の外の境界へ移動し、それから反射して後へもどる時間より速く脈動する。
- 大きい中心太陽が安定したリズミカルな頻度で脈動する時、A1 と A2 の総体的な媒体を通して複数の脈が時間の配列にそって移動する。
- 出て行く球状脈は、球のいろいろな階層化された領域で、流れている球状脈と衝突する、これらは、動きの安定したパターンを続ける。

これらの衝突している波-パルスは、同じ場所にバランス状態で存在し、完全に球面「縦波」をつくって依然として残る。
- 複数の“standing waves”は大きい中心太陽の回りに巣を作る。そして、宇宙の振動のエネルギー構造の、階層化された、タマネギのような概観を与える。
大きい中心太陽が中央にあり、そして、球状定常波層は宇宙のまさしくその端まで全ての出口を広げている。

6.12 ANCIENT SCIENTIFIC KNOWLEDGE AGAIN PRESERVED IN SYMBOLIC FORM

6.12 記号的な形式で再び保存される古代の科学的な知識

マンリー・P・ホールが秘密の教えで説明したように、この共通の‘nested spheres 巣として重なりあった’構造は、秘教的な科学の重要な鍵である：
家庭のタマネギはそのリングと層が同心の面を表したので、宇宙のシンボルとしてエジプト人によって尊ばれた、この考えによる創造は、ヘルメスのミステリーとして分離された（ヘルメスの教えと展望から。）
本当に、全てにかかわる、共通の軸としての一組の「入れ子にされた球」の概念は
古代の神話として「宇宙木」または「世界木」としてそれに言及することで世界的にひそかにコード化された。
「前章で我々が示したように「世界木」は、世界の神話を通して唯一行き渡った古代の教育方法で、マヤからセルティックス、スカンジナビア、エジプト、シベリア、中国まで
これまで研究されたほとんど古代の文化ごとに文字通り出てくる。
図 6.3 は、神道における陰と陽の神のイメージと考える：

図 6.3（L）
神道の神である陰と陽は球面円環体と入れ子状の球の隠れた象徴主義を示している。

図 6.4 (R)？
マンリーパーマーHall’のイグドラシルの解釈は球状円環体構造の明確な証拠を示した、。
この陰と陽のイメージを研究すると、彼女の体が球面円環体の軸を図示するつもりだったことが明らかに理解できる、そして、“nested spheres 入れ子状の球体”の複数の層が彼女をとり囲む。
さらに、彼女の精巧な頭飾りは A2 のエネルギーの渦を示し、最後は小さい円錐になり、背後には反対方向に動く A1 の広い円錐が見られる。

図 6.4 は、「イグドラシルとして知られているスカンジナビアの世界木伝説のマンリー・P・ホールの解釈である。」
彼の図面が十分にすべての概念を図示するわけではないが、
すなわち、「木の枝」で実際にある球の互いに入れ子にされた内部に、明らかに伝説が記述している隠された球面円環体を見ることができる。
イグドラシル伝説では木の基部のまわりに巻きつくと言われるヘビに、特に目がいく。
それが球の中心で速まっているが、これは A2 の渦運動の渦巻き-スタイルの動きの明らかな実例である。
我々はこの章の中の、このイメージが他の秘密も暴露することを知っている。

前章で我々は、この神話の世界的な流行は、人間の予言者が体外離脱で視覚的に旅行したとき、彼らが目撃した宇宙の球状円環体のエネルギー的構造を説明するために試みたことによると推測した。

6.13 EACH SPHERE IN THE “NEST” HAS A DIFFERENT AETHERIC DENSITY LEVEL

6.13“入れ子構造の巣”のようになっている各々の球は、異なるエーテル密度レベルを持つ

このように、球状エネルギー・フィールド層の後の層は、‘central oscillator 中心発振器’と既知の宇宙の球の外の境界との間にできる。
これらの“standing waves 縦波”はタマネギの層に非常によく似て一緒に巣をつくっている、そして、A1 と A2 の相互作用は彼らの境界面に少量の発光プラスマを作る。（普通の状態で目で確認するには弱すぎる）
より重要なことは、、これらの入れ子にされた各々の球は、各々の球の異なる波-干渉パターンのために異なる aetheric な密度を持つ。
明らかに、中心発振器から波動が、球の全ての端とうしろの出口へと動くときより、最初に興奮して離れるときはエネルギー的な力と、強さが、ある。
インパルスは絶えずフィールドの-バブルが互いに衝突する原因になり、大量の運動量は失われる。
したがって、球の中心の方には最高 aetheric な密度の領域があります、
これらの領域に最も強いものがある時、
最も弱いものとバランスをとる最もエネルギー的な外への圧力は、ほとんどエネルギー的に圧力のない力に対抗してバランスをとる。
従って、球の遠い端に最も近い地域は密度が最も低くなり、

球面波の押して引く力、は、等しくなり、このように、圧縮と圧力の量を減らす。
球の中心に最も近い発振器は、最高密度と圧力を持つ、最も外部の端の方へ進むと、密度は絶えず減少する。

6.14 THEORETICALLY INFINITE NUMBER OF DENSITY LEVELS

6.14 理論的に無限の数の密度レベル

次の理解のキーは、異なる各々の球の中に、類似し縮小したフラクタル構造が理論的に無限の数が中にあると考えることである。
しかし、これらは層でかなり組織化される、そのため、これらの無限の構造はすぐに明瞭にはならない。
7 つの主な球を作り、主に 7 つの密度を持つとすると、それらの各々の球には、7 つの層の副密度があり、その 7 つの層に下位のサブ密度がある、そして、各々のサブ密度の中にサブーサブ密度の 7 つの層があると続く。
このように、球の中央の最高密度から外の端にある最も低い密度へのスムーズな変換が、無限の段階的変化がある時、入れ子にされたハーモニックなレベル中で全てが動く。
フラクタル構造に関連した最近の発見は、“infinite recursiveness 無限の再帰性” が宇宙の中の最も基本的特性の 1 つであることを明らかにした。
小さいサイズの球がより小さくなって、同じ構造が出てくるのを見続ける。
計測装置はより洗練され、測定は、より微妙にすることができる。
これは、また、同様に音または色の研究でもすることができる。
各々の球の主な密度に無限の低レベルがあるにもかかわらず、1 なるものと特異点がある、オクターブレベルへ移動する。
したがって、これらにどれほどの高さの振動の数値レベルがあるか、天井があることを思い出すことは重要である。
これらはオクターブのパラメータの範囲内で無限であるが、それらの主なパラメータ外には動くことができない。
オクターブは和声学と振動の基本的な法則である。そして、音楽の研究で見られる。
これは、前の章で深く追求した。

6.15 QUANTIZED WEIGHT CHANGES EXPLAINED

6.15 量子化された重さの変化の説明

我々は、現在コズイレフの最も変則的な観察の 1 つを説明する必要があると考える、
すなわち 物の重さの上昇または下降は常に特定の量子化された間隔で起こるということだ。

全てのレベルの密度が見えるエーテル的な展望からは、色または音などの 1 つの密度から他のものへのエネルギーの置き換えは、幾何学的変化に類似したものに見えるだけかもしれない。
しかし、
我々が住む三番目の密度感覚器官と器具にとって、より高い密度に置き換わる時、物体は消えるようだ、
それは、一度デイビッド・ハドソンのイリジウムの単原子が摂氏の 850°に着いたときがそうでした。
現在、は Kozyrev’s のモデルに戻る。
分子の場合、それ以上-密度エネルギー流が、入ると物質になるために体重が増加する、そしてこれらの物質-エネルギーの一部がより高い密度に置き換えられると、体重が減少する。
大部分の動きは、“質量”の最も大きな量があるところ原子核（中心発振器）で起きている。
したがって物の重さが増加するか、減少するか、流動状態として我々に現れることは、
常に球面エネルギーが別々のレベルで現れより高い密度に置き換わるか、あるいは、より高い密度から我々自身のもとに流れもどるかのどちらかとなる。
全てのケースで個々の球のエネルギー構成が変わり、これらは、我々の密度から現れるか自発的に消える。
これが、Kozyrev の実験で“quantized”量子化された形で重量が増減する理由である
6.16 GRADUAL INCREASE IN DENSITY LEVELS AS SPHERE EVOLVES

6.16 密度レベルが段階的に増加し球が進化する

我々が考慮しなければならない面白いもう一つの要因は特定の最大の拡大点まで、中心発振器が絶えず A1 と A2 の量をより大きくさせるということである。そして、発光プラスマを形成し、その物理的サイズを増大させる。
中心発振器の寸法が徐々に増加し、泉の水面の上をゆっくり広がる波紋の様に、中心の高密度の領域から離れて遠くへ、そして、より遠くへと広がる。
球の最も外部の端が恒常的な圧力下にあって、大きさが増大できないと仮定するならば、時間とともにエーテル的な密度が高くより高いレベルへと圧縮している球の内部領域を想像することができる。
本当に、結局 A1 と A2 が利用できるエネルギーのすべてが球の内部で消費され、
最大のエーテル密度がその時達成され、引力を、支配する。
それから、aetheric な全ての密度レベルのエネルギーは、中心へと急速に衰え始める。
これは、スペースと時間がないブラックホールに関する概念と似ていて、秘教的な伝統が、ミステリーで覆われたと主張する一なるものへのシフトである。
結局、全宇宙がこの特異点で崩壊しなければならないと思われる、そして、これはこの最後の存在のための進化の通り道の終結を象徴する。

6.17 STAR EVOLUTION

6.17 星の進化

この拡張と収縮の過程は星の進化に見ることができる、これらは小さな太陽のような物から始めて、絶えず大きさが増加していく。

概してこれらの星は自らの大量の核燃料を消費していると、説明されるが、このように、圧力が減りなから、膨張していくことは、新しい理論に完全に合う。
星がより大きくなって、カラーが黄色からオレンジへそして赤へシフトしそしてこれらは結局“red giants.赤色巨星”になる。
一旦我々の太陽が赤色巨星になるならば、現在の位置で惑星の全てを吸い込む。
一旦赤色巨星がその最大サイズに達するならば、それは崩れる、そして、すぐにエネルギーを内側に破裂させる、この突然の崩壊は超新星として知られている白色光の光り輝くきらめきを作る。
超新星が起こったあと、物質は非常に圧縮されて非常に少ない面積の、白色矮星として知られているものが残る、そしてそれは結局茶色矮星になり、さらに冷たくなる。

従来のモデルでは、白色矮星における茶さじ 1 杯の物質は全ての地球より重いと計算される。
また、我々の太陽系が銀河系の外の端の近くに、正に配置された事実を考えることは、面白い。
これ以上の高密度エネルギーが広がる球が現在の銀河の端の近くの我々自身の地域へ移動することがありえるだろうか？
第 8 章で、我々は確固とした、科学的なデータ（観測された証拠の収集）を調査する、それは、銀河のレベルに存在するエネルギー密度のこれらの“nested spheres 入れ子状態にされた球の巣”を見る、そして、第 9 章でローカルな恒星間の媒体（LISM）密度の明瞭な変化がどのように現在の我々の太陽系に影響を及ぼしているか議論する。

6.18 全宇宙は、回転している

次にこの章の中で主要な点は、全宇宙が回転していなければならないことを知ることである。
これは、A1 が A2 より速く循環するという我々の単純な前提に基づく。
物質が宇宙でつくられ、同時にすべては A1 の余分の勢いに影響を受けている。
我々は、回転運動が、量子レベルと惑星間と銀河のレベルで存在するのを、すでに知っている、それはフラクタルな原則に基づいているが、宇宙でもこの原則を見なければならない。

次の章で、我々はこの議論をバックアップする科学的な証拠を調査する。

6.19 A FLAT DISC AREA OF EJECTED MATTER FORMS IN THE SPHERE

6.19 球の中から放出された物質の平面的ディスク領域

我々の次の点は、宇宙で、物質が“平面的”ディスクの形をとる理由を説明する。（例えば銀河）
これは、この点を理解することは読者にとってとても重要である：
全ての宇宙の球の圧力の最大量は、A1 と A2 の南北軸に沿った流入である。
純粋幾何学の観点から言えば、圧力の最少量は黄道の面に沿って存在することを意味する。
それは、完全に水平に、宇宙的な球の赤道に沿って、存在する平らな領域である。
物理学者博士 O.E. ワグナー（その人はまた、aetheric な宇宙論的モデルを開発した）は、”圧力が相殺された領域“としてこの低圧の地域に言及する
この黄道面の上下にある大きい圧力の地域は上からと底から押し入る。そして、
圧縮の領域をつくるが、水と油の間の形が休みの状態でいる時のフラットラインと異なるものではない。

O.E.ワグナー博士は、“destructive interference. 破壊的干渉”としてこれに言及する

この低圧の地域は、最終的に大きい中心太陽から放出された物質で満たされる。
大きい中心太陽の中の放出プロセスは、赤道より、南北極に多くの圧力がかかるという事実に起因する：
A1 と A2 の内側に破裂する渦-エネルギーは、中心の大きい太陽のトップと底ではその赤道にできる圧力より高い圧力を引き起こす。
我々は、A1 と A2 が完全に結合された宇宙的な球の回転構造は、A2 より A1 はわずかに速く動いていることを思い出す。
これは、つくられた全ての物質-エネルギーが同じ様に回転していることを意味する。
外へ放出する遠心力がつくられ、全ての宇宙的な球は循環する、そして、低圧の地帯が黄道の面に沿って存在する時、それはこのように、犬が体をふるわして乾かす時、水滴が飛び散る方法に似ている。
- 大きい中心太陽は、その呼吸のような波動を続ける一方で、循環し、赤道の地域に沿ってよりも、トップと底が強く圧縮される。
- このシステムの結果、その結合された A1-A2 物質-エネルギーの一部は、赤道の地域から爆発的にリリースされる。
- 物質-エネルギーのこれらの爆発は黄道の低圧の地帯に沿って、外へ放散する。そして、構造が同じ様な銀河の腕は、螺旋形に、外へ放射される。

-もし全ての宇宙的な球が回転してないならば、エネルギー経路として黄道の面に沿って一直線に線をひいたスポークがあると予想するかもしれない。
しかし、ちょうど渦状銀河の腕が現れる時、全ての宇宙的な球の回転によってつくられる“引く力”は、これらの光線が螺旋構造にカーブする原因になる。
- 幾何学的な力（例えば八面体の中央から発生する 4 つの結節線）は、2 つの方向に爆発する原因になりえる：

大きい中心太陽から赤道全域に、同時に開放された。

これは、特定の軌道位置あるいは、赤道に沿った一つの地域でリングを回転させ釣り合わせる。
幾何学的なエネルギー構造の中での 1 つの結節点、例えば八面体の赤道の 4 つの結節点のうちの 1 つで爆発するならば、すぐに、大きい中心太陽の動きを複製した物質の小さい球が作られる。
一旦新しい球が黄道の面の外へ放出されるならば、標準の“法則”はそれにもあてはまる：

放出された小さい球の-相互逆回転する A1 と A2 のエネルギーは、周囲の圧力によって圧縮される。

-これらは律動的に内側に破裂し、大きい中心太陽と同様に爆発する、そのため、これらも中心発振器を作る。
- そこから、上にあげたのと、全て同じ基本的動きで、各々の小さい球は、正確にそれ自体の球内に全宇宙のパターンを複製する。

- これらの新しい形は星として現れるが、この段階で、これらは実際は原始的な銀河である。
図 6.4（Hall’のイグドラシル Yggdrasil の“木”の図にもう一度戻るならば、この伝説も黄道面の重要性を捕らえリングと固体を示したことがわかる。

多くの、他の伝説と同様にこの黄道面を表現している、それは、前の第１５章で伝えた

6.20 宇宙のフラクタル構造

このように、ますます大きい中心の太陽は、黄道面に沿って物質-エネルギー圧力を開放し、

数えきれない数の新しい“原始の星”を螺旋を描く経路に沿って噴出する。そして、我々の宇宙にある巨大な超銀河の腕をつくる。
-結局 これらの原始の星の各々は同じパターンを繰り返す。そして、これら自身の中心発振器から銀河を作る。
-結局これらの銀河の中に同じ過程で何億もの星が作られる。
これらの星の各々が、同じパターンによって動き、徐々に、これらの黄道の面に沿って新しい惑星を放出する。
- 新しくつくられた惑星は結局同じパターンで続く。そして、これらの黄道面に沿ってリングと月を放出する。
一方、より小さくもっと微小なハーモニックなエネルギー領域である、量子世界は、ジョンソンの物理学に関連するエーテル的なモデルに見られるように、同じ原則に一致して激しく動いている。
- このように、最終的に、あらゆる原子は宇宙的な球の完璧なホログラムである。そして、宇宙は完全なフラクタル原則に組み立てられることが明らかになる。
各々の原子と各々の血球は、それ自身が宇宙の全てと共通の形を持つと考えられる。
（エドガー・ケイシーリーディング 281-024（1935 年/6/29））
この方向で考えていった明らかな 1 つの結論は、惑星がガスとちりの惑星星雲から凝縮したというよりむしろ太陽から生まれたということである。
懐疑論者は、速くもこの惑星形成モデルが、多くの優勢な科学的な視点を否定すると反論するだろう。
現在の惑星形成モデルが機能するためには、少なくとも 2 つぐらいの超新星の爆発が、要求されるが、爆発が近くで起こったという事実の証拠が全くないという多くのパラドックスを、この太陽中心のモデルは、解く。（Grandpierre（2000）。）
このモデルは、ウォルター・ラッセル博士の宇宙論、ベーダや、多くのロシアの学者、そして、まだ著者が目にしていない他の者によっても考えられてきた。

それは、イマーヌエル・カントの有名な 18 世紀の命題にさかのぼり、ピエール・サイモン・デ・ラプラスによって、さらに広げられた。
マックスウェルが太陽から惑星に放出された円環をひとかたまりにするにはその重力は、あまりに弱いことを後で証明したとき、従来の科学は惑星形成のこの概念を割愛した。
しかし、ここでは、我々は、重力を越えた力を扱っていることを覚えていなければならない
そして、それに関係する幾何学は星の赤道の別々の領域に出現して、エネルギーの爆発を引き起こすことがありえる。
我々はジェフリー・ハーディの連続的創世記と称する仕事が、惑星形成の既存のモデルが誤っているというとても力強い例証を提示した点に注目しよう、そして、実際、惑星は親

星から放出されなければならない。
1 例として、従来の惑星形成のモデルでは、単純なことだがガスの惑星が、空気を集めるのに十分な時間がない。
同様にリチャード Pasichnyk の仕事は、太陽から惑星が誕生する状況を明らかにする。
我々はこれらの情報を調査するのは読者の判断に任せるが、証拠の重みは無視することができない。
地球上で種の進化を議論するとき、惑星進化のこのモデルは後の章で非常に重要であることがわかる。

6.21 宇宙は、自己再生する有機体である

この点で宇宙は、最後の、生きた存在でそれ自身の像で子をつくると考えることは、あまり困難ではありません。
このモデルの宇宙の球状エネルギー・フィールドの動きはいくぶん複雑だが、我々に自己再生する有機体の全ての基本的性質を見せてくれる。
そして次のような疑問が生まれる、“これらのエネルギー・フィールドはどこで働くのか？。”このモデルが真実なら、それを証明する十分な証拠がなければならない。
次章において、我々はこの作業中の宇宙論モデルの証拠の概要を見る。
ディスク形の黄道の面に沿って、放出された物質の各々のサイズのレベルで、球と、逆回転するエネルギー・フィールドと、球の中心軸、中心発振器、“球状の巣 nested spheres”のエネルギー密度の変化がわかる。
情報をよく整理して、我々が神の宇宙の完全な統一見解をすこしでも見るのが許されるように、これらのサイズ・レベルを各々別々に議論する。

ホーム | インデックス | 次
REFERENCES:
リファレンス：
1. Crane, Oliver et al. Central Oscillator and the Space-Time Quanta Medium.
1. クレーン、オリバーほか中心発振器と時空量子媒体。
Universal Expert Publishers,　2000 年 6 月、英語版
。
ISBN 3-9521259-2-X. URL:
http://www.rqm.ch/engl/book.htm
2. ディーン（グレン）。Deen, Glen.

The Physics of an Episodic Quantized Redshift.
量子化された赤方偏移の物理学のエピソード。

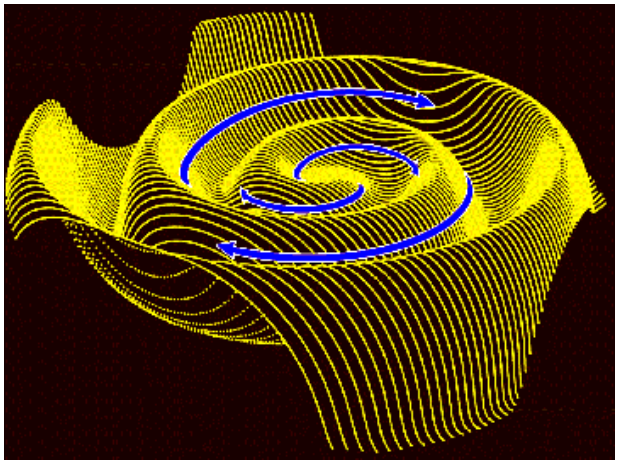
2001 年 3 月 26 日。
http://home1.gte.net/res00bfl/Redshift_Physics.htm
3. Grandpierre, Attila. （アッティラ）。
4 ハーディ（ジェフリー）. Hardy, Geoffrey.
Genesis Continuous.
創世の連続。
http://www.crash.ihug.co.nz/~hardy/gconsyn.html
5. Pasichnyk（リチャード）。
The Living Cosmos.
生命宇宙。
2000 年.
http://www.livingcosmos.com/
6. ラッセル（ウォルター） Russell, Walter.
The Universal One.
http://www.philosophy.org/
7. Steer, William Andrew.
音ルミネセンス。Sonoluminescence.
（球体 Sphericity）1998 年。
http://www.ucl.ac.uk/~ucapwas/sl/sono.html
8. ウィルコック（デイビッド）Wilcock, David.。
Convergence 収束 III.。
2001 年 4 月。
http://ascension2000.com/ConvergenceIII/

第 7 章：

SPHERICAL ENERGY STRUCTURES IN THE COSMOS

宇宙の中の球体エネルギー構造

7.1 MAGNETIC FIELDS AND “ VACUUM DOMAINS ”



7.1 磁場と“真空領域

”

最後の章で議論する球状円環体エネルギー・フィールドの基本的構造の多くが、当然、磁場に見ることができる。

この十分な説明が今まで与えられなかったが、テスラは、磁場が絶えず回転していることを発見した最初の人であった。

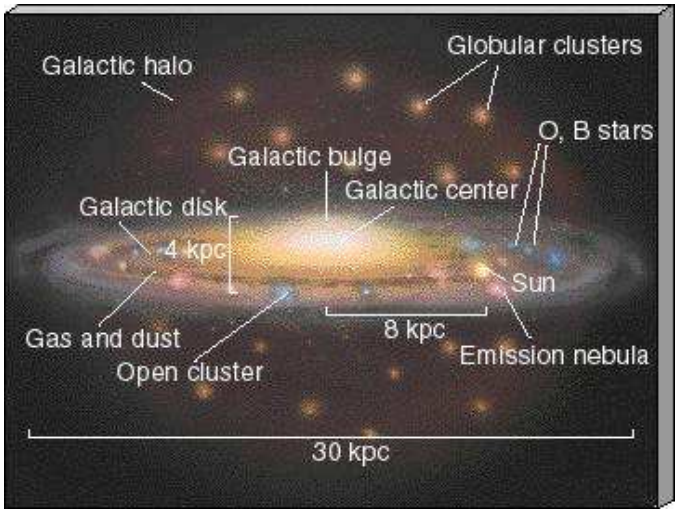
良い磁石がなぜ強さが減少することなく 1000 年以上の間、良く続くのか、まだ、わかっていない。

我々の新理論では、惑星の鉄フェライトまたは金属的棒の核は、磁場を作るためには必要ではない;

エーテル 1（A1）とエーテル 2（A2）が基本的球状円環体形の中に、一緒に流れるとき、フィールドがつくられる。

磁石の中の分子の南北の向きは、単にこのエネルギー流を利用している。

「球電」は観察された、独立型磁場の多数の例の 1 つで、前巻と、ここでは、5 章に公表したが、この輝くプラスマ球は、Schappeller の研究所の仕事、サール、Roschin とゴーディンのサール効果の再実験その他で本当に発生することができている。



:

前章において、我々も“真空領域での”、以下の変則的な効果の現象を引き起こす異なるサイズの球面エネルギー形態を詳しく書いてきた：

1. [真空領域]は物質を通り抜けて自由に浸透することができる;

2. これらは、広い振動範囲で発生することができ、光と他の電磁放射を吸収することができる;

3. これらは自身の中と外の両方に、強い電界を産むため、電子装置が機能するのを中止する原因になることがある;

4. これらは、かなりの磁場を示す

5. これらは重力場をゆがめることができる。そして、物が浮揚するか、重くなる原因となる;

6. これらが恒常的な回転状態にある時、自身の回転形の内部に空気とちりをまき起こすことがありえる;

7. これらは、必ずしも形態と大きさが変わるわけでないのに爆発することができる;

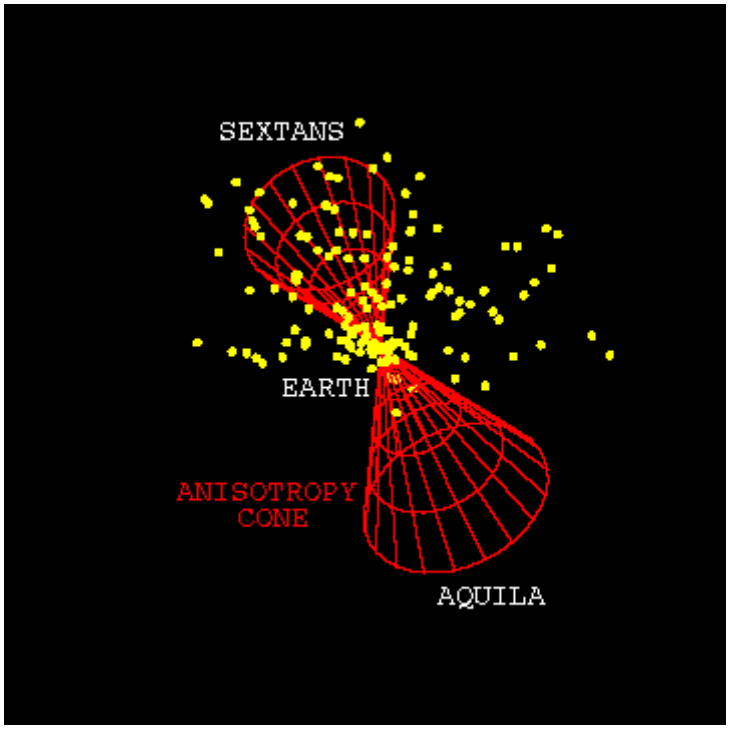
8. これらは、球または“楕円形の卵形（基本的に引き伸ばされた球である”）のような明確な幾何学的な形になる;

そして、最後に、

9. 太陽活動がピークに達した年に、これらは、たびたびよくみられ報じられる。

最も重要なことは、V.L Dyatlov 博士は、先進物理学での 2 つの形のエーテルが混ぜ合わせられるときだけ、この形が出てくることができることを明らかに証明した。そして Terletskiy の理論では、“物理的真空物質 physical matter vaccum”つまり PMV、または“物理的真空反物質 physical vaccum antimatter” PVA としてこれは理解されている。

（もちろん、ここでは、両方で物質を生みだすことが要求されるのだから、物質/反物質として分類することは定義としてあまりに制限があり過ぎると考え、我々はこれを A1 と A2 と呼んだ。）
ここでのキーは、“真空領域”で A1 と A2 が完全に十分安定せずに一緒に混ざるとき、発生し、長続きする物質/エネルギーをつくるということである。



これらは、自身を安定させようとして、周囲から重力とねじれ-波エネルギーを非常に活発に引出し、この変則的効果を生み出す。
他の物体に入れられた、1 つのエーテルの「泡」のイメージはまた、突然水に、油を放出したときに、起きることに似ている。

その場合、油の球が現れるのを見る、しかし、これらは短い瞬間あるだけである。
手短に言うと、前章に戻って抜粋すると Aleskey ドミートリーブ博士と V.L Dyatlov:博士の仕事に見るように、これらの領域で異なる形の現象がみられる。
7.2 ANOMALOUS “VACUUM DOMAIN” PHENOMENA

7.2 変則的な“真空領域”現象

1. 球電。
著者によれば、これは最も有名で研究された変則的な現象である、それは全て 9 つの VD 特性を示す。
大部分の科学的論文は球電で起こる空中上昇の効果には少しも言及しない、しかし、これは単に球電が小さく観察するのが難しいからである。
球電の典型的形は、直径 10 から 30 センチメートルの間である。
ちり粒子が球電の中で回転しているものが、見られたと報告された。
2. 自然な自己発光性の物体、または plasmoids.”、
これらは明るい光のボールとして肉眼で見られるが、写真に撮るとさらによく見れるだろ

う。
これらは通常地震のとき地球の地殻断層の領域の最もエネルギー的な活動がある所の近くに発生する形である。
これらは球電と似た特性を持つ、そして、この場合、空中上昇の大規模な効果はもっと見られるだろう。

著者は我々に A. Yu Olhovatov、によって書かれたロシアで“Sasovo 爆発として知られている事例を述べる。この形態は、上のリストの No7 で言及した爆発的効果を生じる特性と同様に物を浮揚できることを証明した。
研究の中の写真は、明らかにこれを示す。
3. Poltergeists.

3. ポルターガイスト。

ある場合は、「とり憑かれる」ことは、本当の実在が含むかもしれない
他は、nonphysica 非物理的な形で、VACUUM DOMAINS 真空領域 つまり VD が人の家の壁を通してしみ出す場合であるように見える。
この場合には、
物を浮揚するボールのようなわずかに輝くエネルギーが、見られる、
電気的で磁気フィールドをつくり、
飲みほすグラスの中と金魚鉢の、水を回す、そのうえ、
人々への損害を引き起こす。

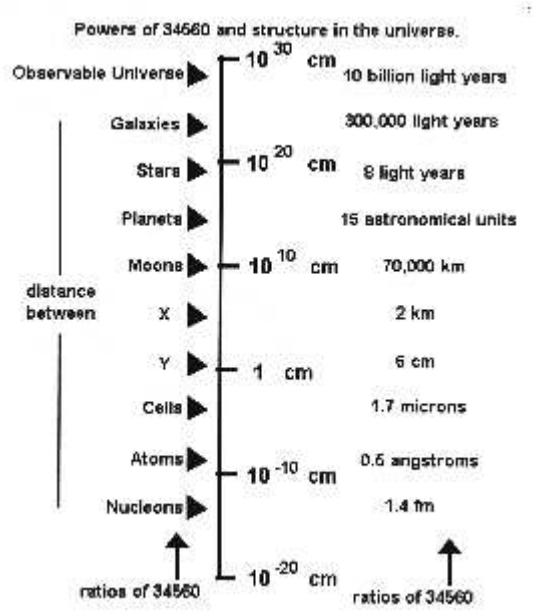
繰り返して現象が起こるのが見られるなら、この形を生じるエネルギー的に活発な地球の領域に家がつくられているからかもしれない。
特定の人々（特に不満なティーンエイジャー）は、特性としてこれらの知的エネルギーからつくられているので、これらの形の動きを示すことができる。
4. Tornadoes.

4. 竜巻。

我々全員、乱暴なじょうごのような竜巻の雲の形をよく知っている。そして、それは巨大な損害をつくることができ、本質的に無傷の物を浮揚することができる。
ドミートリーブ博士が、“竜巻の Electrogravidynamic 概念”と題して、またウェブサイト http://www.millenngroup.com/.も、完全に別々の論文をだして取り組むほど、実際、竜巻の研究は、重要である。

リストに載っている竜巻に直接関係する大きな 9 つの特性には、可視的光の現象が含まれ

ている。
“竜巻”の論文で、ドミートリーブは以下のケースを取り上げる：
1951 年のテキサスの観測者を通りぬけたじょうごは高さ 6 メートル、内部に 3 メートル幅の壁があり直径およそ 130 メートルあった。
くぼみ内が［脈動する］光り輝く雲[あるいは、中心に発振器]があった、中では呼吸するのが簡単だったので、真空では、なかった。



その他の場合、光球ボールの群れと “連続的に輝く光”と“連続的光”を含む他の明光現象は、竜巻の内外に見られる。

他の変則的な現象にはよく竜巻で重力と物質に相互浸透している aetheric なエネルギーが高密度に転換されることが起きることが含まれる、ことは、前章で同様に議論した。

特に人が中で呼吸できるならば、竜巻の中に生じる反重力効果を説明するのに“空気が吸入される効果”によるという考えだけでは十分ではない。

5. “Angels.天使”

この用語は、特別な種類のレーダーへの干渉を言っており、全てのシステムが防衛しなければならない。
レーダーの初期の時期に、スクリーン上に飛行機またはミサイルのように見える、レーダー上の映像が現れるケースが、あった。

エンジニアはこれらが実際に物理的物体でないのを理解しており“angels、”とこれらを言っている、ところで、誤ってこれらの形を見つけないように現在のレーダーは造られている。
著者は、“angels”が“自然の自己発光性の形と同じものであると提案する、”これら両方とも地殻構造上の断層で直接起きている。
NSLFs の場合、これらはちょうど断層より上に見つけられるのに対して、概して“angels”は断層より数キロメートル上に見つけられる。

6. “Small Comets 小彗星”または“Atmospheric Holes.大気の穴

これらは地球の高くでとられた”高度紫外線写真に見られた。
およそ 1 ミニッツの 20 倍の、大きさのブラックホールが電離層の上にできるのが見られる。それぞれ幅がおよそ 30 マイルである。
（これを発見した人々によって出された）従来の仮説は、これらの穴が雪と氷の“小彗星”によって出来たと言うものである。
しかし、多くの彗星が絶えず地球に衝突しているならば、また同様にこれらは、月と衝突しければならない、しかし、そのような出来事に一致する震動が月の表面にはない。
したがって、著者はこれらが真空領域に同様に起因するかもしれないと考える。

7. 電離層と大気の爆発。

この場合の、名称は自己発光である。
多くの人々は、悪天候の徴候もまったくなく、明瞭な爆発源もないのに、自然の大きな爆発を聞く。
これらの爆発は、球面幾何学の形の発光と関係し、また物質を透過する性質が見られる。

8. Lithospheric 光の球体パイプの爆発。

これらは、地球の岩石圏または地殻の内部で起こる現象で、電磁界を伝えることができ、弾力性のある、柔軟な性質を持つことが可能である。
地質学者は岩石圏の内部で突然のパルスまたは熱の爆発を観察し、すぐにその後に“kimberlite pipe キンバーライト・パイプ”として知られている細長い楕円チューブがそこに作られる。
しばしば、このパイプの内部はダイヤモンドで覆われる、そして 5 章に述べたように、これはエスキモーの人々には有名である。
これは、電磁放出を生じる自己発光の爆発で、すくなくともロシアでは、これらは現代地質学の“大きなミステリーと考えられている。

9. “Sprites”、小妖精とジェット elves and jets。

これらの変則は最近発見され、従来の説明はかなり脆弱である。
雷雨雲より上の、光の非常に大きい瞬間的きらめきは、高さ最高 100 キロメートルに見えることがある。
これらは、これらの高さによって青または赤でしばしば現れる。
ドミートリーブほかの研究者に最も重要な、これらの形態は、しばしば雲から地面に落ちる稲妻の最も激しいグループに深く関係している。
これは、稲妻の明るいフラッシュが作られる原因である地球からのエネルギーがどうもこの雷光にも関係していることを示唆する。

10. 地震と火山の噴火に関連する発光。

ドミートリーブほかによれば、ほとんどすべての地震と火山の噴火には、光輝体が観察される。
これらは、出来事の後、またはその間に、見られる、したがって出来事に非常に密接に、関係する。
前巻のドミートリーブと Dyatlov の上記の 10 点の観察の他にもう一つが見逃がしたものがある？
「ＮＡＳＡ UFO」の謎で、ＮＡＳＡの映画フィルム場面の多くの異なる部分に球面エネルギーの形が見つけられる。
これらは、太陽に起源があるように見える。
“Vacuum Domains 真空領域”のもう一つの候補は“Rods”現象である、かすかな、明るい螺旋を描くエネルギーの螺旋形のチューブが特定のビデオテープの上に高速でビュッと進むのが見られる。
It is possible that these documented “Rod” sightings are of vacuum domains whose spiraling central axis is more visible than the surrounding sphere.
これらの真空領域の「ロッド」の観察例の報告は、可能で周囲の球より螺旋を描いている中心軸が、見える。
そして、これらの形のパズルを解くために 2 つの異なる「エーテル」を持ち適切に一緒に混ざらなければならないことを Dyatlov が厳密にデモストレーションした時から、これらの形は、統一された宇宙論の中に確かにこの場所を持ち、我々に A1 と A2 が現実に存在するのを見るのを助けている。
前章で宇宙の統一されたモデルを述べたが、この章では、宇宙に観察される安定した構造に、より関心がある。
7.3 THE PLANETS

7.3 惑星

リチャード Pasichnyk は、彼のウェブサイト「生きた宇宙」の上で、ほとんど全ての、惑

星に赤道の黄道として知られている平面に沿って、外へ発散するリングが見え、またはエネルギーの流れがあるのが観測されたのを明らかにした。
全ての惑星の中で土星は最も単純によく見えるリングを備えているが、他の大多数も同様にこれを持つのがわかった。
このための従来の説明には確固としたものが、ない。
さらに、また、大部分の惑星は、完璧な黄道を通る経路をいくつかの球状の月が回りながら、軌道に乗って回る。
リチャード Pasichnyk の研究は、ガス惑星の動きを観察することで活動中の A1 と A2 の逆回転するエネルギー・フィールドの原則をみせた。
ガスの逆回転するバンドはガス惑星の全てに観察された、そこでは絶えず時計回りと反時計回りに交互の回転する帯がある。
時計回りの地域は“belts”として知られ、反時計回りの地域は“zones.”として知られている。そして、金星のような特定の惑星の大気は実際に高さが物理的に上下しているのが見られた。そして、中心発振器のような惑星全体の“息”を明らかにする。
金星の電離層は２４時間内に 200 キロメートルの高さから、数千キロメートルまで変化可能で、同時に、全ての惑星の表面を覆う雲の上の面（空気）の高さは 1 キロメートルまたは 0.62 マイルも浮き沈みを繰り返す。
これは、金星の 4 日の周期的な期間で起きている“恒常的呼吸”として知られている。
Pasichnyk も、惑星の中心が実際は金属的なものではなく、我々の太陽に似た熱烈なプラスマ・エネルギーの形だ、という概念を発展させた。
惑星がマクロコスモスに対してミクロコスモスであるという違うレベルでの証拠は、前章で詳細に紹介した。
我々が発展の結果を議論しようとするなら、これ以上のことを言わなければならない。

7.4 太陽

我々の太陽は太陽圏として知られている磁場を持つ。それはまた、球面円環体の形である。
全ての惑星は、太陽の赤道または黄道の面の内側を、軌道に乗って回る。
太陽の表面は、本当は中で脈動するものが外側へ出ていると理解される。それはこの章の後半で詳細に書く。
[アルファ Centauri A の星は同じ様に脈動しているのが知られている。]
我々の太陽は黄道面に沿って移動する磁場をもつことは、ほとんど知られていないが、それはパーカー螺旋と呼ばれており、それは三次元構造を持ち、銀河の螺旋を描いている腕に正確に似ている：
図 7.1？
パーカー螺旋は惑星間の磁気の形で、（これは科学がまだ理解していないが太陽系の構造に横たわる大きなミステリーを示唆している）；

おそらく連続的創造が起こっているならば、太陽系はこれから結局完全な銀河にまで成長し、このようにパーカー螺旋フィールドは結局星で満たされ銀河の腕をつくりだすはずだ。我々が続けると、この概念には不合理なものがだんだん減少するようだ。

7.5 THE GALAXIES

7.5 銀河

誰もが、銀河が星、惑星と黄道の面に沿ってできる平らな、ガスの円盤であることを知っている。

ほとんどの人々は、銀河が銀河の後光として知られている“暗黒物質” /、あるいは“暗黒エネルギー”の内側に、囲まれているという最近の発見を知らない、我々の前の両方の本に貼り付けた写真の左上にそれがある。:

図 7.2？

銀河の構造は球状後光を含む

この球状後光は、まるで銀河が、1 つの統一された球状物のように回転する原因になる重力の大量の行使を説明することで知られている。

これは確かに我々の太陽系が動く方法ではない、そこでは、水星は軌道に乗って冥王星より速く太陽を回る。（我々の太陽系が銀河ならば、太陽を水星と冥王星は両方とも同じ時間をかけて軌道に乗って回るだろう。）

そう、もう一度銀河にもどると、黄道面の地帯の中の物質でできた、エネルギーの球を持つ。

ＮＡＳＡはまた、銀河の南北の中心から発散する“軸となるジェット流 axial jets”を観察した、このジェットは球面トーラス体であるエネルギー形態の南北の中心軸と我々には考えられる。:

図 7.3？

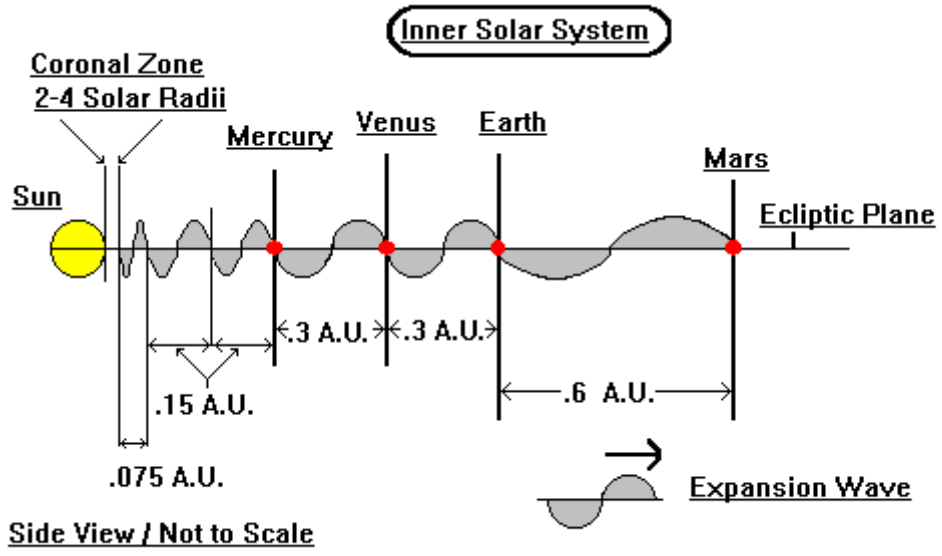
銀河の核から発散している“axial jets 軸となるジェット流”のＮＡＳＡ技術者の解釈。

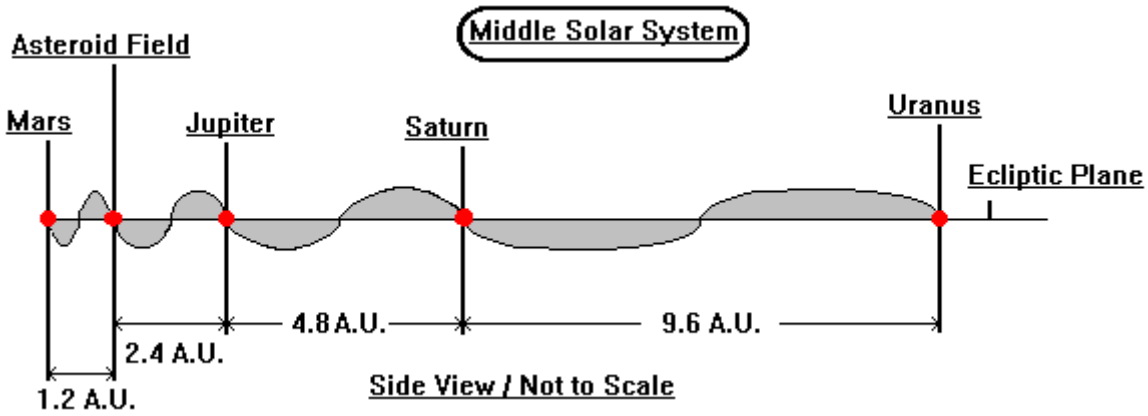
この軸現象の 1 例は、C.D Dermer.の調査から、オンライン科学ニュースの中に来て[２]引用され た。

（J.D.）Kurfess と W.R.パーセルと他の人はこの反物質と熱いガスのジェット噴射を議論している。

「我々には、この放射がどのように発生すると考えてよいかわからない」と、パーセルは言う。

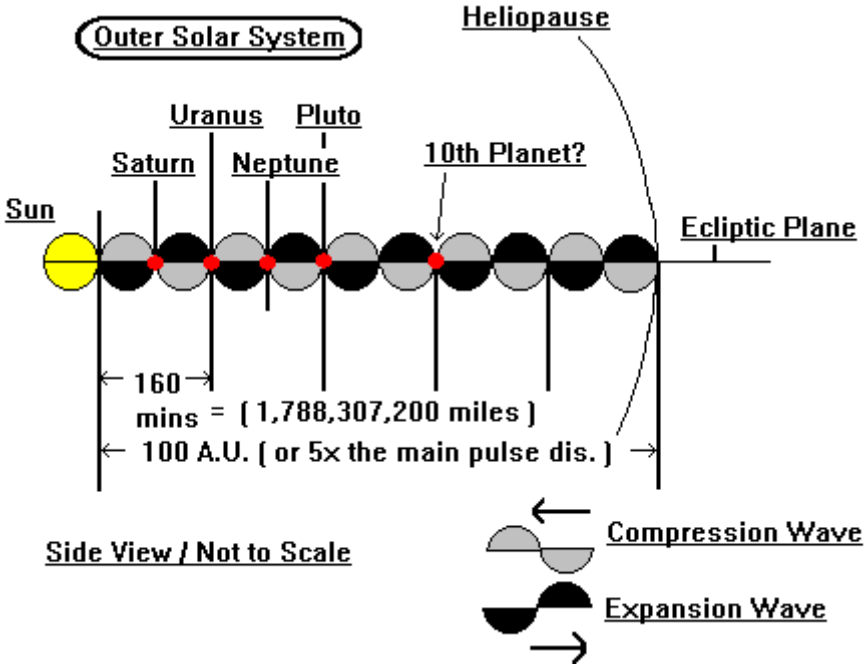
しかし GRO マップは、銀河の中心で高高度の放射が普通の放射と連結していることを示す。その解像度は制限されたものだが、地図は、中心から上がる放出は、物質と反物質の流れの一部であることを提示する。





ラジオ・イメージは、似た経路を暗示している。
ある種の活動は、「集結して、我々の銀河の面に穴を開けて壊し、ガスを銀河の後光へと注いでいる」と、Dermer は主張する。
崩壊している放射の源には疑問の余地があるが、銀河中心の密集した近辺にはこれにあたる候補に不足することは、ない。
1 つの有望な容疑者は、（天の川の中心にあると考えられる）ブラックホールで、質量はおよそ太陽の 100 万倍に見積もられる。
ブラックホールは、グロスに観察されたガンマ-光線放射を引き起こすことができ、

物質のジェットと、放射をうむと思われる。



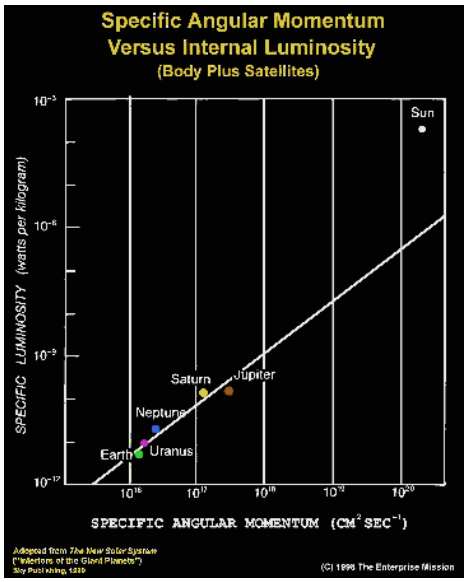
：

[強調を加える]

さらに、池端ほかは、宇宙の A1 と A2 の交差する動きである我々のモデルとおよそ重複する、銀河の進行中の逆回転する流体力学過程の形の、基礎が、研究所で安定した形で、つくることができることを証明した：

http://newton.ex.ac.uk/aip/physnews.393.html#3

研究所の中の天の川？



（銀河系に似た）粒子密度が螺旋形につくられたパターンをもったプラスマが研究所で安定してつくられた。そして、我々のホームである銀河の構造に重力よりむしろ流体力学効果が関係するかもしれないという可能性を与えた。
日本の研究者（茨城大学の池端タカシ、ikehata@ee.ibaraki.ac.jp）は、冷えた、静止したアルゴン・ガスに、熱いアルゴン・プラズマ（超音波の速度で回転する）を注入して、プラスマを回転させ続ける限り、それが螺旋腕の構造を持続させることを観察した。（チャージされた粒子の低密度のハローを放って）
回転によって導入される外部の「遠心」力のため、その熱いプラスマの中に現れる渦は概して螺旋になった。
奇妙なことに、ガスとプラスマの間の流体力学相互作用が螺旋形成過程にとって主要なことを示唆し、静止したガスがない場合、螺旋構造は、発生が見られなかった（池端ほかの、物理的再検討の手紙、1998 年 8 月 31 日。）[強調を加えた]
池端ほかの.実験では、熱いアルゴンプラスマは非常に高速度で回転させ、冷えたアルゴン・ガスは、動かさないままだった。
静止したガスが非常に回転しているプラスマに対して抵抗を提供する時、
A2 の反時計回りの動きが A1.の時計回りの動きに抵抗するのと非常に類似した、互いに逆回転するフィールドの 1 つの状態をつくる。
そして、ポール・ウェッソン博士は彼の論文の 2.17 セクションの中で、言う。
「銀河構造の 2 つの標準理論には、大規模な構造の起源の理論のように、明らかに特別要素が含まれている。」
それから、2.18 セクションで、彼は言う、
「基本的な物理学を試験するための「銀河の回転と、起源で問題を含む、良いデータを一式提供している。」
そして、ブラックホール問題について、このモデルはこれらが存在しないと言うにいたってはなんと言っていいのだろう？
ＣＮＮウェブサイトに関する最近の記事は、主流界の“aetheric”な解決を実際示した：
(CNN) ーブラックホールは矛盾で満ちていると主張し、これらが星を内側に破裂させるより天文学者はもっともらしい運命を考案した。
アメリカの 2 人の科学者が量子物理学的説明を提示した、それは極めて不安定で捉え難い空間内部で巨大な瀕死の星が gravastars と言う、とても高密度物質のシェルに変化するという。最初のブラックホールの提示者は、光の粒子から重力まですべてに影響を及ぼす宇宙の飛躍的変動を知らなかったと Mottola とメーザーは、述べた。
「我々は、通常この量子媒体[すなわちエーテル]に浸された中にいることを知らない
「Mottola は、ニュー・サイエンティストに書き込む、
「穏やかな池の魚のような」彼は全ての水分子を絶え間なく揺すっていることを知らない

（崩れている星の中に）ブラックホールが生まれできる前に、
量子影響は、巨大な破裂の内側で時空を入れ替える、
流動する水が氷になるのに似た根本的な相の移行を開始する。
新しい状態への移行は、重力エネルギーの薄い球状の貝殻によって包まれた凝縮された泡である gravastar という、見慣れない新しい物体の形成にとなる。
物理的再検討の論文が提出された新聞に、Mottola とメーザーは gravastars が物理学の古典的な法則と一致していると主張したがブラックホールのような居心地の悪い矛盾はない。
さらに、これらは地球からは、古典的なブラックホールとほぼ同じように見える。
したがって、天文学者がブラックホールの間接的な証明と考える宇宙の中の密集した混沌としたホットスポットは、同様に gravastars の存在を支持するものでもあると、彼らは言う。
Mottola とメーザーは、gravastar が宇宙の最も深いミステリーに、光を投じることを望んでいる。
　オモイモノ体が、爆発したことを遠い宇宙からの激しいガンマ光線が説明することができた。
彼らはより大胆に、全ての宇宙が巨大な gravastar の中にそれ自身を閉じ込めることができると提案する
天文学者は、Mottola とメーザーのすべての仕事を「ものすごい業績で光り輝く」から、「ありそうもない。」とまで評価が分れる。
誰もが本当のことを知るには少なくともおそらく、10 年かかる。

[強調を加えられる]

そして、「ものすごく輝く」形の gravastar？
あなたは、それを球状円環体の黄道面に沿って発散し放出された“rings”と推測する？。
このように、まだ主流の多くの学者は、仮定は本当には「失われてない」が、ここに、我々は公然と「エーテル」を単にそれを「量子媒体」と言って議論する記事がある、それは水の中の魚のアナロジーとして流体の特性を書いている。

7.6 THE SUPERCLUSTERS

7.6 超銀河団

銀河の集合は球状の超銀河団のなかに入ることが知られている。そして、球状エネルギー・フィールドのより大規模なパターンが働くことを再び示唆している。
（実は超銀河団になるエネルギー・フィールドから銀河が作られたと言う方が、もっと正確である。）

Halton アルプ博士の飛躍的な研究は、
現在の我々の星の距離を計算する方法として「赤方偏移」が知られているが、不正確なことを明らかにした。
そして、一旦我々が導入された歪曲を修正するならば、大多数の超銀河団を見ると、本当の形は球形で、最大の濃度でこれらの銀河が集中している。
これが我々のローカル超銀河団の中心の「乙女座集団」でも銀河の大きな球であることが本当なことを知っている。
Arp の研究も実際クェーサーとして知られている高強度体が新しい銀河の種となる形であると結論する。そして以前の、成熟した銀河から放出された、糸状体に見える線条組織がこれと接続する。
これは、章の後半に非常に詳細に書くつもりだ。
7.7 THE UNIVERSAL SUPER-GALAXY AND SURROUNDING SPHERE

7.7 宇宙のスーパー銀河と周囲の球

最後に、我々は S.N. Kimball のシンメトリーの理論からデータを持ち込む。
最近の宇宙での宇宙マイクロ波の背景放射（CMB）放射線の測定は宇宙の全ての見える物質が「平面に広がっている」ことを確認した。そして事実、ディスク状の巨大な超銀河のようなものがもう一つ作られている。
（2001 年の秋、ＮＡＳＡ科学者は、主流メディアに理論を発表した
逆回転する 2 つの fluidlike エネルギー体に起因する巨大な万能のディスクがありえるとした。そして、再び流体のダイナミックなモデルを持ち込んだ。）
ブローダーストなど、他の研究も同様に、1990 年のペンシル-ビーム・レーザーの探査は、宇宙の中に広大な 128 メガパーセクの長さの真空空間の領域で切り離された銀河の壁があることを明らかにした。
探査では、毎秒 2.5 ギガレンジ giga　par　sec を上回って、観察することが可能な距離に、これらの壁は広がっていた。それは宇宙のビッグバンの仮定の大きさの４分の１である！
物理学ニュースからの以下の記事は、この物体のデータに言及する：
http://newton.ex.ac.uk/aip/physnews.304.html#2
IS THE UNIVERSE CRYSTALLINE?

宇宙は、結晶化しているのか？

天文学者が更に銀河と超銀河団の赤方偏移を測定すると、宇宙の三次元構造はもっと明白になる。
ファイバー・オプティックスと自動測定装置の増加に利益を得て新しい赤方偏移調査は、これまでより遠い空間まで達している。
現在の赤方偏移カタログの新たな分析は超銀河団の周期的な配置の証拠を提供し、それは

120 メガパーセク（およそ 3 億 9000 万光年）のスケールの真空で切り離されている。
このスケールの銀河の大きい壁は認められていた、しかし、明瞭な周期性は新しい事実だ。
研究者は、これらのデータに見られる巨大な 3D-チェス盤構造を説明するのに新しい理論が必要かもしれないと言う。
（J. Einasto ほか、「自然」1997 年 1 月 9 日。）[強調を加えた]
“chessboard チェス盤構造”の外観はたぶんペンシル-ビーム・レーザー探査で見つかった“walls 壁”がおよそ 360 度広がる螺旋を描く腕をつくるためであることが理解されてない。
そして、フラクタルの原則で超銀河は作られている。
そして多くのことがある、:
1994 年に、ラウアとポストマンが超銀河の壁に安定した速さがあり、全て同じ方向に移動していることを発見した？これらは、回転している。

[それを特別に確かめるために、ラウアと Postman は、空独特な速さの完全な研究を実行し、150 メガパーセクの範囲内の全てのアベル集団銀河が Cosmic Microwave Background 放射線によって提供された絶対フレームと比較して 1 秒につきほぼ 700 キロメートルの統一速度で動いているのがわかった。
ラウアと Postman のデータは、それからシュトラウスほかによって 1995 年に統計学的に分析された、
95%を超える、信頼できるレベルで、大規模な回転速度のこれらの観察が正確であると結論し、
このようにプロセスによって大規模に構築する人気のビッグバン・モデルは全て除外されそれに賛成することができなくなる。
図 7.4？
Nodland と Ralson の“宇宙軸”または異方性円錐の発見。
宇宙が最高の銀河の形であることを本当に理解するならば、次の、質問は宇宙的な球は中心軸を持つかということだ。
Borge Nodland とジョン Ralston の異方性の宇宙理論は、それを明らかにする。
彼らは、宇宙の中至る所に存在するねじれフィールドを見つけ、それは当然粒子の回転を引き起こし、移動し、均一に配置されないがゆえに、宇宙的な軸をつくる。
（「異方性の」語は、「等しくない四方八方にということを意味する。」）Nodland と、ラルストンは宇宙の粒子がこの Universal Axis 宇宙の軸に近いほど、よりねじれた螺旋を描いて運動しようとするのを見つけた。；

それは、微妙だが、全くかなりの影響がある。
P.F. シェーヴェと B.スタインによって物理学ニュースの更新に書かれた、
ロチェスター大学のボルゲ Nodland と、カンザス大学のジョン・ラルストンの 2 人の研究

者、は 160 の銀河の運動中の分極化回転データをよく観測してファラデー効果に加えて余分の不可解な角度の関係があるのを認めた。
（bnod@lle.rochester.edu;
716-275-5772）
（ralston@kuphsx.phsx.ukans.edu;
913-864-4020）

本当に、まるで宇宙が軸を持つように空間は一貫した角度で回転する。
1 つのありうる説明は、特別な粒子物理学論による宇宙の異なる領域間の「領域壁」の存在によるかもしれない。
これは宇宙的軸だけでなく我々が論議した“「領域壁」”の「構造の考えを支持する。
Nodland とラルストンはまた、全宇宙の平面ディスクが中心に南北軸をもつ球面トーラス体の形をした球のエネルギー・フィールドに囲まれていなければならないことを効果的に証明した？。
A1 と A2 の渦の流れは軸を通して最大のエネルギー量で螺旋を描く原因となり、そして、そばの全ての物質を最大にねじれ回転させる。
Nodland’s チームはこれを完全な球面円環体とみなさない、しかし、これらのイラストの円環体の中心領域に“double cone”構造があるのを、我々は見ている。
図 7.4 に見るように、軸の 1 つの極は星座アクィラの方にあり、他の方向は六日星座 the constellation Sextans にある。
Nodland とラルストンは、これらの星座の名前に関係する面白いシンクロナイズ現象を指摘する：
奇妙だが、それ自体異方性の方向で、つまり電磁放射の分極化面が多くのものをねじる宇宙コンパスの針の方向で、空間組織がもっている放射方向であるのが分かる。
星座六分儀座が六分儀（旅人が位置を決める古代の海のナビゲーションの装置）を表すことは、注意することは面白い。
ところで、アクィラは天国からの使者である？神話の中の魂を不死に導くワシである。
[加えられる強調]
Nodland とラルストンは明らかに、これを偶然の一致とするが、これらの星座が古代のミステリーの継承者によって名前がつけられたことは確実にあり得る。そして、その人は宇宙的な軸の位置を、よく知っていた。

我々の前巻の第 15 章で指示したように、
太陽系の球面円環体の中心軸は、人間の発展の球の外に魂をより高い面に導くこととしばしば非常に関係している、
アクィラの伝説、ワシが「魂を不死に導く。」

「イグドラシル」として知られているスカンジナビアの世界木は、ワシを球の北極においている。
似た線から、ポール LaViolette 博士は我々の銀河の中心を囲む十二宮の星座が直接その点をどのように示すようになったか教える。そして、再び古代の物理学の知識を提案する。
それで、我々は本当にビッグバンの代わりに膨張する宇宙のモデルを紹介している、そこで、すべては突然、現れる。
これは、一部の人が考えるほど従来の科学的な考えから、遠くはない。
ポール S.ウェッソン博士の言葉を考える：
我々が現在マイクロ波背景放射で同じ温度として見る Photons は、初期の宇宙の原因との（直接の）交信からみると互いの地平線の外になければならなかった。
適切な修正は、初期時間におそらく指数関数的急流、拡大の相を持つことである。
この膨張の考え方でいいのか？？現在、重要な論文は、そうなっている。
しかし、エネルギー源は確認されなかった。
[加えられる強調]
簡単に、全ての物質-エネルギーがビッグバンで自発的につくられると思ったこの方法では、一緒に 1 つの地域に完全に詰め込むことができなかった。
未確認のエネルギー源は、A1 と A2 の反回転の動きである。

7.8 THE UNITY OF THE HARMONIC RATIO OF 34560

7.8 34560 の調和的な比率の統一

これまで集めたあらゆるデータは、説得力のある論拠をつくる。
そして、上記の事実に加えて、我々は単純な音楽の（調和的な）原則に従って動く球状振動（波動）の統一されたシステムを扱っていることを思い出さなければならない。
現在、我々がそのようなモデルが本当に正確なことを証明したいならば、持続した調和的な統一を宇宙中至る所に見つける必要があるだろう。
物質-エネルギーのあらゆる物体が大きな中心発振器からの流体状の“aether エーテル”からつくられているならば、全てのサイズのレベルで、既知の全宇宙の“支配的関連”をつくる一つの音楽の比率がなければならない。
論争の的となる物理学者レイ・トームズは、和声学または音楽の振動の科学によって、この本当に全てのパズルを統一する不可欠な新理論をだしむた。
大きな中心太陽はそのリズミカルな動きを続け、我々が言ったように、音楽と振動の法則が支配するように放射される波-パルスがつくられる。
宇宙で例えば月、惑星、太陽、銀河と宇宙のように全ったく異なるサイズの球状円環体エネルギー構造が生じる。
奇跡的に、トムスは宇宙の中の各々のサイズ・レベルのこれらの球面エネルギー形態の全

ての間の平均距離が正確に一つの音楽の比率で相互関連することを発見した？
34560.
月との平均距離を得て、それに 34560 を掛けると惑星間の平均距離を得られる。
- 惑星間の平均距離を得て、34560 をそれに掛けると、恒星の間の平均距離が得られる。
星間の平均距離を- 34560 倍すると、銀河の間の平均距離を得る。
銀河間の平均距離を得て、34560 倍すると、既知の宇宙の大きさを得る。
これは、Cosmos に「フラクタル」組織があることを示唆し、「全てのレベルに自己相似性がある。」ことを意味する
幾何学的な形がフラクタルにつくられ、数学的に指数的に拡大することができる、
そして、あなたが物質がない形まで深く「ズームイン」しても、同じ幾何学的な構造を見る。
多くの“Chaos”理論家は、宇宙が異なった不思議な多くの方法でこうした論理によって働くのがすでに分かっていた。
驚くべきことに、我々が次のチャートに見ることができるように、34560 のこの同じ正確な調和的な比率は宇宙に広げることができるだけでなく、圧縮することができる：
- 34560 の要素で 2 回、月との間の平均距離を圧縮すると、植物または動物どちらでも、細胞間の平均距離を得る。
- 34560 によって細胞間の平均距離を圧縮すると、原子間の平均の距離を得る。
- 34560 によって原子間の平均の距離を圧縮すると、宇宙の中で最小の自然の“particles 粒子”である核子間の平均距離を得る。
この次の図はこれらの関係の全ての支配関係の概要を示す。そして、全世界が 1 つの巨大な、統一された計画通りに相互関係することを強烈に証明している：
Figure 7.5？
図 7.5？
Ray Tomes’ discovery of the unified ratio of 34560 in the Universe.

レイ、トムスの宇宙の中の 34560 の統一された比率の発見。

どんな精巧な調整も、簡略化、または数学的なマジックのペテンを必要とせずに、このような単純なシステムが超銀河のレベル量から生きている細胞まで機能可能なのは、文字通り全く不可能である。
（例えばコペルニクスが太陽系の中央に太陽を置く前に、地球中心の主流科学者は、数学的に、惑星が時折後方に移動する（すなわち「後退する」）ように見える理由を説明するために、これらが夜空でこれらの黄道面を移動するように精巧な「回転円」をつくって「調整する」。）
トームズは主流科学的研究から出てきた各々の平均距離数をあげどんな形であれトームズは「本を料理し」懐疑論者の議論に有効性がないようにした。

トムスは、単にこれらの異なる種類の球面エネルギー形の各々は、分割され、単独で相互に関係し、ハーモニックな比率が支配しているのを発見した一人であった。
一旦我々の新しい量子物理学調査結果を統合するならば、現在本当に、そのモデルに完全性があるのを知ることができる。
さらに、34560 の比率の有用性はちょうど今述べた著しい事実だけで、終わらない。
エーテル振動の他の形である、例えば光速と他の振動/波動の基本的速度の違いは 34560 のハーモニックな支配を同様に示す。
この証拠はダンウィンターの仕事から来る。そして、その人はさらにトムスによって発見された関係を調査することに入った。
Winter の仕事で 1 つのハーモニックな例として、水中の光速と真空の中の光速との 2 つの振動数の間にほとんど正確に標準の音楽の関係がある。？
面白いことに、
-光速を 34560 で圧縮すると、音の速度を得る。
-音の速度を 34560 で圧縮すると、熱の速度を得る。
もちろん、これは次の非常に単純な概念を露す
光速は、宇宙の中の最高速度では決してない？我々がすでに言ったように、我々自身の密度の領域のエーテルの中を単にエネルギーが移動できる最高速度を表している。
他のより高密度の領域では、光のより速い速度が、コズイレフのねじれ-波フィールドでの観察のように、起こる。
「時代の変化」では、ブルース・キャシーから光速が完全なハーモニックな数値である証拠を詳述した。
最初に、キャシーは彼が「グリッド秒」と呼んだ 8 のシステムの代わりに、9 のシステムから確立された秒より少し短くなっているが、密接に関連する時間単位を使った
（すなわち 8x3=24 時間（9x3=27「グリッド」時間)。）
キャシーは、地球がどのようにハーモニックな寸法であるか教えた、
例えば理解するために赤道から 1 度 1 分 1 海里で、
完璧なハーモニックな物差しを表し、宇宙的なエネルギーを測定する。
（地球がハーモニックな原則に従って出来ていなければならないことを思い出すと、これは偶然ではない。)、そして、キャシーは真空においてセカンドグリッドごとに通り抜ける海里数で、光速を計算すると、正確に 144,000 になった！
144 は、12 の二乗で、音楽の振動の科学の中で重要な数である。
さらに、ランバート・イルカとバリーSetterfield の仕事は、それが最初に計算された時から、光速が着実に少量減少していることを決定的に証明した。
この発見は、文字通り 1980 年以前の歴史上に起きた光速のあらゆる研究のメタ分析から生まれた。
我々はこのかなりの光速度の低下が我々が銀河の中のより高い aetheric な密度の領域へ引

っ越す準備をしており、我々が現在遭遇しているエネルギー的な境界線の強さによると思う。そして、それはこの本の中心テーマである。
今のところ、我々は単に光速が 34560 の同じ宇宙的なハーモニックな比率によって、直接音と熱と関連することを思い出さなければならない。
我々が物質の密度を議論するとき、我々が 34560 の比率を見つける可能性を探りたいならば、我々は立方体の和声学、すなわち我々が二次元の距離の構造の代わりに三次元構造を 34560 の和声学として 3 回の累乗で、扱うのを見る必要があるだろう。
我々がこれを考慮して宇宙における物質の密度を考えるとき、以下の面白い関係が出てくる：
-34560^3 乗によって普通の物質の密度を圧縮すると、中性子星（宇宙で最も濃い物質と考えられる）の密度を見つける。
- 普通の物質の密度を（34560^3)^2 乗で緩めると既知の宇宙の密度に到着する。そして、それは現在主に“真空”の空間と言われているところである。
トムとウィンターの全ての観察は、宇宙的な球の中心発振器が全てのエーテルを通して波動をつくっているという考えを補強するだけである。
これらの波動の全ては（時間間隔が大きくても小さくてもどちらでも）秒の時間間隔の正確なハーモニックな倍数である、そして、この初源的なハーモニックな波長は全てのファクターで 34560 の比率である。
トムスは 34560 のハーモニックな比率が他の星と惑星の間で間隔を決定することができることを証明したが、34560 の比率は確かに最も支配的である。
彼の研究は、我々の近くの星の全ては、これらの相対的な距離に関して互いに正確なハーモニックな関係にあるという完全な決定を含む。
中心発振器概念も、Kozyrev の実験のように螺旋を描きながら aetheric な波を観察する理由を、説明する。
たとえ宇宙の球のどこに我々がいても、絶えず複数種類の aetheric なエネルギーが動いている：
球の回転と中心発振器から波動パルスが流れ出て行く。
これらの動きは、宇宙の中至る所で全ての異なるレベルサイズで複製される。
このように、あなたが aetheric な媒体を通り抜ける波を引き起こすどんな時でも、様々な動きが交差する幾何学的方法で、波は常に渦巻線で移動する。
7.9 COMPLETE EVIDENCE FOR THE CENTRAL OSCILLATOR SYSTEM

7.9 中心発振器システムの完全な証拠

次の問題は、これら基本的概念が証明できるかどうかということである。
我々が最後の章で提案した“Central Oscillator 中心発振器” の全複合体の概念の完全で統一された例を本当に観察することは可能か？

この作業のための我々が最初に選ぶものは、銀河かもしれない。
これまで我々自身がいる銀河の写真を 1 枚も撮らず、大部分の単に理論的にその存在を推論するだけの人々は、まだ銀河の中心はブラックホールであると思っている。
我々がビッグバンを処理するとき、ブラックホール概念は物理的概念の代わりに数学を使って宇宙を理解する人工品で、もはや必要でない。
実は我々自身の銀河の写真証拠を見ると、予想通り単に射手座 A に圧縮した、明るい集団がある、そして、大部分の天体物理学者は中心の明るい点の後に、ブラックホールが隠れていると言う。
「第 7.5 節で見るように、主流科学者は現在、ブラックホール論が誤りであったと認めている、、ポール La ビオレット博士、Halton アルプ博士その他は、長くブラックホール論を偽造してきた。
我々は、それが、実際、脈動している運動を示しているか確かめるために自身の銀河の中心の形を詳細で十分な観察をまだしていなかった。
しかし、我々自身の太陽系で、この“Central Oscillator”システムを完全に研究する素敵な機会がある。
オリバー・クレーンの仕事によって、完全なメカニズムが推論された
が、我々がレイ・トームズの仕事に、J.B. Stoneking の共鳴理論を、特に持ってくるとき、本当に確固としたものにできるだけである
「我々の最初のミステリーの一瞥は、1766 年の J.D.ティティウスの
1772 年に J.E.ボーデによって発表された「ボーデの法則」として知られている、ものの発見から生まれる。

「この発見で、惑星位置が本当に音楽の一定の間隔によって間隔があけられていることが分かった。
天王星を除いて 95%以上の精度を示した、この理論は 1 世紀以上の間広く受け入れられたが、海王星の発見後、結局捨てられた。それは完全にボーデが述べた単純なパターンを破壊した？そして、パーシバル Lowell’の冥王星の発見はそれを更に悪くした。
しかしトムズと、J.B. Stoneking は、間違いを訂正し、図 7.6、7.7 と 7.8 で見られるように、より長いハーモニックな波長を見つけ海王星と冥王星が本当に彼らの適切な“音楽的”場所にあることを示した。
さらにもっと驚くべきことに、我々は現在、太陽が本当に中心発振器であるということを知っている！
1962 年に、R.レイトンほかは、太陽の表面が規則正しく脈動していることを発見した。

1970 年代初期、アメリカ、ロシアと英国のいくつかのグループは、それを確かめた
太陽は、本当に安定したパルスで振動していた、

その表面はおよそ 3 キロメートル（1.86 マイル）上下している
このパルスは、正確に 5 分の、これ以上でも、以下でもない時間単位を基本として、いろいろなハーモニックな間隔で発生し、それは最大値で 160 分まで上がる。
（太陽に正確な 5 分の鼓動があるという事実は、宇宙の中の中心発振器が完全に秒の倍数で脈動していることを示す。
この理由のため “共通時間定量 Quantum.” として秒に言及することがある）
フランス、ソビエト、アメリカの一連の科学者が、5 日間連続して太陽を測定するために南極大陸に集まり南極で慎重に観測したとき、この影響に対する全ての疑問は除去された。
12 月下旬の、南極で 1 日２４時間の間連続的に太陽を狙う;
この環境では、決して装置の「設置が出来ないので
彼らは、「普通の良い天気で 24 時間交替制で、3 キロメートルの波動振幅と 160 分の振動期を同様に観察した。
次の図は Stoneking の仕事からのもので、太陽の波動によってつくられた波とこの波が惑星を回転させる方法を示している：
図 7.6 と 7.7？
Stoneking の共鳴は内部と中央の惑星位置に影響を及ぼす。
J.B. Stoneking の 1998 年の論文の中で彼は、太陽が生じる異なる各々のハーモニックな音程（例えば 5 分のパルス、10 分のパルス、80 分のパルス、160 分のパルス、その他などの）によって生じた波長を計算した。
太陽から特定の距離離れてこれらの波長の存在が、計測された。
波長を計算するのは、単純な数学的な問題で太陽の表面が各々のパルスで動く
距離（2-3km）と光の速度（毎秒 186,000 マイル）で移動する各々の（5 分間隔の）パルスの波の時間間隔を含む。
Stoneking がこの計算をしたとき、（それは彼の論文に発表されたが）画像に見るように、発見した各々の波長の端に、惑星があるのがわかった。
波長のこれらの「結節点」は最少の圧力の地帯で、そこでは、全ての振動は相殺され、惑星が形成されるのが許されている。
さらにまた全ての太陽圏は、正確に深い 5 つの 160 分パルスが太陽の磁場によって作られる。
図 7.8？
太陽系の外での Stoneking の反響。
さらにまた、Stoneking は、各々の惑星が太陽の直径の正確な特定の数値の場所に太陽から離れて置かれることを発見した。
各々の惑星軌道は、Sun の波動によって作られる「波紋」の 1 つに全く一致しているようになり、それが巨大なドラムのように共鳴する。

上記の図は、外惑星だけが太陽の直径と調和するように見える、しかし、図は一定の比率でない？
そして、太陽の直径は、実際は、160 分のパルスより非常に短いい。
オリバー・クレーンが彼の“Central Oscillator 中央発振器”の論文で推論したこの惑星位置のハーモニックな関係は確実な科学的データがある。
もう一度、偉大な中心太陽に関する我々の最初の議論を考えよう
入れ子にされた球状エネルギー振動の「タマネギみたいな」形を作る方法は互いを妨げる球状パルスの「波紋」に起因しており、これらは出て行ったあと反射し中心の方へ後退する。
我々自身の太陽系の中の見えないエネルギーの球の、これらの位置で、惑星が保持されていると理解しなければならない。
通常、我々は単に移動方向に楕円の線を描くことで、惑星軌道を思い浮かべる、
しかし、現在は惑星が見えない球面の波形によって適切な場所に保持されているものと見なければならない
そして惑星は、太陽と太陽圏がつくられる元となる全体的な A1 と A2 の回転によって、黄道面に沿って回転する。
ある球は、他より「平らにされ」、円形の代わりに楕円軌道を作る、
そして、これは主に太陽系もまた移動しており、銀河系の力によって、、影響を受けているという事実による。

太陽系のハーモニィに関する詳細な情報は下記のロバート・グレイスのページを参照してください。
http://hometown.aol.com/MetPhys/97planetmusic.html。
多くの人が、偶然単独でこれらの関係を発見した。
我々は、太陽系の最も完全なハーモニックな解析が、「黄金の時間尺度とマヤ暦」と表題をつけたセルゲイ、スメリャコフ博士の仕事にあるのがわかった、それは後の章で、詳しく特集する。
このように、太陽系の真実のエネルギー的構造を見るとき、それが脈動し、太陽のそばにつくられた一連の入れ子にされた球面エネルギーの形を見る。
これらは３次元に存在する球であることを現在思い出すとこれらは、ただ黄道面に沿っているだけではなく完全に太陽を広い層で広くとり囲む。
通常、我々には完全に見えないが、前巻でイニシェイションされた者と、神秘主義者によって体外離脱状態で見たという詳細な例を報告した。

東洋人の、文化は竜を知恵と同等視するが、この資料は同じように Poimandres という名前をつけられた宇宙的心を象徴した竜によって訪ねられた古代のトトメス Thothermes

Trismestigus のヴィジョンまで戻る。
正確にことば通りに繰り返すことに値する 2 つのとても意味深いキーポイントが、Stoneking の論文に書かれた。
地震学者によって科学ジャーナル（1998 年 3 月 27 日、頁 2089）にレポートが公表された。
スダ、ナオキ氏他は、彼と彼のチームが得た証拠から地球が一定の振動状態であることを示すのが理解されたと述べた。
彼は、その振動数が 2-7 mhz の間にあると報告した。（.002-.007Hz。）
この 2mhz を波長に変換するなら 93,141,000 マイルに等しい。偶然の一致としてもこれは地球惑星軌道の半径に近い[すなわち太陽から地球の距離]
またこの振動数のスペクトルは、太陽の反響するパルス波長の 2 倍である。

（太陽の直径 x 2^5 = 27,680,000 マイル、6.7mhz、
そして、太陽の直径 x 2^6 =、55,360,000 マイル、3.3mhz。）
2 つの同じ振動数には、金星から地球の距離（.3AU）と火星から地球の距離.6AU。）が関係する
[加えられる強調]
ここで飛躍して、
惑星の共鳴周波数のうちの 1 つは、その平均軌道の半径と等しく惑星間のプラズマにこの反射波を発すると仮定してみよう。
他の証拠は、この考えを支持することができると思う？
我々が太陽系の中の最大の惑星、木星の太陽系での軌道を見るならば、それが Trojans として知られている 2 つの小惑星のグループに影響を及ぼすことを知る。
[これらのグループ]は木星軌道の 60 度後ろと[60 度] 前方の位置]にある。
（太陽から木星まで直線を引き、太陽から先の線に対して 60 度の角度で木星の軌道と交わるまでひくと、軌道上で前方 60 度後方 60 度なのだから]どちらの終点にもトロイの木馬 Trojans を発見する。）
知っているように、三角形の内角は 180 度に等しくなければならない。
太陽から Trojans、そして木星に直線を引いてまた太陽まで直線を引いて戻るなら、Trojans、木星と、太陽、は 3 つの 60 度内角の完璧な正三角形をつくる。
これら全ては、木星が 4 億 8330 万マイル離れた太陽から生まれたのと、同じように Trojans が遠く離れた木星から生まれたことを意味する：

[加えられる強調]
上記の最初の点は、我々に
地球の動きと、それ自身のハーモニックな振動率が、太陽からの距離と密接な関係があるのを見せてくれる。

これはこれらの間の空間の存在する“量子力学的媒体物”で、可能なだけである。
そして、Stoneking が言及した太陽と、木星、Trojan の小惑星の「三角形構造」は、幾何学的な力がエネルギー・フィールドで作動中であることを示唆し、
前章で見たように量子レベルで観察したホログラフィー的な整列がうまれることを、論議した。

7.10 CONNECTION BETWEEN SOLAR SYSTEM AND NEW QUANTUM PHYSICS

7.10 太陽系と新しい量子物理学間の関係

太陽系を我々の量子モデルに関係させた重要なもう一つの発見はリチャード・ホーグランドとエンタープライズによって発表された。それはトム・ビアーデン中佐のパイオニア的な仕事の影響を受けた。
前巻の１２章で、惑星の変則を調べ、惑星が赤外線のスペクトルで太陽から流入を受けるより、かなり大きな熱エネルギー量を持つのが見られた例を若干書いた。
この熱が来る原因について、異なる理論が主流から提案された、、ビアーデン、ホーグランドほかは、この理論が誤っているとする証拠を示した。
次の数値の中に、我々はビアーデン、ホーグランド他のパズルの解答を見る？すなわち、各々の惑星が宇宙の外へ放射する熱エネルギー量は、直接、どれくらいの動きがその内外に起きているかということと関連する。
図 7.9？
太陽系に広がる熱放出と角運動量との関係。

この理論はエンタープライズミッションの会議室でそれを議論した多くの参加者を混乱させた。
キーは、計算された角運動量が本体に衛星をプラスしたものによるという事実にある。
地球は、それ自身の軸を中心に回転しつつ太陽を中心に回転し、そのうえ、軌道上に月がある。
グラフの軸の基底にある地球の 10^16 よりわずかに多くの数値は、このシステム全ての動きを集めた合計である。
天王星、海王星、土星、そして、木星の特定の角運動量は、惑星自体の中と、その月の中全てで起きている機能の動きの総量の現われでもある。
物を囲むその勢いの量と総熱放出量との間に非常にスムーズな関係があることは、グラフから明白である。
さらに、我々が現在持つデータを、同じ関係からみると太陽がその場所に適合しないように見えるのは明らかである。
この矛盾は、まだ見つかっていない少なくとももう 1 つの惑星が太陽系になければならな

いことを示唆する。
一旦我々の太陽系の軌道に乗って回わる物体全てが知られ、測定できたならば、太陽がまた、この線に完全に一致すると予測される。
これがどのように、量子物理学と関連するか？
それは、むしろ実際単純である。
エーテル的なエネルギーは物体または物体のグループへ流入し、角運動量はシステムでより増加しようとする。
このエネルギーとの関係は、物体が放出する光のエネルギー量（光度）で、見るか赤外線スペクトルで直接判断することができる。
惑星が“真空”の空間で本当に互いが切り離されているなら、そのような関係は不可能だろう。
しかし、シュスターの仮説として知られているこのモデルでは、惑星または星は、エーテル中を動き、エーテルは、それ自体に多くが集まろうとする。
我々の量子モデルでは、Biefield-ブラウン効果に見るように電子雲のネガティブチャージはポジティブチャージされた核に明らかに注いでいる。
実は非常に微小レベルの、この原子核は、音ルミネセンス実験で見るように、地球、または太陽自体から発散する熱のプラズマのような、発光プラズマの形になっている。

原子核の中の発光エネルギー量は、どれくらいのエーテルがそれへ移動したか、直接あらわす機能である？そして、核に入るエーテル量を角運動量機能で測定できる。
この太陽と惑星の関係は、太陽の総エネルギー出力が周囲の惑星、月、彗星と他の物質の動きの量と直接関連していることを示す。
この初源的な物体で aetheric なエネルギーである A1 と A2 の動きは物体へ流入している。
7.11 INDEPENDENT PROOF OUTSIDE OF OUR OWN SOLAR SYSTEM

7.11 我々の太陽系の外側の証拠によると

太陽系のこの aetheric なモデルが本当に真実ならば、特に Stoneking の言うように正確な反響の現象を見るとき、非常に類似した有効な構成が他の惑星全てのシステムの中に存在しなければならないだろう。
我々が「時代の転換」に報告したように、人類が最初に見つけた 2 つ以上の惑星をもつ惑星外システムは我々自身の太陽系と正確に同じ特徴を持つのを確認した。
イスラエルの天体物理学者 T. Mazeh と I.ゴールドマンは、パルサーB1257+12 は少なくとも 3 つの惑星がそのまわりの軌道に乗って回り、互いに対して相対的に水星、金星と地球と同じ比率のサイズを持つのを観察した。
これらは互いに相対的に、水星、金星、地球と、同じ距離である。
前にジョン・グリビンによってロンドン（イングランド）のガーディアンに報告されたが

このことは、非常に速く忘れられた：
PLANET SYSTEM DISCOVERY REVEALS STRIKING SIMILARITIES
ロンドン、ガーディアンによるとジョン・グリビンによって
惑星システム・ディスカバリーは、著しい類似を明らかにした
惑星システムデスカバリーは、PSR B1257+12 として知られているパルサーは軌道に乗って回る 3 つの惑星で、太陽系の内部の、水星、金星と地球と正確に一致する特性をもつ。
この類似は、惑星の特定の軌道が常に特定のサイズになることを確実にする自然法則があるかもしれないと思わせた。
それは
[ボーデの法則]として知られた多くの天文学者が単なる数理神秘学として退けたが我々の太陽系の惑星の軌道に関連する数学的関係が信頼できるもので重要性があるという結論に導く。
PSR B1257+12 は、我々の太陽よりわずかに多くの物質を含んで、速く回る中性子星である。それは、直径 10 キロメートルの球に包まれる。
星が回転しながら、地球上で観測出来る無線周波数の雑音を規則正しく間隔があいたパルスを発し、灯台からの光線の様に、それは無線周波数の雑音の光線をまわりに振りまく。

3 つの惑星は、直接見ることができず、これらが旋回し、pulsar のパルスの状態を変化する方法で現れる。
3 つの惑星は、それぞれ地球の質量のざっと 2.98 倍と等しい質量、地球の質量の 3.4 倍、地球の質量の 1.5 パーセントであることを示す変化するパルスに現れた確かな情報がある。
そしてこれらはパルサーから、それぞれ、
太陽-地球の 47 のパーセントの距離、
太陽から地球の 36 パーセントの距離、
太陽-地球の 19 パーセントの距離、に等しい距離の間隔があけられる。

観測された 3 つの惑星間の距離の比率[1：0.77：0.4]は地球、金星と水星の距離の比率に、とても近い。そして、それは 1：0.72：0.39 である。
そして、太陽系の 3 つの地球型惑星の質量は、地球質量を 1 とすると、地球質量の 82 パーセントと地球の質量の 55 パーセントである。
各々のケースで、外の 2 つの惑星は、大雑把に言えば同じ質量で、内側に非常に小さな質量の仲間を持つ
星のまわりに惑星形成のための宇宙のメカニズムがあることを示している。
パルサーと我々の太陽と同じように多様なシステムでも働くならば、全ての星でその可能性が働くということである、そして、我々自身の“太陽系”システムが例外というよりむしろ天の川の星の中の規則かもしれない。

宇宙ネット Astro Net.から再版された。
このように、グリッビンが言ったように、B1257+12 で観察された最初の試みから、他の全てが最終的に類似した特徴を持つとわかり、マルチ惑星システムが発見されると予測するのは簡単である。
我々が見る場所に関係なく惑星形成のメカニズムは、同じものである。
B1257+12 が中性子星であるので、それは宇宙の平均密度より、正確に 34560 は、3 乗濃密であるのを忘れるべきではではない。

7.12 RHYTHMIC OSCILLATIONS OF ALPHA CENTAURI A AND R SCUTI

7.12 ALPHA　CENTAURI　A と R　SCUTI のリズミカルな振動

我々はこの章の前半で、太陽が正確に 5 分間の鼓動が測定されたと書いたのを思い出す。
面白いもう一つの事実は、アルファ Centauri A（我々の太陽系で最高に明るい星）が表面に正確に 7 分間の波動を持つのが測定されたということである。
これはヨーロッパの南天文台（ESO）の、F. Bouchy と F. Carrier が Coralie スペクトルグラフ(分光写真)を使って発見した。
これは、近隣の星で、完全にハーモニックな秒と同調する波動を、再び見つけることができた最初の時である。
2001 年 7 月の BBC ニュースの記事が示すように、
それは、875,000 キロメートル（544,000 マイル）の半径の星で、40 メートル（131 フィート）だけ収縮膨張して「呼吸する」。
最初の太陽系外の波動もまた、分の偶数倍の長さを持つことは非常に魅力的である。
“中心発振器”のモデルも、特定の星でパルス/波動の複数のモードが同時に起こることを示唆する。
これは、5 分から 160 分までいろいろな長さのハーモニックなパルスが太陽で見られる、
そして、現在 Alpha Centauri A のようには有名でないが、R Scuti 星の明るさの変動も注目されるべきだ。
物理学ニュースの次の抜粋は R Scuti 星は“chaotic、カオス”またはフラクタルな振動パターンを示すと言っている。そして、同時に、2 つ以上の異なる振動のモードが起きていることを提示する。
ここで、我々は学術用語“chaos カオス”がカオス理論の用語で“hidden ordr 隠れた秩序”と同義であることを思い出さなければならない：
http://newton.ex.ac.uk/aip/physnews.215.html#2
CHAOTIC PULSATING STAR:

カオスとして脈動する星：

R Scuti 星の詳細な観察は、その変動する光放射が数学的なカオスの定義に従うことを示す。（J.ロバート Buchler ほかの、1995 年 2 月 6 日フィジカルレビューレター、）
フロリダ大学のソルターン・コーラスによれば、これは最初の星からのカオスの放出の強い証拠である。
彼と彼の同僚は、15 年にわたって多数の天文学者によってとられたデータを集めた。
秒は、宇宙の全てに「起きた」運動を統一するための時間単位で、これらは、星の光の曲率、（時間機能を示す放射で）つまり、星でのわずかに異なる 2 つの振動モードのような複雑に変化するパルス波動での共通部分に生じるかもしれない部分に注目し、推論する。
（1995 年 2 月 18 日、科学ニュース。）
更に、この自然の観察が何度も続けると、波動の時間単位として秒の重要性がたぶん明らかになる。

7.13 PROOF FOR THE SECOND AS A UNIVERSAL TIME QUANTUM

7.13 秒が共通時間量子とあることの証明

さて、さらなる適切な情報で、我々は、秒と呼ぶ時間単位が本当に宇宙の振動の標準であるという我々の議論の証明に戻る。
まず最初に、1 日２４時間/1 時間/60-分/分-60 秒の時間を測定するシステムがシュメール人から来たことを我々は知っている。
ゼカーリア・シッチン、ロイド Pye その他の仕事は、地球外の援助の広範囲にわたる認識をもたらし、それは天から地球へ来たアヌンナキまたはネフリィムによって古代のシュメール文化に与えられたものとして知られている。
「我々の前の作品の両方で、秒は Cosmos 起こっている全運動を統一する時間単位とみなした。
3 つのキーポイントは、以下の通りである
Nineveh の定数はシュメールの粘土タブレットによって見つかり、ＮＡＳＡ天体物理学者モーリス・シャトランが解読した。その人はアポロ宇宙船のための巨大な軌道計算を扱った。
Nineveh 定数は、全ての惑星軌道が 1 つの基本となるマスターサイクルから完璧に細分化されたものであることを示す。
このサイクルは、正確に 70 に 6 0 を 7 回掛けた秒の数値として表される、あるいは、（70*60)^7.
我々の太陽系のあらゆる既知の物体は、秒に至るまでのマスター数の範囲内に、完全な軌道サイクルの数値を持つ！
各々の惑星の単純なアナロジーは、12 の卵を正確に卵ケースに入れる方法である;

惑星軌道のサイクルの各々の特定の数は、一秒も残らず完全に Nineveh 定数に適合する。
たとえば Nineveh 定数には、冥王星の 25,000 サイクルがある、そして、ハレー彗星の 81,000 サイクルがある。
Nineveh 定数は、非常にラフなものでおよそ 620 万年の長さである。
また、Nineveh 定数は、マヤ暦に記録されたよりも長い数値の低調波 sub-harmonic である。
Nineveh 定数が太陽系を統一するのと同じように
ウィルコック定数は、銀河全てのあらゆる物体を正確に同じ方向で調和させて全ての軌道を相互に関係させる。

この数は、60 に 0.7 を正確に 9 回掛けたもので、あるいは、(.7*60)^9.
その軸で銀河系が回転するには必要な真実の時間の正確な数値は、非常にラフで 2 億 2350 万年、一般に引用される数値で 2 億 2500 万年だが、秒で、形づくられる。
さらに、ウィルコック定数は、Nineveh の定数の、正確に 36 倍である。
更なる発見でこの銀河定数が全惑星システムのためのマスター・サイクルであることを確認する可能性は、非常にある;
そして、前巻において理論上の基礎が与えられすでに利用できる、最高の光速度宇宙旅行技術によって、この発見が、なされる。
宇宙定数は、ヘンリーB.マイヤーズ博士の仕事に、最初に見られたが、
その詳細な数学的な分析は、全ての宇宙的な球は、全てのライフサイクルの間、完全に 1 回転をするだけであるのを示唆した。
古代のヒンズー・ベーダの科学的な知識と統合したマイヤーズの計算は、
宇宙の本当の理論上の時代サイクルの長さは、
正確に 120 ウィルコック定数にとても近く、またはそれはおよそ 260 億、8 億 2000 万年であるとする。
現時点でマイヤーズは、我々がこのサイクルの途中で利用できるだけであると見積もる
Myers の仕事は、古代のベーダの天文学者が同様にこのサイクルを知っていたことを証明する。
これらの定数は ‘偶然’という可能性は全っくなく、これらには既知の精度がある。
これらは、完全に秒で振動する中心の大きな太陽の “鼓動”の直接的な機能である。
これらのマスター定数の全てがハーモニックな関数として単に 7 と 6 で互いに対して振動する（すなわち 70 または 0.7 と 60）だけであるという事実を我々は決して忘れてはならない。そして、これらの基本的間隔の時間に秒を使う。
我々が同様に音楽の振動を研究するとき、秒の重要性を見る。それは後で探求する。
O.クレーン博士は、宇宙の中心発振器の最も速い速度が、我々の量子領域での観察で説明すると、毎秒 10^23 サイクルであると結論した。
クレーンが述べるように、

10^23Hz の周波数は 10^-13 cm の基本的長さになる、そして、同様に、10^-23 秒の基本周期を持つ。
クレーンが明らかにしなかったことは、鼓動のパルスは本当に正確に秒のハーモニックな分割でなければならないということである。
7.14 PROOF OF “LOCAL” CHANGES

7.14 “局地的”変化の証明

このモデルから可能な予測の 1 つは、エネルギーのより高い密度が球状渦システム（この場合例えば我々の太陽系）に入るとき、我々がそのシステムがこのエネルギーを吸収して、非常に基本的な若干の変化を被るのを予期することである。
我々は導入で一時的に観察された我々の太陽系の変化の一部に言及したが、次章において、これらの変化が銀河でより高いエネルギー的な密度領域への動きに起因しなければならないことを示唆する多くの厚い証明と一緒に、特別詳細にこれらをカバーする。

HOME | INDEX | NEXT
REFERENCES:

参考文献：

1. シャトラン（モーリス）Chatelain, Maurice。
Our Ancestors Came from Outer Space.
我々の先祖は、宇宙から来た。
Doubleday & Co., Garden City, New York:
1978.
Orest Berlings.によって翻訳された
2. Cowen, R. Our Milky Way’s Heart Gushes Antimatter.
2. コーウェン、R. Our Milky Way’s 心臓は、反物質を噴出させる。
(1997) Science News Online, May 3, 1997.
http://www.sciencenews.org/sn_arc97/4_26_97/fob1.htm

3. ディーン（グレン）Deen, Glen.。
The Physics of an Episodic Quantized Redshift.
挿話的な量子化された赤方偏移の物理学。
2001 年 3 月 26 日。
http://home1.gte.net/res00bfl/Redshift_Physics.htm
4. ハーディ（ジェフリー）Hardy, Geoffrey.。
Genesis Continuous.
連続的な創世記。
http://www.crash.ihug.co.nz/~hardy/gconsyn.html
5. キンブル。S.N に、シンメトリーの理論 Kimball, S.N. The Symmetric Theory：
An Alternative to Big-Bang Cosmology.
ビッグバン宇宙論に代わるもの。
1997.
http://www.polaris.net/~ksn/beta.htm
6. LaViolette（ポール）LaViolette, Paul.。
Earth Under Fire.
攻撃を受けている地球。
http://members.macconnect.com/users/s/stargate/LaViolette/Disinformation.shtml
7. Myers, Henry B.
7. マイヤーズ（ヘンリーB.）
8. Nodland（ボルゲ）Nodland, Borge.。
A Glimpse of Cosmic Anisotropy.
宇宙異方性を垣間見ること。
(1999) URL:
（1999 の）URL：
http://www.cc.rochester.edu/College/RTC/Borge/overview.html
9. Pasichnyk, Richard.
The Living Cosmos Website.
生きた宇宙ウェブサイト。(2000)
http://www.livingcosmos.com/
10. Steer, William Andrew.
Sonoluminescence.
音ルミネセンス。
(Sphericity) (1998) [Note:
（球体）（1998 年）[注：
Link no longer operational 6.02] URL:

関連もはや活動中でない 6.02] URL :
http://www.ucl.ac.uk/~ucapwas/sl/sono.html
11. スタイン、B.とシェーヴェ（P.F.）Stein, B. and Schewe, P.F.
Is the Universe Birefringent?
宇宙は、複屈折か？
(1997) Physics News Update, The American Institute of Physics Bulletin of Physics News, Number 317, April 17, 1997.
物理学ニュース、ナンバー317、1997 年 4 月 17 日の（1997 の）物理学ニュース更新速報。
http://www.aip.org/enews/physnews/1997/physnews.317.htm
12. Stenger, Richard.
12. スタンジェル（リチャード)。
Is black hole theory full of hot air?
ブラックホール理論は、熱気でいっぱいか？
(2002) CNN.com/SPACE, January 22, 2002.
（2002 の）CNN.com/、2002 年 1 月 22 日、スペース。
http://www.cnn.com/2002/TECH/space/01/22/gravastars/index.html
13. Stoneking, J.B.
Stoneking Resonance.
Stoneking 反響。(1999)
http://ourworld.compuserve.com/homepages/jbstoneking
14. Stoneking, J.B.
Planetary Reflection Waves.
惑星反射は、手を振る。(1999)
http://ourworld.compuserve.com/homepages/jbstoneking/jbspage7.htm
15. Tomes, Ray.
Harmonics, Pythagoras, Music and the Universe.
和声学、ピタゴラス、音楽と宇宙。(1996)
http://homepages.kcbbs.gen.nz/rtomes/alex-ha.htm
16. Wesson, Paul S. Fundamental Unsolved Problems in Physics and Astrophysics.
16. ウェッソン（物理学と天体物理学の中のポール S.基本的な未解決の問題)。
(2000) Prepared for California Institute for Physics and Astrophysics.
物理学と天体物理学のためにカリフォルニア研究所の準備ができている。(2000)
E:
Wesson@astro.uwaterloo.ca
17. Whitehouse, David.
First stellar “heartbeat” heard.

最初の星の“heartbeat”は、聞いた。
BBC News, July 2, 2001.
2001 年 7 月 2 日、BBC ニュース。
http://news.bbc.co.uk/hi/english/sci/tech/newsid_1418000/1418291.stm
18. . Wilcock, David.ウィルコック（デイビッド）。
The Shift of the Ages.
時代の転換。(2000)
http://ascension2000.com/Shift-of-the-Ages/
19. Wilcock, David.
収束 III。Convergence III.
(2001) URL:
http://ascension2000.com/ConvergenceIII/

CHAPTER EIGHT:

第 8 章：

THE TRANSFORMATION OF THE SOLAR SYSTEM

太陽系の転換

8.1 THE CHANGES OF THE HELIOSPHERE

8.1 太陽圏の変化

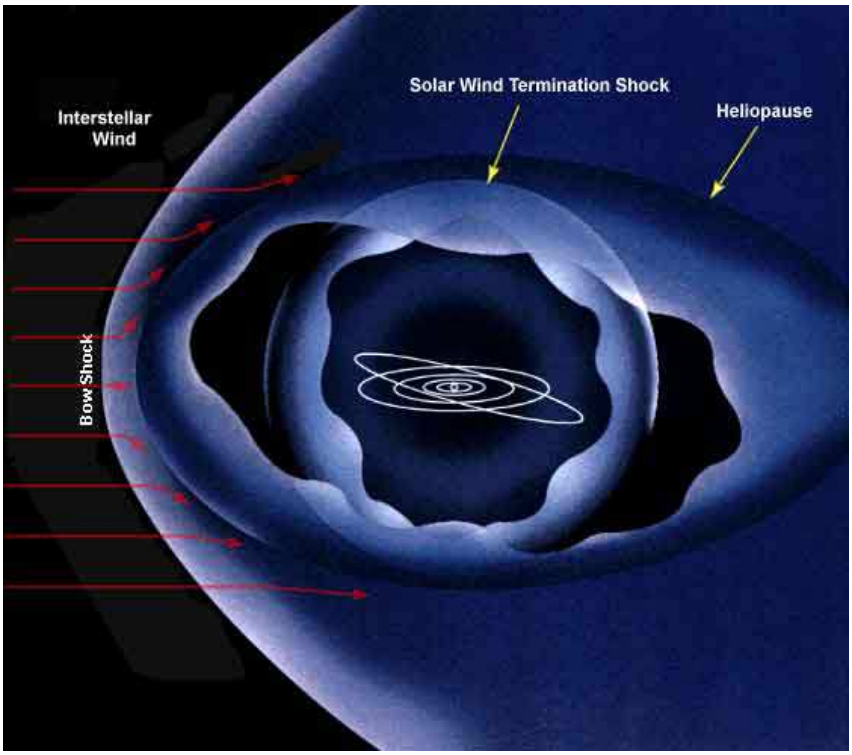


図 8.1？
太陽圏の基本的構造（ＮＡＳＡへ感謝）
1973 年以降地震が 400%猛烈に増加し、頻繁になる。
[221875 年より、火山が煙と溶岩とちりを吐きだしたものが 500%増加した。
[22]50 年前より竜巻が 200%頻繁になり予想外の地域（例えばメリーランド）でも発生した。。
[15 の]海岸線を通り過ぎる先例のない巨大・ハリケーン。
[15] 烈しい熱波と雪のない暖冬。
大陸を横切って荒れ狂う野火。
かんばつの被害、あるいは、先例のない洪水。
これまでに上げられただけでも、大量の数の、種の絶滅。
大西洋と太平洋の海の中の大きな温暖化 heatings。
[3]極地の氷冠がはずれ、かなり巨大な量の氷の崩落。
多くの衛星が突然の出来事に耐えるには造られなかったほど、太陽のエネルギー的活動が増加した。全ての以前の予想を粉砕した。
[15 の]地震と竜巻活動のように、地球はカタストロフィー的に変化する。そして、大きな太陽の出来事が数日以内に出てくる。
[15, 31]
これらは我々の日常生活の出来事である、そして、一旦これらが我々の裏庭に到着するというならば、注意を払わなければならない。

ソファー、テレビのリモートコントローラーはなく、地面が揺れ、草がこげて避難所は提供されない、地面が揺れているとき、草は枯れて、
猛烈な風が、急に吹く、
海は、魚がない
、そして、食物の収穫は出来ず 1 週間以内に、川はかれる。

2002 年 6 月 04 日火曜日、我々が市民のためにこの本のパート 1 の全てをオンラインに貼るちょうど 2 夜前に、“シンクロシティ”現象は再び起きた。
ドラッジ報告[46]が掲示され、それ以後主流プレス[45]が載せ、突然、それは公式になった：
米国政府は、“地球温暖化”が本当だと言い始めた。
[emphasis added]
ブッシュ政権のための衝撃的なUターンで、
アメリカ合衆国は、国連に「特定の広範囲にわたる影響」を詳述する気候報告を送った
それが初めて言うのに、アメリカの環境は「地球温暖化に、責任がある」？
ホワイトハウスでの、最近の地球温暖化に関する人間行動への
大部分の非難は、主に「熱を閉じ込める温室効果ガスを空気へもたらす」、化石燃料の燃焼に対してであった？
ニューヨークタイムズは、情報を発表するために月曜日に 1 ページの報道する予定になっている、
アメリカ合衆国は、ここ数 10 年にかなり変化すると、ブッシュ報告は主張する。
アメリカ合衆国は、「たぶん」「雪で供給される給水の混乱を見ている、
より息のつまるような熱波とロッキー山脈草原の永久の消失
そして、海岸の湿地も…
新しいレポートの予測は、気候変化に関して管理者の前の声明とは鋭い対照を明らかにする、
ブッシュ大統領が常に概略で話すのに対し、科学的に問題を解決するために非常に多くの調査の必要を強調した。」

これらのしばしば議論された変化にもかかわらず、非常に小数の人々（大部分はロシアの科学者）だけが、太陽のシステム(太陽圏）の全部がこの変化を経験していることを知っている。
[15 の]CFCs“の化石燃料使用による地球温暖化”は、現在実際に起こっている変化を説明するには未熟すぎる。
我々の本のこの章は、米国政府が非を認めた正確な日の前に、決して以前に見られない世界的な形で、太陽系のエネルギー的変換の、状況を提示する。

我々はこの本と同様に、他に我々が現在立っているようなデータを収集するための信じられる情報リンクしてほしい。
、http://ascension2000.com/DivineCosmos
正しい答えに対する熱い欲求は、この絶えず増大する変化の原因について多くの矛盾する考えを生みだした。
“地球温暖化の政府告白の外に、インターネット形而上学的サブカルチャーで広がった理論”は科学的な多くの実証は必要ない。そして、差し迫った運命の単純で普遍的感覚が大きな信仰の思いと結合する。
1 つの人気のある例として、2000 年 5 月 5 日の比較的珍しい惑星配置は、地球表皮の移動/ポールシフトの引き金であるとかなり売り込んだ。

そして、最近、ゼカーリア・シッチンの論理的研究は、行方不明の惑星 Nibiru が 2003 年に地球の近くを通り抜けようとしているという“channeled チャネラーの” 直観的推測と組み合わせられた。
この神話のシナリオは、我々が現在経験する変化を説明するがらくた入れとして使われた。
シッチン博士は計算の後、惑星 Nibiru は 2160 年ごろまでは帰らないと思っていた。

[47] 人は、そのような確立された 3,600 年軌道を楽しんでいる大きい物体が紛れもなく現在から 1 年もたたないうちに我々が絶叫する前に、夜空の中の月以上の大きさで見えると予想する、
まだ、観測の証拠もなく、ただの陰謀という暗いうわさか、無名の天体物理学コミュニティの中の“情報提供者”の“リーク”である。

さらに、自然の力で軌道に乗って回っている惑星は、全ての太陽圏を通してこのような大きいエネルギー的な波を確かに、引き起こすことはできない
それは、太陽の大きな磁場と結合し、その内側で本当に軌道に乗って回る実在の物体である。
本当に、我々が現在目撃している異常を外部のエネルギー源で、説明することが要求される。
多分 2004 年 1 月 1 日に多くの人達がホッとしたため息でシャンペン・コルクを抜いたが少したっても、2003 年のニビル Nibiru の意志を信じた大部分の人々と異なる見方は公開されていない。
この章の中で、我々は、単独でこれまでにない最強のモデルを作る
我々の太陽系(太陽圏)は、ローカル恒星間の媒体または LISM.の内側でより高いエーテル的エネルギー密度の領域へ移動している。

[15] ＮＡＳＡは、大きく LISM を我々の銀河のローカル地域の星の間の「スペース媒体」として定義する(i.e. 我々のモデルではエーテル的なエネルギー)
これは学術用語「物質-エネルギー密度の転換」が、好ましいのだが我々のモデルの中では、これはラフにすでに進行中の「次元シフト」とみなすことができた
我々が銀河の中のこの新しいエネルギーのフィールドへ引っ越して、太陽、惑星と全システムを囲む太陽の巨大な磁場への相当な変化によって“地球温暖化”が起こる？そしてこれに対して人間の汚染で誘発されたものはごくわずかな影響しかない。
[この新理論は、同様に考えられた「フォトンベルト」理論の、例えばその大部分の面を支える「Manasic、リング“Manasic Ring.」とも大きな違いがある。

8.2 THE BREAKTHROUGHS OF DR. ALESKEY DMITRIEV

8.2 アレクセイ　ドミートリーブ博士の進展

この章の中の情報の良い部分は「地球と生命の惑星物理的状態」Planetophysical State of the Earth and Life,と題した Aleskey ドミートリーブ博士の、仕事から収集された。そして、それは元々1997 年に書かれ 1998 年に、更新されて、英語に翻訳された。
[15]ドミートリーブ博士は、地質学と鉱物学の教授で、ロシア科学アカデミーのシベリア部門の地質学と地球物理学と鉱物学の連合研究所の主任科学者である。
ドミートリーブは、世界的な生態学と地球の急速処理過程の、専門家である、そして、
そして、一連の彼の記事は、英語に翻訳され、そして、http://www.tmgnow.com/.に掲載された

また、この章の中の情報の多くは、グローバルシフトの国家セミナー旅行の時の、我々の金曜日の夜の科学プレゼンテーションでの内容と事実が似ている。

[44]
Dmitriev’s 研究は、現在の政府の基本的物理学の認識の変化と地球の挙動が不可逆性になっていると指摘することから始める。
強い証拠は、ドミートリーブが、「非常にチャージされた物質、エネルギー的に不均一のもの」と言うものまたは我々が aetheric なエネルギーのより高い密度というもの、
近くの惑星間空間（ローカル）の中の（LISM）によって
我々が動かされることによってこれらの変化は、起きていることを暗示する。

この以前には見られなかった、非常にチャージされたエネルギー物質は現在我々の太陽系の惑星間の領域に吸収されている。そして太陽と同様に全ての惑星を、今までになかった

プロセスでエネルギーの興奮状態にする。
この地球上の観察可能な変化と影響は、大気圏の垂直と水平の中身の変化と、オゾンの配布の変化と大きな破滅的な出来事の頻度の絶えざる加速的増大と磁極移動に関係する。
[15]
ドミートリーブが強調する 1 つの重要な点は、これが彼自身の仮説ではないということである：
気候学、地球物理学、惑星物理と太陽物理の多数の専門家は起きた原因が宇宙的原因の傾向が状況にはあるとしている。

本当に、最近の 10 年間の出来事は、異常に重要な heliospheric 太陽球と惑星物理学的な変化の強い証拠が与えられた。
[加えられる強調]

さらに、我々が観察した変化は議論のテーブルに非常に統合された宇宙の完全に異なった見方をしなければならなくなるとドミートリーブは認めた。
この新理論では、
地球の上のこの気候的および生物圏の過程は、我々の太陽系に起こっている普遍的で全体的な変形プロセスと、背後で関係し、（フィードバック・システムに密接に関係することによって）直接インパクトを与えられる。

地球上の気候的な変化を理解しようとすれば 1 部分だけでなく、太陽圏でおきている事全部に連続して、関連するので、我々は注意を組織化することを始めなければならない。
[加えられる強調]
そのようなエネルギー的な相互連絡のケースは、前章ですでに基礎がしっかりしている。
もう一つの重要な部分の引用は“惑星エネルギー容量（静電容量）が、増大の方向に動くことで、この[地球上の急速な破滅的な変化]の傾向が同じように増大するかもしれないとする。（これまで我々がこの本に示したエーテル的宇宙論では、それは地球システム”の一部が非常に興奮しチャージした状態に至る）そして、エーテルの球面渦ができ（例えば地球の輝くプラスマ核に）電子回路のコンデンサのようにエネルギーを、非常に吸収し、放出する。
前章に確認したように、発光プラスマは、強いねじれ-フィールドだけでなく電磁（gravispin）放射を持つ。

ドミートリーブは結論する
その「最も激しい変化は[太陽系の]惑星ガス-プラズマ膜で起こっている、

「これらの変化は、地球の生命圏バイオスフィア）が機能可能となる方法と直接関係する。
“ガス-プラスマ層”は、我々の大気、“電離層と惑星の磁場構成物の層（例えばヴァン・アレン帯）との結合された存在である。
この“動乱する過剰エネルギー”で、ますます以下のような事態が発生するようになる：
-電離層でのプラスマの生成。
-磁気圏での 磁気嵐。
大気の温帯低気圧。
“今これらの大気の高エネルギー現象の全ては、激しく頻繁に、なって、その中の性質が変化してきている。
ガス-プラスマ膜の層の構成は変化している。、また、これらの点の全てをこの章の後半で再び触れる。
Dmitriev のこの研究のキー懸念の 1 つは、これらの変化が地球上全ての生命に与える影響である。
非常に巧みに注意深く言葉を使用して、我々が現在それを知っているように、ドミートリーブは最終的にこれらの変化が生命の新しい深い特性」「生命の新しい完全性の可能性」といった人類の性質の大きな進化につながる可能性がある事実への感謝を明らかにする。
生命圏と人類の適応反応は、地球上の生命と種の、グローバルな完全な変革と新しい状況をつくるかもしれない。
平衡のとれた新しい物理的状態に地球がなると生命自体の新しい深い特性が、再生と熟達のなかで新しい生物体への発展の可能性が、ここから生まれて来るかもしれない。
現在の変化期間は、一時的である、そして、これらの新しい biospheric 生命圏の現実の状況に対応するには必要な深い評価の後にだけ、将来の生命の代表への移行が、起こるかもしれない
したがって、それは気候が新しくなるだけでなく、
しかし、人間としての我々は、地球的な変化を生きる有機体の不可欠なプロセスで感じている、
そしてそれは、さらに全体のプロセスの中のもう一つと関連する。
我々はまた、それらを個々に別なものとして扱うことができない。
[加えられる強調]
この本のパート 2 は特に aetheric なエネルギー、意識と生物学の間の関係を扱う。そして、それは我々が Dmitriev’s 言葉の背後にある真実を理解するのを助ける。
スティーブン J・グールドの「均衡の中断理論」のように現在目撃している変化は、地球上の意識的な生命形態の大幅な進化の前段階であることを確信しようとしている。
これらのエネルギー的な変化は、直接 DNA 分子の構造に影響を及ぼす。

8.3 CHANGES IN THE LOCAL INTERSTELLAR MEDIUM (LISM)

8.3 ローカル恒星間の媒体（LISM）の変化

いろいろなロシアの科学者はエーテル的密度が高い領域である LISM へ我々は移動していると結論した。それはこの観察された太陽系の変化を説明する理論での唯一重要な要因である。

地球から見ると、我々の太陽圏はヘラクレス星座の中の太陽軸の方向に移動している。

1997 年のドミートリーブに一致して、ドミートリーブと Mahatmas は 1995 年に Kruzhevskii ペトロフと Shestopalov は 1993 年に、太陽圏は LISM を含む地域に知らぬ間に 1960 から徐々に移行しているとした：

…高く集中した] [new]非均質性の物質[すなわちとヘリウムと水酸基、水素イオンを含むエネルギーには他の元素と組合さったものが加わる。 [荷電粒子]。

この惑星間空間の分散したプラスマの種類は、磁化された帯構造と筋を示す。

[強調を加えた

西側の科学者は、生まれつきこのような荷電粒子を含む LISM に“磁気化された帯構造と striations みぞ”があるという考えを疑うかもしれない。

しかし、この我々のエーテル的理論からすると、全レベルサイズに同じ構造が現れるのを見ることを予想する。

図 7.1 は我々の太陽系に現れたパーカー螺旋形を明らかにした、そして、フラクタルの原則によって、相似の形態が銀河にもなければならない。

図 8.1 太陽系のパーカー螺旋の俯瞰図を示し、同心円の惑星軌道の位置を示す、：

図 8.2？

太陽系の中のパーカー螺旋のエネルギー構造の俯瞰図。

（ＮＡＳＡへ感謝）

図 8.2 に見るパーカー螺旋の各々のカーブした腕は本当に“磁化された帯”または“筋”を表す、我々の惑星がその中を動くと、磁気エネルギーと荷電したプラスマの増加が見られる。

明らかに我々自身のものと同様に Dmitriev の証拠は、宇宙のフラクタルなハーモニックな相互関係）によって、この構造がまた、銀河のレベルに存在しなければならないことを示す。

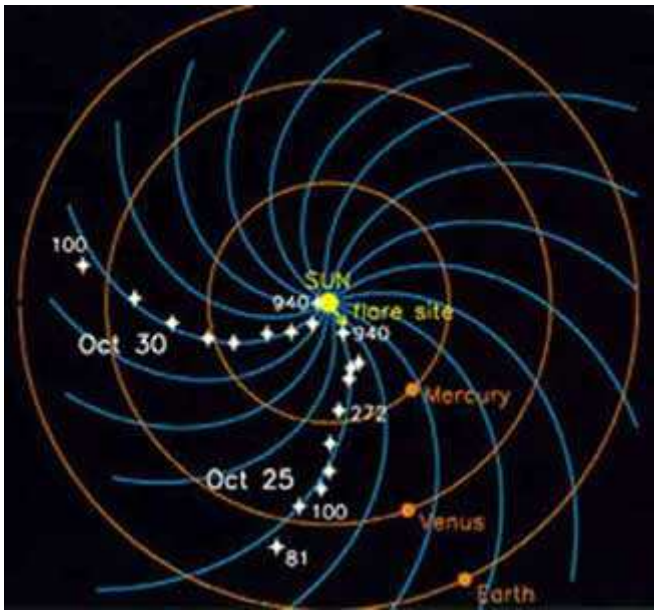
ここから、Dmitriev’の引用を、続ける：

この[太陽系の] 太陽圏の構造の中の移行は、太陽系が直面する 3 から 4Au の衝撃波が 40AU 以上まで、または 1000%の、増加の原因になった

ここでドミートリーブが言及している“shock wave”は、“終端ショック、”と、知られている：我々はそれを図 8.3 で図示したのを見ることができる

図 8.3？

太陽圏のエネルギー的な活動は終端ショックで 70-100 を示した。
人は、ドミートリーブの言い回しから、1960 年代初期のロシアの天体物理学者によって、この発光プラズマの終端ショックは 4AU と測定されたと仮定することができる
[すなわち太陽から地球までの 4 倍の距離]
そして、一旦水素、ヘリウム、水酸基と他の荷電粒子の組合せが 1960 年代後半に優勢になると、サイズと終端ショックの明るさは、現在 1000 パーセント以上のファクターに増加した。
1978 年までアメリカの、ＮＡＳＡは類似した調査は、始めなかったが、ロシアの科学者 D.E.Shemansky 教授[35]はこの情報を先立って得ていた。。
明らかに、この太陽圏の最先端の赤熱の明るさは、宇宙の低密度の真空から地球の高密度の大気への移動するスペースシャトルまたは隕石の底が熱くなるのと同じ原因で発生する。
ドミートリーブは、この磁気境界線での刺激の 1000 パーセントの高い増加が本当に何を意味するか多くの技術用語で説明し続ける：
この厚くなった衝撃波は、側壁の層で重なってプラズマの形になり、それは
太陽システムのまわりでプラズマの火の風になり、惑星間の領域へ進展した。[5,6]
この進展は、太陽系の惑星間空間に作られる一種の物質とエネルギー分布を構成する。
太陽系を囲むこの通路が本質的に告げることは、現在太陽、惑星と惑星間空間内に流入する発光プラスマの新しい層が形成されたということである。そして、我々が観察するエネルギー活動の全体的レベルを上げる。
この章の以降の節は、このエネルギー的な変化の詳細を詳述する。
しかし、周辺の証拠を調査し始める前に次の大きな疑問を調査することは、西洋の多くの読者には興味があるはずだ：
“もし本当に起こっているとして、当時のＮＡＳＡはこれまでに語った、理由を理解していなかったのか？”
1 人の優秀な博士によれば[35]、ＮＡＳＡはこの太陽圏の変化のどんな議論に対しても“頑固で悪質な先入観”を持つので、疑い無く、LISM は“.均質の密度”その他を維持しなければならないと自動的に仮定するのを知っている、観察された光度とエネルギー的な増加を“「再度、加速された太陽風」のように、難解に説明する。（ドミートリーブその他の理論の単純さと優雅さがない”）
“LISM 密度は不変である”という考え方の支配に対して、我々が見つけた珍しい 1 つの例外は、デラウェア大学のゲイリーP. Zank との 1999 のインタビューにあった。
このインタビューで、Zank 博士が提案したように LISM 密度が変化し、大災害という結果になったとしても、我々の多数はそれがいつ来るか、知らない：[42]
われわれは熱いガスによってとり囲まれている。（と彼は言った”）
“太陽は極端な‘真空’または低密度の惑星間空間の中を動いており、太陽風は保護する泡を生じる？太陽系の回りの太陽圏は地球上で生命を開花させる。



残念なことに、我々はいつでも小さな雲にぶつかっており、そして、我々はおそらく、それが来るのを見ていない。

太陽圏なしでは、中性の水素が、我々の大気と相互作用しておそらく破滅的な気候変動をもたらし、非常に高エネルギーの宇宙線の形の、致命的な宇宙放射への露出が、増加する。」

Zank は、太陽圏と太陽系を囲む太陽風の膜の研究で、SDSC クレイ T90 を使った。

シミュレーションでは、ローカル恒星間の媒体（LISM）と太陽風との 2 つの相互作用の影響を、感知しないことは確実である。

太陽風の衝突圧は全ての太陽のサイクルの段階で、強いショックとして、存在するのであるが、11 年の時間間隔で異なる、

そして、(これらの振動数は変化することが出来る)…

Zank の計算では、既存の器具では、実際の相互作用が始まる前に、太陽圏を圧縮するか、崩壊させるのに十分な LISM の増加を見つけられないことを示唆している。

[加えられる強調]

Zank 博士は LISM で高エネルギー密度のランダムな雲に遭遇するかもしれないと考える、すでに太陽系の中に同じエネルギー的な構造が存在することは証明されたので、銀河のパーカー螺旋モデルは真実に見える。

実はそれに入る前に、Zank 博士の先進の研究から収集できる 1 つの重要な告白は、

我々の既存の器具は、LISM 密度の重要な増加を見つけるのに十分、敏感でないことである。

したがって、西洋の太陽の物理的研究者の大部分の器具がそれを証明するのに十分洗練されていないならば、LISM は均一な密度を維持しなければならないと仮定するのは、むしろ愚かである。

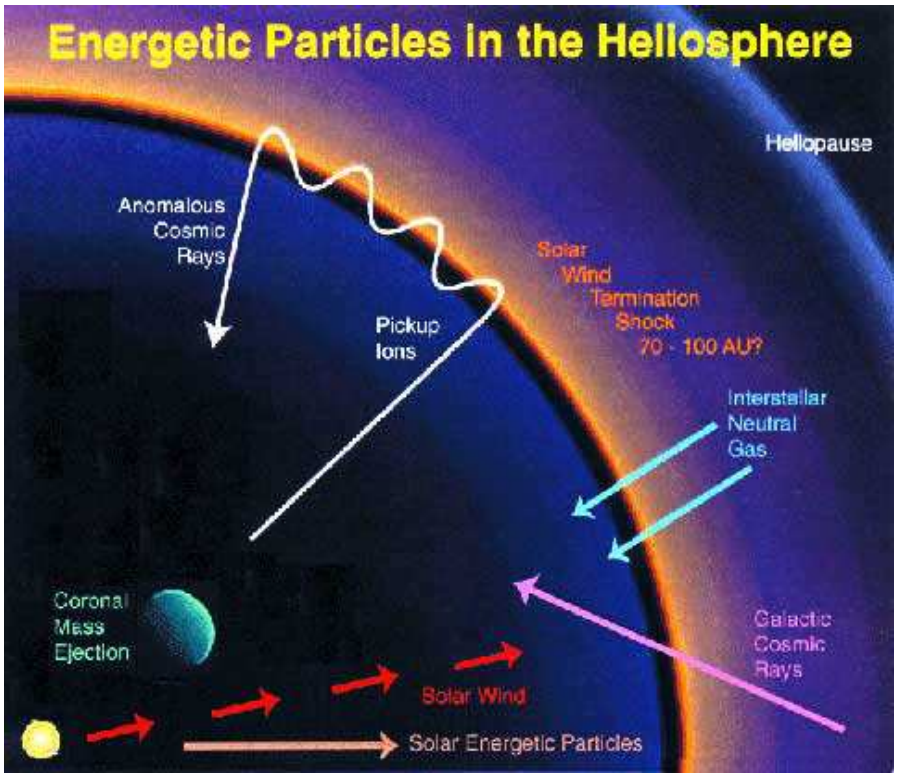
この点を支持する多くの証拠が、ヨーロッパ南天文台（エソウ）から来ている：

残念なことに、

ローカル恒星間の電子、または陽子密度、または、ローカル恒星間の磁場という 2 つの因子が支配する太陽圏のサイズと構造の、直接的な測定方法が、ない。
したがって、理論上のモデルの選択の際、測定装置の上の厳しい制約を持ち出すことができ、プラズマ密度と形の間接的な観察として十分考慮に入れる必要が、ある。

[加えられる強調] [16]

（ドミートリーブによって報告されたように ESO の LISM の密度でも“間接的な観測”として規定する必要があるにもかかわらず、どんな“理論上の適合モデル”[16]でも、LISM がたいてい変化しない密度を持たなければならないと仮定している
“LISM 密度増加によるこれの否認”のもう一つの例が、カリフォルニア工科大から R.A Mewaldt のニュースの中にある。



以下の引用では、ボイジャー1 と 2 は太陽圏の低エネルギースペクトル”で、変則的な“増大を見つけたことを明確に認めた。[23]
しかし、、LISM の密度の増加のこれらのエネルギー的強化が可能となる“seed population 種になる集団”については、決して言及されない：
種となる集団は太陽のエネルギー粒子（RSEPs）と（再加速された太陽風（RSW））を含み、相互作用する領域で、イオン化されたエネルギー一に体化されて回転している。

これらは、ボイジャー1 と 2 で観察されたマグネシウム、Si、S と他の低エネルギー・スペクトルの成分の 60Au を越える強化は構成元素が再加速されたことによるとして説明可能になる（ストーンとカミングズ 1997;
また、1Au の低エネルギー・スペクトルのいくつかの成分の予想外で不可解な増加が、報告されている（例えば、高島ほか 1997;Klecker ほか 1998;
Reames 1999)。

[加えられる強調]
それで、この研究から、西洋の heliophysicists 太陽圏研究者が非常に明確に本当に“異常（太陽圏のエネルギー活動、終端ショックに予想外で不可解な増加”）を発見したことを知っているために Dmitriev の理論に期待する。
LISM 密度の変化を認めずに、ISM”を中立の個体群の新たな元素と簡単に推定しても、他の複雑な問題を含む、証明されていない、説明が、可能なだけである。
たとえどんな”太陽エネルギーの再加速理論が提示されても、実のところ、エネルギーは保存されなければならない。
太陽圏のエネルギー荷電の増加の最も単純な説明は、外部との関係でおきたとするものである。
南カリフォルニア大学の 1 人の教授（D.E. Shemansky 博士）はこの問題についてあえて特に大胆な声明をした。そして、彼の慎重な努力で疑いようも無い LISM [35]のエネルギー密度の、“大きな増加”の“最初の証拠” をＮＡＳＡに示した：
Research on the properties of the Local Interstellar medium have been carried out in scattered periods beginning in 1978.
ローカル恒星間の媒体の特性が 1978 年に開始している散らばる期間に運び出されたことを

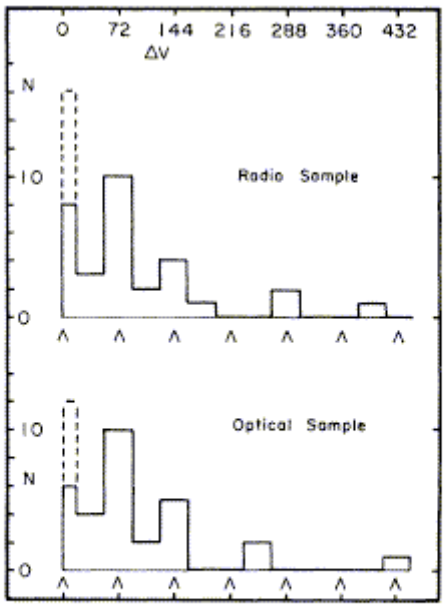
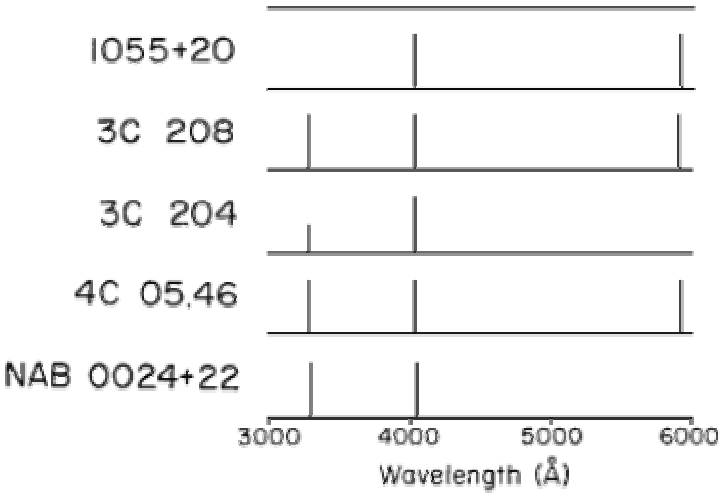


FIG. 1.—The distribution of redshift differences for double galaxies in the accurate radio sample (*upper*) and best optical sample (*lower*). Numbers are counted in cells 36 km s^{-1} wide centered at $N \cdot 72$ for $N = 1-7$. The number in the 0–18 km s^{-1} cell is doubled since the width is half the other cells.

続けて調査する。

ＮＡＳＡ Space Physics 部は、アメリカ合衆国で部門の形成時から
の LISM の中性ガスの影響の研究に対する持続的な悪質な偏見を示した、
このプログラムの研究で最も重要な貢献は、論文（48）である、
それは、絶対の LISM 密度を測定する適正独立した方法を示す、
そして、(89)、
region のボイジャー測定値から、LISM 中性の原子状水素密度の 50AU の大きな増加の最初の証拠を示した。
[加えられる強調]

It is certainly interesting that Dr. Shemansky would say that NASA has displayed a “persistent, pernicious bias” against this work.
Shemansky 博士はＮＡＳＡが“この仕事に対する頑固な悪質な bias”）を示したと言うこ

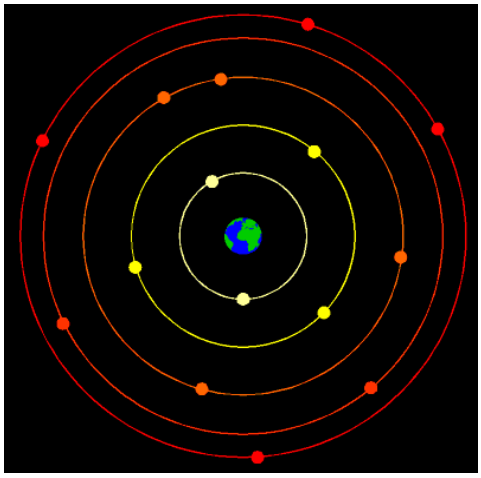


とは、確かに面白い。

Microsoft Word 2000 の類語辞書は、 “pernicious 有害な” という 言葉が “destructive（有害な、致命的な）evil” と “insidious. 知らぬ間に” と同義であることを示す（疑問は尋ねられる必要がある）：

なぜ、ＮＡＳＡの一部にこの LISM 密度増加については重要な問題にしないという「潜在的」「致命的」方針が、あるのか？

ドミートリーブ博士のようなロシアの研究室に答えが見つけられる、そこでは、この LISM 密度増加が進行中であることと、それが我々の太陽圏全てを通して大きなエネルギー的変化を引き起こしていることは基礎がしっかりしている。



これらの世界的な変化は、古代の予言と完全に一致している

「終末の時に起きる出来事を書かれた、ユダヤ教とキリスト教者の聖書の教義、

「または、他の文化は、「黄金時代の始まりとして書かれた。」

それは、UFO 問題、海底に沈んだ古都の証拠、火星の記念碑など否定できないもの

をメディアは、嘲笑し、無視する。

[39]「地球温暖化の登場で今ドアは、隙間が開いた、「しかし、太陽と惑星の大きな変化は脚注に放棄された。

（LISM 密度の変化が存在し、存在しなければならないことを証明する完全な理論を与える本当の意味で鍵を握る”限定され見通しがきくもう一つの領域は、“赤方偏移である：

8.4 “REDSHIFT” ENERGY VALUES AND AETHERIC DENSITY LEVELS

8.4 “赤方偏移”のエネルギー数値とエーテル的密度レベル図 8.4？

ウィリアム Tifft 博士の“quantized” は、マイクロ波データの“赤方偏移”を変化させる。本当に、銀河の LISM 密度レベルの規則的な、組織化された変化があることを証明する直接的観測証拠に裏付けられた完全な数学的理論が、すでに存在する。
評価され論争の的となる天体物理学者 Halton アープシンセサイザー博士は、「赤を観測する」という本で、厳密な、多量の証拠で“赤方偏移”が現在、信じられているように、天体の物体の距離とは、関係がないことを証明することを示した。
[30、31、37、38
単純に言うと、赤方偏移は、反射された星明りのスペクトルで｀『虹の』終端の近くの『赤』がマイクロウェーブでどれぐらい輝くかという測定値である
エドウィン・ハッブル卿は、その時にもっともらしく、地球から遠ざかりつつある物の赤方偏移はより高く見えるという理論を提唱した。、
、ウィリアム Tifft 博士は、赤方偏移が“量子化されるとし（図 8.4 で見るように、それが特定の規則的な和声的音程で起こるだけであることを証明し類似した論争をひき起こした。
Tifft の発見のもう一つの証明は、図 8.5 [38]でクェーサー・データのグラフに見ることができる：

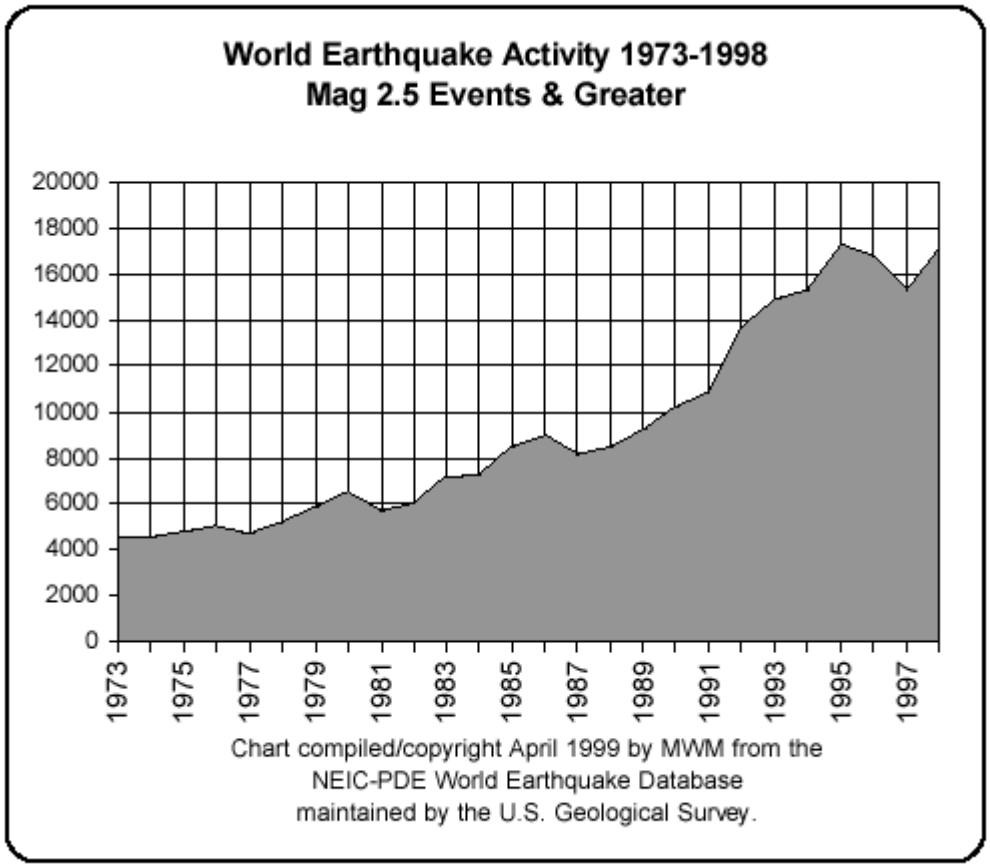
図 8.5？
近くのクェーサーの中の‘赤方偏移’の量子化された数値。
図 8.5 の波長が距離を示すならば、明らかに、全ての赤方偏移数値の間は全く特定の正確な間隔になるだけではなく、それは地球が宇宙の中心であったことを意味する。
図 8.6 で見るように、宇宙の中の全てのクェーサーは、地球から自然に離れた距離の独立した“shells”にならなければならない。
[38]これは、正に中世の宇宙の “地球中心”モデルへと、我々を置く！
図 8.6？
正統的な赤方偏移理論から見ると地球が宇宙の中心になる。
（J タルボットへ感謝）
銀河の中の我々の位置についての常識的な単純な知識は、地球が宇宙の中心でないと我々に伝えている;
直面している重大な問題は、赤方偏移が天の物体の距離を天体物理学者が計算するのに使う初源的な方法であるということである。
それの代わりに、我々が直面していることは、Cosmos のエーテル的理論の「和声学」でどんな伝播媒体でも音の基本的な振動パターンとして理解可能とすることに抵抗する非常に奇妙な例外である

[39]
ノルウェーのアーリン・ストランド博士によって観察された明るいプラズマ構造の重要な次の点は、忘れることが出来ない（5 章で議論された）
太陽の一と同じくらいのかなりの熱い温度で 1 秒、自発的に現れ、視界から消えた。
また、このプラスマ構造は全ての時間を通して、レーダー/あるいは、赤外線のスペクトルで追うことができた。
我々は、これらのプラスマ構造が、すなわち、我々自身のエーテル的レベルと我々自身のものより直接上のエーテル的レベルという主に 2 つの aetheric な密度レベルの間で変動していると結論した。
（大部分の思想家は、誤ってこれらの密度レベルを “次元.” と呼ぶ）[39]
プラスマが高い密度へ移動し置き換わる時、その可視性と巨大な熱量が消える、おそらくそれは赤外線と同様マイクロ波のような非常に高スペクトルの波長をまだ発しているはずだ。
したがって、遠くの天の物体の全てのマイクロ波放射を観察したとき、偶数の、量子化されたハーモニックな数値を見るとき、これがエーテル的エネルギー密度レベルが変化する兆候だと考えることは確かにもっともらしい。
最終的な証明はケンブリッジ大学のハロルド・アスプデン博士から来た、その人はエーテル密度に様々なレベルがあるということを「領域の間隔。」と呼ぶものをつくって本当に数学的に証明した。、

彼は以下の通りに恒星間の中間の密度（ISM）の各々の異なるレベルを解説する、我々は理解を容易にするために「層」に言い換えた：
人は、各々のエーテル密度レベル]は、電子と陽電子の数と一致すると言うことができる
それは、グループをつくることができる
エーテル粒子が消滅した[後に]、それによって空虚にされたエーテル・スペースは電子と陽電子によって満たされる
宇宙の全部の広がりの中で、多くの異なる領域がある。
[加えられる強調]
それで、“aether particle エーテル粒子” は第 2 章でウラジミール・ギンスブルグ博士が “field bubble” と呼んだものと、同じものである。
Aspden’s 理論によれば、LISM が濃密で、大きい圧力下にある時、“aether particles” は、その領域では小さい。
“aether particle” が消滅するならば、真空の空間が突然作られ、電子（光子）と陽電子が真空の空間に走る。大きい空間へ適合する数よりも、小さい空間に適合する数は少ないといったように、電子（光子）と陽電子はサイズは変化しない。
Aspden’s 博士のデータは、一旦それがつくられたならば、陽電子と電子の特定の正確な

数だけが真空の空間にはめ込むことができることを示している。
真空の「フィールド泡」の空間にはめ込まれる粒子の数は、各々の密度の「N」として知られている、
そして、その最大値は 1843 で、我々自身の密度の数である。
我々自身より上の密度は、1842 の N を持ち、次は、1841 の N となる、
そして、その他、新しい各々のフィールドバブルの、密度は、前の密度より小さい。

アスプデンのサイトでこのことは更に詳細に研究され、この声明の後の計算は全く複雑になるが、彼のデータは、以前からの量子領域での未解決の謎の数を計算する完全な方法を提供する、
例えば「毎 100 万レベルの精度での微細構造定数に関してである。、
（この本の 2-3 章を見てください)。
「さらにまた、この仕事は、1972 年に名門の Physics Letters A で発表されるに値すると考えられた。



[2]

ここには、簡略化された居抜かれた線がある：

アスプデン博士が最初に Tifft のものが赤方偏移価値を量子化するのを見たとき、

彼は、彼らが

アスプデン博士が最初に Tifft の赤方偏移数値を量子化するのを見たとき、彼の理論の aetheric な密度レベルと一致した数値と同一であると理解した。（！。

[1]これまででアスプデンが Physics Letters A で彼の元の 1972 年の論文のその後の追求を発表しようとしたとき、それを証明する Tifft 博士の現在宇宙の中により高密度のこれらの領域が、存在するという直接的な観察の証拠を完備していた

たとえ彼の新しい論文が 1972 年に同じジャーナルですでに受け入れられ、発表されたことに直接的な、目に見える証拠を加えただけだったとしても論文は、numerological 数秘学であるかのように匿名で拒絶された、そして、更なる全ての訴えは失敗した？

。

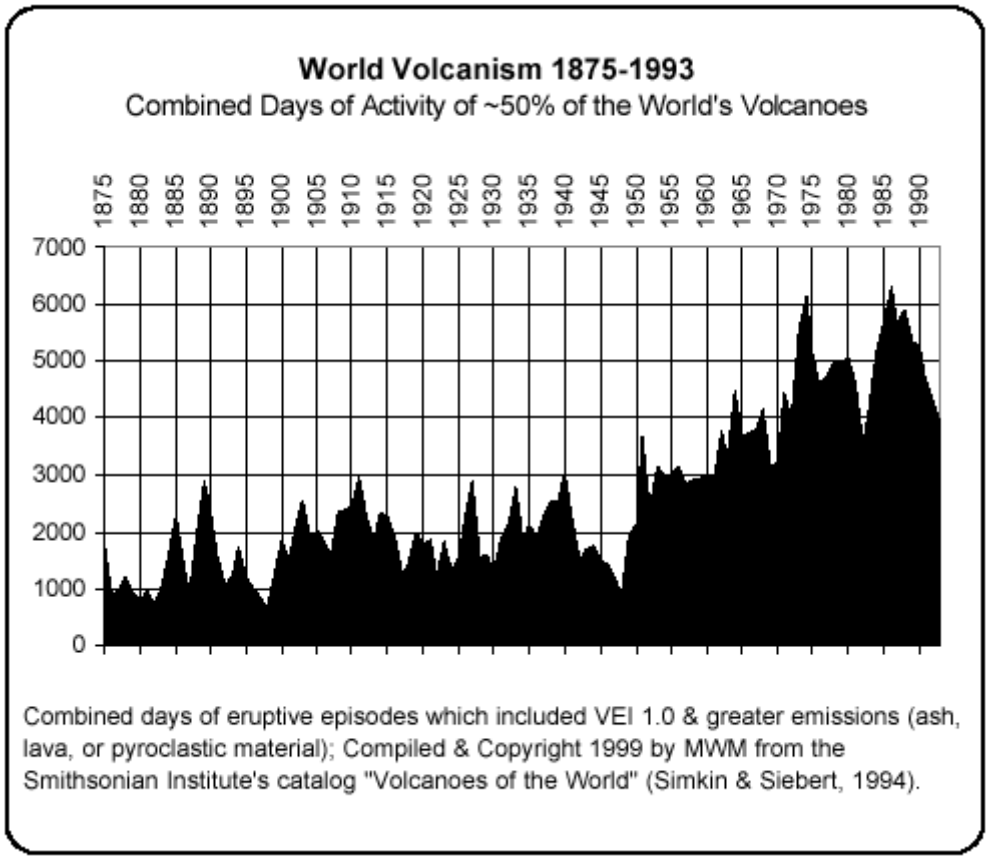
Aspden のウェブサイト「チュートリアル 10」で不正に拒絶された彼らの批評への彼の完全な反論の論文は、まだ読むことができる。

結論として、アスプデンは以下の面白い推測をする：

天文観察により、議論下の理論と正確に一致する、72.5km/s 増大が確かめることが出来た

と報告した。
そのような[エーテル的なエネルギー密度の]領域は、地球磁場反転のような地質学的出来事と関係がある、
隣接した空間領域を切り離す境界を通る、太陽系の変化として [それは起こる]。
[加えられる強調]

当然、エーテル的密度と地質学的出来事のこの関係はドミートリーブほかによって得られた結論と正確に同じものである。そして、アスプデンが、確固とした、数学的なモデルを提供したことは状況を劇的に明確化する。
「生命の広大さ The Vital Vastness」の、764 ページはかなり重要である？
我々はリチャード Pasichnyk による第 2 巻に、以下のことを読んだ：
高い赤方偏移は、通常銀河の青春期を示す特徴に関係している。
また、赤方偏移は、強い銀河系間フィールドの赤方偏移への影響を示しており、そのシステムの位置をあらわす機能でもある。
同様に、個々の銀河は、これらの内部から遠い限界点まで赤方偏移勾配を示す。[加えられる強調] [31]

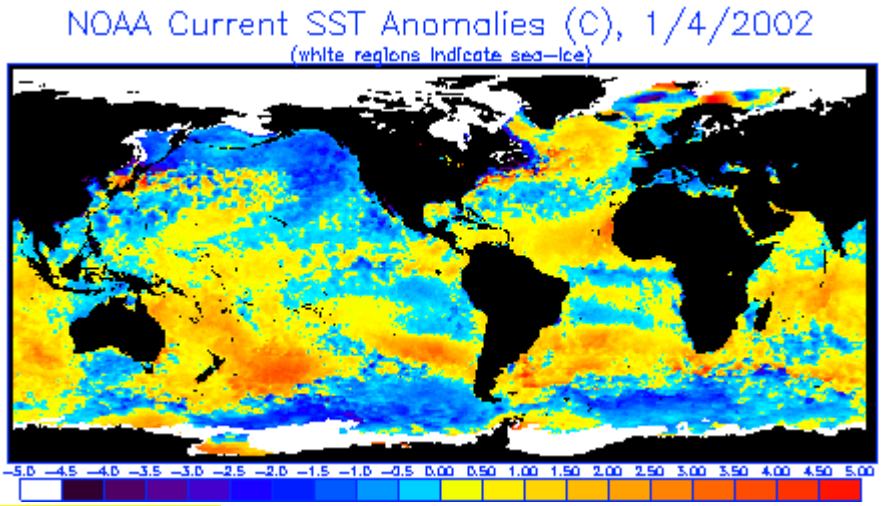


主流が決してこのような仕事をするのを許さない時から、Pasichnyk は我々が、このデータに非常に興味があったので、この“銀河の赤方偏移 gradient”発見が天体物理学大学院生によって実際に発表されたことを伝えた。
それでもなお、さらなる観測と研究は、常に具体的に疑う余地なくこのデータを確かめるのに役立つだけである。
これは、図 8.2 で視覚化したように、銀河系で、エーテル的エネルギー準位を変化させるパーカー螺旋-タイプの形の存在を効果的に証明する。
Pasichnyk は、従来のどんな説明と比較しても、我々の銀河系の中心核から発散している赤方偏移の量がほとんどイメージ不可能な巨大な強さだと言い続ける：
赤方偏移フィールドは、また、従来の理論が「膨張」と呼ぶもので、天の川の面で見つかる
それは、宇宙全体より 10 倍、、高い（ハッブル定数)。
アルプ/Tifft/Asdpen 理論では、銀河の中心は、銀河系のエーテル的な/ねじれフィールド・エネルギーの最大の源泉であることを証明する
我々のモデルではすでに提案し、前章で書いた。

我々がこれらの aetheric なエネルギー・レベルが我々の銀河の恒星間の媒体の中に存在可能で、存在しなければならない、そして、ＮＡＳＡ、物理学文字 A と他の西側主流の関係者によってこの情報を抑制する、進行中の全く慎重な努力があるように見えることを知ったが、我々はこの出来事が生じている変化の直接の物理的証明を調べ続ける準備ができている。
この情報の多くはドミートリーブ博士から来るけれども、我々はまた、より状況を明らかにするために研究データを加えた。
LISM の高密度エネルギーが大きくてより大きく集中しながら太陽圏へ流入し続け、地球、太陽、惑星と惑星間の空間は大きなエネルギー的変化の徴候を完全に示している。

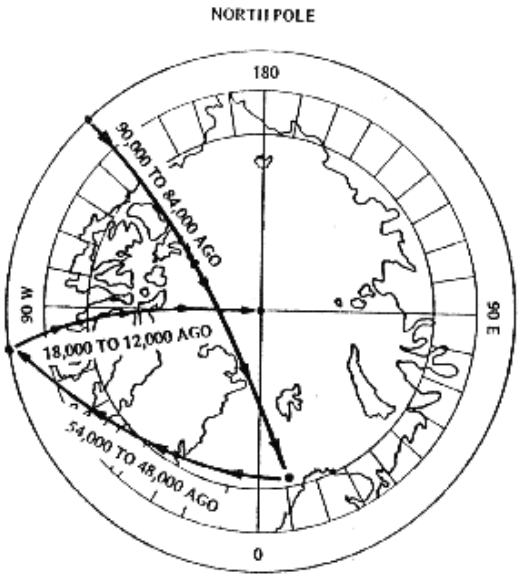
8.5 地球のエネルギー的変化

図 8.7
リヒタースケールで 2.5 以上の地震活動（1973-1998（マイケル・マンデビルへ感謝)）
地球で進行中である「特定の、広範囲にわたる影響」は、明白で現在ブッシュ政権が公的に認めている。そして、「次の二三十年間にアメリカ合衆国をかなり変化させる。」
ブッシュ政権のレポートの内容は、「地球温暖化」をもっと越えており、我々の天気パターンがますます混沌として、有害で、予測できなくなったことを知っている。



我々には、ハリケーン、台風、竜巻、泥流、洪水、かんばつと他の大災害を絶えず増大させる基底が存在する。

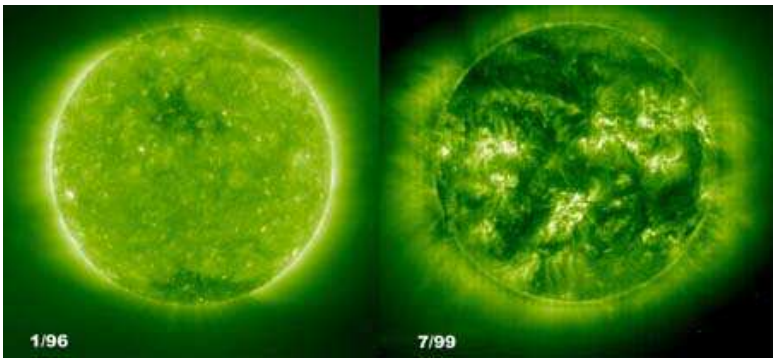
1 例として、1990 年半ばのものすごいハリケーン・アンドリューは、ほとんどテキサス全州と同じくらいの大きさだった。人は、自然界の解放された力がアメリカ人に対するテロリズムよりはるかに大きな脅威であると主張することができる。



Alexey Dmitriev 博士の計算は、それを暗示する：

1973 年以降重要な大災害のダイナミックな発生率の成長は、大きな増加を示す。
そして、一般に、大災害の数は、1963 と 1993 の間で 410 パーセント増大した。
[加えられる強調] [15]

この研究がなされた時から、観測された活動の波に基づいて、我々は現在更新された統計で600パーセントと同じくらい高いかもしれないと仮定することができる。



そして、この再度、徹底的に調査された数字は、地震、火山の活動、竜巻、ハリケーン、洪水、かんばつ、その他を含む大災害の全ての種類を含む。
まだ、主流源は、今までの“地球温暖化”の理由が除外されても、このような大胆な声明をする気には見えない。
、マイケル・マンデビルという名の研究者は、ワールドワイドに、図 8.7 で見られるように、同じ線でリヒタースケールの 2.5 以上の地震で麻痺したものは 1973 年以降 400 パーセントも増加したことを明らかにした。

[22] さらにまた,図 8.8 は、火山の活動が、1875 年と 1993 年の間でほとんど 500 パーセント増加したことを示す。

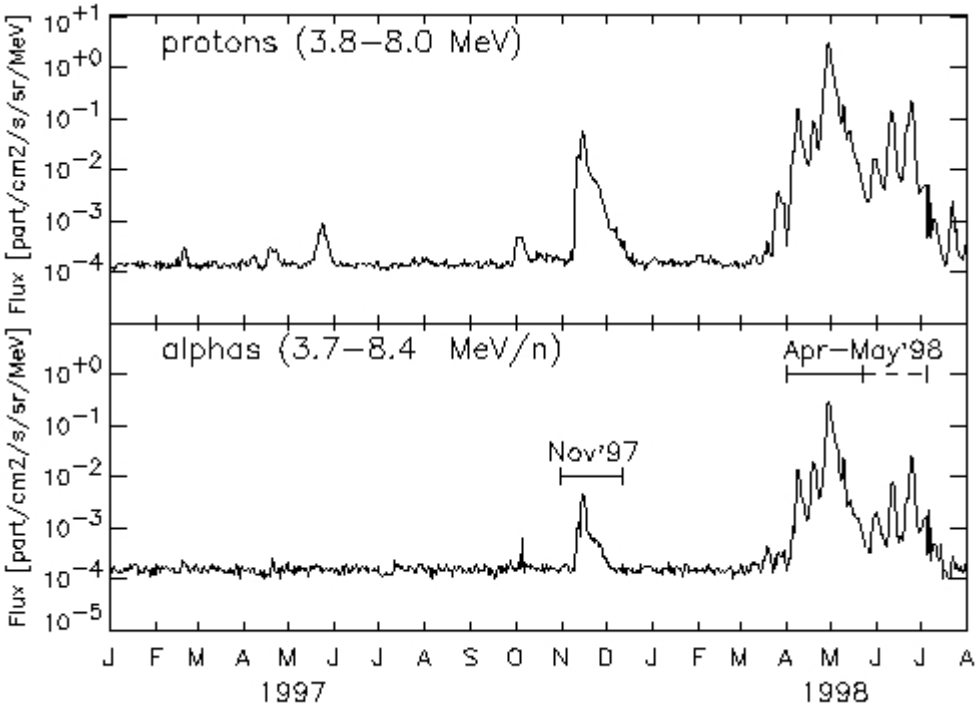
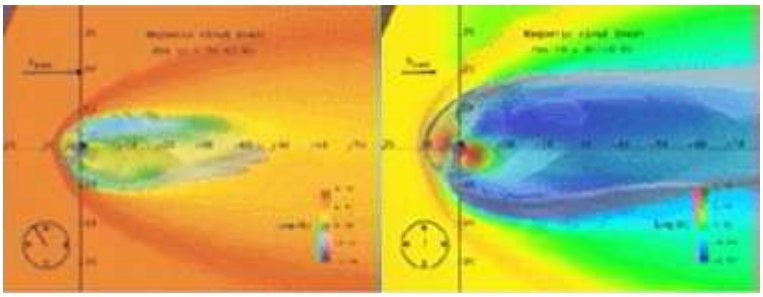
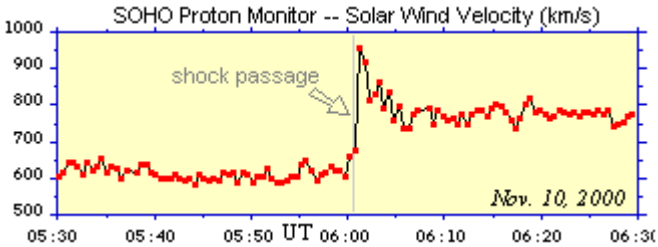


図 8.8？

1875-1993 年の世界的な火山活動の増大。
（マイケル・マンデビル感謝）
また、これらの統計は、より遠い背後の時代まで調べられた。
我々が現代の地震の器材を持つ前に、地震の強さは死んだ人の数によって測られた。
この測定値基準に基づいて、1999 年に、ロシアの国家の地震情報中心は、AD856,年からの世界で最も猛烈な 21 の地震のリストを発表した。
AD856 年から最も大きい 21 の地震のうちで少なくとも 9 は、20 世紀にあった。
この研究は、Sergey スメリャコフ博士によって言われ、パート 2 の中で重要な議論の側面

になる。[36] 

今我々は
従来の科学的な見地から、これらの変化の全ては、かけ離れた動きで
どれくらい珍しいか心に留めなければならない。」
我々が 5 章で確認したように、地震活動の主因は地球の芯のエネルギー的な増加であると思っている。



突然の太陽の放出で、これらの増加が非常に急速に起こるとき、芯の中の発光プラスマの一部は激しい周囲の圧力によってより高いエーテル的なエネルギー密度レベルに入る。
そのような密度の転換は、第 3 の物質密度中のプラスマを自由に動かす。
この超圧縮プラズマは地球のマントルを通して沸騰し圧力を軽減させ“物理的物質.”の密度を減少させ置き換える

大きな爆発性の力がつくられそれから非常に広い地域で、
猛暑がリリースされ、確かに地震と火山など地球物理学的活動に影響を及ぼす。
我々は、起きている変化がまた、人間の汚染に起因しておらず、我々の“惑星のガス-プラスマ層”に起因しているのをドミートリーブ博士が報告したことを書いてこの章を始めたことを思い出す。
[15]新しいプラスマは電離層で発生し、サイクロンは大気圏で増加し、より大きな磁気嵐が磁気圏でおこっている。
ドミートリーブもまた、惑星のガス-プラスマ層”の“物質構成が、変化していることを示した。

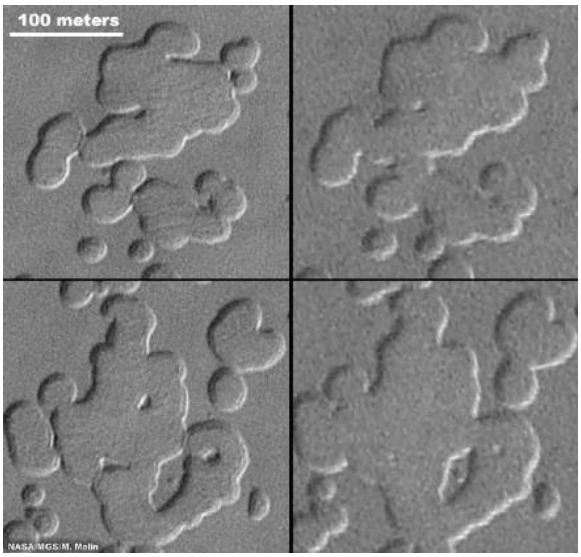
詳しく見ると地球上、高度 11 マイルのガスに重要な HO2（hydroperoxyl）の新しい成長がわかった、このメカニズムはオゾン層の破壊または人間の汚染と地球温暖化.、を含むどんな説明でも完全に不可解である。

ロシアの別々の研究は世界を覆う雲の量の総量が最後の世紀にかなり増大したことを確認した［15］
その上、エソウは 1994 年に地球をとり囲むヴァン・アレン放射帯に、予想外の新しい 2 つ宇宙粒子が発見されたと報告した[4]：
電子密度で 50MeV を超える新しい層は、コロナの大規模な放出または CMEs として現在知られている突然の太陽の磁気嵐の時期に、地球内部の磁気圏に注入される。
新しいベルトは、地球の回りのヴァン・アレン放射バンドに出来る。
この新しいベルトには、星の構成だけに伝統的に見つけられるイオンの要素を含む。

ドミートリーブによると、これらの例外は、惑星間空間の新しく変化した質に、直接起因している、それは以前にもまして惑星がより大きく Sun と太陽圏との相互作用する伝達メカニズムの働きをしているのを感じる。

[コズイレフ、ミーシン、Shnoll [39]と他の研究者の発見に基づく我々の理論において、ねじれ放射は自動的にそのような機能を提供する。.]
より重要なことは惑星間の空間のこの新しい変質は、太陽の活動を刺激して、その最大限と最小の相の両方の活動をプログラムする。
ここでドミートリーブが我々に話そうとしているものは、この宇宙の惑星間の中の非常にチャージされたエネルギーが、一方向だけでなく、地球上の出来事と、太陽に二方向の影響を及ぼす “回路”をつくったということである。
地球に戻ると、我々が観察する奇妙なもう一つの変則は、ラニーニャまたはエルニーニョの現象である。
例えば図 8.9 で、多くの気象衛星写真で、現在地球の大きい海の表面下に温暖化が起きていることを示す赤外線の明白なデータが、ある：
図 8.9？
地球の大きい海の表面下の中の温度変則。
（NOAA 感謝）
海の深い表面下でこれらの温度変則が出ており、この温暖化を引き起こすのに太陽輻射では決して十分な強さではない。
これは、海が地球内から熱せられていることを示唆する。
[3].
さらに、ドミートリーブ博士はこれらの海での温度変化が、地球磁場の強さに直接同期し

て上下することを示した。[3]
さらに正確に 30 日のコースで 0.22 度 C の温度変化が、世界的にあり、地球磁場の振動数の中央の変化と相関している。
[15]それゆえ、地球の発光し、磁化されたプラスマ核は、直接これらの変化に対して関係する。
プラスマの圧力が突然、増加し、その磁場の強さが急騰し、その熱のレベルの上昇波がある。そして、海洋温度が上がる。
同じように、ロシアのノボシビルスク Klyuchi 天文台は磁場の高さが毎年最高 30 ナノテスラ増大していると報告した。そして、芯の変化を再び示した。
また、地球の芯のこの熱エネルギーの増加は、極地の氷冠を急速に溶かす際に見ることができる。
ロードアイランド州と完全に同じくらいの大きさの南極大陸のロス氷棚は裂け、2000 年に海に落ちた。そして、このようなことは最近の 10 年に他にも何回もある。
この過程は、2002 年の間に速度が大いに速まった、
２、３ヵ月で、大陸から厚い 3 つの巨大な一切れが逃げ、
ごく最近の 2 つの存在は、C-18 と C-19 に名がつけられた。



このニュースは、ブッシュ政権さえ最終的に進み出て“何かが起きている”と認めなければならなかったほど、、一般的になっている
同様に磁極は速くこれらの位置を移した。南北方向が完全に変動していると多くの権威者が思う原因となった。
しばしば、国際的なラジオ番組、アートベルが報告したように、我々自身の磁北は絶えず増大する速度で通常の位置から離れ漂っている。
これは、世界中の土地の空港と飛行機がコンパスを使わなければならないが、地球磁場の変化に対応するためにこれらの滑走路を塗り直さなければならないほど、急速に変化して

いる。
また、個人的にはこれを見てはいないが、1990 年から 2000 年までのちょうど 10 年間にわたって航空会社飛行マップのナビゲーションパターンに、重要な変化を見ることができる。この磁気変化は、また、動物界に影響を及ぼしている。

海の動物の大量の数は変則的に自身を引き揚げ、他の多くの移住する動物、鳥と魚の通常の移動パターンを壊れ混乱している。
また、過去２、３年間で、具体的な説明もなく、劇的な大量の鳥の死が、報告された。
移住する鳥の混乱の１例として、1999 年に、アートベルラジオ・トークショーのホストと協力者リンダ・ムールトン・ハウは東海岸で行われた 2 つの異なる伝書鳩レースを報道した、そこで、そして、有名なルートに沿って旅行し帰るとき、全く、先例のない数のハトが絶望的に完全に失われた。
さらに、地球は、変化しつつある。:
ウィリアムハットン博士が証拠を明らかにしたが（地球の内核は外核より速く回転するだけでなく、それは実際、地球の外部とは異なる角度で回転する。
これは、確かに地球の内部にすでに方向の変動が起こったことを示し、すぐに外部でもそれを同様に完了する。[17]
ドミートリーブ博士と他は地球磁極が漂い続け、これらが“極移動の通路を移動することを思い出させる。そして、これらは常に過去の完全な磁極反転の前に続いた細い道である。歴史を通していろいろな時間的長さで磁極が北から南に絶えずはじき飛ぶことを知っているが、そのような反転は異常なことではない。
図 8.9 で、我々はパターンを見ることができる。それは海底峰から溶岩の中に放出された磁化された鉄分子の方向を分析することで決定される。
各々の溶岩の新しい層がこれらの峰に沿って冷やされ、鉄分子は特定の時間の地球磁極の位置に一致する。
図 8.10？
過去大きな 3 回の地球磁極のシフトの経路。
（モーリス・シャトラン感謝）
さらに、全ての成分が現在極地の磁気反転が再び起こっていることを示していると地質学者グレッグ・ブラーデンは、いう。
[6]地球の歴史を通して、最初の成分は、現在の重力場の強さがとても弱いことを示している。
10 の等級が最も強いものだとすると、現在はスケールの底である、1 に非常に近い。
第２に、2,000 年前より、磁場の強さはおよそ 38%低い、そして、スウェーデンの科学者 N.A Morner によれば、100 年につきおよそ平均 6%減少していることが 1988 年現在、測定された。

。第３に、シューマン反響として知られている地球の電磁エネルギー振動は、標準の毎秒7.8 のサイクル値より急速に増加し 8.6 以上が報告され、また、特定の地域で特に高いように見える。
歴史的にこれらの地球の 3 つの成分が結合した時、磁極シフトは、起きたと、ブラーデンは言う。
多くの研究者はこの考えに基づいて、我々が知っているように、人間の文明を崩壊させるものすごい大変動を引き起こしたと結論した。
磁気保護シールドが下がるとき、歴史的な大量絶滅に関係する大規模な太陽輻射の爆発が直撃する。
この大部分の人々が理解していない新しいエネルギーの爆発状態と形而上学的関連は、ここでは重要である;
この本のパート２で、それが直接、エネルギーと意識の自然発生的な変化に関係することを証明する。

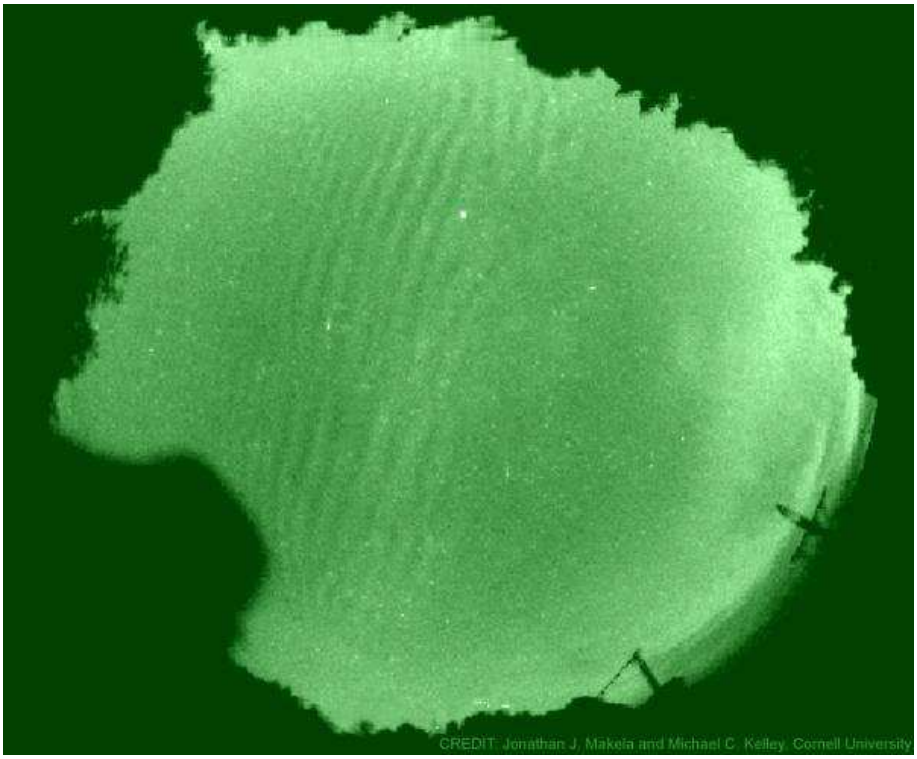
8.6 太陽の変化

図 8.11？
太陽の活動は 1996 年は最低（左側）、1999 年は最大(右側)。
（ＮＡＳＡへ感謝）
焦点を太陽に向けると、エネルギー活動全体の変則的な似たような増加を見つける。
（マイク・ロックウッド博士によって率いられた）オックスフォードの近くのラザフォード・アップルトン研究所のチームは今世紀最後に、太陽の磁場の全体的な強さが２倍以上になったことを発見した。それは 1901 年より、230 パーセント強くなった。
[20]もっと面白いことに、この磁場成長率は、絶えず速度が増加している。
Alexey ドミートリーブ博士は、それを報告する：
全体として、観測所の全ての報告の証拠は、我々の太陽系の太陽圏のエネルギー的な力の特性の速さ、質、量ともに、その成長のスピードを示している。
[加えられる強調]
これは太陽圏が太陽から発散し太陽系をとり囲む磁場であることを思い出さなければならない。
11 年ごとに、太陽の活動量の大きな増加がある、そして、2000-2002 年の期間に再びこの太陽の活動は最大になった。
図 8.11（対照のための緑の色をつけた）で、太陽が 1996 年が最小限で 1999 年が最大である違いは、全く明らかである。
さらに、現在の太陽の最大化は、その終了時の全ての予測を狂わせた;

それは、元々2000年にピークに達して、速く落下することになっていたが、2002年夏から高レベルの活動を示し続けた。
前の1989年に太陽が最大のとき、3月5日の非常に強力なX線フレアは
高エネルギーの陽子の流れを発しているSunから導かれ3月13日まで連続的に地球へと流れた。
シャトランとギルバートがマヤの予言で報告したように、この出来事は２、３時間だけで地球の磁極が途方もないことに八度それた。それは1952年以降地球磁場の最大の急転であった。
この事件も、通信システムの重大な混乱を引き起こし、激しいオーロラ現象を引き起こして、完全にカナダのパワーグリッドを崩壊させ何日間100万人以上の人々の電気が停電した。
さらに、Aleskeyドミートリーブ博士は、激しい太陽からの放出と地球上での天気の激動（例えばハリケーンと竜巻）と、地震活動と火山の活動を含む地球現象に関連させる。
この同じ情報は、リチャードPasichnykによって「広大な生命」の本のシリーズと彼のウェブサイト「生きた宇宙」で厳密に論文化された。
[31]この“かけ離れた活動”の、影響は、再び、この本の最初の章の始めに議論したようにN.Aコズイレフ博士と他によって科学的に証明されたねじれ放射に起因する。

。

図8.12？



太陽の中の陽子の波の、活動が急騰する。（1997-1998）
（感謝ＮＡＳＡ）
1995 年にＮＡＳＡは、、ユリシーズ宇宙船を外へ配備し太陽の高い高度の軌道に乗って回って、特別の観測をした。
すべての人の驚きは、太陽がその通常の磁場の全ての兆候を失ったことだ;
全ての表面の上には、北極もなく、南極もなく、恒常的な強度のフィールドがあった。
誰もこれを説明することができなかった、そして、ドミートリーブ博士が述べたようにこの“劇的な状態は、太陽の磁場の一般的な理論を変え、おそらくさらに磁気学者の’分析的プレゼンテーションを難しくした。我々の太陽からの最後のエネルギー放出は冠状コロナの大規模な放出として知られている。
これらのケースで、太陽は同時にその全表面から多くのエネルギーの超きらめきを放出する。そして、最高 100 億トンの帯電ガスを含む後光のような広がる泡が、宇宙の外に移動する。
[28]当然ドミートリーブ博士は以前にも毎年、これらの超フラッシュが実際急速にスペースを移動していると説明してきた！。
これは、水の中では、糖蜜より速く、泳いで横断できるのと同じ理由である;
惑星間空間は、良い伝導体になった。
これは、太陽圏の高い aetheric なエネルギー密度の領域への運動による別の影響を見せてくれる。
1997 年 11 月 6 日の莫大な、冠状コロナの放出質量は、9.1 の X レベルとＮＡＳＡがラベルを貼って相当に評価した、（正確な引用のように）72 時間も、地球は陽子エネルギーによって非常にチャージされた。
従来の理論は 1997 年 1 回の出来事だけを厳しく予測したが、実際は、3 回あった。そして、それは 300 パーセントの増加を意味する。
そして、図 8.12 に見るように、1997 年 11 月の出来事の激烈さは、さらに大きい強度の 1998 年の 4 月から 5 月の出来事を通して、後で追い越された。
最近でさえ、2000 年の 5 月 10 日から、13 日を通して
「太陽風」として知られている太陽から流れ出るエネルギーとちりは急に、閉ざされ、
引用したように、ＮＡＳＡがこれまでに観察された「最も急激で最も長続きする減少」とそれを発表する原因となった、。
[25] これが、地球上の巨大なオーロラをつくり、通常のサイズの 500 から 600 パーセントの間に、達する磁場を引き起こした。[25]
多くの国際的な衛星は、これはこれまでに目撃した地球磁場の最大の拡大であることを確認した。
左の写真はより圧縮されエネルギーに溢れた状態の、地球の磁場を示すのに対して、右の写真は拡大されてよりリラックスした状態を示す。

スペクトルの終わりの青は、赤より高い磁気エネルギー・チャージの度合いを示す。
図 8.13？
太陽風シャットダウンの後の地球磁場は 500-600%拡大した。

（感謝ＮＡＳＡ）
それから、2000 年 7 月 14 日、大きな太陽面暴発は、直接地球を撃った。
太陽からの陽子は我々のところへ 15 分のみできた、それは、これまでに観測された最速の移動速度の 1 つであるとＮＡＳＡは示した。
[26]純粋な光の速度は、太陽から地球への 8 分の移動時間の二倍より少し速いだけだ。
通常、エネルギー的な陽子は、光速に近い速さで移動するのが観測できるとは考えられない。
このフレアの後、従来のモデルで予想されるより優に 200 パーセント速く、移動するコロナの大規模な放出が、リリースされた。
日本の “Advanced 衛星を含む宇宙論と天体物理学のためのいろいろな衛星と器材は使用不能になるか完全にシャットダウンされた。そして実際にその軌道において盲目的にゆれるようになり、損害を受けた”。

図 8.14？
2000 年 11 月 10 日の CME の後、太陽風の力は急増する。
（ＮＡＳＡ/ソーホーへ感謝）
2000 年 11 月 8 日の、大きいフレアの後、すぐに 10 年間で最も激しい放射嵐の 1 つをつくったコロナの大規模な放出が続いた。
[27]
11 月 10 日に到着した、衝撃波は 31 時間経過しただけで地球をおそった[27]。そして、それは簡単な計算でもＮＡＳＡ科学者が予想したよりも二倍速い。
我々が図 8.13 で見ることができるように、太陽風の速度は shockwave が通ったので、
1 秒につきほぼ 600 から 1000 キロメートルまで急増した
そして、地球の回りで測定された高エネルギーの陽子の量のこの時間に突き出たレベルは普通より、それは優に 10 万倍大きかった。
SOHO とスターダスト衛星はそのような影響に耐えるために造られていず、放射の急騰で盲目になりこれらの位置確認のために通常使う星は“観測”不可能になった。
[27]
2001 年 2 月の第二週、さらに太陽は全く活発だった。そして、絶えず地球を粒子で攻撃した。
この時に、最初にＮＡＳＡは通常、あらゆる 11 年の太陽のサイクルの終わりに予想されているように、太陽の磁極が逆になるプロセスの中にあると報告した。

この反転が開始したので、地球へのエネルギー流動は再び突然、増大した。そして、多くの非常に重大な、大きな地震を引き起こした。
大部分の従来の科学者は、そのような明らかな関係を拒否している。
1 月 12 日と 25 日の間で、アラスカ沿岸で 6.9 の地震、エルサルバドルの 7.6 の地震[13] グジャラト（インド）での 7.9 の地震がある。
[14]
それから 2 月 28 日シアトル、ワシントンは、7.0 の地震に襲われた [14]、
HAARP プログラムの流動磁力計は、地球の磁気場の強さのゼロから 200 のガンマまでの突然の低下を測定した。そして、地震は起こった。
これは、地球の輝くプラスマ核への圧力が一時的にエネルギーの大きい爆発を放出する原因になることでシアトル地震が引き起こされたことを示している。
地球が突然のチャージを放出したので、エネルギーが放出された時、その磁場の強さの大きな瞬間的な、低下があった。
このエネルギーの赤字はすばやく太陽のねじれ-フィールド放射の流入圧に取り替えられた、しかし、この出来事の明確な兆候は磁力計データに見える。
従来の理論は、一旦極性が逆になるならば、以前に常時、起きていたように、太陽は穏やかになると思っていた。
太陽の磁場は、2001 年の 3 月 18 日から 27 日まで着実に増加し、29 日に非常に大きい太陽面暴発が吹き出た。
地球に誘導された CME によってオーロラの光が襲うという重要な出来事が後に続いた。、
それから、すぐに後に続けて 2001 年 4 月 2 日の、太陽面のフレア暴発 NO9393 は明るさと強さの全ての記録を破った。それは、聞いたこともない 22 の X-クラスの重量があった;
驚くべきことに測定器具の物差しは、最大 20 前を測定するように設計されているだけだった。
このフレアは､少なくともこれまで 25 年間で観察されたその種類で最大のものと考えられ、それに“メガフレアという放出の新しい名前がつけられた。. [43]” 2 つの連続的なコロナの大規模な放出、あるいは、CMEs は 4 月 10 日に放出された。
最初の CME は、秒速よりゆっくり移動した、これは、「カーニバル CME」という名前をつけられた、そのあと最初の、CME は秒速より速く感動的に消えた。
1989 年 3 月の出来事は地球の磁場を 8 度逸脱させ、Canada のパワーグリッドを完全に閉鎖させたが、それよりほぼ 3 倍、強力だった X-22 レベルのフレア NO9393 からの放射は幸いにも、直接地球に衝撃を与えなかった。。
このほぼ 3 倍の大きさの爆発は、文字通りそれが襲った全地球の半分を働かなくすることができた。
2001 年 4 月 10 日に再び、2 つの CMEs が、放出された。

それから、4 月 11 日に、猛烈な竜巻（４分の１マイルより少し広い）の頻発は中西部のアメリカ合衆国を通って爆発した。そして、カンザス、アイオワ、オクラホマ、ミズーリとネブラスカに影響を及ぼした。
さらに、4 月 7 日インドネシアで 5.7 の地震が、動き（4 月 13 日に中国で 30,000 の家を破壊した 5.9 の地震があり、、そして 4 月 15 日日本海沖で、6.5 上の地震が起こった。
大部分の科学者は太陽の活動と出来事（例えば厳しい天気と地震）の関係を認める気がない、しかし、、我々はエネルギー現象がどのように再び関係するかわかる。
これらの全ての出来事は、4 月 10 日の太陽の活動の波の周辺に集合している。
正にこの太陽活動が、後退しなかった現在、これまでの、理論で可能だと考えられたよりはるかに多くの CMEs がうまれ、ＮＡＳＡの科学者は口で言い表せない問題をかかえた。
これは、完全に隠蔽されていず、ＮＡＳＡまたは他の宇宙機関には隠されてない;
単にそれは、メディアにはあまり注目されてないだけだ。
要するに、このごく最近の太陽の最大の周期は、とても異常でエネルギー化されていた
そのＮＡＳＡの太陽-地球の関係 Program のための科学ディレクタージョージ Withbroe、は、声明を出した
それを引用すると「これは、歴史上で最大にユニークな太陽である。
この最も突飛なイメージとデータは、1 代前の天文学者の手に余る。」[41]

8.7 ENERGETIC CHANGES OF THE PLANETS

8.7 惑星のエネルギー的変化

我々の aetheric なモデルでは、太陽は極地地域の周囲の多数のエネルギーを吸収して、過速させ赤道にそって、黄道面に沿ってこのエネルギーを外へ放出する。

ちょうど風船が爆発する直前までふくらますことができるが、Sun はこの鬱積したエネルギー・チャージを放出することを強制される。そして、X 線爆風、巨大な太陽面暴発、陽子排出と大規模な放出は、LISM エネルギー密度増加に起因する。
この回転は惑星間の媒体が良いエネルギー・コンダクターになる原因になる。そして、それは惑星のエネルギー的なチャージをより高くより高い量で飽和させるのを助ける。
それで、もし本当に地球に見るように惑星が発光プラスマの核を持ち、エネルギーを保存することができ、放出することができるなら、似たようなエネルギー的な変化が太陽系の中、至る所でみられると予想しなければならない。

Dmitriev 博士の惑星の調査は、磁極シフトの速度、気候変化、地球の地震とサイクロンのの発生の加速を示し、他の惑星上の磁気およびプラスマ・エネルギー・チャージを増加させ、大気の質が変化する。

それに加えて、ある惑星は、実際に顕著に輝くようになった。
以下の全ては、特に明記しない限り Dmitriev’s 研究室[15]の脚注がつく。

: 8.7.1 冥王星

最も外側に観測される惑星である冥王星は、重要なことに　最近その表面に大量の暗点が予想外に増加している。

8.7.2 海王星

一部の科学者は、惑星海王星の上で、最近完全な磁気のポールシフトがあったと考えている。
ボイジャー衛星が通って磁場を測定したが、回転するポールからほぼ 50 度傾けられたと考えられる。
そのようなアンバランスは通常比較的短い時間にそれ自体を直すので、出来事は最近だと単純に考えられると惑星物理学者は話す。
また、海王星から発される可視光の強度は、顕著に増加した。

8.7.3 天王星

海王星のように、ボイジャーは惑星天王星でも、磁場が回転軸から移動した点に注目した、このケースでは、55 から 60 度の移動であった。
海王星と天王星は磁気によって接合している惑星なので、海王星と天王星の間のこの同時の動きは可能だと思われる。
両方ともこの似た、変則的な変異を示す。そして、それは最近の、アンバランスな磁極変化が起こったことを示唆する。
さらに、天王星の’磁気圏は、“その強度の大規模な突然の増加”を示した。

8.7.4 土星

明るく色のついたオーロラは土星で最近観察された。そして、明らかにエネルギーチャージを示している。
リチャード Pasichnyk は、これらの輝きの変化を直接太陽の活動に関連させた。
大部分のオーロラは極地の近くに集まる、そして、この劇的なエネルギー増加は赤外線の写真撮影をとおして見られる。

8.7.5 木星

1992 現在、木星の磁場は強度が二倍になった、そして、また、その輝きの総体が増加した。
ドミートリーブその他は、“Comet 彗星”シューメーカー・レビー9（それは 1994 年 7 月に劇的に木星に衝突した）が実際に一連の明るいプラスマの形態であったと思う？そして、

これは輝く球のシーケンスが長い、まっすぐな線を移動した理由を説明する。
一旦この“plasmoid train プラスモイド列”が木星をたたいたとするならば、その後の木星の一連の新しい状態とプロセス”を観察した。それは過度のプラスマの発生を誘導した。
「太陽コロナの穴と同じ物質の」このプラズマは、放出された変則的なオーロラ構造をより大きくしながら、13.2 と 36 センチメートルの帯の、輝く放射帯をつくった。
1997 年に、100 万アンペアの信じられない電磁的強さの、熱烈なプラスマ・エネルギーのチューブが、木星とその月イオの火山の多い領域でできたのが見られた。
この現象は、火山の活動が、惑星または月の中心からの発光プラスマのエネルギー的な発散に起因するという非常に強い証拠を提示している。
最近では、木星によって太陽の光が食された、2001 年 2 月に、ＮＡＳＡ科学者はイオを観測した、彼らはそれが今は以前にもまして輝いていることを発見した、
日光は、それを打っていなかったが顕著に輝き、球自体のまわりに「プラズマ円環体」をつくった。

8.7.6 [11]火星

ドミートリーブ博士が報告したように、火星の空気は、確かな成長の徴候を示していた。
これらの変換は、その生物圏の質を増加させた。
曇の成長が赤道の地域で観察された、そして、普通でないオゾンの集中の増加が大気圏にあった。
さらに、1997 年 9 月に、火星サーベイヤー衛星は、火星の空気密度で、以前のＮＡＳＡデータの計算からすると 200%の増加に遭遇した。
ドミートリーブが示すように、
この大きな大気密度は、太陽の腕のようなエネルギー配列の 1 本を曲げ完全に開いたままにして、人工衛星が故障する原因になった。
図 8.15？
火星の極地の氷冠の溶解。
（礼儀ＮＡＳＡ感謝）
最近もＮＡＳＡは、2001 年 12 月、火星の極地の氷冠が溶ける速度の大きな増加を示す写真を公開した。
[7、3]図 8.15 は、これらのイメージで簡単で最も劇的なものである。
火星上のこの“global warming 火星温暖化”はどんな従来のモデルからも完全に予想外だが、我々が地球で遭遇する変化と、完全に一致する。そして、地球の輝くプラスマの芯のエネルギー的な増加に起因する。
ブッシュ政権は、彼らの最近の“地球温暖化”の議論において、当然、これには言及しなかった。

8.7.7 地球

我々はすでに詳細に地球について書いた、そして、この現在の変化のながれには、空気変化するという非常に明らかな徴候があったのを思い出さなければならない;
これは実際の空気の化学組成で起きたのと同様に、平均の雲の密度の増加が観察された。
通常星からの放射にだけ見られる性質の、新しいチャージされた粒子は、ヴァン・アレン帯に現れている。
1963 年から 1993 年まで全体的に大災害が 410 パーセント増加したことを覚えていよう、1973 年から 1998 年までの地震が 400 パーセントの増加と 1875 年から 1993 年まで火山活動が 500%増加した。[15]
[22]

8.7.8 地球の月

1993 年のボストン大学科学者による研究によれば、我々の月にナトリウム（ナトリウム）の空気がある。それは、5,000 マイルまたは 9,000 キロメートルの高さになる。
[32]、アポロ任務の間、月の大気圏でヘリウムとアルゴン原子が見つかったしかし、地球からの観察は 1988 年にナトリウムとカリウム・イオンをリストに加えた。
[18 の]ドミートリーブは、これを空気の成長の“first-stage 初期段階”の証拠と思う（実際は比較すると地球の空気より濃くなくおよそ 10 億分である）；
月の空気が地球表面の温度と圧力に入れられるならば、それは 210 フィートの立方体に完全に入ってしまうだろう。
[34]、最近では、1998 年 11 月のしし座流星群の後、「月から少なくとも 500,000 マイルの距離のナトリウム・ガスの大きな尾が、3 夜連続にわたってその現れ方が変化」するのが観察された。
[5] [これは、月の表面にぶつかった獅子座流星群の、多くの流星塵に起因すると思われるが、これらのエネルギー的なプラスマ効果によることがありえる。
月の空気の進化に関するデータは我々のセミナーでたいてい多くの質問が起きた、そこで、我々はこの本のためにさらに調査することを決めた。
我々の調査は、ナトリウム空気がフリンと Medillo によって 1933 年の昔に実際に最初に発見されたことを明らかにした。
この技術は A. . Potter,、T. Morsan と L.ジリアンによって 1994 年にもっと精度を高めて再び複製された[29]。そして、空気がもっと月の表面まで及ぶことを明らかにした。
[29]ラトガーズ大学の Theordore E.マデイ教授によると
月の空気の生成に対してサポートするためにいかなる唯一の説明もデータもほとんどない
そして、最も重要なそのプロセスについて一般的な合意もない。

[強調加える]
［21］
彼が「月の空気の進化について」T.モーガンと共同執筆した論文に言及するとき、Shemansky は再び集団との関係を断つ、
「アポロ任務の時よりナトリウムとカリウム濃度の量が本当に増加したと再びほのめかす。
[35] T.E.マデイと Yakshinkskiy は、「太陽風によって噴出する荷電粒子」を提案した
この空気の 1 つの可能なソースからそれは絶えず再供給されなければならない。
[21] ドミートリーブのモデルの提案はこの月の大気の進化は、より高いエネルギー的密度の LISM への、我々の運動と太陽活動の増加によって引き起こされている。

8.7.9 金星

重要な物理的、化学的な、光学的な変化が、金星上で観察されている。
これは、硫黄を含有するガス量の激減、明点と暗点の反転と重要なその全体的な明るさの増加を含む。
これらの変化に関する主流記事の 1 つニューヨークタイムズ（01 年/1/28 日）でケニス・チャンは、言った：
[9]
科学者が金星を見てみるたびに、彼らは異なる何かを見るようである、現れるか、消えている現象で、チェシャー猫の微笑のようだ。
1999 年 11 月に、S.R.I.の研究者とインターナショナルとローウェル観測所は、マウナケア（ハワイ）の、10 メートルのケック望遠鏡が金星の夜側の方へ 8 分間向けられ酸素原子の特徴的な緑の輝きを、確かめたことに注目した。
「それは、全くの驚きであった」と、S.R.I.の科学者で Science の最新号の論文をリードする著者トーマス G. Slanger,博士は言った。、
[加えられる強調]
図 8.16？
夜の金星の表面にある緑の白熱。
（ＮＡＳＡ/コーネル大へ感謝）
これらの金星の変則的なエネルギー的な増加に関する記事が主流プレスに本当に出てきたが、西洋のメディアの中の誰もこれまでそれを全太陽圏を通して起きている変化とは別の出来事とみなし、このデータを結合しなかった。［8］

8.7.10 水星

月のように、水星にもまた、ナトリウム、カリウムと他の元素の薄い空気があるのが見ら

れた。
水星が Sun にとても近いので、従来の理論はこの空気はかなり説明困難であった？
しかし、それでも、それはそこに測定される。
これも、新しい空気の発生の“first-stage 初期段階”を示すものかもしれない。
[21] Pasichnyk は水星の極地にまた、氷が存在するのが見られたと報告する。そして、それは太陽の近くでは不可能だと思われる。

8.8 結論：

太陽圏の変換

この章にこれまで示された情報は、エネルギー的な変化の“オメガポイント”の方へ本当に我々が進んでいることを示唆している。
我々のオンライン記事「マヤ暦の最終的秘密」のなかで、我々は Sergey スメリャコフ博士からの証拠を提示する[40]
それは、この新しい領域への我々の運動が正確にいつ終了するか特定するのを許す。
このデータは以前に英語を話す他のどの著者によってもこれまで書かれなかった[36]。

論文で我々は、5,125 年のマヤ暦の時間サイクルが「ファイ」比率によってどのように金(オーリック)の時間に分割されるか述べ、
長さが次第に短くなり、最終的な「内破」点の原因となる。
それぞれで増加する時間サイクルに達すると、大きいエネルギー的な影響が地球に起こる。
AD 856 年からの 21 の最大の全ての地震はこれらの“分岐点で正確におそった。それは、”
我々の LISM の低いエネルギーから高いエネルギー状態への急速な通過に起因した。
近くの星の超新星爆発は、また、これらの点で起きた。
[40]
エーテル的なモデルは、銀河の螺旋を描く、回転花火形の「パーカーSpiral」構造のふちで、水と油の間に多くの線ができるようにエーテル的な 1 レベルの密度ともう一つレベルの間に別の層がうまれることを提案する。
この境界線域は自然に振動を妨害する。それは、中で単純に“phi”比率に基づいてエーテルを通してどちらの方向にも、波紋を広げる。
我々がオーリック・サイクルの一つの分岐点を通り抜けるたびに、LISM の別々のより高いエネルギー的な領域が始まる。

最も面白いことに、地球の全人口はまた、正確にファイ比率で増加し密集が進行することが示された。そして、これらのエネルギー点に集中した。

[36]新しい宗教、精神的な信仰と時間の測定システムである暦は、これらの時間に生まれる。（その後大帝国の崩壊するのと同時に比較的速く政治的な発展が続く）
そのような出来事が起きることが可能な次の 2 つの“分岐点”は、2003 年と 2008 年である？そんなに遠くのことではない。
これは、aetheric なエネルギー密度が増加し、同様に人間の意識が増加することを示唆する巨大な 1 つの関連する証拠の連鎖である。
これは、また、直接精神的な発展に関係することがありえる。
この本のパート 2 は、エーテル的エネルギー、生物学、意識と精神性の関係を完全に確立することに捧げられる。
Smelyakov 博士の、不思議なサイクルが崩壊する最終的な“implosion point 内破点崩壊点”の日に言及することは、また、重要である：
2012 年 12 月 21 日はマヤ暦の終わりの日？。
ちなみに、地球が銀河系の中心に対する「歳差運動」に完全に同調するため、この同じ時間に、現在、赤方偏移があることを知っているが、従来のモデルの観察可能な宇宙より、10 倍、高い。
我々は、パート 2 で更に詳細にこれらの関係を調査する。

[スメリャコフのサイクルは、テレンス・マッケナの「Timewave Zero」モデルと完全に異なる、
そして、それと混同してはならない、またはそれを支持しながら見てはならない。]
今のところ、肝心な点はこれである：
我々には、証拠がある。
我々は、何が起きているか知っている。
我々は、それが起こる理由を知っている。
我々は、それがどのように起こるか知っている。
そして、我々は正確に“それ”がいつ起こるか知っている。
この次のパート 2 の中の情報で、我々はまた、“それ”が正確に非常に良い状況を作ることが可能になることを明らかにする。
古代の伝統の 1 つの声として、
聖書は、「新しい天と地」人類の空想的な黄金時代の接近として、これに言及した、
、我々の各々はそれに参加するほうを選び
それに加うるにイエスと他のマスターによって表示される能力を持つ
：
“私がするように、汝らもこれらをし、より大きいことをする…”（ヨハネ 14:12）

HOME | INDEX
ホーム|インデックス
REFERENCES:
リファレンス：

1. Aspden, Harold.
1. アスプデン（ハロルド)。
Energy Science Tutorial Note 10:
エネルギー科学チュートリアル注 10：
Tifft’s Discovery.
Tifft’s ディスカバリー。
(1997) URL:
（1997 の）URL：
http://www.energyscience.co.uk/tu/tu10.htm
2. Aspden, H. & Eagles, D.M.
2. アスプデン、H.とイーグルス（D.M.）
Aether Theory and the Fine-Structure Constant.
エーテル理論とファイン構造定数。
(1972) Physics Letters, 41A, 423-424.
（1972 の）物理学手紙、41A、423-424。
URL:
http://www.energyscience.co.uk/tu/tu10.htm
3. Bara, Michael & Hoagland, Richard.
3. バラ、マイケルとホーグランド（リチャード)。
Global Warming on Mars?
火星の上の地球温暖化？
The Hyperdimensional Connection.
Hyperdimensional 接続。

(2001) URL:
http://www.enterprisemission.com/warming.htm
4. Blake, J.R.
4. ブレイク（J.R.）
The Van-Allen radiation belts ? two newly observed populations.
ヴァン・アレン放射帯？2 は、新しく人口を観察した。
(1994) Absr.
（1994 の）Absr.
Spring Meet., Baltimore, MD, May 23-28.
Meet.、ボルチモア博士、5 月 23 日-28 をはねさせる。
EOS, 1994, vol. 75 no. 16.
エオス、1994、第 75 巻 16 番。
5. Boston University / American Geophysical Union.
5. ボストン大学/アメリカ人地球物理学的組合。
Lunar sodium tail discovered.
発見される月のナトリウム尾。
(1999) URL:
http://www.astronomynow.com/breaking/15 分の 9906moontail/
6. Braden, Gregg.
6. ブラーデン（グレッグ）。
Awakening to Zero Point:
ゼロ点に気づくこと：
The Collective Initiation.
総体的な開始。
(1997) Radio Bookstore Press, Bellevue, WA.
（1997 の）ラジオ書店プレス、ベルヴュー、WA。
ISBN:
1-889071-09-9.
URL:
http://www.greggbraden.com/
7. Britt, R.R.
7. ブリット（R.R.）
Mars Ski Report:
火星スキー報告：
Snow is Hard, Dense and Disappearing.
雪は、固くて、濃く、消えている。

(2001) URL:
http://www.space.com/scienceastronomy/solarsystem/mars_snow_011206-1.html
8. Britt, R.R.
8. ブリット（R.R.）
Venus:
ビーナス：
No Lightning, But a Strange Green Glow.
稲妻でなく、しかし、変な緑の白熱。
(2001) URL:
http://www.space.com/scienceastronomy/solarsystem/venus_lights_01022.html
9. Chang, Kenneth.
9. チャン（ケニス）。
(Anomalous brightness increases of Venus) (2001) New York Times, Jan. 28, 2001.
2001 年 1 月 28 日、（ビーナスの変則的な明るさ増加）（2001 の）ニューヨークタイムズ。
URL:
http://www.rense.com/general7/mysterious.htm
10. ＣＮＮ。
(Tornado activity after April 10, 2001 solar activity) (2001) URL:
（2001 年 4 月 10 日以後のトルネード活動太陽の活動）（2001 の）URL：
http://www.cnn.com/2001/WEATHER/04/12/stormdamage.ap/index.html
11. ＣＮＮ。
(Brightness increase of Io) (2001) URL:
（イオの明るさ増加）（2001 の）URL：
http://www.cnn.com/2001/TECH/space/02/07/io.eclipse/index.html
12. ＣＮＮ。
(Brightness increase of Jupiter) (2001) URL:
（木星の明るさ増加）（2001 の）URL：
http://www.cnn.com/2000/TECH/space/12/15/hubble.pic/index.html
13. ＣＮＮ。
(Earthquake of El Salvador, Jan. 2001) (2001) URL:
（2001 年 1 月、エルサルバドルの地震）（2001 の）URL：
http://www.cnn.com/2001/WORLD/americas/02/13/salvador.quake/index.html
http://www.cnn.com/分の 2001WORLD/americas/02/13/salvador.quake/index.html
14. CNN.
14. ＣＮＮ。
(Earthquake of Gujarat, India, Jan. 2001) (2001) URL:

（グジャラト、インド、2001 年 1 月の地震）（2001 の）URL：
http://www.cnn.com/2001/WORLD/asiapcf/south/01/29/india.quake.03/index.html
15. Dmitriev, Aleskey.
15. ドミートリーブ（Aleskey.）
Planetophysical State of the Earth and Life.
地球と生命の Planetophysical な状態。
(1997) URL:
（1997 の）URL：
http://www.tmgnow.com/repository/global/planetophysical.html
16. European Southern Observatory.
16. ヨーロッパの南の天文台。
Astron.
天文学
Astrophys.
Astrophys.
317, 193-202 (1997) URL:
http：
//194.190.131.172/~izmod/Papers/ILM97/sc1.htm
17. Hutton, William.
17. ハットン（ウィリアム）。
Coming Earth Changes:
来たるべき地球は、変わる：
The Evidence.
証拠。
(1998)
(1998)
18. Leifert, Harvey.
18. ライファート（ハービー）。
Investigating the Moon’s atmosphere.
Moon’s 空気を調査すること。
(1998) URL:
（1998 の）URL：
http://www.agu.org/sci_soc/prrl/prrl9826.html
19. American Geophysical Union News, Release No. 98-26.
19. アメリカの地球物理学的合併ニュース（リリース No. 98-26）。
(1998) URL:

http://www.agu.org/sci_soc/prrl/prrl9826.html {sodium and potassium added to list in 1988}
http://www.agu.org/sci_soc/prrl/prrl9826.html｛ナトリウムとカリウムは、1988 年にリストを増した｝
20. Lockwood, Mike.
20. ロックウッド（マイク）。
(230% increase in solar magnetic field since 1901) (1998) URL:
（1901 年以降太陽の磁場の 230%の増加）（1998 の）URL：
http://ascension2000.com/solarmag.html
http://ascension2000.com/solarmag.html
21. Madey, T.E.
21. マデイ（T.E.）
T.E.
Madey’s Research and Co-Workers.
Madey’s 調査と同僚。
URL：
http://www.physics.rutgers.edu/lsm/pages/madey_group.html {solar wind on lunar atm}
http://www.physics.rutgers.edu/lsm/pages/madey_group.html｛月の気圧の太陽風｝
22. Mandeville, Michael.
22. マンデビル（マイケル）。
(Earthquake and Volcanism Increases) http://www.michaelmandeville.com/
（地震と火山活動増加）http://www.michaelmandeville.com/
23. Mewaldt, R.A.
Re-Accelerated Solar Wind ?
Re 速められた太陽風？
An Additional Source of Anomalous Cosmic Rays?
変則的な宇宙線の付加的な関係者？
(1999) Caltech, Pasadena, CA, 91125, USA.
（1999 の）カリフォルニア工科大、パサデナ、CA、91125、USA。
URL:
http://www.icrc1999.utah.edu/~icrc1999/root/vol7/s4_3_07.pdf
24. NASA.
(Solar activity min-max image comparison) (2000) URL:
（太陽の活動 min-max イメージ比較）（2000 の）URL：
http://science.nasa.gov/headlines/y2000/ast22dec_1.htm

25. NASA.
(May 10-13 2000 Solar Wind shutdown, 500-600% increase in Earth magnetic field) (2000) URL:
（5 月 10 日-13 の 2000 の太陽風シャットダウン（地球磁場の 500-600%増加））（2000 の）URL：
http://science.nasa.gov/newhome/headlines/ast13dec99_1.htm
26. NASA.
26. ＮＡＳＡ。
(July 14, 2000 CME, 200% faster traveling speed, satellite damage) (2000) URL:
（2000 年 7 月 14 日 CME、200%より速い旅行している速度、衛星損害）（2000 の）URL：
http://science.nasa.gov/headlines/y2000/ast22dec_1.htm;
http://science.nasa.gov/headlines/y2000/ast14jul_2m.htm

27. NASA.
(Nov. 8, 2000 solar radiation storm, double traveling speed, 100,000 times increase in proton flux around Earth) (2000) URL:
（2000 年 11 月 8 日太陽輻射嵐、二倍の旅行している速度、地球のあたりの陽子流れの 100,000 回増加）（2000 の）URL：
http://science.nasa.gov/headlines/y2000/ast22nov_1.htm
28. NASA.
28. ＮＡＳＡ。
(Properties of CMEs, up to 10bn tons electrified gas) (2000) URL:
（CMEs（帯電する最高 10bn トン・ガス）の特性）（2000 の）URL：
http://science.nasa.gov/headlines/y2000/ast13sep_1.htm
29. Odenwald, Sten.
29. オデンワルド（ステン）。
Archive of Astronomy Questions and Answers:
天文学質疑応答のアーカイブ：
Does the Moon have an atmopshere?
月に、atmopshere があるか？
URL:
http://itss.raytheon.com/cafe/quadir/q652.html {Flynn Medillo 1933}
｛フリン Medillo 1933｝
30. Pasichnyk, Richard.
30. Pasichnyk（リチャード）。
(Redshift anomalies) URL:

（赤方偏移変則）URL：
http://www.livingcosmos.com/quasar.htm
31. Pasichnyk, Richard.
The Vital Vastness ?
不可欠な広大さ？
Volume Two:
第 2 巻：
The Living Cosmos.
生命宇宙。
(2002) Writer’s Showcase / Iuniverse, Inc. ISBN:
0-595-21086-4;
URL:
http://www.livingcosmos.com/
32. Ray, C. Claiborne.
32. レイ（C.クレイボーン）。
Science Q&A:
科学Ｑ＆Ａ：
Lunar Atmosphere.
月の空気。
URL:
http://www.think-aboutit.com/Moon/science_q__a_lunar_atmosphere.htm
33. Rutgers University.
33. ラトガーズ大学。
Lunar Atmosphere Reproduced in a Lab.
月の空気は、研究室で複製した。
(1999) Artemis Society International.
国際（1999 の）アルテミス社会。
URL:
http://www.asi.org/adb/06/09/04/1999/08/news-19990814.html {Yakshinskiy and Madey}
34. Seybold, Calina C. Characteristics of the Lunar Environment.
34. シーボルト（月の環境の Calina C.特徴）。
(1995) URL:
（1995 の）URL：
http://www.tsgc.utexas.edu/tadp/1995/spects/environment.html {lunar 210 ft cube}
35. Shemansky, D.E.
Vitae.

自伝。
University of Southern California.
南カリフォルニア大学。
http://ae-www.usc.edu/bio/dons/ds_biosk.html
36. Smelyakov, Sergey and Karpenko, Yuri.
36. スメリャコフ、Sergey とカルペンコ（由利）。
(1999) The Auric Time Scale and the Mayan Calendar:
金ものは、スケールとマヤ語カレンダーの時間を計る：(1999)
Demography, Seismicity and History of Great Revelations in the light of the Solar-Planetary Synchronism.
人口統計学、地震の頻度と太陽の惑星同時性に照らした大きい意外な事実の歴史。

ISBN：
966-7309-53-3;
http://www.timeofglobalshift.com/Science/Ulti_Secr.html
37. Talbot, J. Plasma Laser Stars 1976-1977 Papers.
37. タルボット、J.プラスマ・レーザーは、1976-1977 書類を主役にする。
http://home.achilles.net/~jtalbot/V1976b/index.html {Fig 8.5}
38. Talbot, J. Quasar Clusters ?
38. タルボット（J.クェーサー一群）？
No Quasar Lensing!
Lensing しているクェーサーでない！
http://home.achilles.net/~jtalbot/references/lenses.html {Fig 8.6}
39. Wilcock, David.
39. ウィルコック（デイビッド）。
Convergence III.
収束 III。
(2001) URL:
（2001 の）URL：
http://ascension2000.com/ConvergenceIII
40. Wilcock, David.
40. ウィルコック（デイビッド）。
The Ultimate Secret of the Mayan Calendar.
マヤ語カレンダーの最後の秘密。
(2002) Time of Global Shift National Seminar Tour.
世界的なシフト国家のセミナー旅行の（2002 の）時間。

http://www.timeofglobalshift.com/Science/Ulti_Secr.html
41. Withbroe, George.
(Solar Changes) (2000) NASA.
（太陽の変化）（2000 の）ＮＡＳＡ。
http://science.nasa.gov/headlines/y2000/ast22dec_1.htm
42. Zank, Gary P. Could the Heliosphere Collapse?
42. Zank に、ゲイリーP.はそうすることができた。そして、太陽圏は崩れる？
(1999) Bartol Institute, University of Delaware.
（1999 の）Bartol 学会（デラウェア大学)。
URL:
http://www.npaci.edu/successes/1999_helio.html
43. (April 2001 Mega-Flare) URL:
43. （2001 年 4 月メガ照明弾）URL :
http://www.maj.com/sun/noaa.html;
http://news.bbc.co.uk/hi/english/sci/tech/newsid_1249000/1249403.stm
44. Time of Global Shift National Seminar Tour.
44. 世界的なシフト国家のセミナー旅行の時間。
URL:
http://www.timeofglobalshift.com/
45. Heilprin, John.
45. ハイルプリン（ジョン)。
White House Warns on Climate Change.
ホワイトハウスは、気候変化に関して警告する。
(2002) The Washington Post, June 4, 2002.
2002 年 6 月 4 日、ワシントンはポストする（2002)。
http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/articles/A58119-2002Jun4.html
46. Drudge, Matt.
46. あくせく働く人（マット)。
Bush Admin U-Turn on Global Warming.
地球温暖化に関するブッシュ管理Ｕターン。
(2002) [Note:
This link is transient and may only exist a short time on the website.] URL:
この関連は、一時的で、短い時、ウェブサイトに存在するだけかもしれない。] URL :
http://www.drudgereport.com/flash91.htm
47. Bara, Mike and Hoagland, Richard.
47. バラ、マイクとホーグランド（リチャード)。

Enterprise Mission Statement on the Coming of Sitchin’s “Nibiru” in Spring, 2003.
春（2003）に Sitchin’s“Nibiru”から生じることの事業任務声明。
(2002) URL:
http://www.enterprisemission.com/zeta.htm

第 9 章：

VORTEXES, PROPULSION AND MATTER CHANGES
渦、推進力と物質変化

9.1 概要

この章では、さらに分極化した「意識ユニット」（CU）の螺旋を描く渦エネルギーに見ることができるいろいろな異常現象を示す
これは、物質の領域に対しても影響し使用できる。
我々は、分極化した Cu の全ての特徴を示す地球の自然な異常現象である竜巻と（オレゴンボルテックス）といった異常現象に関する Dmitriev 博士の調査結果と流れる水を推進力システムとして使ったビクトリー　シュールンベルガーSchauberger の仕事を紹介する。
そして、次の章で、バミューダトライアングルのような地球エネルギーの渦に見られる、時間の経過に影響を及ぼすことが可能なより高次元の力の深刻な異常を示唆し議論する。
9.2

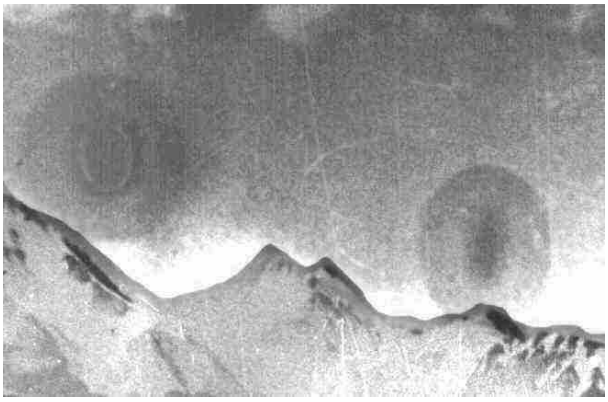
ドミートリーブ博士と“TORNADO PHYSICS 竜巻の物理学”

Dmitriev 論文における竜巻の “Electrogravidynamic という概念、 そして“vacuum domains”についての彼の知識、または我々の“分極化意識ユニット”と呼んだ”考え方を、竜巻が動く理由を理解する方法と課題に直接適用する。我々がすでに言ったように、分極化した意識ユニットは皮をむかれたオレンジの中心のような穴を通る、球状のエネルギー領域である。
中心の管のような地域の動きは最も速い速度で、最高のエネルギー量がある、そして、この地域で、重力波は直接電磁気と光に変わるように見える;
結局、これらは単に aetheric エーテル的エネルギーとして統一されており、異なる形で表れている。
Dmitriev 論文において、この考えを支持する広範囲な事実がある、そして、ここでは概要だけでリストされたものの広範囲なリファレンスを提供せず、興味のある読者は詳細な情報のために論文を見てほしい。
竜巻を研究する大部分の科学者は、サイクロンまたはハリケーンの小型化されたバージョンとして、これを見る。
ハリケーンにおいて、高気圧の地帯と低気圧の地帯が一緒に来て、互いに回転し始めることは有名である。そして、激しく、回転する気候システムを作成し、ものすごい動乱を引

き起こすことがある。
同じように、ほとんどの場合、高速で動く非常に暗い、低くたれこめた雲の後に、竜巻はある。
従来の理論は単純にそのペア雲とその雲の中から起こる動きと、発散する tornado のエネルギーと、力に疑いも無く、簡単に同意する。
1949 年 E.M ブルックス.によって従来の数学的なモデルは初めて提案されたが、じょうご雲より少なくとも 3 倍大きいペア雲があり、それ自体の中に少なくとも 3 つの層が必ずあり、最初は 2 つが逆回転する。

中心軸のあたりの高圧の回転は、空気が中心に向かって移動する原因となる。(腕を引き入れ、それによって回転速度を加速させて回転するアイススケーターに似ている)
ほとんど、このモデルは問題にされていない、したがって、この章は時間の浪費または純真な科学的なまねごとのように見えるかもしれない。
しかし、ドミートリーブはじょうご形の-雲または排水口の形態が、雲なしで、全っく具体的にそれ自体でそう見えるケースの証拠を引用する！
さらに、まわりで雲が渦巻き続けることで、そのまわりにペア雲のように見えるものがで

きる。
現在すでにこの本で紹介した情報に基づいて、我々は説明の手段を持つ。
じょうご雲は実際、球面円環体の回転しているエネルギーの中心のチューブである、我々はそれを、分極化する Cu 意識ユニットとして言及した。
これらのエネルギー的な形は、雲の活動が発生することを要求しない、
ドミートリーブの研究が示すように、
これらは、太陽によって作られ空間を通って動くことができ、我々の電離層に「大気の Holes として衝撃を与える
「これらは「球電」のようになることができ、また、「自然の自己発光性の形成」（NSLFs）または「レーダーエンジェル」として地球から出てくることができる。」
（ロシアで撮られた 2 つの NSLFs の珍しい、写真は、次に置いた。）
[http://www.millenngroup.com/repository/planetary/pfvd.html:の表題
写真 1.
Katun 山峰の上にある巨大なスケールの NSLF』。
写真は、1972 年 8 月 19 日現地時間 11 時にヘリコプターに乗ってとられた。
観測者は、「Belukha サミット山の方向の白っぽい光る点」に注目したことについて話した。
写真では明確に見えるディスクと卵形の形は、視覚的には観察されなかった。
地域の地形学のチャートを使ってされた物の目測では、［これらの直径 1,5km.以上]］とされた



それで、竜巻がペア雲なしで発生するのが見られるケースで、我々が見るものの多くは大気より、地球表面下の動きのエネルギー的プロセスである。
回転する風でちりと粒子は、じょうごに見えるように引き寄せられて形成される。
それから、その後じょうご雲を作ったエネルギーは空気からそれ自体に湿気を引きつけ、このように“parent cloud ペアレンツ雲”ができる原因になった。
しかし、ブルックス・モデルを使う従来の全ての気象研究では、これは不可能な変則現象であって、無視されなければならなかった。
ドミートリーブ博士は竜巻形態で大気のプロセスの重要性を無視してはいない、しかし、彼は我々が方程式の半分を見ているだけだと主張するする。誰も満足にこれらの竜巻が始まる理由を説明することができなかった、そして地球上の特定の場所だけで、これらが存在するのは、ドミートリーブには地球の外皮の下の、岩石圏での動きの fluidlike 対流プロセスに答えが存在するように思われた。
我々がこの“天と地の間で連結しているのを見るまで、”本当に、何がここで働いているか

我々は理解しなかった。
我々が第 7 章を覚えているならば、ドミートリーブほかは“真空領域の特性をリストした。
そして、我々は“polarized 意識ユニット、”と名づけたが活動中に 10 の異なる変則があることが示された。
我々は、これらの真空領域が問題を解決することができるのを理解する、そして、変則の一部が地球の中または地球から上に上がっているこれらのエネルギーを含んでいるのを思い出す。
特に、きわどい地震発生地域は、常に NSLFs を発生させよく観察される、そして、これらの形が空に高く上がるとき、彼らはレーダーで観測することができる、
そして、それは「レーダーエンジェルとして言われる。
「最新の器材は、この誤差信号を除くように造られている、
しかし、これらの発生「理由」は、めったに言及されない。

9.2.1 UFO SIGHTINGS

9.2.1 UFO 観察例

我々にはこれらのルミナス現象の理論を理解していないか、理論がないので、確かに空で光が報告された UFO 観察例のかなりのパーセンテージをこれらが占めてきた。そして、さらにこれらの電磁器具に対する影響も含まれていた。
我々は、金属的構造のはっきりした場合と他の知的デザインの明らかな徴候があった多くの観察例の信用を失墜させるのでこの事実は引用していない。
しかし、これらの現象の我々の科学的な研究にとって、“mass hysteria 集団ヒステリー”または妄想の症例以外のものであっても、長くメディア全体が UFO 現象へのどんな言及も禁止され、ひどく妨害されてきたことを思い出すことは、重要である。
このために非常に、これらの絶えず否定されてきた出来事や特別の状況などの、研究を助けることができる大量の良い科学的なデータがある。
そういうことで、Dmitriev’s モデルにおいて、竜巻の本当の形は、ただ空気が生み出すものでない力の結合された相互作用である;
それは、地球（大気圏の何らかと地球の中の）のいろいろな層の間の、このエネルギー的な動きで始まる。
そして、より密接に竜巻現象をとり囲む異常を見るとき、我々は“すべてが従来のモデルではあてはまらないことを知らなければならない。
我々が本当に空中上昇の具体的な例に直面するのはとても難しい、そういうことで、我々は依然としてそれが空気吸入でなければならないと考えることに強くしばられている！
データは単純にこの概念を支持してない。
9.2.2 HOLE-PUNCH CLOUDS

9.2.2 ホール-パンチ雲

上記の自然な自己発光性の形の写真は、“faked 偽物”で、この考えを支持するいかなる証拠も他にないと思う人々にとって、次の写真は、新しい疑念がたちあがるはずだ。
フロリダのメルボルンで、2000 年 11 月、マット Bragaw とピーターBlottman は、“norm 基準”外の、普通でない構造の雲の写真を撮り、米国気象課は即席でこれらに“hole-パンチ雲”の新しい名前を与えた。
これらの形の何枚かの写真は http://www.floridatoday.com/news/columnists/larimer/111200larimer.htm の記事でえられる、そして、我々はまた、これらが南北方向の、地球磁場に一致していたと話された。
類似した出来事は、1993 年に目撃され、報告された。
Dmitriev’ 博士の調査の代わりに気象学者によってされた説明は、なにかま伸びしているようだ。
…『ホール-パンチ』の特徴は、/南北に整列していることだ。
これは大気の上昇と/下降の対を引き起こしている大気圏に、ある種の『波』があることを示唆している。
「これは、特別冷却された（流動）雲層に波が下降しその部分で氷晶が、落ちる原因となる。
これが起こるとき、（流動液滴の状態で）氷晶は成長する。
したがって、ホールは巻積雲の床部分で始まった。
（フロリダ）メルボルンでの“ホールパンチ雲”？
2000 年 11 月 12 日
手元に現在証拠を与えられたことによれば、
それは、特別に北から南に流れようとする「意志」をもつようで
そして、静かに完全な卵形になるということで、
「空気対」による雲になる、大気圏の不可解な「波」の代わりに
これらが地下地殻構造上のプロセスに起因した領域に起こっている地球の磁場に整列し
自然の自己発光性の形成によってつくられたと考えるほうが、はるかに現実的である。
そして“radar angels”が発生するその時、これらは地面から浮き上がって、大気を通過して電磁変化を引き起こす。
この特別のケースでは、雲層がとても薄く冷たく、NSLF の電磁エネルギーは、雲をイオン化することができ、それによって氷晶の細い穴が見える。
上ってくるエネルギーの影響を充分吸収し、これらの雲の形態が薄くなければ、しばしば観測されるかもしれないが、見る影もなくこれらは分散する。
9.2.3 LUMINOUS TORNADO ANOMALIES

9.2.3 ルミナストルネード変則

心に“ホール-パンチ雲”現象で我々に提示された理由を持って、再び我々の焦点を竜巻へ当てて見よう、現在のモデルは当てはまらない多くの問題が Dmitriev 博士の調査で、我々は明らかに理解することができる。
我々は、ドミートリーブが編集した多くの竜巻のルミネート現象の観察例から、再びキー・ワードを見ることから始める：
- じょうごの中の火の球
- じょうご雲の中の稲妻
- じょうご雲の表面が黄色に光る
-竜巻をとり囲む絶え間ない稲妻
- 竜巻の中の火の領域
- 竜巻を輝く雲がとり囲む
- 竜巻からの壮麗な輝き
- じょうご雲の内側の光り輝く雲
- 竜巻をとり囲む光の玉がついた稲妻
- 竜巻に関係する爆発する火の玉
- じょうご雲の中の濃い青い光の回転する帯
- じょうご雲からの“７月４日の回転花火”のような光の効果
我々がこの特性のリストを見るとき、竜巻に発生している大量の“free energy”があることは我々にとってすぐに明らかになるはずだ。
サールが利用した彼のジャイロ・コイルは、要求されるエネルギー量に比例して恒常的な青白いルミナス現象の量が生じるようである。
しかし、我々が完全に竜巻現象を理解するために心の中に保たなければならないよりはるかに多くの変則が、ある。
9.3 TORNADO PHENOMENOLOGY

9.3 トルネード現象学

それで、ここでは、我々は一時的に Dmitriev’s 論文のセクション 2.1 で言及された 8 点を報告する。これは竜巻を研究するとき、考えなければならない特異現象に完全に注目するために“Tornado 現象学”と称した。
9.3.1 FUNNEL CLOUDS WITHOUT “PARENTS”

9.3.1 “PARENTS”のないじょうご雲

ＮＯ1 で、竜巻構造の従来のブルックス理論を否定する、ペアレンツ雲がじょうご雲を作る役割を果たすように見えなかったケースヒストリーの証拠の引用をする。

H.B. Wobus によって報告されたケースでは、じょうごは雲を残して、前方へ動くとすぐに新しい雲がその上にできた。そして、高さ 10 キロメートルに達した。

この新しい雲が作られた、何時間かあと、その中で激しい稲妻が、みられた。
もちろん、気象学者がこのデータを無視するのを選ぶならば、すべては“明確”である、そして、誤った概念が疑い無く使用し続けることができる。
もう一つのブルックス竜巻理論に挑戦する面白い現象の報告は、上海の近く（中国）から来た。
人が海でボートに乗っていたとき、ボートの近くの水面で突然、霧がまく動きを示し始めた。
非常に短い時間で、霧は幅およそ 10 メートル、高さ 6 メートルある回転している領域をつくった。
あなたがそのボートに乗っていたならば、どれほどびっくりしたか想像してほしい！
この場所で、コラムはそのサイズを急速に成長し始めた。
最初はたとえ雲がサイクロンより上にできなかったとしても、雲は結局発達した。そして、それは暗い色になった。
この両方のケースで、じょうご雲は、ペアレンツ雲に適切に機能することを要求するようではなかった。
じょうご雲が作られる直接的な理由として、本当に目に見えないエネルギー的な形であるという考え以外のものは大気にない。
しかし、地球の下の動きから立ち昇る電子重力エネルギーの爆発的な回転が生じ、その高エネルギーの回転する中心シャフトと、そのまわりに水または空気を集めるならば、すべてはずっと明らかに合致し始める。

9.3.2 水平から垂直の動きへ

ドミートリーブが上げたＮＯ2 は、空の水平の動きが、突然細いじょうご雲の、垂直の動きに、なぜ変化するのか満足な説明を誰も本当にしなかったということである。
水が排水管から下に流れる場合を見るとき、我々は排水管が
重力によって水が穴を流れ落ちている“sink 吸い込み”であることを知っている。
竜巻をシミュレーションするもう一つの方法は透明なガラスのジャーに水を満たすことである？ジャーを水でいっぱいにし、ふたをして、まわりに円を描くように速く回転させる。
竜巻のような形が、水の内部に本当に現れる。
しかし、この形はジャーのガラスの壁のそばにつくられた圧力を必要とする。そして、それは上からじょうご構造の底まで広がる！
竜巻がその中心シャフトを支えることができるためには、シンクとして地球とエネルギー交換をするか、何らかの外部エネルギーが一緒にそれに圧力をかけてその形を保持するか

のどちらかをしなければならない。
明らかに、分極化する意識ユニットの球状エネルギー・フィールドは、この場合、竜巻において見られる中心シャフトへの圧力に関係がある。
9.3.3 LEVITATION EFFECTS NOT CAUSED BY AIR SUCTION

9.3.3 空気吸入に起因しない空中浮揚効果

ＮＯ3 で、ドミートリーブはじょうごの中に明らかに明確に区切る空気の壁が見ることができることを思い出すことから始める、そして、稲妻がこれらの間で光るのが見られる。
通常、竜巻と関連する空中浮揚効果は、単に中の空気の真空の引き起こす機能と思われている。
しかし、竜巻が地面と直接接触してないとき、空中浮揚効果は見られない。
ここでは、我々は再び 1951 年のテキサスのケースを引用する、それは、厚さ 3 メートルの壁をもち途方もない 130 メートル幅の広いじょうご雲は 6 メートルの低さで、オブザーバーを通りすぎた。そして、それは本質的に標準の木より低いレベルである。
人がじょうごに見上げたので、光りの雲が輝くのが見ることができ、そして、呼吸は苦しくならかったので、空気は真空ではなかった。
壁の回転は非常に速い速度であった、そして、この動きはじょうごの上部まで、ずっと観察することができた。
その後まもなく、同じじょうごは、近所の家の上に下がってきて触れて、地面を離れるとすぐにそれを持ち上げた。
ドミートリーブ博士は、これを、空中上昇効果が竜巻の螺旋を描くエネルギー・フィールドの中でのみ起こるということを証明する多数の似たケースの中の、1 例だと説明する。
彼は1966年にされた測定でじょうご雲の内側の気圧が低いことを証明したことを思い出させる、しかし、テキサス・データからは、じょうご雲の下では、気圧が不変であることを知っている。
これは、竜巻を作るエネルギー的な相互作用は我々が信じさせられているより、はるかに不思議なことを再び示唆している。
回転と空気吸入の現象は、雲の内部で自己充足的に見え、それから離れて広がらず、むしろ球状エネルギー・フィールドの中にその構造を維持している。
9.3.4 ANOMALOUS MATTER PHASE CHANGES

9.3.4 変則的な物質相の変化

ドミートリーブはＮＯ4 で、多数の異常現象を引用し、
物質が、見えなくなり、/または他の物質に浸透するといったようにその基本的形態が竜巻で変化することができると提案する。
この点は、実際に我々の将来の議論にとって非常に重要になる。

従来の理論の中の、これらの観察はじょうご雲の中の、空気が中で下方に、高速の運動で動くという科学的な観察によって概して説明される、だが雲の壁を測ると、空気が上へ動く速度は/毎秒 100 から 200 メートルまでくらいである。
主流理論において、この突然の気流の方向の反転は、竜巻の周囲に起きる多くの変則的な出来事を説明するのに便利に用いられる。
ドミートリーブ博士は、慎重に見て、対立する気流による平凡な説明が以下の証拠部分を考えた上で保持できたか疑うよう我々に、訴える。
これらで最初にありえない点は、互いからのほんの少しのメーターだけ離れた地域で、竜巻の影響が非常に鋭く異なることがなぜ可能なのかという点に焦点が当たる。
もちろん、これはハリケーンによる広範囲にわたる損害と、他種類の原因による極端な気候では、非常に対照的になる：
- じょうごはリンゴの木を根こそぎにした。そして、バラバラにそれを裂いた。
木から 2、3 メートル離れてあった蜂の巣は、無傷のままだった。
- 二階建ての木製の家は、その住民から剥ぎ取られて、バラバラに破れていた。
階段のある部屋の 3 つの階段とその前のドアと、それにもたれていたベンチがあったが、ベンチと階段は動かなかった。
この同じじょうごは、他の車にかかわることなく、止まっている車から 2 つのタイヤを引き離し始めた、そして、さらに木の下の近くのテーブルに置いてあった石油ランプはともっていた。
車の状況に関して、竜巻のエネルギーが、車に車輪を接合させていた大型ナットを壊し、これらをばらばらにさせたように見え、その一方で、他の乗物には損害を与えなかった。
全ての車の金属的構造が、竜巻のエネルギー変化によって弱くされたとして、大型ナットは単に圧力で崩れたが、他の停車していた車はバラバラになることに抵抗することができた。
確かに、懐疑論者はこの他に空想的な説明を作り出そうとすることができる、しかし、我々は進んで、これが正しい解釈であることを事実は示唆し続けると思うだけである。
Dmitriev’s 論文を見つける前に、竜巻の通り抜けた地域の直接の証人から、我々はわらの切れ端が、結局破損の兆候なしに窓の磨き板ガラスの途中に溶かされた話を聞いた。
しかし、残念なことに、写真は利用できなかった。
この話題について我々の友人サブリナと話し合うとき、彼女が竜巻が完全に去ったオクラホマで、彼女の友人から連絡があったという、そして、住んでいた納屋の木の壁に牛の体の部分が溶かされていたという話を語った。多くの他の類似した竜巻の異常現象の様に、そして、牛のための影響が驚くほどそれほど致命的だったので農民が注意または悪評を引きつけたくなかったのでこの事実はすっかり隠蔽された。
どうして、そのような現象が、可能になるか？
唯一端的な説明は、竜巻を囲んでいる地域では、空間と時間の“構造”に歪曲がつくられ

たということである。
我々が現在の物質がつくられる際、エーテル的エネルギーとの関係について理解すると、これらの場合それが表面化したのが見える：
竜巻の高エネルギーが回転しているフィールドでは、物質はそれが一時的に相を変えて、他の物質を経験できるより高い振動状態がもたらされる。
竜巻が通り、そして、エネルギー的な影響が徐々になくなるとき、物質は再び通常の状態に戻って、固まる。
これらの物語が面白くても、最初我々には他の事実でこれらを裏づけるいかなる手段もなかった。
それから、調査のためインターネットに注意を向け我々は以下の説明を、http://www.tornadoproject.com/oddities/oddities.htm:に発見した
1915 年 11 月のカンザスのグレート・ベンド竜巻はそれに関連して最も奇妙さを多数持つ竜巻のようである... 破片でいっぱいの鉄の給水栓が見つかった...
ほとんど毎日、虚のような奇妙さは、物語のリストに加えられ成長した。
鉄の水差しは裏返しにされ、雄鶏は水差しに吹きとばされ容器の首からその頭だけ突き出ていた。
我々は、明らかに有能な鉄の消火栓が破片で“fill up 一杯になる”ことの考えが物理学の法則を犯すことを知っている。
破片がどんなに速く移動していても、これらは金属を透過することができない。
しかし、通常固体物質である給水栓が柔軟に他の物体が浸透するようになったならば、これは簡単に説明することができる。
グレート・ベンドからの他のレポートは、（例えば鉄の水差しが裏返しにされることができたという考えは）すぐに嘘と、みなされる。
しかし、給水栓と水差しは鉄（例外的に磁場に敏感である金属）でできている、そして、我々は竜巻に関連して非常に強い電磁変則があるということを Dmitriev’s 博士の仕事から知っている。
裏返しにされた水差しの場合、竜巻がなにか、水差しの物質状態を変えて、それを 1 枚のゴムと同じくらい柔軟にしたことはあり得る。
それから、じょうごの内側の低気圧の前で、水差しの内側の高い圧力は大砲のように突然、鳴り響く。そして、その過程で水差しを裏返しに反転させる。
これは、薄い、弾力性がある材質の場合このような爆発の方法で起きたことは完全に予測できる現象である。
同様に、雄鶏は浸透する物質になった水差しに吹きつけられたかもしれない
そして、一旦竜巻が去ったならば、それ以後は、逃げようとするためその頭を呼吸のため水差しから出した、そして、水差しは固まった。
関連して面白いことに、人間が時々金属のこれらの変化が起こる原因となる高い振動のエ

ネルギーを発生することが可能なことを示唆する情報を持つ。
ラジオ・トークショー・ホスト・ローラ・リーは、彼女のウェブサイト http://www.lauralee.com/,）で、（彼女が“スプーン曲げの”セミナーに行った彼女の経験について記事を書いたがそれを特集した。
もちろん、ユリ・ゲラーは 1970 年代にこの金属を曲げる精神的能力を示し、公表した最初の人であった、そして、場合によっては、彼はラジオに現れて、総体的な金属-曲げの実験で、観衆をえた。
幼い子供たちを含む多数の人々は、彼ら自身の家で成功を成し遂げた彼らの驚きを報告した。
ローラ・リーが出席したセミナーで、プレゼンターは高いレベルで参加者のエネルギーと熱意を引き起こすことができた。その時、手にスプーンまたはフォークを持つように指導され、集中だけでこれらを曲げた。
ローラ・リーが個人的にスプーン曲げに成功しなかったが、彼女は単にそのフォークの下だけ持って、まるでフォークが大きい熱の下で溶かされたように、ゆっくり垂れ折り曲がっている１人の男の参加者を目撃した。
これらのケースでは、銀製食器の本当の溶解が起こるのを許す温度に十分近くに上がっていない、そして、影響は短い時間続くだけである。
しかし、金属が活発に柔軟な５または-１０秒間、彼らが好きなどんな方法ででも、参加者は曲げることができ、それを形づくることができる。
したがって、それは唯一他の説明が、確実である、
利用されていないエネルギーの形は、物質の分子構造を変えることができる、
それを柔軟にし、そして、浸透する、さもなければ可能ではない。
我々は、ロシアの Kulagina、ヴィノグラードワと Ermolayev が行った念動の研究を通して人間がそのようなエネルギー・フィールドをつくることが可能であることをすでに知っていた。
我々が物理的物質のこれらの異常な変化をもっとまじめに見始めるとき、現代の量子論が改訂を必要とすることを発見するだろう？そして、我々は進歩したら、詳細を発表する。
我々の本来の点に戻り、我々は、 “スプーン曲げ”で見られる金属に対する人間の精神的効果が、他にも同様の種類の問題を含む竜巻のエネルギー・フィールドで、非常に大きいレベルで見られることを知ることができる。
これらの変則が孤立して数だけあるならば、懐疑論者はうわさとして速くこれらを全て否定することができる。
しかし、一旦我々が Dmitriev 博士の調査を発見するならば、彼がこの領域で一連の驚くべき事実を関係づけたことがわかる。
彼は. 1966 年の F.W レーンと 1993 年のコロラドのボールダーの T. Grazulis から引用したが、現在の我々は多くの異常現象のリストのデータを増加させた。:

小さい小石は１枚の弾丸のようにガラスを刺し、完璧に透過して、いかなる破砕もない。
１枚の板は、それを粉砕するか、他に目に見える損害も与えることなくもう一枚の板を透過したのが見られる
簡単に二つは“熔け合った fused together.”
- 燃えて焦げた古い木の厚板は、材木でできている家の壁を通って突き通したのが見られた。たとえそれが非常に簡単に分離して薄片にならなければならなかったとしても、それが壁を通り抜けていたのに、焼けた厚板の弱い、多孔性の先端はダメージを受けていなかった。
- クローバーの葉が、窪みを作るのに十分深く固い化粧漆喰壁に押しやられたとわかった。
- 1.5 インチの厚い薄鋼板から作られた門の枠が、1 本の松材によってつき刺されたとわかった。
事実を見た後、これら全ての効果の原因が高速度回転以外になかったために、
主流研究者の結論は、ほとんどばかばかしいといった
「我々が見たものは、物理学の全ての既知の法則の明確な違反である！

クローバーの葉がそのような方法で化粧漆喰壁の中へ押し進むことができる唯一の方法は、ある壁が短い時間、液体と同じくらい柔軟になることだ。
その板が融着することができ、松の材木が固体金属の１インチ半浸透することができ、
または弱く、焦がされた厚板は、破壊なしに家の壁を通り浸透することができる可能な方法が物理学の認められた法則にはない。
だが、竜巻が通って、物質が流動状態になって、浸透するならば、これらは完全に通常の観察になる。
我々は、竜巻の強力なエネルギーの面前では、物質が実際に相変化することができることを知り、おそらく我々の既知の現実が全く消えさえする。
我々が原子と分子が単に固い“粒子”でできていると思い続けるならば、このことは、我々が示す感覚ではありえない、しかし、多くの新しい証拠が示唆するのは原子が単に電磁界のエネルギーである、そしてそのエネルギーは最終的には見えない流状の「エーテル」の測定可能な露出である、
そのケースでは原子はその振動数の変化に柔軟性がある。
バミューダトライアングル情報は、これがどのように起こるか理解する必要があるという証明を与える。
9.3.5 WALLS WITHIN WALLS

9.3.5 壁の中の壁

Dmitriev の竜巻現象のリストの中のＮＯ５は回転ボルテックスがじょうご雲の足の回りに、しばしば見られるということである。そして、ちりまたは水の柱を作り、それが上がって、地球に落ちる滝を形成する。

場合によっては、この滝はじょうごの 2/3 の高さと同じくらいある、そして、それはじょうご雲の実際の高さより広いことさえありえる。
じょうご-雲形成の従来の理論にはこれの説明がないので、それは単に無視される。
しかし、多くの場合、じょうごは完全にそれを囲む第 2 の壁を持つのが見られる、
この第 2 の壁は襟または膜を作り、そして、高速で回転するのが見られる。
そして、まれなケースでは、じょうごはこれらに beadlike 泡のような現われを持つのが見られた。そして、なめらかな円錐形の代わりに一連の球面のふくらみがこれらの中にあることを意味した。
我々が前の章においてすでに調査した情報で、このデータの全ては、球面“vacuum domain”のエネルギー的な力の存在によって説明できる。
我々が Roschin とゴーディン実験で見たように（それはサール効果発生器で Searl 博士の効果を繰り返した）、電離放射線の球面円環体はつくられた、そして、一連の低温磁気の“壁”はそれをとり囲んだ。
したがって、入れ子にされたエネルギー的なフィールドである「壁”の中の“壁」についての考えは、これらのエネルギー・フィールドの通常の副産物であるように見える。
これらの竜巻ケースで、もうひとつの“壁”はちりまたは水を集めて、ある定度可視的なものになっている、そして、じょうごに観察される泡のようなふくらみは最初に竜巻を作った広いフィールドを動くもの、より小さい球状エネルギー・フィールドである。
9.3.6 JUMPING MOVEMENTS

9.3.6 ジャンピング動き

ＮＯ6 は非常に短い。そして、すなわち、ほとんどすべてのケースでじょうごは地面の特定の別々の地点の触れるだけである、そして、重い、なめらかな方法では、動かず、むしろ、1 点から他の点へジャンプしていくのが見られる。
竜巻が最初にできたとき、これは最も起こるようだ。
再び、これらの効果が発生するために地球の表面下の現象と竜巻のエネルギーとが何らかの形で相互作用しなければならないことを明確に知ることができる。
9.3.7 GRAVITY / LEVITATION ANOMALIES

9.3.7 重力/空中上昇変則

ＮＯ7 は、竜巻の空中上昇効果が吸入力の代わりに反重力の力によることを強く示唆する他の具体的事実の例をあげる。
じょうごが川に交差したとき、まるで目に見えない力が喫水線を押し下げ、明らかに不自然な方法で流れるように強制し、川の水の高まったところに実際に溝のような陥没を引き起こすことができる。
これはライン川と同様に、ミシシッピ川とモスクワの川で観察された、そこで、川の深さ

の総量が 25 メートルあった地域に、深さ 7 メートルの溝ができた。
また、ＮＯ7 のリストされたものには、人々と動物を持ち上げることができ、4 から 10 キロメートルまでの距離を運搬し、そのプロセスを通過しても時々生きていていた。
これらが竜巻の中で高速で絶えず回転していたならば、これは不可能に思える、回転することなく反重力フィールドがこれらを抱いたならば、これははるかにありうる。
同じように、一連の例の 1 つでは、1 インチの軟体動物は 160 キロメートル動いて、地上の小さい地域の中に落下した、そして、トルネード雲が到着する前、まる 1 時間落下し続けた。
そして、1940 年 6 月 17 日ロシアのゴーリキーの地域の Meschery 村に、竜巻は 14 世紀の銀貨をおよそ 1000 個ふり注いだ。
コインの本来の場所は見つかり、これは“タイムワープ”ではなかった;
重要な点はコインが数キロメートル運ばれた後に非常に限られた狭い地域に落ちたということであった、そして、これらはじょうごでなくペアレント雲から落ちた。
1879 年アーヴィングの竜巻は 108 トンの重さで 75 メートルの長さに造られた鉄道の橋にむかった。
竜巻は、橋に入りこみそれを持ち上げ巻きあげた？我々が竜巻が通り抜けると物質の状態を変えると考えると、その能力を明瞭に理解するのが非常に簡単になる。
我々は通常、金属が特定の弱い場所だけ、破砕されて壊れ、または単にたわむのを期待するが、鉄はゴムと同じくらいやわらかくなって、竜巻の内側の印象的な力はたやすくそれをよじることができる。
もう一つのケースでは、じょうごは石で作られた大きい校舎を破壊し、その断片は竜巻の中で速く回転したが、それを投げ出さなかった。
これは、明らかに、予期された全ての遠心力の法則をくつがえしている、竜巻の中に単純な回転と空気吸入によって説明されることができない何らかの不思議な力が存在することを再び示す？。
似たケースでは、大きい材木で作られた教会は中の 50 人の人々と一緒に 6 メートル輸送された、そして、誰も死ななかった。
そして、1964 年に、じょうごは中の 10 人の人々と家を 400 メートルの距離を輸送し、彼ら全員、生きたままでいた。

9.3.8 変則的な電磁効果

最後の Dmitriev の変則のリストのＮｏ8 は、すでに示されている、それは竜巻の電磁特性に注目させ、最もダイレクトに“vacuum domains”または分極化された意識ユニットに結びつける。
1 つの事実は竜巻が地面に触れていないとき、ブンブンいうか歯擦音の雑音を持つのが見られたということである。そして、これら自身の周辺の空気をイオン化する強力な電磁界が

あれば、それは当然予想される。
竜巻には、以下の、電磁効果が明らかに付随していた：
球電、じょうごを囲んでいる短くて広い幕電光、じょうごの表面の上に輝く黄色の白熱
、そして球電と類似していてただ非常に大きいスケールの青っぽいボールのような形がじょうご雲の中に見られる。
明らかに、この青いエネルギーの大きな球は、ドミートリーブ博士がどこかほかで言及した“自然の自己発光性の形 formations”と、非常に類似している。
.
H.L ジョーンズは、竜巻が始まる前を“pulse generator パルス発電機”と呼んだ形を報告したが、ゆっくり動く火のコラムは、それに似ている.。
そのケースでは、ペアレンツ雲からじょうご雲があらわれる 30 分から 90 分前に丸い、明るい青い点は、ペアレンツ雲の中に観察されて、電気的な活動のサインを示すように見えた。

9.3.9 トルネード現象の技術的アプリケーション

竜巻がエネルギー的にたくさんの性質を持って、大部分の科学者が説明する提案ほど、決して単純でないことを知り、事実それに注意することは難しい。
これらは全く文字通り、巨大な反重力とフリーエネルギー“マシン”である？強力なサール効果発生器や他の装置の、自然の等価物のようである。
また、物理的物質の状態に対する奇怪な効果がまた、正常な状況下で、同様に技術的に複製できなければならないことを心にとめておかなければならない。
次の章で説明するバミューダトライアングルのようなケースでは、それが弾力性があり他の物質と融合できるようになり始めたあと、物質の“次の段階”で完全に我々の振動レベルまたは“現実”から消えることを知ることができる;
そして、これは念力移動の有効な科学に至るかもしれない。
我々が「時代の転換」で説明したように、これは悪名高いN・テスラの仕事に基づく“フィラデルフィア実験で偶然に起こったように見える。
この論争の的となる“実験で、総てを視覚から無くし、レーダーの不可視性をつくる見込みで、一連の高い強度の電磁コイルが設計され”、船のまわりで脈動する、球状フィールドをつくった。
装置がテストされる間、男の何人かは他の物質に浸透できる状態で船のまわりを歩いた。
船が再度固体化したとき、悲劇的にも彼らは船の金属壁に、溶かされた。
この現実の実験は、軍告発者コロラド・フィリップ・コーソによって彼の死の前に確かめられ彼は実際の船は海軍の掃海艇であって、USS エルドリッジ号もその乗り組員も関係しなかったと主張した。
次の章で、そのような“ボルテックス”技術が可能な技術的装置の多くの例を引用しよう。

9.3.10 より適切な説明としての真空領域

この点で、ドミートリーブ博士は彼の論文の中で始めて “vacuum domains 真空領域 ” と自然な自己発光性の形成に関して彼の調査結果を持ち込み、それには、すでに我々は前の章から精通している。
太陽の活動がそのピークに到着するとき、これらの形の振動数が急に上がるのが見られることを再び思い出す。
また、地面に起因してルミネートの形が高い頻度で見られたとき、例えば Gorny のアルタイ山を囲む地域では、対応して地域の地震活動の量が減少すると話された。
これは、通常地球から地震で放出されるストレスの一部が、高い太陽の活動時に地球から引き出されることを確かに示唆している。
放出された自然な自己発光性の形は、前章においてすでに言及した非常に変則的な、エネルギー的な特性を示す。
9.4 THE OREGON VORTEX:

9.4 オレゴンボルテックス：

A SPHERICAL TORUS OF EARTH ENERGY

地球エネルギーの球面円環体

Dmitriev の博士の調査に見ることができるように、明らかに、自然な自己発光性の形成と竜巻に対して地球内部のプロセスと地球外の大気と、太陽からの、エネルギーとの間には相互関係がある。
ドミートリーブは調査で、この考え方を支持する地球表面のいろいろな磁気異常をリポートする。
2001 年 1 月 25 日“コーストツゥコースト AM”に、マイク・シーゲル博士のホストをつとめてニック・ネルソンが現れたとき、このタイプの変則ではアメリカで最も知られた地域であるオレゴンボルテックスを紹介し、再び人気を押しあげた。
ネルソン氏は 1999 年以降このボルテックスのツアーガイドとして奉仕し“ゴールデンボルテックスと題された本の著者で、現在、http://www.athenapolis.com/NickNelson.html.のウェブサイトを、開いている
オレゴンボルテックスは、その独特な挙動が多くの時間、繰り返し周到に科学的に確かめられた。

この感覚で、これらのエネルギーが研究され、測定でき、活発な情報源をもち、場所と観察のどちらも抑制されず、破壊されず、どんな形であれ市民から隠されないことは全く幸

せである。
我々は、評判が高い科学的なジャーナル「Compressed Air」でそれが提出された報道を記述することによって、「時代の Shift」で、この物語をすでにカバーした
したがって、以前は知らなかった質問を制限されてきた新しい観察は、多くのプログラムで明らかにされた。
ネルソンがボルテックスで慎重に調査をし時間を費やしたので、これらの発見の一部は彼によってされた：
オレゴンボルテックスの、形は球状である。
これは、完全に我々が“vacuum domain 真空領域.”の、渦の中心に空気の上がるエネルギーの煙突のような動きがあるという予想にかなう。
これは、フィールドが実際に球面円環体で、その中心軸を通って他の地域より、速いエネルギー運動があるのを示していることを、我々は、予想する。
特別の領域の中のエネルギーは、螺旋を描く特性がある。
特別の点では、磁化された振り子は円の中で螺旋を描く、そして、人がこの地域に立つならば、同様に体は自然に円形に揺れることを強いられる。
そして、我々は分極化する Cu ですでに回転の重要性を見た。
渦は、非常に強い電磁効果を示す。
激しい電磁エネルギーが高感度器材へ永久の損害を引き起こすことがあるので、ミステリー（サイトの名前は、ボルテックスに基づいた）の家では、映画カメラは表むきは許されない。
はっきりした、重力の変則的な変化は、渦でわかる。

1 つの地域で、あなたが地上に円を描き、その円を閉じると本当の垂直におよそ 7 度傾くことを強制される。
まっすぐに立ち上がろうとするならば、あなたは倒れる。
もう一つの地域では、ほうきはその端の上に立てることができ、最高 36 時間立たせることができる。
もう一つの地点では、ボールが丘を上に転がることができる、そして、これらの roll uphill.”の事実“は完全に、自然の重力-浮揚のバランスが変化することで、分極化した Cu が重力のフィールドで目立つ歪曲を引き起こしたという考えにかなう。
渦は、境界に透明な磁気シートをもつ。
すでに、研究所での Roschin と Godin のサール効果の複製で、この活動中の竜巻現象と同様の球内の球“を観察した。
エネルギーの球の中心は、地球にある。
これは地球の表面下で、岩石圏の流状物質が渦のようなし方で非常に速く流れ、これらのエネルギー・プロセスが地域のあたりに作成されるという予想と関係する。

この地域の中の地下地質学の詳細な研究は、その流れを明らかにしなければならない。
1 つの地域と別の地域の渦の内部とでは物の大きさは実際変化する。
これは、目撃者の観察と、写真で明らかに見える。
渦で歩くことができる 2 つの異なる地域で、明らかに背の高さが同等の 2 人の男性は彼らが立っているところに従い、明らかに背が高く、他は低く見える。
位置を変えると、彼らのそれぞれの背の高さに対して各々の点は同じ影響を示す、
現在とは逆に背が低い男が背が高い男になる。
また、これは竜巻現象の観察にかなう
物質に対する確かな影響が生じていることを示唆し、その全体的な構造をこれまでは未知であった方向で変化させることができる。

物体の変化の大きさは、器具で測定することができない。
これは単にこれらの地域の中で動く計測器も大きさが変化するという事実による。
このように、渦の範囲内では、「全ては相関的である」
視覚の観察による以外は正確な変化の測定は不可能である。
ボルテックスで、時間の経過は、１／４秒変化する。
アインシュタインが空間と時間は一つの“構造体として統一されていると提案したので、空間の質のどんな変化も時間を変化させなければならない。
時間の我々の理解は、エーテル理論の中で新しく定義される;
それは、直接エーテルが振動する速度と関連がある。
我々が時間の我々の新しい理論を議論するとき、我々はこれについてずっと多く言わなければならない、しかし、今のところ、我々は他の問題に移る。
渦の中心に、球のサイズの 6 分の 1 のコロナがある。
再び、これは非常にうまく Dmitriev’s 博士調査結果にかない、この章の始めの自然な自己発光性の形の写真にも、明らかに見える。
重力加速の通常の速度は、渦で低下する。
通常、重力は毎秒 32 フィートでそれ自体を伝播するのに、渦の中で、それは毎秒 29.16 フィートまで失速する。
これは､形での重力-浮揚力のバランスで下への全体的な影響が 10 パーセント減ることを意味する。
これは、サール効果発生器のかなり重要なレベルで見られた人工の重力効果と同一である。
時々、人間のオーラは渦の中に誰にでも見えるようになる。そのとき、人は特別の領域に立っている。
これは、人間自身の磁気または生物電気の場がボルテックスのエネルギーによって拡大されることを示唆する。
ふたたび、人間が基本的にどのようにこの力と相互作用するかが理解される。

ボルテックスの、特定の領域は治療効果を提供する。
ネルソン氏は、進行中のひどい背中の痛みの問題を抱えていると報告した。
行って、渦の特定の地域に座ることで、彼の問題の苦痛は、数分で癒やされる。
これは、完全に彼の家の原動力とするために動いていたサール効果発生器で、彼の顔のひどい火傷の傷を治癒させた Searl 博士の結果と同じである。
オレゴンボルテックスをとり囲む全ての事実を一緒に考えるとき、我々がすでに議論した他の調査と、著しい相互関係がある。
ニック・ネルソンは、彼には、それが密接に棒磁石のまわりにできる磁場に似ているという事実以外に、このエネルギー的な構造を見る他の多くの方法があるという認識をプログラムで示さなかった。
（しかし、彼の本は銀河の竜巻と構造を含む関連する他の現象を書いている。）
最終的に、‘半分は地球の中で半分は地球の外で’異常を見つけることで、”NSLFs、“レーダーエンジェル”と竜巻のような空気に、放出されたエネルギー的な形式と“kimberlite パイプの爆発のような、岩石圏でのプロセスとの間にはっきりした橋を架けることができ、これらが協調して働くということを明らかに知ることができる。
我々の調査に基づいてオレゴンボルテックスのすべての観察された面は起こらなければならない。
9.5 VORTEX PROPULSION OF VIKTOR SCHAUBERGER

9.5 ビクトル SCHAUBERGER の渦推進力

ビクトル Schauberger の仕事にも、回転の副産物とみられる奇怪な反重力効果を発見したことが見られる。
第１１章に見るように、オレゴンボルテックスのような異常は、地球の外皮の下の岩石圏で熱した流体の速い移動流に、そして、最終的には地球の芯の中の明るい aetheric なエネルギーに起因するかもしれないと我々は、すでに提案した。
Schauberger の場合は、類似した効果は、彼の流れる水（特に続々とつくることができる螺旋を描く渦）に関連する変則の研究と理解から発見された。
1982 年にウーロフ Alexandersson が「水の生命」と題する本を書いた？
「ビクトル Schauberger と自然エネルギーの秘密」Turnstone Press（イングランド Wellingsborough）、そして、大部分の他の執筆者が書いた Schauberger の伝記と技術的発明は直接この情報源によってかかれている。
しばしば引用されるもう一つの本は、Callum コートによる「生命のエネルギー」である。
「“Living Water”」の本から、我々は Schauberger が上流に泳ぎ上がるマスの動きを観察することで流れる水に反重力効果が発生していると最初に理解したことを知る。
滝で、最も冷えた地域は通常中心にあると理解した、そして、この中心点での、水は螺旋を描く渦の性質を持つ。

マスは自然に滝の中央にこれらの冷えた、螺旋を描いている領域を捜す、それから、ごくわずかな努力で、泳いで、滝の上方に直接浮揚するのが見られ、続けて上に泳ぎ上がることもできる。
Schauberger は非常に独特な何かが続いて起きていると理解した、そして、これは彼に非常に深いレベルで水の中の渦的な運動と螺旋を描く原則を研究させた。
彼は滝の中心内で重力の量を計るためにストレスを加えられた重力探知器を使って、それを発見し、それは無重力あるいは少量の重力の計測というより、明らかに、反重力効果の顕れである。
結局、彼はいくつかの価値ある発明を作成するために半円形のパイプで形づくられた「用水路」のシステムを含む、この原則を使うことができた。そして、
それは、山の下に巨大な丸太を伝達するために、水の薄いシートを使った。
彼が働いていた伐採業界の中で、この発見は驚きと喜びであった。そして、人はこのような水の小さな層がその大量の重さを支えることは不可能と考えた。
用水路の内部は計画的に高さが上下する多くのリング層を持つように分けられていた、そして、水はリングの隙間の間に閉じ込められ、これらが一緒に移動するように、木材の支柱が提供された。
Schauberger も、非常に小さな環境にやさしいタービンで、水の中で螺旋を描く自然のパワーの動きを利用した非常に高い電気量を生じる水力発電タービンの新しい設計を発明した。
http://www.frank.germano.com/で Frank Germano の仕事は、大量の技術的データを完備した優れた特性があり、本当の“free energy”機械をつくる方向で他の良いステップを作りだした。
Schauberger も、夜の暗闇で観察した水の特別の高速渦の流れに、可視光が生じるということを発見した。
それから彼は岩と流れる水の特別な配列で状況を複製し、友人に効果を見せることができた。そして、それは確かに彼らを驚かせた。
これは Schauberger 自身ととても違って、最初は明らかに奇妙に見えて、
実は我々の誰も、決してこのように観察しようとしなかった。
Schauberger と彼の友人が本当に真実を言っているならば、この現象は再び我々の予想と完全に合致する。
我々がここで知らなければならないことは、正常な状況下で、竜巻に見られるように、水の流れの中央に流れる渦ができるために分極化した Cu の中心軸が作られることが可能になる。
それから、竜巻と他の観察で、そのような渦が示唆する、ルミネイト現象は、見えるようになる。
我々の目的にとって、最も面白い事実は、Schauberger の水の観察が結局彼に伝えたもの

が推進力に運転でできる水タービンを使った反重力機械を生産させたということだ。

当初滝を登るマス魚の観察が反重力を発見した方法であったので、
彼は機械にドイツで「マス魚」という名前をつけた。そして、あなたがまだ推察していないとしても
写真と証拠は、Schauberger の機械は、水を回転球面円環体の形にポンプで送りこむシステムを明白にする。
そして、さもなければ我々が考えてもいない別の形で理解されたが、再度、
反重力効果は、非常に似た方法で利用された！
明らかに本質的に生命原理を大切にする Schauberger の意志とは反対に、ナチ・ドイツによってこのデザインは作動する航空機に取り入れられた。
彼がこのプロトタイプの建造方法を明らかにすることが必ずしも許されなかったので、彼は空中上昇のために他の単純な方法を使用した計画を発明することを強いられた。
彼の“Repulsine”機械を設計するためにテキサスの砂漠へ引っ越した。それは“スモークリング”またはドーナツ型の形態をつくるために密封された、丸い部屋に、空気の爆発を吸い込んだ。
彼らがドーナツ型の部屋の内部の上下の端に移動して、空気の爆発は非常に少ないサイズに丸めこまれた。
この圧縮は装置の中心を通り抜けるチューブに極めて冷えた温度が発生する原因になる。
そして、それは砂漠の熱い、高圧の空気が非常に速い速度でチューブの低圧の地帯に走る原因となる。
そして、この突進する気流は、上部のタービン扇風機を駆動させる。
jbailey@rectec.net でジェームズ L B ベイリーによって Repulsine 航空機を再建造する試みがおこなわれた。そして、彼の仕事は Jnaudin509@aol.com で JL Naudin が所有するインターネット・サイトで、すぐに見ることができる、しかし、ここでの我々の主な関心は反重力を発生した Schauberger のこれ以前の閉鎖系水タービンである。
デンマークのグループはこの発見を繰り返そうとしている、そして、彼らのウェブサイトは http://www.syntropia.de/victor/menzo.htm.である。
Schauberger の人生と研究についての多くの面白い事実は、そこで見つかる。
もう一つの Schauberger の質の良いサイトは、http://energy21.terrashare.com/victor.html.である。
この章で Schauberger の仕事を議論する主な理由は、流体の回転が直接反重力を発生することが可能であることを知るためである;
これは、渦の回転の動きがこれまで認められていない非常に強力なエネルギー的効果を持つことを示唆する多くの証拠を与える。
彼の論文で、Schauberger は自然の“explosion 爆発”力と“implosion 内破”力の 2 つの

力に言及する。
彼は、我々の科学者が熱、圧力、断片化、病気と死に至るプロセスと感じる爆発によってエネルギーを利用していると理解した。
内破の自然力または中心の方への求心的な、螺旋を描く動きは宇宙で冷たさ、吸入、成長といった自然の健康な生命の生成する力を表すと彼には信じられた、そして、これを利用するために彼は機械を作り上げたのである。
さらに、彼は重力と浮揚力の間の釣合いをよく知っており、浮揚力について彼自身が銘銘た名前は反磁性“diamagnetism.”であった。反磁性についての彼の考えは従来の磁気の力とは直接関連してないようなので、これは少し混乱させるかもしれないが、基礎にある概念は同じであるように見える。
Schauberger のデータの一部を短い時間で一瞥した今、我々は次の話題の領域へ移動する準備ができている、そこではバミューダトライアングルの変則に集中する。
ここでは、我々はここと前章ですでに書いたシフトする物質相を含むいろいろな全ての現象の素晴らしい端的な表れを見る、そして、我々はまた、他のデータ部分を見つけ、次のより高い次元と、エーテル振動と幾何学との間の関係を議論する章への扉を開ける。
すでに「時代の転換」を読んだ人々には、これはよく知られた領域への移動であるが、この現在の本を最初に研究する新しい読者には我々の最終的な提案が、全体的で、状況をより線形に演繹的に確立し、段階的に提示しようとしている。

9.6 要約

9.1 この章の内容は導入である。それは竜巻現象、ビクトール Schauberger の仕事、オレゴンボルテックス、進行中の、多数の機会に科学的に研究された不動の時空の異常を含む。
9.2 Alexey Dmitriev 博士の竜巻の物理学の概念と自然な自己発光性の形成は、地球の大気と地球の内部の間の相互作用を含んでいる。
（気象学者と同様に他の科学者によっても一般的に使われる竜巻構造のブルックス理論は、竜巻で観測された異常現象を理論的に解明していない。

9.2.1

予想通り疑問視されている UFO 観察例で多くの場合は、ドミートリーブが概説した物理学の新しいシステムの、地球から放出された自然な自己発光性の形成を実際含んでいる可能性がある。

9.2.2

マット Bragaw とピーターBlottman が“hole-パンチ雲”の写真を撮ったが大気圏の薄い層と相互作用している違うタイプの不可視の NSLFs の例であるように見える。地球の磁場に合わせて可視的な“穴”をつくる。雲の層はもっと厚かったが、これらの影響は、ほとん

ど見えなかった。

9.2.3

多くの竜巻の観察例はルミネート現象を含む。そして、竜巻は実際に非常に高い電磁エネルギーの源であることを示唆する。

9.3 竜巻現象学の Dmitriev のリストは、この点を共有する：

9.3.1

9.3.1

竜巻は、いわゆる“parent ペアレント”雲から離れて、自身で動くのが見られた。

また、これらは完全にペアレンツ雲なしで出来ているのが見られた。そして、これらは後で竜巻に引きつけられるだけだった。

これは再び、竜巻が単に大気の動きに関連するだけでないことを示唆する。

9.3.2

ドミートリーブは、ブルックス理論では雲の層の中で横へ移動する対抗する回転運動が突然、じょうご雲の中で垂直の動きに変化することが可能な理由を、明らかにしていないと言う。

9.3.3

竜巻の空中浮揚効果は、じょうご雲の中の空気の吸入によると言うとはできない。

竜巻が地面よりわずかに上にあるときは当然、気圧変化は感じられず、空中浮揚効果も見られない、しかし、それが地面に触れるとすぐに、空中上昇が開始する。

じょうご雲の内側の領域は低い気圧であることが測定された、しかし、雲の下の基底ではそうではない。

9.3.4

9.3.4

竜巻の強力なエネルギー的なフィールド内で、物質は、流体のように柔軟で半透性になって、突然、変則的な相変化をするのが見られる。そして、固体の物が一緒に溶けるのを許す。

一旦竜巻が去るならば、物質はその通常の“ground 基底”状態に戻る。

「“スプーン曲げ」の場合、”人間は、意識で一時的に金属に対してこれらの影響を複製することができるようだ。

竜巻の物質変化の異常の従来の説明は通常じょうご雲の内部で急速な下降運動があると同時に雲の壁におよそ 100 から 200 メートル/秒までの急速な上昇運動があるという観察に求められる。

9.3.5

“竜巻のそばでしばしば“球状の滝”のような「壁”の中の壁」が見られる。そして、時々じょうご雲自体の高さの 3 分の 2 ぐらいの高さになる。
このエネルギー的な現象は Roschin/ゴーディンの研究所の中でのサール効果の複製に、すでに見られている。
9.3.6

9.3.6

じょうご雲は地球の表面をジャンピングして移動するのが見られる。再び、その他の力と大気の現象が関係している、すなわち、地球の内部に対するエネルギー的な相互作用があることを示唆する。
9.3.7

9.3.7

竜巻が川を通り抜けると、喫水線にボウルのような窪みを引き起こすのが見られた。そして、これらは強力な、変則的な引力に源因があることを示唆している。
竜巻は、物と、物体の集合物と生命のある生きものさえ邪魔されることなくあまりに長距離を輸送することができる。
これは、竜巻の輸送が吸入と回転以外の、空中浮揚に起因していることを再び示唆する。
9.3.8

9.3.8

彼らが地面に触れていないとき、竜巻はガヤガヤ言ったり、シッと叱るようなノイズを発しているのが見られた。そして、静電荷の非常に高いレベルを再び示した。
多くのタイプのルミナス現象が同様に竜巻と関係していた。そして、これらの回りでイオン化が起こっていることを示唆した。
特に 1 つのケースでは、竜巻の形成の前に空中に脈動している青い光を含んだものが現れた。
9.3.9

9.3.9

竜巻の異常は技術的装置が本当に可能であるという強い提案をする。そして、それは次の章で議論される。
1 つの可能な例はフィラデルフィア実験である、故フィリップ・コーソ大佐によって本物であると、確認され、公表されたストーリーに選ばれた USS エルドリッジ号でなく、それは実際は海軍掃海艇だと主張した。

9.3.10

9.3.10

竜巻現象の説明としての Dmitriev 博士の“真空領域”の概念は、データにずっと密接に合致するようである。

我々は、太陽の活動がそのピークに到達する時に、対応して、自然な自己発光性の形成量が増加することを思い出す。

さらに、自然な自己発光性の形が地震の活発な地域の上に見られるが、地震活動の量の減少に対応して減少する。

これは、地震が発生している地面で、そのエネルギーを変化させることによって NSLFs が地殻構造上のストレスを放出していることを示唆する。

9.4 ニック Nelson の本“ゴールデンボルテックスに書かれたオレゴンボルテックスには、”Dmitriev’ 博士の“真空領域”の古典的な多くの徴候を全て明らかにする：

1)、それは球状である 2)、それには煙突のような中心渦域がある、3)、そのエネルギーには螺旋を描く特質がある、4)、変則的な電磁効果が見られる、5)、引力の変化が報告される、6)、そこには境界に透明な磁気シートがある、7)、球の中心は地球の中にある 8)、物の大きさの変化が報告された、9）サイズの変化は器具で判断することができない、これらの観測器具も大きさが変わる、10)、渦の中で時間の経過は 0.25 秒変化する 11)、渦の中心にコロナ（すなわちその総サイズの 6 分の 1、）がある 12)、重力の加速速度は毎秒 32 フィートの二乗から毎秒 29.86 フィートの二乗まで変化する 13)、人間のオーラは渦において誰にでも見えるようになる 14）渦は治癒効果を提供できる。

9.5 ビクトル Schauberger の仕事は、球状円環体が渦運動を通して働く反重力推進力装置のもう一つの例であるように見える。

マスという魚が、滝の冷えた中心領域を通って空中浮揚すること、水が渦運動する流れの領域に、自然のルミナス現象が見られるなどの、流水のいろいろな異常を観察することから、Schauberger は反重力推進力についての新しいアイデアを考案することができた。

この場合は、エネルギーは水のドーナツ型形式の高速回転によって作動する。